魅力ある和の空間ガイドブック

2018 年 9 月　WEB 版公開
2020 年 4 月　WEB 版公開　改訂版
編著：日本建築士会連合会女性委員会　都道府県建築士会女性委員会(部会)

おすすめの和の空間を紹介
全国各都道府県の
女性建築士が解説します

人々のライフスタイルが変化する中で、地域の環境に適した伝統的な住まいに暮らす人々が減り続けています。なかでも日本の住まいの中で培われた和室や縁側といった和の空間がなくなりつつあることが危惧されています。このような状況をふまえ、女性委員会では 2016 年より「和の空間」をテーマに活動してきました。そして「和の空間を体験して、その魅力を再認識できるような建築を紹介するガイドブック」を制作することとしました。このガイドブックは、全国各地で公開されている和の空間の事例の中から、「魅力的なもの、これからの居住環境への示唆に富んでいるもの」を、都道府県ごとに数点ずつ選んで紹介しています。和の空間をあらためて捉え直し、今後の設計活動、居住環境づくりに活かしていくこと、多くの方々に全国各地に現存する貴重な建築の魅力を広めることを目的としています。ぜひご活用下さい。

開館時間等は変更になる場合があるので、見学に際しては各 HP 等でご確認ください。
© 2018 Japan Federation of Architects & Building Engineers Associations

魅力ある和の空間リスト

※新規物件
☆訂正物件

北海道

北海道
- 清華亭
- 旧永山武四郎邸
- ☆ （旧）岡川薬局
- 旧岡田邸（現：おかだ 紅雪庭）
- 旧相馬邸

東北

青森県
- 新むつ旅館（元新陸奥楼）
- 高橋家住宅
- 太宰治記念館 斜陽館
- 田中家住宅

岩手県
- 茶寮かだん（旧橋本家別邸）
- 大慈清水 お休み処
- time＆space愛宕下
- ※ 伊東家侍住宅（和洋食堂Ecru）
- ※ 料亭 京極

宮城県
- 旧伊達伯爵邸 鐘景閣
- 時音の宿 湯主一條　木造本館
- 良覚院丁公園と緑水庵
- ※ 亀田市郷土資料館（旧氏丈邸）
- ※ 海商の館　旧亀井邸
- ※ 不老仙館

秋田県
- 大館市立鳥潟会館（旧鳥潟家住宅・庭園）
- 旧秋田藩主佐竹氏別邸（如斯亭）庭園
- 旧佐藤政忠家住宅
- シェアビレッジ町村
- ※ 旧工藤家住宅（中小路の館）
- ※ 旧長谷山邸(総合交流促進施設)
- ※ 旧料亭　金勇
- ※ 八森苑（矢島町歴史交流館）

山形県
- 旧青山本邸
- 清風荘-宝紅庵
- 本間美術館 清遠閣-鶴舞園

福島県
- 旧甲斐家蔵住宅
- ☆ 瀬上嶋貫本家
- 福島県迎賓館（旧高松宮翁島別邸）
- ※ 郡山市久米正雄記念館（旧 久米正雄邸）
- ※ 野馬追通り　銘醸館　お食事処「食彩庵」

関東甲信越

茨城県
- 水海道風土博物館 坂野家住宅
- 弘道館
- 荒川家住宅(荒為)
- ※ 御料理屋kokyu.（旧小西家別邸）
- ※ 矢中の杜（旧矢中邸）

栃木県
- 旧篠原家住宅
- 日光田母沢御用邸
- 岡田記念館 翁島別邸

群馬県
- 彦部家住宅
- 冨沢家住宅
- 蔵・柏屋四郎右衛門
- 臨江閣
- 富岡市社会教育館
- 旧井上房一郎邸

埼玉県
- 旧山崎家別邸
- 二木屋（旧小林英三家住宅）
- 遠山記念館

千葉県
- 上花輪歴史館
- 戸定邸
- 旧堀田邸
- 翠州亭(旧スイス大使館)

東京都
- 旧白洲邸 武相荘
- 林芙美子記念館
- 旧猪股邸

神奈川県
- 鶴翔閣（旧原家住宅）
- 旧柳下邸
- 旧吉田茂邸
- ※ 鎌倉市吉屋信子記念館
- ※ 山口家住宅（雨岳文庫）
- ※ 松永記念館　老欅荘
- ※ 白雲洞茶苑白雲洞
- ※ 萬翠楼　福住

山梨県
- 御師旧外川家住宅
- 安藤家住宅
- 根津記念館

長野県
- 伊那部宿 旧井澤家住宅
- 旧横田家住宅
- 旧小田切家住宅
- 旧松本区裁判所庁舎
- 山寺常山邸

新潟県
- 渡邉邸
- 北方文化博物館
- 旧齋藤家別邸
- 松籟閣

東海北陸

愛知県
- 徳川園 蘇山荘
- 古川美術館分館 爲三郎記念館
- 南山寿荘/昭和美術館

岐阜県
- 和田家住宅
- 吉島家住宅
- 北岡田家住宅

三重県
- 三松荘
- 旧崇広堂
- 旧長谷川家住宅
- 賓日館

富山県
- 豪農の館 内山邸（富山県民会館分館）
- 茶室円山庵 立礼席
- 菅野家住宅

石川県
- 明治の館
- 武家屋敷跡野村家
- 横町うらら館
- 無限庵

福井県
- 養浩館
- 旧京藤甚五郎家住宅
- 旧料亭蓬嶋楼

近畿

滋賀県
- 蘆花浅水荘
- 居初氏庭園と天然図画亭
- 外村宇兵衛邸（てんびんの里 伝統家屋博物館）
- 大津町家の宿 粋世
- ※ 公人屋敷（旧岡本邸）

京都府
- 豪商 稲葉本家
- 聴竹居
- 頼山陽書斎（山紫水明処）

大阪府
- がんこ「平野郷屋敷」(旧辻元家住宅)
- 旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）
- 堺市茶室 伸庵・黄梅庵
- さかい待庵・無一庵（さかい利晶の杜）
- 太閤園「淀川邸」（旧藤田男爵家 東御殿）
- ※ 適塾　旧緒方洪庵住宅

兵庫県
- 倚松庵
- 篠山市立 青山歴史村
- 兵庫県立舞子公園 旧木下家住宅
- ※ ヨドコウ迎賓館（旧山邑家住宅）
- ※ 堀家住宅（一橋徳川家領庄屋）

奈良県
- 今西家書院
- 中家住宅
- 臨済宗大徳寺派 慈光院 書院
- ☆ 奈良学園ｾﾐﾅｰﾊｳｽ 志賀直哉旧居
- ※ 名勝　依水園
- ※ 奈良町宿　紀寺の家

和歌山県
- 琴ノ浦温山荘園 浜座敷
- 山﨑邸
- 蓮華定院
- ※ 旧松井家別邸（がんこ六三園）

中国四国

鳥取県
- ホテル東光園本館
- 塩谷定好写真記念館
- 鳥取いなば有隣荘

島根県
- 小泉八雲旧居
- 旅館美保館本館
- 旧堀氏庭園 楽山荘客殿

岡山県
- いかしの舎
- 脇本陣 木代邸
- 後楽園
- 由加山 蓮台寺 客殿 通天橋
- 特別史跡 旧閑谷学校
- ※ 重森三玲意匠書院復元
- ※ 旧広兼家住宅（通称：広兼邸）

広島県
- 太田家住宅
- 恋しき
- 耕三寺潮聲閣

山口県
- 旧毛利家本邸
- 山口市菜香亭
- 金子みすゞ記念館
- 長府毛利邸

徳島県
- 長岡家住宅
- 出羽島の民家
- 吉田家住宅

香川県
- 旧金毘羅大芝居
- 渡邊邸
- 香川県文化会館
- ※ 合田邸
- ※ 古民家ステイ　香露軒

愛媛県
- 常信寺庫裏
- 古今荘
- 木屋旅館

高知県
- 岡御殿
- 竹林寺書院(客殿)・庭園
- 五藤家安芸屋敷
- 土佐山田の舎

九州沖縄

福岡県
- 旧戸島家住宅
- 旧木下家住宅(堺屋)
- 旧伊藤伝右衛門邸
- ※ 旧丸林本家北棟　「うなぎの寝床」
- ※ 旧柳川藩主立花邸
- ※ 旧松崎旅籠　油屋

佐賀県
- 旧中尾邸住宅（鯨組主中尾家屋敷）
- Fountain Mountain（旧一増本店）
- ギャラリ－喫茶 欒
- ※ 竹屋

長崎県
- 心田庵
- 湧水庭園 四明荘
- 茶室 「閑雲亭」
- 石田城五島氏庭園隠殿屋敷
- ※ 旧早川家住宅
- ※ 旧楠木正隆屋敷
- ※ 合資会社　猪原金物店

熊本県
- 旧細川刑部邸
- 松浜軒
- 仰松軒
- ※ CAFÈみなもと
- ※ 川尻公会堂

大分県
- 冨士屋Gallery一也百－はなやもも－
- 旧丸毛家住宅
- 旧真光寺休憩所

宮崎県
- 宮崎県総合博物館 民家園
- 日向市歴史民俗資料館/旧廻船問屋 河内屋
- 霧島創業記念館 「吉助」

鹿児島県
- 赤尾木城文化伝承館 月窓亭(種子島邸)
- 旧増田家住宅
- 鹿児島県民教育文化研究所

沖縄県
- 中村家住宅

清華亭

せいかてい

北海道札幌市

清華亭は、札幌最初の都市型公園であった「偕楽園(かいらくえん)」の中に、開拓使が貴賓接待所として建てたものである。設計・監督は開拓使の工業局が担当し、約8ヶ月間の工事によって、1880(明治13)年6月に完成した。翌年9月1日、明治天皇の札幌行幸の際には、天皇がこの亭で御休憩されたという由緒ある建物で、建物の完成に当たって、時の開拓使長官だった黒田清隆が「水木清華亭」と名付けたことから『清華亭』と呼ばれ今日に至っている。

この建物は、全体に洋風の造りの中で、至る所に和風の様式を調和させている和洋両様式を取り入れた古い建物である。自然条件の厳しい北海道で百有余年を生き抜いてきた。使用されている建材は全て道産材で、トドマツやアカマツである。土台の石や玄関のたたきには札幌軟石が使われている。また外壁は、板を一枚一枚重ね合わせた「下見板張り」になっており、隙間風などが入らず、寒地型の外壁の造りになっている。

見どころ

明治天皇は札幌行幸の時には偕楽園を視察され、清華亭でご休憩を取られた。その際に清華亭の座敷から鍵型の縁側を通して庭園を眺められ、大変お気に召されたのだそう。ここからの眺めは見どころの一つである。
また、和洋折衷の中での色々な試みがある。
和洋両室を直接連結し、和座敷に洋風の両開扉がそのまま現れている。洋風導入過程での特異な手法で、建具額縁も洋風になっており不思議な感覚に陥る。洋室の天井中央のシャンデリア基部に、漆喰彫刻で和風の桔梗模様が施されているところや、明治初期の建築にはめずらしいボウウィンドーも見どころである。

和室は15畳の広さがあり日本の伝統的な書院風作りで、壁は京壁づくり。東側に特徴的な鍵型の縁側が配置されている。

明治13年、清華亭の建築と並行し、開拓使の指導者であったアメリカ人のケプロンに見出されたルイス・ベーマーの設計により、ゆるやかな起伏のある高低差を利用して和洋折衷の庭園が造成された。現在は、かつての「偕楽園」の姿はないが、亭の周囲には26種の樹木が四季折々の花を咲かせ、来訪者の目を楽しませている。

建物名称	清華亭
建築年	1880（明治13）年6月
構造・様式	木造平屋建
所在地	札幌市北区北7条西7丁目
電　話	011-746-1088(現地警備員室)
Ｈ　Ｐ	http://www.sapporo.travel/find/culture/seikatei/
営業時間	9：00～16：00
休館日	年末年始(12/29-1/3)
観覧料	無料
アクセス	ＪＲ札幌駅北口から西へ徒歩10分
	札幌市指定有形文化財

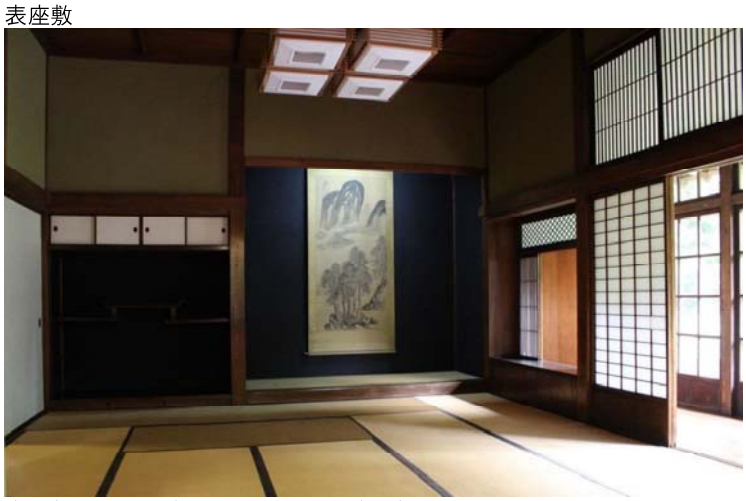
旧永山武四郎邸

きゅうながやまたけしろうてい

北海道札幌市

旧永山武四郎邸は、第二代北海道庁長官・永山武四郎が屯田事務局長時代に建てた私邸である。明治10年（1877）代前半頃の創建で木造平屋建て、建築面積136.06㎡の和洋住宅である。小屋組は、洋式のキングポスト・トラス。外壁は低い竪羽目の腰を回し、上部は隅柱型付の下見板張りとしている。玄関棟の妻に十字型の飾りがついている。
敷地は札幌繁栄図録によると、木製の板塀で囲まれ、北側には2本の木製橋がかけ渡してある。玄関からホールに進み、南側の庭園に面して洋風の応接室と15帖の表座敷が続いている。2室は引き分け板戸で隔てられ、表座敷に隣接する北側の8帖脇座敷は、主人の居室と推測される。

表座敷



表座敷から応接室を臨む

脇座敷

見どころ

表座敷

表座敷と脇座敷の天井は、2室とも竿縁天井だが、床差し（床挿し）になっている。これは通常は忌み嫌われるが九州地方には多く見られるようである。

特に興味深いのは脇座敷の天井板で、道産材（マツ･カツラ）の寄せ張りとしている。表座敷の板目との対比が面白い。

脇座敷

応接室と表座敷を分ける開口部の額縁は、洋室側と和室側で形状が異なり、特に和室側の額縁は、市内に現存する清華亭とよく似た形状である。

表座敷の廊下から庭に出る沓脱ぎ石は大振りの軟石を重ねたもので、玄関よりも重厚な印象を受ける。

平成17年度（2005）に大規模な保存改修工事を実施。隣接する「旧三菱鉱業寮」も平成28年（2016）から2年かけて保存活用工事を実施し、平成30年（2018）6月23日に一般公開となった。洋風2階建ての建物は、永山邸を買収した三菱鉱業（現在三菱マテリアル）が昭和12年頃に増築したものである。今回の一般公開に向けて、1階にカフェを開設。2階は貸室としても開放しており、車いす用のスロープ、トイレも設置されている。

建物名称	旧永山武四郎邸
建築年	明治10年(1877)代前半頃
構造・様式	木造平屋建て
所在地	札幌市中央区北2条東6丁目
電　話	011-232-0450
Ｈ　Ｐ	https://sapporoshi-nagayamatei.jp
開館時間	9：00～22：00
定休日	毎月第2水曜日（祝日の場合はその翌日）年末年始
入館料	無料
駐車場	身障者等用駐車場　1台
アクセス	地下鉄東西線「バスセンター前」下車、10番出口より徒歩10分
備考	北海道指定有形文化財

（旧）岡川薬局

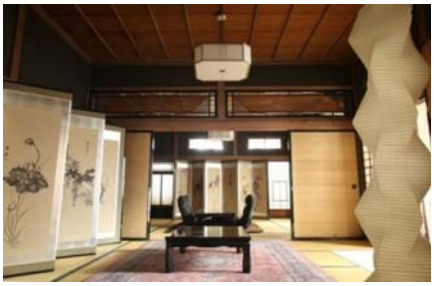
きゅう　おかがわやっきょく

北海道小樽市

明治28年創業の岡川薬局は小樽で数少ない薬種売薬の老舗であった。昭和5年、二代目が本建物を新築。その娘は小樽で2番目の女性薬剤師であった。建設地はＪＲ函館本線の南小樽駅の近くにあり、日本で3番目の旅客鉄道として明治13年に開通していることからも、当時この周辺は商業地として繁栄していたことが窺える。
本建物は店舗併用住宅であり、主屋と石蔵から成る。主屋は木造モルタル塗とタイル貼の3階建で赤いマンサード屋根と装飾のあるドーマー窓、2階の正面の縦長窓の中心にはかつてバルコニーが配されており、1階店舗のアーチ型ショーウインドウ、右読みの看板など昭和の洋風な意匠が色濃く残っている。後方は切妻の2階建である。外観は洋風だが和洋折衷の造りで、今回紹介の和室は主屋の2階にある。階段を上がると正面（道路）側に縦長の窓が迎え、二間続きの十二畳半と十畳の和室、廊下を挟んだ後方に六畳と三畳および六畳の各和室が配されている。特に十二畳半の和室は格調ある書院造りで、座敷飾り（床、付け書院、違い棚）、欄間や障子の繊細な組子細工、洗練された引手などに当時の匠の卓越した技を見ることが出来る。
1階正面の薬局は2層分の高い天井をもち、板張りの中心には漆喰塗の中心飾りが施されている。調剤室のガラス窓に当時の女性薬剤師の姿が重なるようである。

見どころ

岡川薬局は店舗併用住宅であり、1階正面に薬局、他は居住空間である。2階正面、縦長窓の背後に廊下を挟み、この家で最も格式の高い十二畳半の和室がある。まず目を引くのは二間半の床の間と脇床、座敷飾りである。こぶ洗い出しの重厚な床柱を中心に、付け書院の繊細な組子、違い棚には筆返しが施され、金色の天袋の鈍い輝きと鶴の透かし彫りの引手が小さいながら空間を引き締めている。続く十畳間への欄間は、松の透かし彫りと麻の葉模様の組子細工を塗り縁と竹で囲んでいる。真、行、草でいうところの行の座敷である。縁側的な廊下は洋風と和風の意匠が調和しており、かつて住人が過ごしたハイカラな日常生活に想いを馳せるのも楽しい。



二間続きの和室：
欄間は透かし彫りと組子、
竹を組合わせ凝った造り

平成20年に四代続いた薬局を廃業。平成22年に（旧）岡川薬局として極力現状維持の状態でゲストハウス、カフェに用途変更され、観光都市小樽ならではの宿泊を軸としたビジネスモデルの創出を展開している。歴史的建造物が保存のみならず、新しい役割を見出し活用され、将来に建築文化を繋げた好例と言える。

かつての薬局は
カフェとして営業

取材協力
Ｎ合同会社
建築史家　駒木定正氏
「小樽の歴史的建造物」
（発行:小樽市教育委員会）

建物名称	（旧）岡川薬局
建築年	1930年（昭和5年）
構造・様式	木造3階建て・在来工法
所在地	小樽市若松1-7-7
電　話	0134-64-1086
Ｈ　Ｐ	http://www.re-okagawapharmacy.info/
開館時間	公開時間：13:00～17:00 （営業時間中の対応・要予約） 定休日：月曜・木曜(祝祭日とその前日は営業) カフェ：日曜・火曜・水曜　11:00～20:00 金曜・土曜　11:00～22:00 ゲストハウス：チェックイン　～22:00 チェックアウト　～10:00 レンタルスペース：11:00～22:00
アクセス	ＪＲ南小樽駅より徒歩10分　駐車場有
備　考	小樽市歴史的建造物、小樽市都市景観賞奨励賞

旧岡田邸（現：おかだ 紅雪庭）

北海道旭川市

きゅうおかだてい（おかだ こうせつてい）

旧岡田邸とは昭和8年に建てられた酒蔵のオーナーの自宅。
完成までに2年を要し、見積もりのない建て方と呼ばれ贅を尽くしたこの建物は、いたるところに「本物」の歴史的建造物として残っている。
また、別名「紅葉館」とも呼ばれ、落葉樹を巧みに活かした日本庭園も、庭師の丹念な手入れにより、今もなお美しさを保ちつづけている。

「紅雪庭」の名前の由来にもなった紅葉の上に積もる雪の様子

見どころ

旧岡田邸は「北の誉」という酒蔵のオーナーの自宅として誕生。正面玄関の当時では珍しい外国製ステンドグラス、西日を美しく見せる銅の入った硝子、細部に渡るこだわりの意匠、クリスタルのシャンデリア、大陸的な高い天井、遊び心のある欄窓の数々。30畳の和室とアーチ型の居間、美しい漆喰の壁、そして、秋に紅色に染まる庭園。
2年もの月日を要して建てられ『見積もりのない建て方』と言われるお屋敷は、和と洋との空間を巧みに合わせ持つ北国らしい建物である。
建築物を生かし、新しい息吹を与えて守っていく「動態保存」というカタチで、現在は蕎麦と日本料理「紅雪庭」として食事を楽しみながら、建物を堪能する事ができる。

【沿革】
1933年（昭和8年） 清酒北の誉創設者岡田重次郎宅として建築。
1934年・1938年には皇室の方にご宿泊頂いている。
岡田邸は、重次郎、正平、正雄と三代に渡り住み、
2003年10月より、京都在住の資産家が所有。
取り壊しが危ぶまれていた岡田邸を何とか残したいと
2009年10月　旧岡田邸200年プロジェクトチームを発足。
2010年10月　一般財団法人旧岡田邸２００年財団を設立。
2011年5月　財団が京都の資産家より買取、現在に至る。

撮影：山崎一

建物名称	旧岡田邸（現：おかだ 紅雪庭）
建築年	1933年（昭和8年）
構造・様式	木造2階建て
所在地	旭川市5条通り16丁目
電　話	0166-22-5570
Ｈ　Ｐ	http://okadatei.jp/index.html
営業時間	昼　11：30　～　15：00
	夜　17：30　～　21：30
アクセス	旭川駅よりタクシーで7分　駐車場有

旧相馬邸

きゅうそうまてい

北海道函館市

大広間から臨む庭園

函館港を一望できる敷地

1854年（嘉永7年）日米和親条約で箱館開港した歴史から和洋折衷が函館のスタンダード。
傾斜のある地形を活かして石垣を築き、その上に敷地を造成している。イギリス領事館を見下ろす場所で、領事館の庭も港へと続く景観もすべてを私邸の庭としている空間づくりに商人の心意気を感じる。
特別な人のためのむくり屋根の大きな玄関、外国の客人をもてなす配慮、大広間の掛け軸や家財、いたるところに使われている屋久杉の一枚板、見る位置によって表情を変える書院造り、部屋ごとにデザインが違う釘隠しなど、細部にまで贅を尽くされた家は寒冷地ならではの工夫も見られ、当時の暮らしの息遣いが感じられる。
蔵を歴史回廊、歴史的美術館のギャラリーに変え、北海道の宝と言われている江差屏風やアイヌ絵巻など、当時の北海道の風土や賑わいがわかる資料の見学もできる。

多くの方に「旧相馬邸」に入館頂き、110年以上歴史が続くこの家を未来へつなげてゆきたいと協力を呼びかけている。

見どころ

旧相馬邸は一代で築いた函館の豪商相馬哲平の私邸。1907年（明治40年）の大火で他は類焼し蔵のみが残る。翌1908年（明治41年）大火復興のシンボル「希望の星」として建てられた建物で、職人や材料は全国から一級品を取りよせた。1921年（大正10年）に再び大火に見舞われたが一部の損傷のみで助かった。木が自らを火事から守った痕跡がある。
2008年（平成20年）まで子孫の方が住まわれていたが、現在は一市民が所有し、一般に公開しながら保存している。

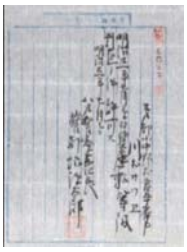
建物名称	旧相馬邸
建築年	1908年(明治41年)
構造・様式	木造平屋、一部2階建て
設計・施工	筒井与三郎
所在地	函館市元町33-2
電　話	0138-26-1560
Ｈ　Ｐ	http://www.soumatei.com
開館時間	4月～11月　9：30～17：00(木曜日休館)
入館料	一般／800円、高校生／500円 修学、自主研修／300円、 中学生以下／300円　修学、自主研修／200円
アクセス	市電　函館どつく前行「末広町電停」下車、 徒歩5分、駐車場有
備考	文科省指定「伝統的建造物群」歴史的建造物 写真提供：旧相馬邸

新むつ旅館（元新陸奥楼）

青森県八戸市

しんむつりょかん（もとしんむつろう）

東北一と謳われた八戸の遊廓は度重なる大火で衰退したが、小中野新地に1896年（明治29年）新設された。
元新陸奥楼（現新むつ旅館）は1899年（明治32年）に八戸警察署の貸座敷許可を受けて新築された。戦時中、新陸奥楼は兵隊の士気を高めるために取り壊しを免れた。戦後、売春防止法を受けて1958年（昭和33年）に新むつ旅館に転業し、現在に至っている。元貸座敷の特長を残す貴重な建物として平成19年に登録有形文化財（建造物）に指定された。元貸座敷の建物として、特別に豪華な設えは見られないが、初代女将が働く女性の健康や幸福を願って施した細やかな心遣いの意匠に感服させられる。大らかな現女将が語る由緒や当時の生活に関わる説明は、拝聴に価する



左：土蔵の墨書　貸座敷遊興料が書かれている
右：八戸警察署による貸座敷許可証

見どころ

【小中野新地の八間道路】
小中野新地の広い八間道路は、かつての遊廓の賑わいを思い起こさせる。
【外観】
妻壁のブリキや白い汚れに小中野公害、二階軒の電燈や黒漆喰に蓄積された歴史を読み解ける。
【内部空間】
ソラ窓(天窓)からの光に照らされた帳場とＹ字階段と空中歩廊と二階回廊の吹き抜け空間
【意匠】
初代女将が働く女性（娼妓）の健康や幸福を願い、設えた七宝紋様・鱗紋・蝙蝠紋・瓢箪紋など
【貸座敷資料】
八戸警察署の貸座敷許可証を始めに、来客の風体を記録した遊客帳や大人の玩具など

左側：七宝紋様（輪違い）　〇を四方に繋げる が訛って七宝紋様になった。輪が幸福・円満を象徴している。
右側：鱗紋　蛇の鱗をシンボル化した△を組み合わせた鱗紋は、女性の厄除けや再生の意味を持つ

左側：蝙蝠（こうもり）紋　中国語の蝙蝠は＜幸福＞と同じく「ビィェンフー」と発音し、幸福を象徴した紋様
右側：瓢箪紋　鈴生りの瓢箪は無病息災・子孫繁栄や厄除などの意味を持つ。襖の引手にも使われている

遊客帳には、月日に加えて、客の容貌や服装や接客した娼妓を記録し、警察が確認の印を押した

【Ｙ字階段と空中歩廊】
二階の貸座敷には、帳場からＹ字階段で上り、三途の川に掛けられた橋（空中歩廊）を渡って貸座敷（天国）に赴く。

【帳場上のソラ窓（天窓）】
帳場天井の１間×１間半の吹き抜けから屋根の半間四方のソラ窓の光が差している。電燈が普及する前の町屋で一般的。

建物名称	新むつ旅館
建築年	1899年（明治32年）
構造・様式	木造在来構法　二階建　ソラ窓付切妻屋根
所在地	青森県八戸市小中野６丁目20番18号
電　話	0178-22-1736
Ｈ　Ｐ	―――
開館時間	10：00～16：00（予め電話で相談）
アクセス	ＪＲ八戸線小中野駅より徒歩約10分
備　考	国登録有形文化財

高橋家住宅

たかはしけじゅうたく

青森県黒石市

見どころ

【中町伝建群保存地区】
雪深い津軽の街は落し板に明り障子を嵌めたコミセが生活を庇護している。
【コミセ】
各町屋のコミセはよく見ると少しずつ異なるのは、私用のコミセを共用するためである。
【外観】
家作規制のために低い棟高の切妻屋根・妻入町屋で、豪雪時はコミセ屋根から出入りした。
【ツキミノマから愛でる仲秋の名月】
通り土間脇のツキミノマからカクレ部屋越しに名月を楽しめる。
【通り土間の喫茶コーナー】
２間幅の通り土間を活かした喫茶コーナーは新たな住まい方を提案している。

上：カクレ部屋
通りから見えるコミセ上のガラス窓はカクレ部屋の窓
黒石藩の家作規制により低く抑えた棟高に併せて登り梁とした天井の低い２階

左：ツキミノマから
愛でる仲秋の名月
通り土間脇のツキミノマの囲炉裏からカクレ部屋のモンドリアン風組子の障子及びガラス窓を開け、仲秋の名月を愛でる

代々「理右衛門」を名乗る黒石藩御用達の米問屋であった高橋家の住宅は、1751～1763年（宝暦～明和初期）に建てられた。1766年（明和３年）１月28日の豪雪時の大地震に耐えて以後、通り土間と水廻りを改造しただけでほぼ当初の様子を伝えている切妻屋根・妻入のコミセ付大型町屋である。江戸時代中頃の津軽の町屋である高橋家住宅は、1973年（昭和48年）に国の重要文化財に指定され、2004年（平成16年）に屋敷内の蔵も追加指定された。

明り障子と板戸で雪を防ぐコミセ

津軽のコミセは、北陸の雁木と異なり、雪を防ぐ障子と板戸を立てる。

通り土間を活かした喫茶コーナー

幅２間の通り土間を活かし、新たな生活空間として喫茶コーナーを設置している。

建物名称	高橋家住宅
建築年	1751～1763年（宝暦～明和初期）
構造・様式	木造在来構法　妻入屋根一部二階建住宅
所在地	青森県黒石市中町三八番地
電　話	0172-52-5374
Ｈ　Ｐ	―――
開館時間	9：00～17：00（不定休）
アクセス	弘南鉄道黒石駅から徒歩約８分
備　考	国指定重要文化財

太宰治記念館　斜陽館

だざいおさむきねんかん　しゃようかん

青森県五所川原市

見どころ

【暗い冬と対峙する外観】
暗く吹雪が続く津軽の冬に存在感を示す「赤い屋根と煉瓦塀」の外観。
【明るさを求めた内部空間】
雪が積もった住居の内部は、カッチョと呼ぶ雪囲いで覆われた暗い空間となる。堀江佐吉は「サマ(高窓)とガラス窓」を多用して明るい冬の暮らしを実現した。
【建てぐるみの付属屋】
豪雪と地吹雪の津軽平野では、主屋と付属屋を繋いだ建てぐるみとする。
【洋小屋組】
外観は和風の入母屋屋根であるが、台所上はトラス構造の洋小屋組である。

【通り土間脇の二階の応接室】
二階への折り返し階段を上ると札幌や函館の洋館に学んだ洋風の応接室と家具が残されている。

【通り土間脇の続き間】
玄関を入ると、広い通り土間が裏まで続いている。その傍に伝統的な炉付きの続き間が連なっている。

暗く低い雲が垂れ込め、地吹雪が続く冬の津軽平野のほぼ真ん中の金木町（現五所川原市金木町）に衆議院議員であった太宰治の父　津島源右衛門が青森県の近代洋風建築を担った堀江佐吉に依頼して1907年（明治40年）に建てた煉瓦塀に囲まれた入母屋屋根・木造２階建の和洋折衷様式の住宅である。外観は和風であるが、主構造は木造トラスの洋小屋組である。平成16年3月14日の豪雪で煉瓦塀が破損したが、修復して現在に至る。1950年（昭和25年）に住宅から太宰治文学記念館併設旅館に変わり、1998年（平成10年）から太宰治記念館として公開されている。津軽の近代化を象徴する住宅として、2004年（平成16年）に重要文化財に指定された。

板の間上の洋小屋組

通り土間を突き当たった左手に大釜と自在鉤を吊した囲炉裏がある。
その上は頬杖にトラスを組み合わせた洋小屋組で、棟両側の高窓から、冬でも明るい光が射し込んでくる。

中ノ蔵や米蔵を下屋で一体化

通り土間を抜けると中ノ蔵と米蔵手前に２間から３間幅の下屋を掛けて屋内化した作業空間がある。
下屋はガラス戸で外と仕切られているので、冬でも雪に悩まされずに作業ができる。

建物名称	太宰治記念館　斜陽館
建築年	1907年（明治40年）
構造・様式	木造トラス構造二階建　和洋折中様式
所在地	青森県五所川原市金木町朝日山412ー1
電　話	0173-53-2020
Ｈ　Ｐ	http://dazai.or.jp/
開館時間	5月1日～10月31日 8：30～18：00 11月1日～4月30日 9：00～17：00
アクセス	津軽鉄道金木駅から徒歩7分
備　考	国指定重要文化財

田中家住宅

たなかけじゅうたく

青森県三戸郡南部町

岩手県軽米町出身の田中家の曾祖父が1896年（明治29年）に建てた消防屯所を摸した洋風望楼付入母屋屋根の木造二階建住宅である。
戦前は軍馬100頭余りを飼育する山林持ちの豪農であったが、戦後1952年（昭和27年)頃には馬が２ー３頭までに減り、かつての外厩は車庫として使われている。
1957年（昭和32年)の大火はすぐ脇の堰まで迫ったが、なんとか類焼を免れた。その後の生活の近代化に伴い、1982年（昭和57年)から１年掛けて土間やダイドコ（広間）を伝統的意匠を継承した居間とDKに、元土間上を二階に改修した。
青森県南地域の豪農の生活を伝える住宅として2007年（平成19年)に登録有形文化財（建造物）に指定され、現在に至っている。

見どころ

【屋敷遠望】
約3000坪の屋敷の道路側に棟門と板塀を構え、屋敷林の間に洋風望楼を遠望できる。
【外観】
格式を感じる表玄関と見上げる洋風望楼、生活を表出した裏側の格子窓の外観が特長である。
【庭】
オンコ（一位）に赤松やヒバ、ツツジやコブシ等に苔を配した庭園は癒やし空間そのものである。
【表空間】
表側はジョイからオクザシキまで続き間があり、庭の眺めは深い森に包まれた間隔を与える。
【生活空間】
ダイドコ(広間)と土間を伝統意匠を活かしたDKと居間に改造し、生活を豊かにしている

24畳のジョイからオクザシキまで奥行 3間に間口13間の広い続き間は、イベントや展示会に使用されている。

ダイドコ（広間）とドマ廻りは、現在の生活に合わせた当初の意匠を活かした居間とDKに改造されている。

【表側外観】

棟門からツツジの間を右折すると、格式を感じさせる「マツカワビシ」の棟飾りを設えた玄関があり、見上げると洋風望楼が地方の近代化を感じさせる。
左手の塀重門奥はザシキ庭園に続く。

【吊り上げ大戸の勝手口】

生活の現代化に伴って、1977ー1978年(昭和57年-58年)の１年掛けてダイドコ（広間）と土間を改造したが、当初の吊り上げ大戸を残して豊かな軒下空間を設けている。

【広縁からの庭の眺め】

鍵の手状のザシキに沿った広縁からオンコ(一位)や赤松、ヒバを背景に苔やツツジを配した庭は、静粛な冥想へ誘ってくれる。
庭に下りて、散策し始めると深いしじまが迫ってくる。

建物名称	田中家住宅
建築年	1896年（明治29年）
構造・様式	木造在来構法　望楼付ー部二階建住宅
所在地	青森県三戸郡南部町大字福田字間ノ原5ー1
電　話	0178-84-2520
Ｈ　Ｐ	ーーー
開館時間	原則非公開（見学希望の場合、電話で相談）
アクセス	青い森鉄道苫米地駅から徒歩20分
備　考	国登録有形文化財

茶寮かだん（旧橋本家別邸）

岩手県花巻市

さりょうかだん（きゅうはしもとけべってい）

建物外観

旧橋本家別邸は、童話作家・詩人の宮沢賢治（1896～1933年）のまたいとこで呉服店を営んでいた当主が妻の療養のために建築した。花巻市役所交差点近くの路地、通称「ひゃっこ坂」を下ったところに歴史を感じる石垣と土壁の塀が見えてくる。別邸は昭和初期に建築された和洋室のある豪華な木造平屋の建築物だ。敷地内には、賢治が晩年に設計した花壇が復元され四季折々のお花を楽しむことができる。

正門外観

見どころ

洋間の1角は両壁をわざわざ狭くして出窓のようにしている。額縁に見立て窓の向こう側の庭を絵画のように見せる意図があったのでは。
床の間の造作の職人技は見応えがある。床柱の側面は1本のようだが、小口を見ると寄木になっている。
年月が経っても隙間が見られないし上部も同じ作り。長押など目に見えないところも埋木をされていて埃のたまり難い納まりとなっている。浴室入口の引き戸の敷居は金物ではなく、1本の木をレール状に加工したもの、細かい技なのに今でも歪んでいない。裏側の天井のコーナーも扇状に張られていたり、トイレのタイルの役物も凝ったデザインとなっている。建具の模様などは部屋ごとに違い、微妙な湾曲など細かい職人技がみられる。

【喫茶店内】

間取りは建築当時のまま、玄関入って左側に洋室、建物南側には縁側と10畳・6畳の続き和室がある。縁側の奥の３畳の個室は南面で日当たりのよい場所である。縁側からは自慢の花壇が眺められる一面ガラス戸で当時のゆがみ硝子をそのまま利用、現在の喫茶店では低めのテーブルとチェアを置き珈琲を飲みながらくつろげるようにしている。10畳の和室には立派な床の間がある。床柱・書院なども手の込んだ造作で建築に３年かけたと言われているだけの大工の技がみられる。また天井板には古代杉、屋根瓦も大坂で特別に作らせるなど全国から質の高い建材を取り寄せて随所に使われている。縁側奥の個室の型ガラスの模様がまた美しく、老朽化で割れたものなどは復元工事のときに邸内の同じ模様のガラスをこの部屋に集めて再現している。
当時の所有者、橋本家は大津屋という呉服店を営んでいた大きな商家。別邸の南側から上町商店街までの敷地は大津屋呉服店の敷地で別邸はその少し高台の見晴らしのいい場所に建っている。賢治が設計した花壇は、敷地の南斜面に位置し、南北約9m、東西約4m、高低差約1.1mのスペースに楕円や四角など幾何学模様がデザインされている。その模様がどれ一つとして同じ形をしていないのが特徴だ。

建物名称	茶寮かだん（旧橋本家別邸）
建築年	1927年（昭和2年）
構造・様式	木造平屋建
所在地	岩手県花巻市花城町11-12
電　話	080-2823-1048
Ｈ　Ｐ	http://kadan.on.omisenomikata.jp/
営業時間	10：00～18：00（定休日 木曜日）
アクセス	東北本線花巻駅よりタクシーで5分 東北自動車道花巻南ICより車で10分 ﾊﾟｰｸｱﾍﾞﾆｭｰ花巻駐車場(有料)をご利用ください
備　考	

大慈清水　お休み処

岩手県盛岡市

だいじしみず　おやすみどころ

外観

この町家は1898年（明治30年）頃に、八百屋「八百勘」の大澤家町家として建築された。木で木を組む木組みの伝統工法で地震等に対して金物で固める剛的構造と違って、木組みの復元力で柔軟に対応する工法である。
昭和の初めに、大掛かりな改造をして、前2階を座敷にし、吹き抜け奥に 2階を増築した。戦後は、借家として、診療所、電器店の店と住まいに利用されてきましたが、空家となり、解体して駐車場化される可能性があった。
お休み処は特定非営利活動法人盛岡まち並み塾で、お借りし空家町家の再生第一号として取り組んだ施設である。
平成19年9月に地域の活動拠点、実物の町家見学、体験施設として開設された。
また、この界隈には鉈屋町に生活用水として今も使われている青龍水と大慈清水、２つの井戸があり、豊富な湧き水で酒造、豆腐、ところてん等の業種も生んだ。
毎月第２土曜日には盛岡町家の開放イベントも行われ、特に盛岡ｄｅ手作り市『てどらんご』は若者で賑わっている。

見どころ

盛岡の町家は、町人の職住一体型の住まいとして成立してきた。密集して住まう住居形態で現代的に表現するなら「横に連なる集合住宅」といえる。盛岡市鉈屋町にあるお休み処では、外部の狭い間口からの想像を超え、高く清々しい空間を堪能できる。中の間を家長の仕事の場、家の中心として常居（じょい）と呼び、２階が載らない吹抜けとし、この部屋に大きな神棚がありとても魅力的な空間である。主人を足下にしない、出世を妨げないと言われ、神棚の位置が家の間取りを決めていることから神のいる町家と呼ばれている。
外観は下屋付きで、道路と平行に屋根の棟を持つ平入り（ひらいり）である。この下屋は、青森県、秋田県境北部にみられるこみせ木造りアーケードが変化し、それぞれの家専用のうち土間に変わったものである。窓には細い縦格子を配し地味で落着いた姿である。

内観

神棚

夜景

建物名称	大慈清水　お休み処
建築年	1902年（明治34年）
構造・様式	木造亜鉛めっき鋼板葺二階建
所在地	盛岡市鉈屋町3-15
電　話	019-622-8989 （特定非営利活動法人盛岡まち並み塾）
Ｈ　Ｐ	http://machijuku.org/
開館時間	10：00～16：00（水曜日定休）
アクセス	バス盛岡駅東口13・14番線乗り場 「矢巾営業所」「日詰駅」行
備　考	

time＆space愛宕下

岩手県盛岡市

たいむあんどすペーす あたごした

南部家44代当主南部利英氏が1953年（昭和28）に建築。昭和30年に南部家別邸（現在は盛岡市中央公民館）が盛岡市に売却されることになり、その代わりとして、その前の昭和28年に建築された。南部家は東京に居住していたが、来盛時に滞在するための邸宅が必要であった。
施工は鹿島建設㈱（初代社長・鹿島精一は盛岡市出身）、設計者は不明である。

1953年（昭和28年）竣工時　離れが繋がっていた

見どころ

季節の花に迎えられ、和の趣きのある玄関は引き戸ではなく開き戸。うっかり引いてしまう。玄関で靴を脱ぎ広間へ。程よい高さの勾配天井と漆喰壁、すっきりとしたコンクリート打ち放しの暖炉、長い年月を経て磨かれた板の間に障子が映える。暖炉の壁面線は壁に対し、わずかに斜めで圧迫感を感じない。建具は外の景色を邪魔しないシンプルなデザインで、障子の桟は手前が細く奥が太く、台形状になっている。
広間の奥には一段上がって和室があり、間仕切りの引込み戸を閉めれば茶室としても使える。また、コンサートなどの舞台にもなる。季節ごとの床の間の掛け軸や飾り棚の設えを楽しむことができる。
4尺ほどの深い軒の出は、夏には日射を遮り、冬には暖かい日差しを導き、梅雨時は窓を開けて通風を得ることができる。外観は軒の水平線が美しく、建物に奥行きを与えている。
現在はオーナー夫妻が「ゆったりと流れる時（time）と心を解き放てる空間（space）」を提供しながら、珈琲・お茶を楽しむことができる場所になっている。

時代の変化を受けて、南部家はこの住宅を売却することになり、現在の所有者の親族が1963年（昭和38年）に購入したものの、平成21年まで使用することなく雨戸も閉めたままとなっていた。46年後の平成22年にこのタイムカプセルを開けたところ、屋内の保存状態はとても良く、また屋外も軒の出が大きいため建具やガラスの状態も良好であった。1953年（昭和28年）当時の姿に戻すこと、何も造り変えないこととし、傷んだところのみ修繕する工事を行い建物が蘇った。天井の漆喰、壁板、柱、床板、木製建具・ガラス、戸棚、暖炉等々のものが全く手つかずで現存している。
翌年23年3月11日の大震災では若干漆喰壁に亀裂が生じたが、大きなダメージは無かった。

コンクリート打ち放しの暖炉と障子が映える板張りの広間

建物名称	time&space愛宕下
建築年	1953年（昭和28年）
構造・様式	木造平屋建
所在地	盛岡市愛宕町23-49
電　話	019-651-8050
Ｈ　Ｐ	http://www.atagoshita.jp
営業時間	11：00～18：00　定休日：木曜・金曜（原則）
アクセス	盛岡グランドホテル　西側下
備　考	12月末から3月中旬まで冬眠

伊東家侍住宅（和洋食道Ecru）

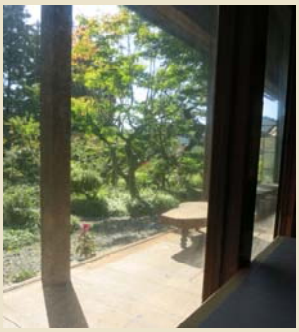
いとうけさむらいじゅうたく　　（わようしょくどうえくりゅ）

岩手県胆沢郡金ヶ崎町

金ヶ崎町城内諏訪小路重要伝統的建造物群保存地区内にある建造物で、江戸時代末期（１９世紀中頃）創建と考えられる。
城内諏訪小路地区は、金ヶ崎要害（城）と武家町のほぼ全域にあたり、当地の侍屋敷は小路と敷地境の石積みと生垣・エグネ（暴風防雪防暑の屋敷林）・庭園・建物などから構成されている。
伊東家侍住宅では、平成19年に主屋である侍住宅を一部創建時の姿に復元修理を行い、現在は主に公開部分をカフェとして、非公開部分を居住空間として利活用しており、侍住宅や屋敷生垣などは保存物件となっている。

見どころ

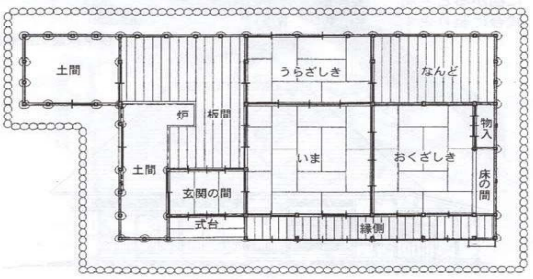
江戸時代の金ヶ崎侍住宅の姿がそのまま伝わる空間を体感できる。居間から奥座敷へと続く畳の間は、天井が高く開放的で、縁側からは梅・桜・あじさい・紅葉など、庭園の四季折々の景観を眺めながら美味しい食事を楽しむことができる。また、板間の炉や古家具・伊東家に伝わる調度品なども伝統的な和の暮らしが現在に引き継がれていることを感じさせる。
家主自らが庭園・畑の手入れや建物の手直しなどを行っており、またカフェとして常に多くの人が利用するなど、日々の生活そのものにより伝統的な空間の維持・継承がなされていることを実感させられる建物である。



【生垣･屋敷入口】
通り沿いにはヒバの生垣が回されており、また生垣の切れ目となる入口正面には樹木などが配されている。武家町の防御形態を取り入れた、通りからは敷地内部が見通しにくい構造となっている。

【屋敷地】
畑での野菜の自家栽培や、柿などの果樹木は、当時の金ヶ崎侍の半士半農生活を伺わせるものである。
庭園には、松の古木・梅・桜・紅葉などの樹木や池などが配され、季節の移り変わりによってさまざまな表情をみせる。

【侍住宅（主屋）】
創建時は、桁行7.5間、梁間4.5間の直ご家（すごや）・茅葺寄棟造りであった。昭和40年代に屋根が切妻鉄板葺きに改修されていた。平成19年の復元修理で創建時の寄棟大屋根に復元したが、維持管理上の問題から茅葺ではなく鉄板葺のままとした。 間取りは創建時と同様に復元し、建物表部分の奥座敷や居間･板間の一部･玄関の間･式台･土間の一部はカフェの客席部分として、奥の納戸･裏座敷･板間･土間はカフェ厨房や居住部として改修している。
土壁や建具などは復元修理時に新設したが、柱・梁などの構造材は創建時のものである。



創建時の間取り

建物名称	伊東家侍住宅（和洋食道Ecru）
建築年	江戸時代末期（19世紀中頃）
構造・様式	木造平屋建　寄棟造
所在地	岩手県胆沢郡金ヶ崎町西根六軒２
電　話	0197-34-3008
Ｈ　Ｐ	http://ecru.d2.r-cms.jp/
開館時間	11:30～15:00,18:00～21:00（定休日 火曜日）
アクセス	JR金ヶ崎駅より徒歩15分、水沢ICより車10分
備　考	金ヶ崎町城内諏訪小路重要伝統的建造物群保存地区内　保存物件

料亭 京極

りょうてい　きょうごく

岩手県盛岡市

建物外観

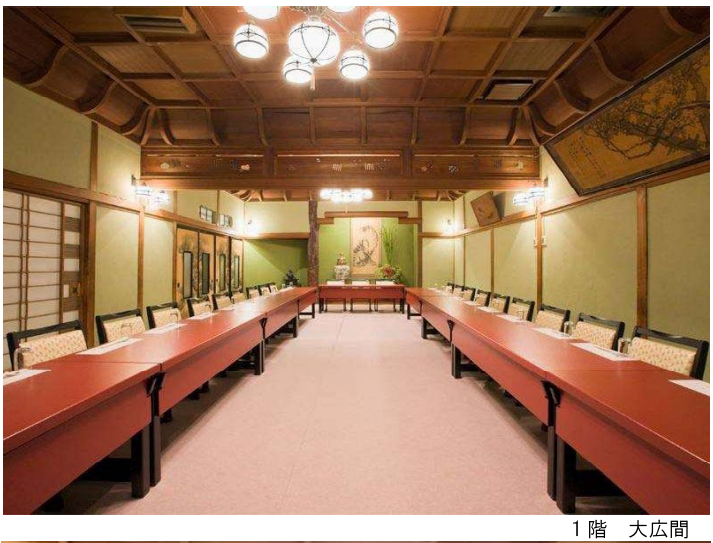
料亭京極は、昭和13年創業の歴史ある老舗の料亭である。大広間を含む7室のお座敷があり、盛岡市の街中にありながら一歩踏み入れると一瞬で歴史の中に引き込まれる。時代を超えた落ち着きのある空間で、旬の懐石料理や名物のうなぎ料理を味わうことができる。平成24年に耐震改修されている。

見どころ

玄関ホール・廊下・階段は、欅の大木を贅沢に使った漆塗りの床板が用いられいる。１階の大広間は、耐震改修時に壁を増設しているが、床の間・折り上げ天井・欄間等は創業当時のままである。欄間には源氏香図が彫り込まれている。

改修された建具等は、既存の大広間の佇まいを損なうことなく調和している。また、照明器具をLED対応器具へ交換しているが既存の器具のデザインと同様の器具を選定し調和が保たれている。

大広間には、原敬の別邸「介寿荘」より譲り受けた貴重な品々が並べられており、気品のある落ち着いた空間であり歴史ロマンを感じさせる。２階の改修されたお座敷の床の間は、部材にこだわり黒炭・柿・欅等を用い、障子の桟のデザインには、職人の繊細な仕事ぶりが感じられる。



１階　大広間

２階　改修されたお座敷

建物名称	料亭　京極
建築年	昭和13年（1938）
構造・様式	木造２階建て
所在地	岩手県盛岡市大通1-8-4
電　話	019-625-9459
Ｈ　Ｐ	https://kyougoku.gorp.jp/
営業時間	11:30～14:30(L.O.13:30) 17:00～22:30(L.O.21:00) （定休日：不定休あり）
アクセス	JR盛岡駅徒歩10分
備　考	

旧伊達伯爵邸　鍾景閣

宮城県仙台市

きゅうだてはくしゃくてい しょうけいかく

鍾景閣表門と脇玄関

旧伊達邸は、明治38年に第十五代当主邦宗が邸宅として、仙台市一本杉に建造したものである。旧大名層の屋敷の系譜を有する明治時代の華族邸宅の典型で、意匠的にも優れた建造物である。また、内向の諸施設葉をも配した、華族の生活資料としての位置も高い。旧伊達邸は、昭和55年聖ウルスラ学院から仙台市が寄付を受け、昭和60年10月、現在地に復元したもので、邸宅に保存されていた第五代藩主吉村公の扁額に由来し、「鍾景閣」と命名され、仙台市指定有形文化財に指定されている。

見どころ

表玄関、脇玄関、広間（侍待）、二重天井の大書院、武者隠しのある小書院（客座敷）、居間書院、奥座敷、他女中部屋、台所、浴室、便所なども大名屋敷の原型をとどめており、華族の生活をうかがわせている。表玄関の屋根は瓦葺き入母屋作り破風、脇玄関は切妻造り起り破風となっている。両玄関とも銅板葺きの屋根庇が二重に設けられている。大玄関の軒裏には柱の頭部に実肘木と大斗など複雑な枓栱が用いられている。　床の間の天井板に、ケヤキの一枚板、ヒノキの二列の竿縁天井、珍しいトチの板など部屋の格式ごとに違えてある。上質の材料が使われ、随所に大工の気概を感じさせる丁寧な造りとなっていることを肌で感じることができる。

設計は、当時宮城県で活躍した第一級の建築士、山添喜三郎であることがわかっている。山添はオーストリア万博に大工棟梁として招かれるほどの腕のいい大工で、仕事には極めて忠実で施工や材料にもずいぶん厳しく次のようなエピソードが語り伝えられている。瓦は一枚一枚重量を測り、一定以上の瓦は容赦なくはね材とし、材木も検査が厳重ではね材が多く出されたため、納入業者は次次と倒産したといわれている。

仙台藩祖、伊達政宗公は、料理に対して、強いこだわりを持っていた人だったと言われており、「少しも料理心なきはつたなき心なり」（少しも料理の心得がない者は貧しき心の持ち主だ）という言葉が、政宗公の言動を書き記した『政宗公御名語集』に残されている。
鍾景閣は現在、レストランとして、一般に開放されていて趣きのある仙台箪笥に会席料理を納めた箪笥料理やお食事膳をいただくことができ、建物や器の美しさを五感で楽しみながら鍾景閣を堪能することができる。

建物名称	鍾景閣
建築年	1905年（明治38年）
構造・様式	木造平屋建て一部二階　書院造
所在地	仙台市太白区茂庭人来田西143-3
電　話	022-245-6665　㈱金魂グループ
Ｈ　Ｐ	https://shoukeikaku.jp/
開館時間	11：30～15：00　17：00～20：00
アクセス	宮城交通バス「秋保温泉行」「二口温泉行」「茂庭台団地行」「茂庭荘入口」徒歩15分
備　考	仙台市指定文化財

時音の宿 湯主一條　木造本館

宮城県白石市

ときねのやど ゆぬしいちじょう　もくぞうほんかん

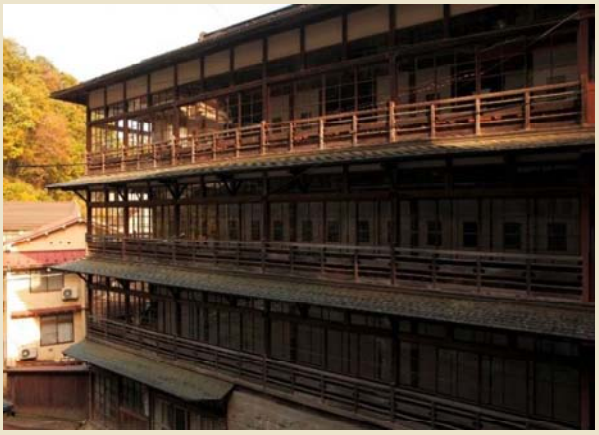
木造本館　全景

鎌先温泉郷は、古くから交通の要所である、宮城県最南端の白石にあり、1428年頃に開湯されたと言われ、伊達政宗や白石城主片倉景綱（小十郎）も入湯したと言われている。その中の一番奥に立地し、一番古い歴史を持つのが湯主一條である。急峻な土地を徐々に切り開いて建物を増築していった経緯があり、巧みな配置計画が美しい景観をつくりだしている。

木造本館を坂から見る

見どころ

木造本館は湯主一條の建物群の中で一番手前に位置しており、温泉街の細い坂をあがった先に、木造４階の建物がそびえるように現れる。その姿は圧倒的であるが、外部がすべて木製ガラス建具であるため、軽やかさも感じる。木造本館の先には同じ形態の湯向棟・事務所棟、その左手に客室棟と続く。一歩踏み出すごとに、表情をかえる景観は一瞬にして、昭和初期へタイムスリップする感覚を味わうことができる。
かつて湯治用の客室であった木造本館は現在、宿泊客の食事の場として使用されている。山あいの深遠な景観は夕暮れには、木造本館・湯向棟に灯る照明で、幻想的な雰囲気に包まれていく。最後は座してゆっくりと空間を堪能することをお奨めしたい。



【木造本館】
外周部四面に回廊、西面に８畳４間と６畳１間、東面に６畳４間と4.5畳１間が横並びとなり、各々１間の床の間と飾り棚を背にして配置されており、１階から３階まで同様の平面となっている。
東日本大震災時、木造本館は外周部の木製建具が１枚外れたのみで被害は全くなかったという。外周部はすべて開口だが、内部の間仕切り壁が背骨のような役割をし、地震力に耐えたのでは、と推察されるが、建設に携わった棟梁の技術によるところも大きいと思われる。木造本館の工事は塩谷藤吉氏が請け負い、気仙大工の手伝いも頼んだと言う。木材は一條家が所有する山から切り出した100年生の杉を使用し、伐採・製材開始から落成まで約２年半の年月を要した。当時の通路は石段であったため、材料の運搬もすべて人力だった。建前時には人足の数は300人にもなり、１週間ほど続いたという。また、当時は統制の時代で、釘・金物の入手には困難を極めたため、継手や仕口には金物を使用せずに木を組み上げ、また柱も主要柱61本中33本を33尺長さの通し柱とするという木工事を行ったという。
創建当時の姿を維持していて、建築好きにはたまらない見どころが多く、大正・昭和期の大工技術が最も高かったと言われる時代の技術を感じることができる建物である。

建物名称	時音の宿　湯主一條　木造本館
建築年	1941年(昭和16年)
構造・様式	木造三階(一部四階)建
所在地	宮城県白石市福岡蔵本字鎌先1-48
電　話	0224-26-2151
Ｈ　Ｐ	http://www.ichijoh.co.jp/
開館時間	一般公開はしていないが、宿泊者は見学可能
アクセス	東北新幹線白石蔵王駅よりタクシーで15分 東北自動車道白石ICより車で20分
備　考	湯向棟、土蔵とともに国登録有形文化財

良覚院丁公園と緑水庵

宮城県仙台市

りょうかくいんちょうこうえんとりょくすいあん

緑水庵

良覚院丁公園の良覚院とは、京都聖護院（天台修験）の末寺で修験寺のことであり、伊達の祖・伊達朝宗（1199年没）に仕えた日林という修験者が、良覚院の始祖である。代々伊達家に仕え、伊達政宗が岩出山から仙台に居城を移した1602年（慶長7年）に従ってきてこの地を賜り、修験寺が建てられたと言われている。藩政時代には、政治、軍事、事変、日常の吉兆運勢について祈祷を行い、伊達家の信頼も厚く一門格の待遇を与えられ威勢をふるっていたという。明治に入り伊達家からの保護が無くなって、廃寺となり、広大な土地のほとんどは、民有地に変わり、庭も錆びれたが、明治中期頃、5年がかりで改修された。今茶室として使われている建物は1899年（明治32年）に建てられた。うっそうとした樹々に囲まれていたためか昭和20年の空襲を免れて残った。戦後の復興事業により庭園が分断される形で区画街路計画が持ち上がった時、市民の間からこの庭を残してほしい旨の申し入れがあり、計画は変更され、公園として残される事となった。昭和35年、庭園に残る建物は仙台市に寄贈され「緑水庵」と名付けられた。築約120年を経ているが、傷んだ所はその都度、改修、補修されており、建物の状態はとても良い。

現在は月に2回、一般公開され、庭園を眺めながらお茶を頂ける。他の日は予約を入れて、利用する事もできる。

見どころ

緑水庵がある、良覚院公園は仙台駅から約1.2kmの市の中心街に位置し、周囲は高層マンションや事務所ビルに囲まれ、近くには仙台高等裁判所、地方裁判所、仙台高等検察庁など官公署のある地域内にあるが、細い路地から門を一歩入ると、高い木立に囲まれた庭園内は濃い緑に覆われて、都市の喧騒から解放され、静寂な空間を感じさせる。庭を管理されている方が、苔が少なくなったと嘆いていたが、周囲の高層の建物の間から漏れる太陽の光も少なくなってきているせいかもしれない。緑水庵は、茶事を目的として使われており、和室（8畳、6畳、3畳）水場、管理室、便所（身障者用含）準備室などの規模である。特に和室8畳から障子を開けて眺める庭園は美しい。濡れ縁の下屋の桁の丸太組、柱は土台を両側から差し込む「柱勝ち」で納め、木材の小口を見せない構造、障子の突合せ部、蚊帳の吊金具などの何気ないﾃﾞｨﾃｰﾙに先人の知恵を感じて懐かしく、落ち着く。

庭にはアカマツ、イチョウ、モミジ、ツツジ、シラカシ、サルスベリサンゴジュなどの樹々が茂り、茶室に一層、趣を加えている。
特に6月の梅雨時には苔が十分に水を含んで緑のじゅうたんを敷き詰めたようになり、木立の緑と相まって光も緑色に光って見える。

庭から見た緑水庵

緑水庵

建物名称	良覚院丁公園と緑水庵
建築年	1899年（明治32年）
構造・様式	木造平屋建　数寄屋造
所在地	仙台市青葉区片平1-2-5
電　話	022-225-3860
Ｈ　Ｐ	http://www.city.sendai.jp/aoba-koen-somu/aobaku/koen/ryokusuian.html
開館時間	毎月２回公開日 9：00～16：00
アクセス	市営地下鉄東西線　大町西公園駅下車3分
備　考	

角田市郷土資料館（旧氏丈邸）

宮城県角田市

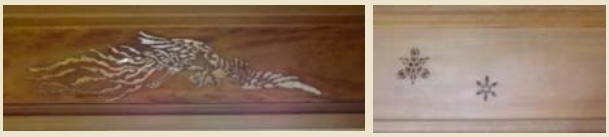
かくだしきょうどしりょうかん（きゅううじじょうてい）

角田市郷土資料館（旧氏丈邸）は、明治初年から大正年間にかけて、初代と２代目の氏家丈吉氏が建築した邸宅である。
敷地は東西に細長く、西側の通りに面して、表門と明治初年に建築された土蔵造り２階建の店蔵があり、奥に進むと明治10年建設の主屋、大正10年に2代目丈吉によって建築された新座敷、奥座敷、水回りへと、廊下と縁側で各室にアプローチできる間取りとなっている。敷地内にはこのほかに土蔵造りの初代丈吉の時代に建てられた文庫蔵、二代目丈吉によって建てられた前蔵、二棟の米蔵が並び、敷地の奥にはこの地方には珍しい、土蔵造りの明神様がある。
表門は角田城の門と伝えられており、明治15年に移築されたものである。庭の石灯籠も角田城からと伝わるもので、主屋も？という興味深いお話を資料館の方から聞いて頂ければと思う。

見どころ

明治の主屋から大正期の新座敷、奥座敷へと続く、南側に大きく開かれた縁側を雁行して庭の風情を十分に感じながらそれぞれ趣の違う座敷に招き入れられる。上段の間、新座敷、奥座敷、２階座敷と、各々の室をイメージ付ける床の間のしつらいやそれらの空間をサポートする欄間、建具の意匠、引手のデザイン、大正期の照明器具。大正の二間続きの新座敷から、廊下で隔てられた二間続きの奥座敷へ、と歩き回るのではなく、それぞれの座敷に座して感じて頂くことをお奨めしたい。
おもてなしの空間を堪能したら、北側の夏座敷にまわって頂き、櫛形の上部明り取りのある、また違った風情の空間を感じて頂きたい。

【引手と欄間　（下図）】



【手洗（右）・洗面室（下左）・
脱衣室（下右）】

客人へのおもてなしの心の集大成は、大正浪漫の香り漂う浴室の手前、水回りに凝縮されているように思われる。
特に３畳の脱衣室には、網代の引戸、格天井、火燈窓、袋床とまるでお茶室の風情漂う空間なのである。

【床の間（明治の主屋）】
天袋、違い棚、蹴込床、
付け書院筬欄間
書院窓も欄間と同じ意匠。
繊細な柳障子
床脇も蹴込床であるが、
床の間とは違なる納め方

【床の間（大正）】
（左）新座敷
袋棚、本床、付け書院欄間
透かし彫

（左中）奥座敷
琵琶床

（左下）２階座敷
西楼棚（海老束埋木細工）
本床、平書院欄間透かし彫
地袋

（下）夏座敷
２段床、地袋

建物名称	角田市郷土資料館（旧氏丈邸）
建築年	1877年（明治10年） 東側増築1921年（大正10年）
構造・様式	木造平屋建て一部二階　書院造
所在地	角田市角田字町17
電　話	0224-62-2527
Ｈ　Ｐ	http://www.city.kakuda.lg.jp/syogai/page00001.shtml
開館時間	9：00～16：30（年末年始、月曜休館）
アクセス	阿武隈急行線「角田駅」よりタクシーで5分
備　考	角田市指定有形文化財

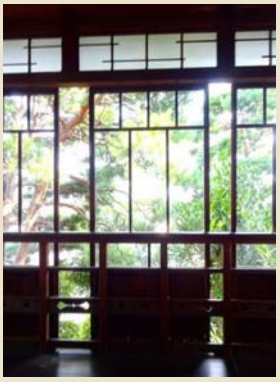
海商の館　旧亀井邸

宮城県塩竈市

かいしょうのやかた　きゅうかめいてい

この建物は、亀井商店「現総合商社カメイ（株）」の初代社長 亀井文平氏によって大正13年（1924年）に建てられた。
この頃の塩釜港は、明治15年から始まった開港場（ｶｲｺﾊﾞ）の埋立による港湾整備が進み、明治43年には、東北で初めてとなる国の重要な港湾としての指定を受け、明治45年には、県内で二番目になる近代的上水道（現権現堂浄水場）の完成を機に、東北で初めてとなる製氷会社が設立され、いつでも氷があるという事から、外来漁船が増加した。
明治20年には、東北本線の東京ー塩竈駅間が開通しており、明治30年以降、石油も一般に使用されるようになり、電灯も明治44年には利用されるようになった。
荷揚げに便利な祓川（はらいがわ）に面した場所に砂糖、小麦粉、食用油、髪油、灯油やろうそく製造販売の店を開店していた文平氏は、東北にも販路を求めていた日本石油（株）から、明治41年ついに、三陸沿岸の日本石油代理販売店の資格を取得した。（日本石油（株）は、日本の石油産業発祥の地である新潟で設立され、国産越後油の名を広めていた）
その後の塩釜港の整備による東京、函館への航路開設、漁船の大型化、港への出入りの増加などにより繁栄する塩釜港と亀井商店の隆盛を象徴した住宅である。

見どころ



接客空間である２階への階段は、隣室の前を通らずに各々の部屋から出入りできるように途中で二方向に分かれている。廊下は、擦り硝子の欄間、腰板付の硝子戸、間隔の広い欄干、腰板の高さと欄干の横桟が同じなど、一本引きの硝子戸を全て引込むと、素晴らしい景色が広がったと思われる。
また欄間は、縁起がいいと言われる、蝙蝠と金魚をモチーフにした華やかなもので、日本石油（株）の社章でもある蝙蝠は、引手としても使われている。

玄関と居室を仕切るのは、夏のしつらえである簀戸。今も、建具替えが行なわれていて、冬のしつらえになるとその空間は一変する。季節を変えて訪れて頂きたい。

塩竈神社裏坂をなかほどまでのぼり、左手に引き込まれるような小路を進むと門があらわれる。かつて塩竈神社の裏坂は、商店が立ち並び、参拝客でにぎわう通りであったというから、喧騒を離れた、見晴らしのいい高台に建てられたお屋敷であったと思われる。

門をくぐり、セセッション様式を取り入れた洋館を左手に見ながら玄関へ

玄関の式台は、一枚板の埋め木細工、天井は折上げ格天井である。

洋館の室内は、漆喰壁、板間、縦長の上げ下げ窓であるが、丸窓に組子の引分け戸と和の意匠。

建物名称	海商の館　旧亀井邸
建築年	1924年（大正13年）
構造・様式	木造二階建て　和洋併置式住宅
所在地	塩竈市宮町5-5
電　話	022-364-0686
Ｈ　Ｐ	http://shiomo.jp/archives/1057
開館時間	10：00～15：30（年末年始、火水木曜休館）
アクセス	ＪＲ仙石線本塩釜駅より徒歩10分
備　考	

不老仙館

ふろうせんかん

宮城県登米市

不老仙館は、嘉永5年（1852年）、仙台伊達家第13代藩主伊達慶邦（楽山）公が北部巡視される際の宿泊所として狼河原村（現東和町 米川地区）の畠山源兵衛宅に建築されたものと伝えられている。
明治39年（1906年）佐藤家の3代新助氏が買い受け、明治38年の凶作による米谷町の町民救済事業として、約3年かけて現在地に移築したものである。
玄関を東側から西側に移したこと以外は、原形のままであるが、大正10年から12年（1921～1923年）にかけて玄関から西の二階部分が増築され、来客用の水回りおよび、家人用の便所・風呂も北側に増築されている。
移築当初木羽葺であった屋根は、昭和5年にスレートに、平成8年には二階部分と調和のとれるように葺き替えられ、現在に至っている。

見どころ

3代新助氏も米谷村会議員や県会議員などを務められたが、その後のご当主の方々も米谷町長などを務められたため、この建物はゲストハウスとしても使用され、ここに逗留された著名な文人墨客による書画が数多く置かれている。どの和室にも襖絵があるが、下図は大正に増築された二階にある襖絵で、大正13年に北村西望が宿泊した際に画したものである。
襖絵のある空間をじっくりと味わって頂きたい。

来客用の水回りへは、移築された建物に接続された長い渡り廊下を歩いて行く。この渡り廊下は、船底天井で模様入り擦りガラスの入った相当な枚数の腰窓は、一本引きである。「開け放すこと」の思いを感じる。先には、同仕様の建具とマジョリカタイルが使われた浴室がある。

【茶室】
大正13年（1924年）に岩手県東磐井郡小梨村大登（現一関市千厩町）にあったものを解体して移築した。天井は竿縁の割付がユニークな、折上竿縁天井である。また、踏込床の床の間に対し、床脇は蹴込の床とし、一段上がったところにある地袋と違い棚、天袋が、床の間側に緩やかに弧を描き納まっている。きのこの海老束、埋木細工の窓台、額は渋沢栄一氏の書、掛軸は土井晩翠氏の画と豊かな床の間である。

【手水鉢と濡れ縁】
上壇の間の東側にある手水鉢とそこにアプローチするさらし竹の濡れ縁。

【日本庭園】
5月末ころからキリシマツツジが見頃となり、その後、別種のツツジが咲き始める。

建物名称	不老仙館
建築年	1852年（嘉永5年）　西側増築1921年（大正10年）
構造・様式	木造平屋建て一部二階　書院造
所在地	登米市東和町米谷字秈荷（ぜんか）65
電　話	0220-42-2002
Ｈ　Ｐ	http://miyagi-maiya.jp/guidemap/furosenkan/
開館時間	10：00～15：00（年末年始、月曜休館）
アクセス	三陸自動車道　登米東和Ｉ.Ｃから車で5分
備　考	登米市指定有形文化財

大館市立鳥潟会館 （旧鳥潟家住宅・庭園）

秋田県大館市

おおだてしりつ とりがたかいかん（きゅうとりがたじゅうたく・ていえん）

表門

鳥潟家は慶長年間のころから続く旧家で、花岡の肝煎を代々務めてきた家柄であった。花岡といえば鉱山で大変栄えた町だった。
第17代の鳥潟隆三博士は、1936年（昭和11年）に京風の意匠を取り入れ、邸宅の増改築と庭園の拡張を行った。庭造りには京都から造園師を招き、庭石に京都の鞍馬石を使うなど、京風の情緒豊かな庭園として、建物と共に東北地方有数の文化遺産といわれている。
2011年（平成23年）3月22日、建造物が秋田県指定文化財に、庭園が秋田県指定名勝（記念物）に指定されている。

主人室から眺める庭園

見どころ

主屋は1760年代初めの建築、1936年（昭和11年）に曳家・増改築した建物である。旧屋部は江戸期の、増改築部は京風数寄屋造りとなっている。
また、増改築時に庭園の拡張を行っており、京都から1000人を超える大工・左官・造園師を招き、５年の歳月をかけて完成させたといわれている。随所に珍しい材料や趣向が凝らされており、秋田の奥地にありながら、京都風の侘び寂びを感じられる総合的な空間となっている。
場所により全く違う意匠・雰囲気を持っており、多くの使用人・職人が宿泊した裏の領域も圧巻である。どれだけ多くの感動を見つけられるかもひとつの楽しみ方である。

茶室と離れ

中門

母屋

台所

建物名称	大館市立鳥潟会館（旧鳥潟家住宅・庭園）
建築年	1760年代初め（1936年（昭和11年）移転・増築）
構造・様式	木造二階建　数寄屋造
所在地	秋田県大館市花岡町字根井下156番地
電　話	0186-46-1009
Ｈ　Ｐ	http://odate-city.jp/museum/torigata
開館時間	9：00～17：00（11～3月は16：00終了）休館日有
アクセス	秋北バス　鳥潟会館前/花岡本郷 下車 駐車場有（大型可）
備　考	建物：秋田県指定文化財 庭園：秋田県指定名勝

旧秋田藩主佐竹氏別邸（如斯亭）庭園

秋田県秋田市

きゅうあきたはんしゅさたけしべってい（じょしてい）ていえん

如斯亭庭園は、元禄年間に３代藩主佐竹義処が近臣の大嶋小助に土地を与えて、建てた別荘がその起源であり、佐竹氏居城の久保田城搦手（裏門側）にあたり、遠く太平山系を望む景勝地に営まれました。
寛保元年（1741）には五代藩主義峯に献上され、倹約の旨により一時衰亡しましたが、８代藩主義敦が安永４年（1775）に再興しました。

見どころ

流れは園内北東部の築山の峡谷から発し、中島を配した園地を経て清音亭の露地に至ります。絶え間ない水流は、見る人に由来となった光景を思わせる構成となっています。園内の見所である「園内十五景」は紅霞洞、靄然軒、夕陽坡、観耕台、清風嶺、佩玉矼、仁源泉、超雪谿、玉鑑池、弓字径、渇虎石、巨鼇嶋、星槎橋、幽琴澗、清音亭からなり、庭園の遠路を回遊することで、それらの奇岩の景石や灯籠、四季折々の植栽など様々な風景を楽しむことができます。
この庭園は回遊式庭園であるほか、園から北西の山を望む借景式庭園、主屋から見る鑑賞式庭園としての要素をもつ庭園でもあります。
市指定名勝千秋公園（秋田市）や国指定名勝旧池田氏庭園（大仙市）の設計に関わった、近代庭園の祖といわれる長岡安平は、如斯亭庭園を「寛政頃完成し東山時代の構を伝えたと思われる東北では無二の名園」と絶賛したと伝えられています。
旧秋田藩主佐竹氏のものとして現存する唯一の庭園で、東北地方の大名庭園や庭園文化を知る上でも重要な文化遺産です。

9代藩主義和によって庭園が本格的に整備され、秋田藩校明徳館の助教幹事であった儒者那珂通博に「園内十五景」を選定させました。そして名を「如斯亭」に改め、藩主の御休所にとどまらず、藩内外の多くの文人墨客の交遊の場ともなり、佐竹氏の文化の表徴として多くの詩歌書画にうたわれるようになりました。
9代藩主義和が名付けた「如斯亭」の由来は、孔子の論語「逝者如斯夫、不舎昼夜（逝くものは斯くの如きか、昼夜をおかず）」からとったもので、水流の絶え間なき流れを嘆賞しつつ、人間のみちも学問もまたかくあるべきという意味といわれています。

平成19年（2007）に国の名勝に指定され、平成26年（2014）から修復整備を行い、往時の姿に蘇った如斯亭庭園は、平成29年（2017）10月に秋田市の新たな名所として開園しました。

建物名称	旧秋田藩主佐竹氏別邸（如斯亭）庭園
建築年	寛政の頃
構造・様式	木造平屋建
所在地	秋田市旭川南町2番73号
電　話	018-834-6300
Ｈ　Ｐ	
開館時間	午前9時～午後4時30分（4月～11月） 午前9時30分～午後4時（12月～3月）
アクセス	【バス】秋田駅から約10分　「秋田温泉線」もしくは「仁別リゾート公園線」でバス停「からみでん」下車。徒歩5分 【自動車】秋田中央ICもしくは秋田北ICから車で約15分
備　考	

旧佐藤政忠家住宅

秋田県由利本荘市

きゅうさとうまさただけじゅうたく

西側通り　座敷部

秋田県の南部、江戸時代、讃岐より入部した生駒氏が治めた矢島藩（由利本荘市矢島町）に『旧佐藤政忠家住宅』はある。1868年（明治元年）の戊辰戦争により多くの城下の建物は焼失。翌1869年（明治2年）に江戸家老であった加川退蔵の住宅として建てられた。当時の加川家住宅は、八森陣屋の近くにありましたが、1873年（明治5年）に加川家が東京へ転任するにあたり、佐藤政忠が所有。その後現在の地へ移転された。
本住宅は当時の江戸大工の手によるものとされていて、武家住宅の様子をよく伝えている。

南側通り　正面

建物は145.634㎡、矩折の木造平屋建。西側通りの桁行7.5間は座敷部、南側通りの桁行4間は台所部になっている。
屋根は緩い勾配の銅版葺切妻屋根。西側の壁面には繊細な格子を組んだ板屋根の出窓を設けて、東側の縁側からは風情のある庭を眺めることができる。
玄関を入ると、畳敷きの取次、供部屋、8畳の茶の間、6畳の中座敷、6畳の奥座敷、縁側の座敷部。台所部は玄関すぐ隣にある勝手口(土間）、台所、水屋と縁側を通って奥座敷まで移動できる。
ハレ（特別な時）の間・ケ（普段の生活）の間とを区別できる間取りになっている。
内観、外観とも簡潔につくられていますが、出窓の繊細な格子や茶の間の造り付けの神棚・仏間など目を惹く。

取次　供部屋

見どころ

座敷の天井高が2100mm程度と低く、畳の上にそのまま座ると落着く空間になっている。そして、この和室ならではの簡素で融通性のある空間に身を置くと、当時の清廉潔白な日本の美意識とゆっくりとした時の流れを感じることができる。

建物名称	旧佐藤政忠家住宅
建築年	1869年（明治2年）
構造・様式	木造平屋建
所在地	秋田県由利本荘市矢島町矢島32
開館時間	9：00～16：30 ※事前申込みが必要
利用申込み	由利本荘市教育委員会　矢島教育学習課（日新館） 0184-56-2203
アクセス	由利高原鉄道鳥海山ろく線矢島駅より徒歩15分 羽後交通バス矢島総合支所前徒歩0分
備　考	

シェアビレッジ町村

しぇあびれっじまちむら

秋田県南秋田郡五城目町

大戸

冬の茅葺住宅に明かりがともる。今はほとんど目にすることのない景色が、ここにはある。まるでタイムスリップしたかのように暖かくそして懐かしい暮らしの風景。

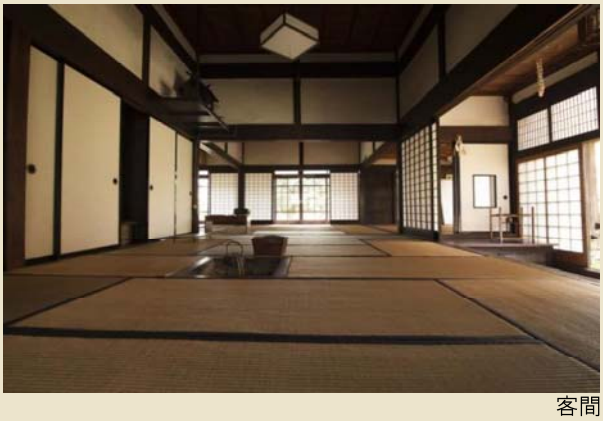
高齢化率日本一の秋田県の中央、人口約9,000人の秋田杉に囲まれた集落に、築135年の茅葺古民家がある。東北地方の日本海側に多く見られる中門造りの農家建築で、土間内部の床上部分にイナベヤ（稲部屋）という稲収納場を設けているのが特徴のひとつである。ニワは、収穫された農作物のほか季節の山菜などの加工・保存等の作業場であった。

ニワ

見どころ

里帰りの村民（会員）が古民家維持のために、自分のスキルを提供する「助太刀」で、家守や地域住民と共に掃除・手入れが行なわれている。夏には茅葺屋根の葺き替え作業まで協力してくれる。
三和土（玄関）と土間に囲まれた茶間と、その奥の間とつながる畳の間は、村民たちが集い囲炉裏で鍋を囲む交流の場として今も活きている。

縁側



客間

書斎

【古民家から始まる新しい田舎】
この茅葺古民家が取り壊しの寸前に、「家を一人で維持することの困難」な家主の厳しい現実を聞いた一人の若者が、家の維持費をみんなで分け合う「シェアビレッジ」という仕組みを思いついた。この家を一戸の古民家として文化的に保存をするのではなく、新たな「村」をつくるためのシンボル（拠点）として蘇らせた。この「シェアビレッジ町村」は秋田県の農家民宿として登録されており、年貢（年会費）を納めれば誰でも村民となれて里帰り（宿泊）ができる。玄関を入り左側には一際目を引く広い土間があり、子供のころ夏休みに遊びに行った祖父の家を思い出させる。宿泊専用の和室は、質素で優美かつ落ち着きのある空間で、過去の家主が丁寧に守り続けてきた証である。ここを地元のおじいさんやおばあさんが土間に座り、都市から来た若者たちと談笑している風景を理想としている。その風景そのものが”村”であり、いろいろな人がまざり助合い”村”のように維持していく。

【第二の故郷へ”憧れの里帰り”】
この民宿は、100年以上も昔の先祖たちが過ごした空間で宿泊し、郷土料理を楽しみ、里山サイクリングで山々を駆け巡り、里山での暮らしを体験することができる。
単なる見学ではなく、この先100年住み継げることを目的に活動している若者たちと、地域住民が、農業文化を通して、人も里も共に生きる方法で新たな地域、暮らしのスタイルを創造し再び歴史を刻み始めた。
そして今、高齢化が進む過疎の村に子供たちの笑い声が聞こえ始めている。

三和土（玄関）

建物名称	シェアビレッジ町村
建築年	1878年（明治11年）頃
構造・様式	木造平屋建　中門造　曲家　農家民宿 全9部屋（うち2部屋は宿泊専用）
所在地	秋田県南秋田郡五城目町馬場目字町村49
Ｈ　Ｐ	http://sharevillage.jp/machimura
開館時間	10：00～15：00（火、木、祝日定休　土日営業） 問合せ：事前HPcontactより専用メールフォーム
アクセス	JR八郎潟駅より車で約20分（10km） 秋田空港より車で約50分（50km　高速道路経由）
備　考	運営（農家民宿部分）：大潟村松橋ファーム

旧工藤家住宅（中小路の館）

秋田県鹿角郡小坂町

きゅうくどうけじゅうたく　　（なかこうじのやかた）

小坂村（現小坂町）の工藤家は明治期の大地主で、11代目当主・作兵衛が1885（明治18）年に私邸として建てた。江戸時代には南部盛岡藩士として津軽藩と秋田藩との藩境を管理する御境古人を勤め、御給人と呼ばれる武士の家柄で、明治期の旧住宅にも武家だった頃の面影が残っている。

工藤家住宅は、鹿角市十和田毛馬内から青森県平川市につながる街道沿いに立つ。江戸時代には上役の御境（おさかい）奉行が年２回巡視に訪れ、宿泊や村人への申し渡し場として工藤家住宅を使った。当時の住宅は84（同17）年に焼失したものの、作兵衛がそれを模して再建したため、厳格な家の雰囲気が今も感じられる。

板の間　囲炉裏端

南北に長い直屋は東側を正面とし、大きな寄棟屋根が目を引く。中央部に常(じょ)居(い)（現在の仏間および北側取次）、その奥に納戸が配され、南側には座敷２室、北側に板の間や土間が設けられている。常居と座敷の東側には式台の付いた大玄関があり、家格の高さを感じさせる。大玄関の張り出しは昭和初期の増築である。平成10年（1998年）に小坂町に寄贈されるまでは、工藤家の避暑地として使用されてきたが、末永い保存のため街に寄附され、「中小路の館」は工藤家の屋号にちなんで名づけられた。また、家の前の巨木は「中小路のくぬぎ」（推定樹齢300年）として地域のシンボルとなっている。

便所に通じる縁側扉

見どころ

奥座敷と床の間まわり、寝室２室、板の間に面する柱にはケヤキ材が用いられ、東側正面に面する部屋と区別されている。床の間は奥座敷、寝室及び２階予備室に設けられ、いずれも床(とこ)框(がまち)下に蹴(け)込(こみ)板を付ける形式である。床わきや書院の有無など異なった意匠を見せ、蹴込板に部屋毎に違った装飾を施している。また、大玄関を入った取次の間は矢(や)筈(はず)張(ばり)天井としている。板の間及び土間上部は太い梁組の重なりと茅葺の小屋裏を見せ力強さを感じさせる。

板の間の囲炉裏端には、床を堀り下げて造られた「室」があり、火棚で乾燥された蒔きを保管したり、ベンケイに串刺しして燻した岩魚や山女の燻製などを保管していたという。

2階の客間は天井は低いものの、床の間の設えを見ても、著名な方たちが逗留したことが伺える。

囲炉裏端　ベンケ

座敷　床框

板の間　室

2階　客間

板の間から寝室を見る

建物名称	旧工藤家住宅（中小路の館）
建築年	明治18年　　築 134年
構造・様式	木造2階建て　直屋（すごや）造り 全10部屋　貸出
所在地	秋田県能代市柳町13-8
Ｈ　Ｐ	https://www.town.kosaka.akita.jp/kanko_rekishi/ e-mail : kyodokan@town.kosaka.akita.jp
開館時間	9時00分～16時30分 毎週月曜日（祝日の場合は開館し翌日旧館）祝日の翌日 冬期間（12月1日～3月31日まで） 問合せ：小坂町立総合博物館郷土館 Tel0186-29-4726
アクセス	東北自動車道小坂I.Cから車で　3分　駐車場完備 高速バス小坂停留所からタクシーで　2分

旧長谷山邸（総合交流促進施設）

秋田県雄勝郡羽後町

きゅうはせやまてい（そうごうこうりゅうそくしんしせつ）

土蔵高楼　外観

旧長谷山邸は、羽後町の出羽丘陵の子吉川水系に属する西部地区、標高200～300mの山間・高原地帯である田代地区の中心部に位置している。
長谷山家は代々羽後町田代地区の地主をしていた豪農であったが、最後の当主長谷山行毅氏は、参議院議員や、裁判官弾劾裁判所の裁判長を務めた村の名士であった。
その長谷山氏が亡くなった後、土地と建物を羽後町に寄贈。1998年(平成10年）に、羽後町が改修整備を行い、総合的な交流の場として利用、公開、保存を行っている。

母屋　外観

見どころ

母屋は、この地方に多く見られる茅葺民家形式の中門造りの様式で、側柱上端から腕木を出した船枻（せがい）造りの重厚な外観。内部は、梁を幾重にも積み重ねる「本小屋」の梁組である。
土蔵高楼は、周囲に映える白壁と軸部の均整のとれた美しさが「長谷山の三階建」と言われ、この二つの建物が渡り廊下で連結されている。現代の家には無い、太い柱、梁を組み上げた内部は一見の価値がある。地主屋敷の風格を保ち地域のシンボルとして親しまれている本格的な木造の歴史的建造物である。

土蔵高楼　外観

土蔵高楼からの眺め

１階に土蔵･３階の和室へ

土蔵高楼の3階（和室）

母屋正面には唐破風屋根の玄関があり、懸魚（げぎょ）には、鯉の透かし彫り、軒飾り、方立の雲形の彫刻等、格式の高い造りになっている。内部は、梁を幾重にも積み重ねる「本小屋」の梁組で、柱は200角･大黒柱は300角と豪雪地域に十分耐えられる骨組みとなっている。座敷は仏間を含め3室。1室は床の間をもち書院･違い棚をしつらえてある。違い棚の足元に桜樺をもちいたり、欄間は亀甲模様の組子細工でほどこされ、長押に蟹や蝶々等一室ずつ形の異なる釘かくしをほどこす等、細部にまでこまやかなこだわりの意匠がみられる。
土蔵高楼は、1階部分の土蔵に高楼を乗せた独特な形式で、3階に床の間を持つ座敷がある。書院に細やかな組子細工の建具や、黒柿の銘木を使用する等、来客をもてなす空間として上品にしつらえている。

母屋　内部

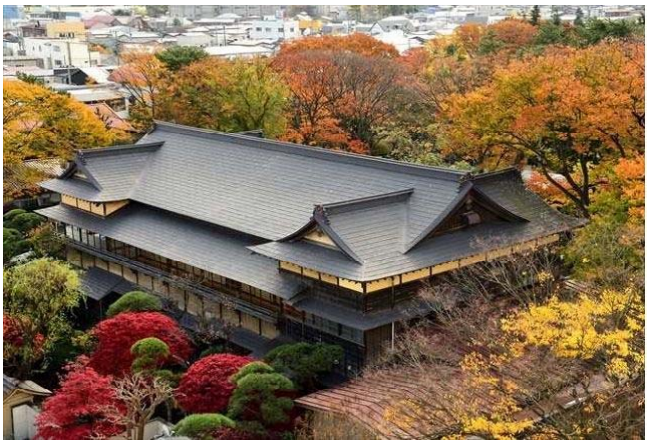
母屋 和室
欄間・釘かくし

建物名称	旧長谷山邸（総合交流促進施設）
建築年	母屋1885年（明治15年）･土蔵高楼 1902年（明治35年）
構造・様式	母屋（木造平屋建）･土蔵高楼（木造3階建一部土蔵）
所在地	秋田県雄勝郡羽後町田代字麓67番地3
開館時間	土・日曜日　9:00～17:00 ４月～11月（12月～3月の冬期は終日休館）
アクセス	JR湯沢駅からタクシーで30分 車　湯沢横手道路　湯沢ｲﾝﾀｰﾁｪﾝｼﾞから30分
問い合わせ	羽後町役場 企画商工課 観光担当 秋田県雄勝郡羽後町西馬音内字中野177 電話：0186-62-2111　内線：223～224）

旧料亭　金勇

きゅうりょうてい　かねゆう

秋田県能代市



市の中心商店街にある金勇は、南側に位置する八幡神社の境内に隣接しており、樹齢200年内外と推定され「逆さ松」と呼ばれる黒松や、参道にある夫婦松、欅、桂等古木、名木に囲まれ、春は桜に、秋には鮮やかな紅葉に包まれる。

「田毎の間」飾り窓

見どころ

2階110畳の大広間が象徴的だが、1階の中広間「満月の間」は1本の天然秋田杉から取られた長さ5間（9.1m）5枚の中杢単板天井板が見事です。このほか、個性豊かな9つの客間を待ち、「田毎の間」には縁起のよい「松・竹・梅」をあしらった飾り窓が、「川風の間」には三代目当主が好んだ「割氷の紋様」の欄間がある。また、建具の全ては能代の建具職人によって作られ、柔らかな揺らぎの手隙硝子は建設当時からのものです。長さ25m幅1間の1階廊下は、お客様がつまづかない様に継ぎ目のない特注ゴザがしかれ、訪れた人々へのさりげない配慮が残されている。

1階　ロビー「待合」

1階　中広間「満月の間」

秋田県能代市は米代川の河口に発達した街である。
米代川が交通の役目を果たし、上流の北鹿地域の金銀銅、木材などの資源や米を中心とした農作物などが集まり、南下して交易の場として栄えた。中でも注目されたのが「秋田杉」で、秀吉の求めで桧山城主安東実季（さねすえ）が大安宅船（だいあたけぶね）用材を送ったのが文禄２年（１５９３）。伏見城にも使われ「秋田杉」の名声は京都・大阪方面から広まったようである。
明治中期には、機械製材が導入され、それまでの手加工に比べ生産量は飛躍的に伸び、市内には製材工場が立ち並んだ。製材された材木は国内のみならず海外まで輸出され、以来能代は東洋一の「木都」と呼ばれるようになった。

2階　大広間

料亭金勇は、初代金谷勇助（かねや ゆうすけ）氏が明治23（1890）年に創業。木都能代を象徴する建物で、県内屈指の料亭として各種宴会や接待、婚礼などに広く使われた。現在の建物は、昭和12（1937）年２代目金谷勇助氏によって「木材界の迎賓館」として建てられた。平成10（1998）年10月26日に国登録有形文化財に登録された。その後、平成20（2008）年8月末に閉店。翌21年に能代市に寄贈された。
天然秋田杉は濁川国有林（金山）から切り出され、人力、森林軌道、筏を使って能代まで運ばれた。能代市内は道が狭く、家を傷つけたり場所によっては家の一部を取り壊して運ばれた。天然秋田杉以外では、杉・松・エゾマツ・アカマツ・ベイマツ・ヒバ・ケヤキ・カエデ・サクラ・キハダなどが使用されており、特にイタヤカエデは十和田湖のほとりから馬そり・筏で運ばれたという。
「金勇」と言えば「110畳の大広間」と言われるくらい有名だが、決して贅を尽くした使い方ではなく、選木した良材を有効的に使用していること、建物内に四方柾の柱が１本のみしかないことから、与えられた素材を無駄なく製材したことが窺える。

玄　関

庭

建物名称	旧料亭　金勇
建築年	昭和12年　　築 82年
構造・様式	木造2階建て　数奇屋造り 全5部屋（110畳大広間を含む）部屋貸出
所在地	秋田県能代市柳町13-8
Ｈ　Ｐ	http://www.kaneyu.jp
開館時間	9時30分～16時30分（年末年始12月12日～1月3日） 問合せ：能代市旧料亭金勇　Tel0185-55-3355
アクセス	JR五能線 能代駅より徒歩　約10分（5km） 秋田空港より車で約50分（50km,高速道路経由）
備　考	駐車場完備　車イス利用可能

八森苑（矢島町歴史交流館）

秋田県由利本荘市

はちもりえん　（やしままちれきしこうりゅうかん）

▲表門

八森苑は、寛永17年（1640年）17万余石の讃岐国（香川県）高松藩より矢島入りした藩主、生駒氏に従って来た重臣佐藤家の住居。名庭園として名高い栗原公園の創始者佐藤道益の子孫であり、いまなお庭園内にはその名残が残っている。この時代の住居は、戊辰戦争(1868-1869)により焼失、その子孫が明治時代に前家の様式を取り入れながら当時を代表する町屋として建設された。

▲左　主屋　　奥　離れ

明治初期に建設された母屋は秋田・新潟地方に多く残る古民家の様式「中門造り」であるが、桁構造、柱間が六尺五寸の大規模で構成されるなど、江戸期の武家屋敷の流れをくむものであり、歴史的に貴重な建物。玄関を入ると10畳２部屋・８畳２部屋のゆとりのある座敷、８畳・６畳の和室をもつ平屋建て。
大正末期に増築された離れは遠州流といわれる庭園との協調主題として建設。１階は茶室８畳２間、２階は賓客用の和室３間（10畳１室・６畳１室・４畳１室）の二階建て。
母屋・離れ共に素晴らしい庭園が観られる配置になっている。建築面積は３４４．７１㎡

見どころ

離れは主に賓客の接待用に使用されていて、一階の茶室はシンプルで静寂を感じられる。そして、今も地元の人がお茶会を開催することがある。
二階和室はトチ・柿など様々な銘木が使用され、意匠が凝っていて大変見応えがある。二階廊下の凹凸のある手作りの窓ガラスから見た揺らぎのある庭の景色もタイムスリップしたようで楽しい。

建物名称	八森苑（矢島町歴史交流館）
建築年	1877年頃（明治10年頃）
構造・様式	木造平屋一部二階建、銅板葺
所在地	秋田県由利本荘市矢島町55
開館時間	※見学は事前に予約が必要。
利用申込み	由利本荘市教育委員会　矢島教育学習課（日新館） TEL0184-56-2203
アクセス	由利高原鉄道鳥海山ろく線◎矢島駅より徒歩約10分 本荘より車で４０分
備　考	国登録有形文化財

旧青山本邸

きゅうあおやまほんてい

山形県遊佐町

旧青山本邸は、1890年（明治23年）に竣工され、後に【漁業王】と称される【青山留吉】が漁業で成した財で故郷に建てた邸宅である。建設当時は茅葺きや石置き杉皮葺の屋根が主流の漁村集落に、雄大な瓦葺きの大屋根は、まさに『故郷に錦を飾る』を建築によって表現したものと言えよう。山形県遊佐町の貧しい漁家に生まれた青山留吉は1859年（安政6年）単身北海道の漁場に渡り、明治期の積丹半島を中心に漁場を次々と拡大し、漁場15ケ統余、漁船130隻、使用人300人余を擁する道内有数の漁業家となった。漁業一筋48年、明治41年73歳で北海道の漁場を養子の政吉に譲り　ここ青塚に隠居した。一時は村税の8割を収めるほどの大地主となり、北海道小樽には【旧青山別邸】が建てられている。

見どころ

酒田市から国道7号線を北へ20分、≪旧青山本邸≫の大きな看板の建つ交差点を左折し海岸の方へと向かうと一際大きなお屋敷が現れる。現在は駐車場等の周辺施設も整備され、遊佐町の観光拠点の一つとなっている。

建物の建築の計画は分家の当主で後に西遊佐村長を勤めた青山米吉に一任し、遊佐町宮田の土門市郎左衛門を棟梁とする人々によって建てられ、地元では【ニシン御殿】と称されている。
建物は主要８室からなり、茶の間～中の間～下座敷～上座敷と続く山形県の庄内地方にはよくある形式である。豪快な瓦葺の切妻屋根、軒は出桁（だしげた）によるせがい造りで、内部は春慶塗の欅の床や柱、漆喰壁、神代杉の幅広天井やうぐいす張りの廊下、継ぎ目の無い一本物の長押など見ごたえ十分。床の間は紫檀、黒檀、鉄刀木、杉、ツゲを使った書院造り、襖の引手には当時宝石と同価値とされた【七宝焼】が使われている。欄間には竹、紫檀、黒檀に彫刻が施され、日本画の絵師たちが競って描いたふすま絵や書など、贅の限りが尽くされている。母屋の屋根裏にはほかに例を見ない形式の棟札が掲げられている。

年間を通し、館内や隣接する土蔵には留吉が求めた美術品をはじめとする所蔵品を展示、庄内雛街道に合わせお雛の展示やお茶会などのイベントを企画。事前の申し込みでボランティアガイドの方が邸内を詳しく解説してくれる。

建物名称	旧青山本邸
建築年	1890年（明治23年）
構造・様式	木造平屋建
所在地	山形県飽海郡遊佐町比子字青塚155
電　話	0234-75-3145
Ｈ　Ｐ	http://www.town.yuza.yamagata.jp/culture/heritage/7415d8201.html
開館時間	9：30～16：30
アクセス	ＪＲ酒田駅より秋田方面へ車で20分、国道7号青塚地内十字路（看板有り）より左折200m
備　考	

清風荘-宝紅庵

せいふうそう-ほうこうあん

山形県山形市

清風荘は池泉回遊式庭園（古庭園）として有名な【もみじ公園】の中に建つ市の施設である。秋には見事に色づいたもみじが言葉には尽くせないほどで、さながら京の都を思わせる美しさである。もみじ公園は時の城主松平下総守忠弘が、真言宗の巨刹宝幢寺の庭園を江戸の庭師と共に山形城本丸庭園の余石と、吉野のもみじを用い手を入れた庭とされている。庭園の池は心の文字をかたどったことから【心字池】と名付けられている。清風荘は明治維新以前は宝幢寺（真言宗）の寺院であり大書院であったが、昭和31年に跡地が市によって買収され、中央公民館分館≪清風荘≫として開館した。昭和54年には数寄屋造りの粋を集めて造られた公共のお茶室≪宝紅庵≫が併設され、ともに純和風の施設として芸術文化等の諸活動や国際交流などにも広く利用されている。

見どころ

≪清風荘（せいふうそう）≫
閑静な住宅街のなかにある市民公園【もみじ公園】があり、その中に≪清風荘≫は建っている。もとは最上義光の庇護により1370石の寺領を持つ大寺院となった宝幢寺の書院であった。創建当時の建物は400年ほど前に焼失し、1862年（文久2年）に再建された。平成13年には国登録有形文化財として登録されている。最上のお殿様が必勝祈願にお寺にお出でになった際のお控え処として造られた本格書院造りの和室は、落ち着いた雰囲気の中にも荘厳さを秘め緊張感の漂う不思議な空間を感じ取ることができる。

≪宝紅庵（ほうこうあん）≫
昭和54年、数寄屋建築の第一人者【中村昌生】博士の設計により建設された本格的な公共の茶室である。≪宝紅庵≫は宝幢寺の「宝」、紅葉の「紅」から名付けられた。材に京都北山杉を用いた建物は、小間・広間・鞘の間・水屋・寄付・立礼席などからなり、山形と京都の文化の交流から創り上げられた本格的な茶室となっている。特に立礼席は流派を超えて管理・活用をしており、通年を通しお点前を体験できる。受付時にお願いをすればお茶室の見学も可能で、施設の方が丁寧に解説付きで案内をしてくれる。

建物名称	清風荘-宝江庵
建築年	清風荘：1862年（文久2年）再建 宝江庵：1985年（昭和54年）
構造・様式	木造平屋建
所在地	山形県山形市東原町2-16-7
電　話	023-622-3690
Ｈ　Ｐ	http://www.city.yamagata-yamagata.lg.jp
開館時間	8：00～22：00
アクセス	山形駅発県庁行 東原3丁目バス停より徒歩約3分
備　考	

本間美術館 清遠閣-鶴舞園

山形県酒田市

ほんまびじゅつかん せいえんかく-かくぶえん

本間美術館は江戸時代は豪商、明治以降は日本一の地主として知られた【本間家】が創始者となり昭和22年に開館した美術館である。公益の祖として地域に貢献してきた本間家が、敗戦後の人々に美術・文化に接することで元気とゆたかな人生を取り戻してほしいとの意見に賛同した人々との共同作業により実現した。庭園≪鶴舞園≫は鳥海山を借景として四季折々の風情を織りなし、別荘≪清遠閣≫の京風木造建築の美しさ、北前船によりもたらされた素材と芸術品の数々は、自然・歴史・芸術が融合する美術館となっている。庭園を通り抜けた先にある本間美術館新館では、本間家に伝わる諸藩からの拝領品の他、古美術から現代美術まで国内外の多種多様な作品を展示紹介している。

見どころ

≪清遠閣（せいえんかく）≫
藩主酒井候の領内巡視の際の休憩所としてつくられ、京風の精緻な造りと手すきの硝子、随所に建築に携わった職人たちの心意気が見て取れる。館内の大正ロマンを偲ばせる数々の調度品は酒田にも度々滞在した詩人で画家の【夢二】の世界を彷彿とさせる。又、酒田の迎賓館としても使用され、昭和天皇が東宮殿下の頃にご宿泊された。光と影を巧みに計算しつくした設えは思わずため息が出るほどである。
匠の技と庭園のコラボレーションを是非その目で！

≪本間氏別邸庭園：鶴舞園（かくぶえん）≫
1813年、四代：本間光道築造の池泉回遊式庭園。池の中島に鶴が舞い降りたことから藩主酒井候により鶴舞園の名を賜ったとのこと。庭園の整備には港で働く人々の冬期間の失業対策事業として行われた。地域貢献を祖先以来の方針としてきた本間家、その精神は今でも【公益の祖】として市民にたたえられている。庭石には北前船が運んだ佐渡の赤玉石や伊予の青石などが配され、新緑から秋の紅葉、冬の雪景色など風情豊かな庭園となっている。

建物名称	本間美術館 清遠閣-鶴舞園
建築年	1813年（文化10年）
構造・様式	木造二階建　池泉回遊式庭園
所在地	山形県酒田市御成町7-7
電　話	0234-24-4311
Ｈ　Ｐ	http://www.homma-museum.or.jp
開館時間	9：00～17：00（入館は16：30迄）
アクセス	ＪＲ酒田駅より徒歩５分（駐車場有）
備　考	

旧甲斐家蔵住宅

福島県喜多方市

きゅうかいけくらじゅうたく

51畳の蔵座敷は、7年の歳月をかけた豪華な造り。書院・本床・脇床を配し、金雲模様の大唐紙がはめ込んである。上段の間の床柱は鉄刀木（たがやさん）と四方柾の檜、次の間は縞黒檀、書院は黒檀、唐紙と障子の戸縁には紫檀と選りすぐりの銘木を用いた造作が随所に見ることができる。

旧甲斐家蔵住宅は、幕末に初代が酒造りを始め、３代目が麹製造、製糸工場を、４代目が味噌・醤油の醸造を営んできた歴史をもつ建物である。上段の間、次の間の間仕切上部に設けられた筬欄間は、一枚の檜板をくり抜いて造られており、奥まで見通せるほど繊細だ。

庭園に入り奥へと進む　　ゆったりとした時間が流れる

見どころ

細部にわたる意匠のこだわりから客人をもてなす気持ちが伝わる

店蔵中央に構えるケヤキの一木から造り出された美しいらせん状の吊階段

内装に趣向を凝らした客人用の浴室。浴槽は大理石を使用している

応接室として使われてきた西洋室

店蔵正面は重厚な風格が漂う

広縁、縁側から中庭へとつながる空間
ここで多くの客人を迎え入れてきた

照明用のレトロな回転スイッチ

歴史を感じる
ケヤキ床の廊下

座敷にいざなう
みがき杉丸太の
竿縁天井

主屋の北座敷は畳床に炉が切られお茶を楽しんでいた様子が伺える

建物名称	旧甲斐家蔵住宅
建築年	1923年（大正12年）
構造・様式	木造土塗壁土蔵　切妻　蛇腹付二重屋
所在地	福島県喜多方市字1丁目4611番地
電　話	喜多方観光物産協会0241-24-5200 旧甲斐家0241-22-0001
Ｈ　Ｐ	http://www.kitakata-kanko.jp
開館時間	9：00～17：00（最終入館16：30）
アクセス	磐越西線喜多方駅から徒歩で30分 磐越道会津若松ICから車で25分、駐車場有
備　考	蔵座敷・店蔵・醤油蔵（国登録有形文化財）

瀬上嶋貫本家

せのうえしまぬきほんけ

福島県福島市

嶋貫家の先祖は上杉家の家臣であったと伝えられている。江戸時代に士族となり福島の下飯坂に移り住み、後に商売をするために奥州街道の宿場町として賑わった瀬上に居をかまえ、金融業・酒造業・質屋などを営んでいた。
母屋は明治32年に建てられた商家造りで、大正２年に来賓専用の宿泊部屋として離れが増築された。総２階建てで、街道側は急勾配の切妻屋根に破風拝みの飾りと下見板張りの外壁、腰板瓦屋根塀の連続性と重厚感が目を引くと同時に明治期のモダンな建物としての風格も感じる。
建物の内部は、銘木を贅沢に使った40帖の大広間、細部の造作が粋で上質な和室、壁と天井の漆喰の色合いのバランスと装飾が見事な洋間などそれぞれに見応えがあり、贅を尽くした空間に職人の高い技術とセンスがうかがえる。
十一代当主ご夫妻による３年がかりの復元・改修工事によって当時の趣を取戻し、個人の所有物であるが平成22年より一般公開を始める。翌年の東日本大震災で被害を受けたのを機に歴史の大切さを実感し、平成25年「国登録有形文化財」に登録。また「ふくしまの旧家を活かす会」の発起人のひとりとして、福島の歴史的建造物・古民家の保存を唱え、活動を続けている。
瀬上嶋貫本家は、保存と活用の両輪で伝統的な旧家と土地の歴史をを多くの人に伝えている。歴史的にも文化的にもその価値が高く、後世に引き継ぐための貴重な建物である。

見どころ

部屋毎の意匠に趣向が凝らされており、銘木がふんだんに使われている。床の間・付書院・折り上げ天井・欄間建具などの細部に職人の技が光る。障子窓から見える季節によって変わりゆく庭の風景を楽しんだであろう当時の風情のある暮らしぶりが偲ばれる。着物・箪笥、金庫電話機などの調度品や貴重な資料が大切に保存・展示されていて、当時の息づかいが伝わってくるようだ。

モダンな洋間は漆喰のレリーフで仕上げた天井飾りに細部にこだわったレトロな照明が美しく映える。
家具や調度品に主のこだわりを感じる。

屋根瓦の棟飾りには施主がいろいろな意を込めるとされている。母屋の薬師門に乗っている「桃」は不老長寿、妻飾りの「猪の目」は火伏せ祈念など、家族を思う主と職人の粋な遊び心に触れることができる。

右)40帖の大広間
　黒柿などの厳選された銘木を使った歴史と格式を感じる大空間
　現在は展示会・教室・コンサート会場として利用されている
左)当主の執務室であった洋間
　青と白の漆喰の色の対比と装飾技術などのクオリティーの高い空間

建物名称	瀬上嶋貫本家
建築年	1899年（明治32年）
構造・様式	木造二階建　銅版葺
所在地	福島県福島市瀬上町字本町90-2
電　話	090-2273-5001（受付時間10:00～16:00）
Ｈ　Ｐ	http://simanukihonke.com/
開館時間	予約制（10:00～16:00）
アクセス	福島駅より車で20分
備　考	登録有形文化財

福島県迎賓館（旧高松宮翁島別邸）

福島県猪苗代町

ふくしまけんげいひんかん（きゅうたかまつのみやおきなじまべってい）

福島県迎賓館は、大正天皇第三皇子・高松宮宜仁親王殿下が、喜久子妃殿下の母方祖母に当たる有栖川宮威仁親王妃慰子殿下のご保養のために、1922年（大正11年）に建設されたものである。現在、福島県では保存・保護を図りながら、貴重な皇族の別邸として、文化遺産を継承していくため、庭園を公開している。さらに、国指定重要文化財としての価値を紹介するため、期間限定で特別公開を実施している。

見どころ

木造、平屋建で、小屋組みは和小屋で京呂組である。居間、寝所を中心とした居住棟を東西方向に配し、南北方向に客座敷棟、台所棟があり、中庭を囲む形となる。奥の松の間、梅の間、竹の間で構成される居住空間は床の高さが他より一段高く上段形式になっている。

主要なる造作材は竹の間を除いてほとんどが桧材を用いている。屋根は銅板葺（もとはこけら葺）で、主要棟および住棟に付く竹の間、湯殿は寄せ棟造であるが、表玄関の突出部は入母屋造、長局の湯殿は切妻造である。

個々の建築の構造は入念にして堅実、その意匠は洗練され、すみずみまで神経の行き届いた、贅を盡したものである。

妃殿下の別荘にふさわしい典雅にして格調の高いものになっている。

「玄関の間」より式台

「客の間」の屋久杉杢欄間
源氏香の文様を散らしてある

「梅の間」の板欄間（秋田杉）
デザインは磐梯山と猪苗代湖

「客の間」上ノ間　床柱　桧
釘隠金物・梅のデザイン

南の廊下
妃殿下が歩く畳部分と使用人が歩く
床板が分けてあるのが印象的

廊下　竹ノ節欄間　黒漆

畳表は備後産の藺草
畳縁は紫紋で紋合わせ仕上げ

大正11年　有栖川宮威仁親王妃慰子殿下の御保養のために、建てられた純日本風の御別邸である。

大正13年　高松宮宣仁親王殿下が有栖川宮の祭祀を御継承されるとともに、御別邸も同親王殿下が引き継がれた。

昭和27年　高松宮宣仁親王殿下より福島県に御下賜され、県の賓客の御宿泊・休憩に利用してきた。

【松の間】
松の間は上、下の２室より構成される。上座敷は８畳、下座敷は１０畳。昼の御座所、即ち居間書院で、前方に猪苗代湖が見渡せる。壁は美濃紙の紙張りで黒漆喰の押縁を付けている。

【梅の間】
梅の間は休息所であり寝所である。壁は美濃紙の紙張り、押縁はじめ、欄間の框、とこ框、襖類の縁などすべて朱漆塗を用い、襖類の取手、長押釘隠は女性らしく梅の意匠で統一している。

【竹の間】
４畳半の数寄屋造建築。茶室であり、また、湯殿とも接していて、化粧の間とも称され慰子妃の私室である。地袋の天板には神代杉の玉杢を用い、小襖絵に竹を描く。襖の取手、長押の釘隠しは竹のデザインである。

建物名称	福島県迎賓館(旧高松宮翁島別邸)
建築年	1922年（大正11年）
構造・様式	木造平屋建　寄棟造　上層貴族住宅
所在地	福島県耶麻郡猪苗代町翁沢字畑田1074-4
電　話	【天鏡閣】0242-65-2811
Ｈ　Ｐ	http://www.tif.ne.jp/geihinkan/
開館時間	特別公開時に見学可
アクセス	磐越西線猪苗代駅下車・駅前より磐越東都バスで約15分・長浜下車徒歩5分
備　考	国指定重要文化財

郡山市久米正雄記念館(旧 久米正雄邸)

福島県郡山市

こおりやましくめまさお きねんかん(きゅうくめまさお てい)

久米が1930(昭和5)年に鎌倉の二階堂に建てた邸宅、終の棲家として作家生活の後半をここで過ごした。木造２階建て寄棟造りで正面は白壁の洋風、裏側の外壁は押し縁下見板貼りの和風。室内も廊下を渡り裏に回ると純和風の部屋が並ぶ、当時としては非常にモダンな和洋折衷の建物である。少年時代を安積開拓によって急速に発展した旧安積郡桑野村開成山あった母の実家・立岩一郎邸で過ごした事で「第二の故郷」と呼ぶ郡山に、2000(平成12)年「こおりやま文学の森資料館」のオープンにあわせ「郡山市久米正雄記念館」として移築され一般公開されている。華麗なる鎌倉文士の歴史と素顔、生活の一端に触れることができる。

見どころ

俳句好きの久米は、ここ「三汀居」 で毎月句会を催し、年に一度庭先 の梅林がほころび始めると「梅の 句会」を開いた。縁側の先は、池 を中心とした四折々の花が彩る 庭園が広がっており、光や風を取 り入れる工夫が随所にみられる。 多くの文豪が集い、麻雀や文芸談 講に花を咲かせたという。好奇心 旺盛な久米は、屋内外問わず大変 多趣味で流行にも敏感、何でも先 駆けて取り入れた。海外旅行で集 めた灰皿やキセル。写真、野球、 スキー、ゴルフ等、仕事でも遊び でも人一倍にぎやかさを好んだ。

「客間/茶の間」18畳

桐文様の透かし彫り欄間

硝子入り引違戸と欄間窓

書院からも光が注ぐ床の間

引き分け猫間障子と竹を つるで編んだ開口壁

玄関から洋風の階段を上った２階の書斎は、屋敷の中で最も眺めの良い場所にあり、左側の窓では畳座、正面の窓に向かっては椅子にかけて執筆活動を行った。隣は寝室で廊下の先には、当時としては珍しいバルコニーがあり、眼下に庭を望める間取りとなっている。

「書斎」出窓風とした机 造り付け書棚が並ぶ

親柱･手摺･手摺子ならの木彫り

「寝室」10畳､板の間に地窓と地袋の飾り棚竪額入り障子と欄間障子からも光が注ぐ

寂しがり屋でにぎやかな事を好んだ久米は自宅で文士や芸術家との交流を楽しんだ。玄関を入るとすぐ右側にある応接間。ボタンを押して来客者を知らせる掲示板というユニークな仕掛けは「文士の館」と称された久米邸のにぎわいを物語る。移築される直前まで久米邸に住んでいた一人息子の妻、和子さんは「多彩な人が常に出入りする開放的な家だった」と振り返る。玄関に入ると口癖だった「まあ、上がりたまえ」という久米の朗らかな声が聞こえてくるようだ。

「応接間」自慢の絵画、暖炉応接セットが並ぶ

「来客者を知らせる掲示板」女中が人数分のお茶

「水洗トイレ」小便器は蛇口を回す方式和便器は上部の箱に水を溜めて流す方式

「壁掛け電話器」右にあるクランクを回し、交換手につないでもらい話す

「展示室」愛用した遺品や 交友関係が紹介され

「郡山市文学資料館」郡山ゆかりの作家の文学資料を展示 文学の森敷地内は、庭園が整備され

「久米正雄胸像」

「久米正雄句碑」

建物名称	郡山市久米正雄記念館（旧 久米正雄邸）
建築年	1930(昭和5)年鎌倉、2000(平成12)年郡山に移築
構造・様式	木造2階建､寄棟造・和洋折衷様式
所在地	福島県郡山市豊田町3番5号
電　話	024-991-7610
Ｈ　Ｐ	http://www.bunka-manabi.or.jp
開館時間	10:00～17:00（最終入館16:30） 休館は毎週月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日）
アクセス	ﾊﾞｽ:郡山駅前から約15分総合体育館前下車徒歩1分

野馬追通り　銘醸館　お食事処「食彩庵」

福島県南相馬市

のまおいどおり　めいじょうかん　おしょくじどころ「しょくさいあん」

野馬追通りから市民文化会館へ通り抜けられるオープンスペース内に各施設が点在している。

老舗蔵元・旧松本銘醸の明治、大正、昭和の一連の時代と生活の変遷を伝える歴史的建造物である。平成１７年に原町市が再生し、現在一般社団法人南相馬観光協会が施設の管理運営をしている。
昭和中期の生活用品や相馬野馬追関連の展示、旧松本銘醸の歴史などを３つの蔵で常設展示するほか、ギャラリーやイベント会場として２つの蔵を貸し出している。また食事処を兼ねた日本家屋「食彩庵」も運営している。

見どころ

あじろの間、板の間、書院の間の三部屋があり当時 の職人の技を見る事ができる。

床の間

水屋

お食事処「食彩庵」では、お食事や会食、法事などでもご利用いただける。
この地はかつて、酒造業を営んでいた松本銘醸の跡地。松本家は、江戸時代から原町に居住し酒造業を営んだ郷士の家で、天保の飢饉」が起きた翌年、天保５年（１８３４年）付きの「酒造許可状」が残っており、これは酒造用の米を抑えるために酒造を制限したときに出されたもの。
明治時代当主松本孫右衛門は、酒造業を営む一方、味噌や醤油の醸造も行い、鉄道の開通など原町の発 展のために尽力した。
敷地内に大正９年（１９２０ 年）東京信用銀行支店として、洋館が建設された。

東門

赤い壁の洋館は、現在、観光 協会の事務所になっている

蔵などが点在し、酒蔵の面影が残る

昭和３４年築の昭和蔵には昭和中期 時代等を中心とした常設展示でレト ロな物がいっぱいだ。他に昭和５年の原町市の映像が見られる。

建物名称	野馬追通り　銘醸館　お食事処「食彩庵」
建築年	大正８年築
構造・様式	木造平屋建・日本家屋
所在地	福島県南相馬市原町区本町２丁目５２
電　話	０２４４－２６－８０４０
Ｈ　Ｐ	http://www.minami-soma.com/meijokan/
開館時間	AM９：００～PM１７：００
アクセス	【JR】東京駅ー仙台駅ー原ノ町駅（東北新幹線・常磐線・JR臨時バス） 4時間 【車】福島ー県道原町-川俣線ー南相馬市 1時間30分

水海道風土博物館 坂野家住宅

茨城県常総市

みつかいどうふうどはくぶつかん さかのけじゅうたく

書院（月波楼）

坂野家は、常総市内を流れる鬼怒川西岸の台地状の畑作地域や谷津田の点在する豊かな土地に土着して500年ほどになる。江戸時代、この地の豪農としての基礎を固めていたと言われ、幕府管轄地を治める幕府の役人の逗留、幕府の出張所といった役目もあり、農家住宅でありながら薬医門や籠が家の入口まで乗り入れる式台玄関が配されている。約１haの敷地内には主屋（重文）、西に書院（月波楼）、北に文庫蔵、車小屋、三番蔵、藁小屋、薬医門（重文）がある。市では平成10年に建物と屋敷地を譲り受け、歴史的建造物と里山風景を保存する「水海道風土博物館」として整備した。主屋はその後平成15年から平成17年まで、全てを解体し組み直す工法で保存修理。19世紀中ごろの姿に復元した。

主屋全景

見どころ

坂野家住宅は茅葺き屋根の伝統的な和風建築の主屋と月波楼と名付けられた書院がある。主屋は土間部、座敷部、居室部に分かれ、土間部では柱・梁の構造、座敷部では菊の透彫りの欄間、居室部では無双連子の蔀戸が見られる。対して月波楼は文化・交流・創作活動の為に建てられたサロンで、レトロな手延べガラス戸、巻上式の日除け、白黒のタイルを市松に配した風呂場の床タイルなどモダンな雰囲気が溢れている。風呂のから傘天井や板戸の取手、鱗屋根など細部にまでこだわりが感じられる。伝統とモダン、この二つの魅力ある和の空間をぜひゆっくりと時間をかけて見て頂きたい。

2階南側濡れ縁

2階北側掃き出し窓

巻上式の日除け

掃き出し窓と鱗屋根

書院へ通ずる廊下の窓

風呂場

【月波楼】

江戸末期に建てられたといわれている初代月波楼は、多くの文人墨客が集うサロンとして建てられた。現在の月波楼は２代目で大正９年に建てられ、モダンな近代建築の特徴が生かされている。２階には奥行き50cmの月見台のような濡れ縁、室内から庭園（月）を眺めるための大きな掃き出し窓は手すりがあるのみで開放的である。開口部は座敷の南北に配され、風通しもよく、座敷からは南、北両側の庭園を眺めることができる。２間半の床の間や付書院、又、欄間には伝統的な組子欄間、ふすま絵には四君子の蘭、竹、菊、梅が描かれ、これらの伝統的な和風建築の要素が勇壮さを兼ね備えた佇まいとなっている。座敷に座ると、文人墨客たちの集える当時の様子がうかがえる。

２間半の床の間と付け書院

【主屋】

伝統的な農家型民家の特徴である「土間」「四間取り」、武士層の接客のための格式高い座敷部を配している。14畳敷の広間の南側には無双連子の蔀戸を設け、その上は欄間となっており、風通しと採光に工夫がなされ、奥行きがあるが開放的で明るい。居室部は縁のない琉球畳や帯戸を用い、座敷部は畳縁のある備後畳や襖・障子を用い、格式の違いを表している。

無双連子の蔀戸と欄間

建物名称	水海道風土博物館 坂野家住宅
建築年	主屋：江戸中期、書院：1920年（大正9年）
構造・様式	木造平屋建て・寄棟造　玄関入母屋造・茅葺き 木造２階建て・寄棟造・桟瓦葺
所在地	茨城県常総市大生郷町2037
電　話	0297-24-2131
Ｈ　Ｐ	http://www.city.joso.lg.jp/shigai/kanko/
開館時間	9:00～18：00（4月～10月）受付は17時まで 9:00～17：00（11月～3月）受付は16時まで 月曜日（祝祭日の時はその翌日）年末年始休館
アクセス	水海道駅・三妻駅からタクシー15分（駐車場あり）
備　考	国指定重要文化財(主屋・表門)常総市指定文化財(書院)

弘道館

こうどうかん

茨城県水戸市

弘道館は水戸藩第九代藩主徳川斉昭（烈公）により1841年（天保12年）に藩士とその子弟の教育のため創設された藩校である。藩校当時の敷地面積は約10.5haを有し、藩校としては全国一の規模で、敷地内には正庁(学校御殿)・至善堂の他に文館・武館・医学館・天文台・鹿島神社・八卦堂・孔子廟などが建設され馬場・調練場・矢場・砲術場なども整備された。

現在は、その一部約3.4haの区域が「旧弘道館」として国の特別史跡に指定されている。幾度の戦火を免れた正門、正庁、至善堂は国の重要文化財に指定されている。斉昭は弘道館を創設した翌年に梅林で知られる名園偕楽園を開いている。「一張一弛（いっちょういっし）」とは孔子のことばであるが、この弘道館で文武の修業をし、偕楽園で修業の余暇に心身を休めるという一対の施設として構想された。弘道館は偕楽園とともに日本遺産にも認定されている。

見どころ

弘道館は幕末の動乱期を経て1872年（明治5年）の学制発布により閉鎖されるまで総合教育機関としての役割を担った。明治維新にも大きな影響を与えたと言われる水戸の先人たちの足跡や精神に思いを馳せながら、正庁・至善堂の質実剛健で悠然と往時の姿を今に伝える姿を堪能して頂きたい。また、地図を片手に敷地を散策すると、四季折々の美しい花や樹木と共に弘道館の建学精神に沿った独特の工夫を凝らした各施設の配置も楽しむことが出来る。

特徴的な正庁玄関屋根

独立柱で支えられ、更に吊鉄物で上方に吊っている柿葺の下屋根がついている。

正門（国指定重要文化財）

様式は本瓦葺き四脚門。瓦には葵の紋が見られ、柱には1868年（明治元年）の弘道館の戦い時の弾痕が残る。

藩校であるため、意匠に華美な装飾などはないが、ディテールに目を配るのも楽しい。

①正庁破風の懸魚、六葉、鬼瓦。
①②③魔除けや火災除けの猪目（ハートのデザイン）が鬼瓦や釘隠し、六葉に見られる。
②③④徳川家の葵の紋が瓦、釘隠し、畳縁などに入っている。寺社等でも用いられるこの紋縁畳は茨城県畳職業訓練校（茨城県高萩市）でつくられたものである。

正庁(国指定重要文化財)

正庁正席の間

至善堂(国指定重要文化財)

至善堂御座の間

【正庁(せいちょう)】
学校御殿ともいい、藩主が臨席して試験や諸儀式が行われた。正庁の正席の間では藩主が正席の間や二の間で行われた学問の試験や対試場で行われた武術の試験をご覧になった。床には付書院も有している。
【至善堂(しぜんどう)】
藩主の御座所（休息所）。正庁の奥にあり、御座の間をはじめ４室からなる。御座の間は、斉昭の七男で最後の将軍 徳川慶喜が大政奉還後の４ヶ月間、厳しい謹慎生活を送った場所である。
2011年の東日本大震災によりこの弘道館も甚大な被害を受け、その修復の過程で、正庁正席の間と至善堂御座の間の床が二重床になっていることが新たに確認されたが、刺客から藩主を守るためと推測される。
正庁と至善堂は長廊下によって結ばれており、それぞれ床、棚を備え、面取角柱、長押をまわした書院造である。屋根は、正庁の玄関左右側面を入母屋造とし、正庁の背面と至善堂は寄棟造で、すべて桟瓦葺である。輪違瓦が組み込まれた高さのある大棟も美しい。弘道館の建築は、書院造建築の正統を継ぐものであるが、大柄で簡素な手法は、まさに質実剛健で悠々とした趣があり、風格を感じさせる。

建物名称	弘道館
建築年	1841年（天保12年）
構造・様式	木造平家建・書院造
所在地	茨城県水戸市三の丸1-6-29
電　話	029-231-4725
Ｈ　Ｐ	www.koen.pref.ibaraki.jp/park/kodokan01.html
開館時間	9:00～17:00(2/20～9/30) 9:00～16:30(10/1～2/19)　12/29～12/31休館
アクセス	JR水戸駅北口から徒歩8分　駐車場有
備　考	特別史跡、国指定重要文化財、日本遺産 写真：茨城県

荒川家住宅（荒為）

茨城県筑西市

あらかわけじゅうたく（あらため）

旧店蔵北面

荒川家住宅の位置する筑西市下館地区は、下館藩五万石の城下町として成立し、江戸時代半ばより商業で繁栄した地方中心地であった。明治・大正期になると、外来綿や洋糸の販売のほか足袋底木綿工場が設立され、産業資本が蓄積された。そして、国道５０号沿いから金井町を抜ける街道沿いには、蔵造りの商家が立ち並んだ。現在も国道５０号を挟んだ荒川家住宅（荒為）の向かいには国登録有形文化財の荒川家住宅（荒七酒店）があり、当時を思わせる。

見どころ

荒川家住宅の一番の魅力は、明治・大正・昭和という時代の職人たちの丁寧な手技が施された落ち着いた空間とともに、美味しい食事を堪能できるというところだろう。土蔵や庭に囲まれた落ち着いた和の外部空間、そして１階座敷、２階客間、奥座敷へと、趣の異なる和室を配した、商家の実用的な空間を体感して頂きたい。
また、土蔵造りに見られる屋根漆喰や軒の意匠、分厚い漆喰塗りの扉、植物がモチーフとしてデザインされた洋間の装飾的な天井や廻縁、ベランダの袖壁（うだつ）などの左官技術も必見である。周辺は、下館における伝統的な町屋建築が集積するエリアである。訪れた際には、商都下館の街並みも散策して頂きたい。

①

②

③

④

⑤

⑥

①前面道路からのアプローチ②店舗入り口③ベランダの袖壁④洋間天井装飾⑤袖蔵の窓のデザイン　⑥土蔵の扉

主屋南面

荒川家住宅は、屋号「荒為」とし、明治・大正・昭和の時代を通して商都下館を代表する卸問屋である。国道５０号に北面して旧店蔵および袖蔵が建ち、背後に主屋、さらに中庭を挟んで土蔵が建っている。
平成元年に３棟ともに改修工事（屋根の葺き替え、外壁補修ほか）が実施され、歴史的建物の維持が図られた。
平成１８年、この建物を永く保存し活かしていきたい、というご当主の意向で、主屋に、会席料理の店「食の蔵荒為」がオープンした。平成２３年、国登録有形文化財に登録された。

【主屋】
主屋は、木造２階建、寄棟造り、銅板平葺きの建物で、明治２１年に木造平屋建ての住宅を買い取り、肥料・荒物・雑貨などを扱う卸問屋として開業したことに始まる。明治２５年には２階部分を増築し、さらに大正から昭和にかけて洋間が増築された。通りに面し東側の石積みのアーチをくぐり、狭い路地を抜けて主屋に至る。路地の奥には荷物を運んだトロッコレールが残る。
玄関土間を上がると、低い根太天井の座敷と廊下が続く。座敷には帳場の名残の金庫や囲炉裏がある。２階客間は竿縁天井で、床の間が付いた書院造りである。１階は一般顧客用、２階は上客用としていた。大正から昭和にかけての増築部である奥座敷は、賓客用として、１階の和室と２階の洋間（アールデコ調）に分かれる。それぞれの客の立場や用向きによって室の格を使い分けしていた。室内外の境には縁側を配し開口部が設けられ、戸外の景観を望むことが出来るように配慮されており、四季の変化を感じ楽しむ和の空間となっている。また主屋は和洋折衷の建物として、地域と時代を代表する重要な建物の一つである。

１階　座敷

２階　客間

１階　奥座敷

２階　洋間

【旧店蔵】
旧店蔵は、土蔵造り、切妻造り、土瓦葺きの建物で、明治４１年頃の建物と言われている。昭和８年に、前面道路の拡張工事により、建物を現在地に曳家し、また、袖蔵として３階建ての洋館を増築した。間口五間奥行き三間半で、戸締り用の蔀戸も使われていた。
【土蔵】
土蔵は、旧店蔵とほぼ同時期の建物である。内部は間仕切りのない大空間で、三尺ごとに柱がたち、漆喰塗りの真壁が美しい。大空間を活かしコンサートなども行われている。

建物名称	荒川家住宅（荒為）
建築年	明治時代ほか
構造・様式	木造2階建て、土蔵造
所在地	茨城県筑西市田町甲929
電　話	0296-21-1357
Ｈ　Ｐ	http://www.city.chikusei.lg.jp/page/page001170.html
営業時間	食の蔵　荒為 ［火～日］ 11:30～14:30 17:30～22:00 月曜休み　ディナーは予約制。旧店蔵・土蔵の内部の見学は事前連絡が必要
アクセス	ＪＲ下館駅から徒歩15分　駐車場有
備　考	国登録有形文化財

御料理屋kokyu.（旧小西家別邸）

茨城県結城市

おりょうりやこきゅう（きゅうこにしけべってい）

結城市は江戸経済の大動脈である鬼怒川の要衝にあり、結城紬や農産物の流通する一大商業都市であった。小西家は江戸末期に近江から移住し、この地で造り酒屋を始めた。酒造業で財を成し、昭和元年に別邸としてこの建物を完成させたが、長らく邸宅としての役割を担うことなくひっそりと佇んでいた。

外観（主屋）

見どころ

最大の特徴は、筑波山の景色を楽しむために高床とした主屋だ。高床式（床下はコンクリート造の倉庫）の土台の上に木造建築が建てられ、北を除く三面に廊下が回り、外部の建物の周囲に巡らされた景色を見るための濡れ縁は回り縁となっており、その回り縁に沿って一面に張られている表面の波打ちが美しい大正ガラスが建物を特徴付けている。濡れ縁を支える持送り（もちおくり）にも美しく凝ったデザインが見られる。廊下は約6間の一本物の丸桁、天井は屋根の垂木をそのまま見せる野天井の仕上、障子は引分け猫間障子が使われている。広間天井は竿縁天井、五寸角の四方柾目の柱や、欄間の花を型抜きした透かし模様や格子模様のあしらい、床の間の欅の一枚板など至る所に贅が感じられる。高床式で回り縁になっていることで風通しも良く、日本家屋の良さを感じられる。訪れた際には、時を経て再び産声をあげた建物の歓びを是非とも感じていただきたい。

広間（御食事処）

濡れ縁を支えている持送り

野天井の回り廊下

後に地元結城市で古民家の料理店を開くために場所を探していたkokyu店主の目にとまり、親戚である大工棟梁が当主と同級生だったことが縁でこの建物を借り受けることとなり、平成24年7月から8か月間の改修工事を経て、平成25年3月に地元の新鮮な野菜を使った創作料理の店「御料理屋kokyu.」としてオープンした。

【配置】敷地内には付属の平屋造りの建物と高床式の主屋（店舗）があり、渡り廊下で繋いでいる。駐車場からのアプローチは渡り廊下をくぐり抜けるようになっており、建物内部への期待感が自然と高まる要素となっている。

駐車場からのアプローチ

玄関外観（店舗入口）

【主屋】高床式木造平屋建て寄棟造りの建物で、屋根の「鬼瓦」には、ご当主の名前「小西」が刻まれており、柄振り台といわれる鬼瓦を乗せる台には立浪模様が彫られている。内部においては損傷の激しかった漆喰の壁は全て上塗り部分のみ剥がして塗り直し、10帖と12帖の広間の畳敷は板張りに改修した。床の間と床脇の地袋の襖絵は当時のまま残されており、障子も紙を張替え、当時のものを利用している。

床の間と床脇

床の間を中心に店を演出し「和の空間」に添うようなかたちで料理も決められている。
天井の高い二間続きの広々とした空間で、歴史や趣を感じながら美味しい食事を堪能できる。

【付属平屋建物】一部を玄関として改修し、階段を上がった先には新たに和室が設えられ、渡り廊下との間にある組子細工の内窓がさりげなく空間を演出している。渡り廊下へと続く階段の蹴込板は取外しができる仕組となっており、昔ながらの知恵が感じられる。

玄関内観

渡り廊下

組子細工の内窓

建物名称	御料理屋kokyu.（旧小西家別邸）
建築年	昭和元年
構造・様式	木造平屋建て（高床式）
所在地	茨城県結城市大字結城1085
電　話	0296-48-8388
H　P	http://kokyu.in
営業時間	12:00～14:00、18:00～21:00（予約制） 月曜・第1第3火曜休み
アクセス	JR水戸線　結城駅北口より徒歩約15分
備　考	見学は不可

矢中の杜（旧矢中邸）

茨城県つくば市

やなかのもり（きゅうやなかてい）

本館　（居住棟玄関前）

筑波山麓の南、つくば市北条地区に建つ矢中の杜（旧矢中邸）は、矢中龍次郎氏によって昭和１３年から２８年まで、１５年をかけて建設された近代和風住宅である。矢中龍次郎氏はセメント防水剤「マノール」をはじめとした建材の研究家であり油脂化工社（現在の株式会社マノール）を創業した実業家である。平成２０年、所有者が移り空き家状態が長く続いた邸宅・庭園をのちにＮＰＯを構成するメンバーも加わり、少しずつ掃除をし地域の文化遺産として、再スタートした。

別館　（迎賓棟外観）

見どころ

矢中の杜の大きな特徴は、日本の風土を考えて作り上げた実験住宅でもあることだ。矢中氏が考える「建築とはどうあるべきか」という問いの答えを具体的かつ実験的に示している。特に換気についての工夫は邸宅の保存にかかせない性能を発揮している。邸宅内の各所に自然の循環による換気がなされるように設計されている。建具の足元の無双窓や、照明器具周りの排気口などは設計段階から計画されていた。

換気対策小窓

二間続きの応接間

照明器具周りの排気口

暖炉（マントルピース）

玄関ホール

五層窓

ケヤキの廊下

【本館（居住棟）】

本館は木造平屋建で一部に大谷石造の地下室がある。特徴的な陸屋根や山吹色の外壁のほか随所に設けられた通気口、部屋ごとに異なる建具、建築当時のまま残る調度品や設備など多様な魅力に満ちている。

大谷石造の地下室の通気口

陸屋根

書斎

座敷

【別館（迎賓棟）】

別館の構造は一階は鉄筋コンクリート造、二階は木造になっている。内部は豪華絢爛で格式高い意匠が随所に見られる。ずらりと並んだ色鮮やかな板戸絵、サクラやケヤキ、スギなどの見事な銘木。天井高の高い空間作り、特注の調度品など見所に尽きない。

和洋折衷様式の豪華絢爛な食堂

床の間のある応接間

建物名称	矢中の杜（旧 矢中邸）
建築年	昭和13年(1938年)～昭和28年(1953年)
構造・様式	本館：木造平屋+大谷石造 別館：鉄筋コンクリート造+木造
所在地	茨城県つくば市北条94-1
電　話	090-6303-4531（NPO法人“矢中の杜”の守り人）
Ｈ　Ｐ	https://www.yanakanomori.org/
開館時間	毎週土曜日（11:00～16:00　最終入場15:30）
アクセス	常磐道土浦北ICから国道125号線経由で約12km
備　　考	国登録有形文化財

旧篠原家住宅

栃木県宇都宮市

きゅうしのはらけじゅうたく

旧篠原家住宅は、江戸時代から醤油醸造や肥料商を営んでいた宇都宮市を代表する旧家の一つである篠原家の明治２８年に建てられた住居兼店蔵である。
敷地内には１・２階合わせて１００坪の主屋と、新蔵、文庫蔵、石蔵の３つの蔵がある。黒漆喰や地元宇都宮産の大谷石を用いた外壁や、商家を特徴付ける店先の格子などが、明治時代の豪商の暮らしぶりを伝えている。建物は徹底した防火・防犯対策が施されており、屋根、外壁はもちろん、くぐり戸や揚戸などの建具にも当時の知恵と工夫が見られる。

見どころ

ＪＲ宇都宮駅前の歴史的シンボルとして戦火や地震をくぐり抜け、堂々たる風格で佇んでいるこの建物は、幾度も復元・修復を経て、街に愛される建物となっている。
栃木地方特有の大谷石張の町家建築で、親近感を与えてくれる。宇都宮市へ寄贈されたのは平成８年、一般公開されたのは平成９年と最近のことである。主屋の奥、裏は駅前の喧騒を忘れるほどの静かで落ち着いた空間であり、駅前のビル群の中、和を感じるポケットとなっている。

壁面：１階は大谷石貼り、２階は黒漆喰塗り

商いの空間である主屋の内部では、１尺５寸角で全長11mを超える欅の大黒柱や、今ではめったに見られない欅や赤松の床梁組の力強さに圧倒される。また、今では珍しい生活用品や家具、建具などから当時の様子を偲ぶ事が出来る。
床の間の幅２間半の欅の一枚板や、廊下の4間もの長さの檜の床材、精巧で美しいデザインの箱階段等から豪商の財力と見識の高さがうかがえる。江戸時代末期に建てられた「石蔵」と「文庫蔵」、主屋と同時期に建てられた「新蔵」も大谷石を外壁として用い、北側からの防火を意識した造りとなっている。
木造に土を塗り大谷石を張った文庫蔵の内部は丁寧に修復され、力強い架構が再現されている。
年月を経ても美しい自然素材と力強い構造美が豪壮な趣を醸し出している貴重な建造物である。

箱階段：総欅造り、引手は獅子のデザイン

床の間：床板は欅の一枚板、床柱は１階から通しの欅の大黒柱

建物名称	旧篠原家住宅
建築年	主屋・新蔵　1895年（明治28年） 文書蔵　1851年（嘉永4年） 石蔵　江戸時代終わり頃
構造・様式	木造２階建桟瓦葺・土蔵造
所在地	栃木県宇都宮市今泉１丁目4-33
電　話	028-624-2200
Ｈ　Ｐ	http://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/citypromotion/rekishi/geijyutsu/1007372.html
開館時間	9：00～17：00（月曜、祝日の翌日、年末年始 休館）
アクセス	JR宇都宮駅　西口から徒歩３分
備　考	主屋・新蔵…国指定重要文化財・市指定有形文化財

日光田母沢御用邸

にっこうたもざわごようてい

栃木県日光市

もともとこの地にあった銀行家小林年保の明治中期に建設した別邸に加え、当時、赤坂離宮などに使われていた旧紀州徳川家江戸中屋敷の一部（現在の３階建部分）を移築し、その他の部分を新築し、明治３２年に大正天皇の御静養地として造営された。その後大規模な増改築を経て、大正１０年に現在の姿となった。床面積は１３６０坪で、３階を除くすべての屋根がひとつながりになっている。現存する明治・大正期の御用邸の中では最大規模である。ひとつの建物で、江戸・明治・大正時代の最高の建築技術や、建てられた時代や用途によって異なるいくつかの建築様式を見ることができる。和風建築の形態でありながら、一部に絨毯やシャンデリアなどを用いた和洋折衷の生活様式が採り入れられていて、近代和風建築につながる。建築学的にも大変貴重な建物である。
戦後御用邸が廃止となり、宿泊・研修施設等として使われてきた後、平成１２年に栃木県による３年の歳月をかけた修復・整備で蘇り、日光田母沢御用邸記念公園として一般公開されることとなった。

見どころ

御学問所（梅の間）：書院風の角長押が数寄屋風の丸太の床柱に巻き付いた混在の造りになっている。

御座所入側：鳥の子紙の張付壁と張付天井、杉戸絵、黒漆塗りの硝子戸、そして畳敷きの上に英国製の絨毯を敷いた和洋折衷様式。

畳縁は、部屋の用途により、小紋縁、萌葱絹縁、中紋縁、繧繝縁が用いられている。また、長押の釘隠しや襖の引手の錺金物も、建築時期により異なっている。照明器具も部屋ごとに異なるデザインとなっている。

謁見所：最も格式の高い真の書院で、最高の材料で具現化された。

謁見所縁側：謁見時の視覚を和らげる為外側に傾斜が付いている。

廊下：黒漆塗りの竹の節欄間が付いている。

御日拝所：長押がなく、床の間の落掛が黒漆塗り弧形である。

皇后御座所：畳の縁は、萌葱絹縁

皇后御学問所：照明器具は赤色硝子

建物名称	日光田母沢御用邸
建築年	1899年（明治32年）、増改築1921年（大正10年）
構造・様式	木造平屋建、一部２階建・３階建、銅板葺
所在地	栃木県日光市本町8-27
電　話	0288-53-6767
Ｈ　Ｐ	http://www.park-tochigi.com/tamozawa/
開館時間	4月～10月　9：00～17：00（受付16：00まで） 11月～　3月　9：00～16：30（受付16：00まで） 火曜日、年末年始（12/29～1/1）休園
アクセス	JR日光駅、東武日光駅より3km
備　考	国指定重要文化財、日本の歴史公園100選

岡田記念館 翁島別邸

栃木県栃木市

おかだきねんかん　おきなじまべってい

岡田家は５５０年以上の歴史を持つ旧家で、江戸時代に未開地を開墾して村民に生活の基礎作りを指導し安定した村落づくりに貢献した。これにより徳川家より「嘉右衛門新田村」の名称を賜り、以後代々の当主は嘉右衛門を襲名し、当代で２６代目となる。
江戸時代、日光例幣使街道の開設に伴い屋敷内には陣屋が設けられ、代官職も代行し、地域発展のため寄与していた。現在も４０００平方メートルの敷地内に、当時の建物が保存されていることから、別名「代官屋敷」とも呼ばれている。
代々の当主は芸術面にも関心が深く、巴波川の舟運や街道の往還を通して、文人、墨客との文化交流もあり、画家富岡鉄斎の韓信堪忍図をはじめ、文人の松根東洋城、陶芸家の板谷波山の作品など岡田家所蔵の品々が、邸内と共に「岡田記念館」として昭和５３年より一般公開されている。
「翁島別邸」は、その敷地内にある、大正建築を代表する建物で、国登録有形文化財の指定を受けている。

見どころ

長さ6間半、幅3尺、厚さ1寸のけやきの一枚板を使用した１階廊下

横引き雪見障子と無双窓の組合せ

床柱：黒柿　　落とし掛け：亀甲竹　　天井：屋久杉

竹林の小路

湯気を逃がす天井通気口

岡田家２２代当主　岡田孝一が７０歳の時に自らの隠居場所として別荘建築を手がけることを思いたち造られたのがこの「翁島別邸」である。大正３年に工事を始め、工事期間１０年を有し、大正１３年に完成した。用材は当主自らが木場に出向き吟味買付した銘木を使用し、町内練達の工匠が技を競い合って作り上げた。内部は、豪壮な雰囲気の中にも、日本建築ならではの細かなこだわりが施されている。浴室の傘天井も見事である。近年は、テレビ、映画のロケ地としても利用されている。
庭の竹林も風情があり、散策におすすめである。

床柱：紫檀黒檀鉄刃木

戸板：杉の糸柾目

２階の窓からは、富士山、筑波山、男体山の山々が見える。

建物名称	岡田記念館 翁島別邸
建築年	完成1924年（大正13年）
構造・様式	木造２階建、瓦葺
所在地	栃木県栃木市小平町1-23
電　話	0282-22-0001
Ｈ　Ｐ	http://www.cc9.ne.jp/～kauemon
開館時間	9：30～17：00（土･日･月曜、祭日のみ）
アクセス	東武日光線新栃木駅より徒歩15分
備　考	国登録有形文化財

彦部家住宅

ひこべけじゅうたく

群馬県桐生市

長屋門（屋敷の表門）の桁行16.2m梁間3.8mの屋根は茅葺き・寄棟造り。門をはさみ土塁と堀が巡っている。屋敷内には主屋と付属屋の冬住みと呼ばれる隠居屋、穀倉、文庫倉、医務所などがあり良好に保存されている。定住したと伝わる永禄年間以降、由緒ある家柄の館として整えられた。

主屋は入母屋造り・茅葺き、桁行約18m、梁間約11mで、規模は大きい。建築年代は江戸前期と推定される。全国的にみても古い遺構であり、当時の上層農家の姿を伝えている。

見どころ

東西 130m、南北 100mの方形の土塁と濠をめぐらせた彦部家住宅は、渡良瀬川右岸の広沢丘陵手臼山の東の麓に位置している。彦部家の祖は家伝より天武天皇の第一子高市親王となっている。また源氏の直系にもあたることが分かっている。彦部家住宅は戦国時代より地域に貢し、農業のかたわら敷地内に学問所「松広学舎」を設け、国学・薬学・華道に通じた文化人を輩出してきた。近代では桐生織物経営や産地の指導者として貢献してきた。敷地内の建物も織物や染め物の作業に使われ、今もそのたたずまいを残している。庭園は池泉回遊様式で、室町時代の貴族武士の香りを伝えている。
現在は春の市民茶会に始まり、体験教室、全国重文民家の集い、むかしの暮らし体験、秋の紅葉狩りなど数々の人々の勉強の場、憩いの場、なごみの場として開放されている。

冬住み（隠居屋）

文庫倉・穀倉

主屋は東半を土間、西半を居室としている。柱や梁は全体的に細く、オクザシキの押板形式のトコや、広間のタケスノコ床など、構造や手法に古式が見られる。

平成 7年から12年の解体修理工事に伴って土間や建物周辺の発掘調査を実施したところ、当初と考えれる便所、雨落ちなどの遺構や陶磁器などの遺物が発見された。関東地方では最古に属する民家である。後に、放射性炭素１４調査法により建築年は1580年と判定された。

神橋から竹ケ岡八幡宮をみる

からめ手口

建物名称	彦部家住宅
建築年	主　屋：江戸前期(17世紀)　長屋門：18世紀頃 冬住み：江戸末期　文庫倉：江戸末期　穀倉：1856年 からめ手口・櫓台：16世紀中頃
構造・様式	主　屋：木造平屋建・茅葺入母屋造 冬住み：木造平屋建・茅葺寄棟造一部瓦葺
所在地	群馬県桐生市広沢町６丁目877番地
電　話	0277-52-6596
Ｈ　Ｐ	http://www.hikobeke.jp/
開館時間	土・日・祝日　10：00～16：00
アクセス	北関東自動車道・太田桐生ICより10分 JR桐生駅よりバス18分　東武新桐生駅よりバス26分
備　考	国指定重要文化財、群馬県指定史跡

冨沢家住宅

とみざわけじゅうたく

群馬県吾妻郡

養蚕は奈良時代から全国に広まった。江戸幕府が養蚕を推奨をしたため、良質な生糸が生産されるようになり、明治にはいると金銀銅の海外流出を防ぐための主要な輸出品となった。その隆盛期に、群馬の生糸は輸出量の相当量を占めていた。
名主であった冨沢家住宅は米作・養蚕・麦雑穀や繭等の取引、駄馬による運送業や金融業などで財をなした。現在復元されている建物は１８世紀末に大型養蚕農家として建築された。木造２階建ての入母屋造、茅葺、屋根の正面が「かぶと造り風（平かぶと造）」である。その他の屋根は下屋と一体となる。換気のための高窓（ヤグラ・ウダツ）を設けている。出桁造り、東西約２４ｍ、南北約１３ｍある。２階は間仕切りのない一室として蚕の飼育に使われた。１階より張り出した部分に手摺りをつけてベランダ状にし、通路としたり、桑の上げ下げ作業をしやすくするなど活用された。昭和６１年２５代冨沢清氏より中之条町に寄贈された。

群馬県独特の養蚕農家の屋根形式である「赤城型」「榛名型」と共に「前兜造り」と称せられ、正面を切り上げて兜のような形をしている。貴重な建物として復元された。

見どころ

１階は作業が十分にできるよう、また運送業の荷物を預かるため広大な土間（台所）とした。台所の下出には馬小屋、唐臼場（精米）、かまどが設置されていた。家族用の囲炉裏のある居間、奥には「オモテノデー（表のでえ）」「ナカノデー（中でえ）」「ジョウダン（上段）」と三間続きの客用の部屋がある。名主であった当家は幕府の役人など身分の高い人が宿泊にもちいたため、武家の好んだ書院造で、細工の施された欄間も見どころである。

デードコと呼ばれる土間

土間北側の小屋裏

ジャシキと呼称した居間。
ウワイロリがある。

居間には養蚕用の小屋裏へ上る階段がある。

居間の天井

押入のあるオモテノデー

書院のあるジョウダン（上段）

表部分「出桁（梁）造り」：１階の側柱より２階の床が一尺突き出している。１・２階共、深い軒出を農作業などに活用。

両妻側の破風に設けられた換気のための窓

建物名称	冨沢家住宅（大型養蚕農家）
建築年	18世紀末（推定）
構造・様式	木造２階建、入母屋造、茅葺
所在地	群馬県吾妻郡中之条町大字大道1274
電　話	0279-76-3111（中之条教育委員会）
Ｈ　Ｐ	http://www.webgunma.com/615
開館時間	9：00～17：00
アクセス	ＪＲ中之条駅から新治方面へ　タクシーの利用を推奨
備　考	国指定重要文化財

蔵・柏屋四郎右衛門

群馬県藤岡市

くら・かしわやしろうえもん

写真：蔵・柏屋四郎右衛門

絹の取引を行う絹宿として創業して３００年あまりが経つ柏屋旅館内の、明治 12年と明治 25 年に建てられた蔵２棟を再生した、うなぎを中心とした食事処である。地域の文化的交流・発信の場、ギャラリー・サロンとしても利用されている。
藤岡は江戸時代には絹の集積地として月に12日の市が立つほど賑わっていた。江戸や明治からの建物が軒を連ねていた藤岡の街並みが、時代の波に押され変貌していく中で、歴史と文化を大切にしたいという気持ちから蔵の再生がなされた。
蔵は細い道に面していてセットバックの必要があり、曳家をした。２つの蔵の異なった形状を維持したまま連結し、中央に玄関を配置した。来客がその日の気分で、どちらかの蔵を選択出来るようになっている。歪み傾きを矯正し、傷や汚れを取り除き、創建当時の輝きが戻った。工期も費用もかかったがあえて行った。
玄関に張り出した瓦屋根が建物の美しさを引き立てている。よみがえった蔵は藤岡の商店街の町並みに大きく貢献している。

見どころ

室内は雰囲気の違った４つの部屋からなる。蔵独特の力強い梁と少ない開口を上手に生かし、老舗の風格の中に洗練されたモダンで落ち着いた空間をつくりだしている。
ご先祖様から受け継いだ大切な欅の大戸も設置した。継承してきた調度品が店の中に程よく置かれ、豪華な雰囲気に一役かっている。特に１階と２階に置かれた屏風は、あわせて六曲一双となり、比叡山をのぞむ琵琶湖を表現していると思われる。
江戸時代から続く旅館も、時代に合わせながら営まれている。

１階と２階に六曲一双の屏風が置かれている。

屋根の瓦は、すべてを手作業でつくった。天日干し後、達磨窯で焼いた藤岡瓦（いぶし瓦）に葺替え、鬼瓦は既存を再利用した。
外壁はモルタル下地の上、漆喰塗りで、腰壁はなまこ壁を施工した。

蔵は火災や地震、盗難などから貴重品を守り続けてきた。「今でもご先祖様の息遣いが聞こえてくる」とのこと。

写真：蔵・柏屋四郎右衛門

床暖房が施され、冬でも快適な空間となっている。快適さや利便さを実現しながら、配線や配管を一切見せない精緻で美しい空間がつくられている。

建物名称	蔵・柏屋四郎右衛門
建築年	1879年と1892年（明治12年と明治25年）建設 2004年（平成16年）改修再生
構造・様式	木造２階建・蔵造り
所在地	群馬県藤岡市藤岡55番地
電　話	0274-22-0006
Ｈ　Ｐ	www7.wind.ne.jp/kashiwaya/
開館時間	11：00～14：00、17：00～19：00 （夜は電話にて予約。日曜の夜は休み）
アクセス	ＪＲ藤岡駅より徒歩10分
備　考	日本民家再生協会主催 よみがえる蔵・店舗ｷﾞｬﾗﾘｰ部門入選 藤岡市都市景観賞受賞

臨江閣

りんこうかく

群馬県前橋市

本館

臨江閣は、本館・別館・茶室からなる近代和風建築。本館は、当時の県令楫取素彦の提言により、地元有志や銀行等の寄付によって、迎賓館として建設された。 明治26年の明治天皇の行幸の際の行在所として、その後も皇太子であった後の大正天皇 がご滞在するなど、多くの皇族方が、ご滞在された。茶室も、本館と同時期に、県庁職員らの募金によって建てられた。別館は、明治43年に前橋市で開催された一府十四県連合共進会に先立ち、貴賓館として建設され、共進会閉会後は、大公会堂として利用されてきた。

別館

見どころ

別館の玄関から入館すると、ホール左手には、中廊下を挟む南北の和室が続き、欄間も必見である。ホール右手には西洋間、2階に上ると180畳の大広間が広がる。その大広間の天井高や大床の一枚板の杉の天井、縁側のガラス越しに降り注ぐ光の表情など、時間を忘れて楽しめる。渡り廊下から続く本館に入ると、「一の間」からの眺望もまた楽しめる。縁側、縁桁の丸太も美しい。2階の「御座所」として使用された和室も見どころである。
臨江閣の細部の仕様の数々には、日常の生活空間にはない非日常的な和の設えが見られる。市民をいつでも迎え入れ、利用もできる地域に愛される「和の空間」となっている。

【本館】
渡り廊下から本館に入ると、襖で仕切られた和室4室が続く。西に位置する「一の間」には、矩折りに床の間がある。また、かつては能舞台としても使えるようになっており、床下には5個の壺が埋設してある。 その先に奥座敷2室がある。2階には、明治天皇行幸の際「御座所」として使用した12.5畳の和室と「次の間」がある。

【別館】
棟飾りの鴟尾、 破風の狐格子、唐草の懸魚、軒下の舟肘木など、 外観には寺院建築の手法がみえる。入母屋造、洋小屋組で、内部は中廊下を配し南北に7室の和室があり、北の和室の床の間は本勝手、南は、逆勝手の床の間になっている。ホールを挟み60畳の天井の高い洋間には長押が廻り、床は板張りである。

本館

2階の大広間は、畳が敷かれ長押が廻り、格天井で天井高も高く、開放感がある。18尺の大床の左右には、9尺の脇床が設けられており、大床の天井材も見応えがある。西洋間上の2階の床梁を、鉄筋で補強している。また、その一部分が見られるようになっている。

【茶室】
茶室は、茶席が、京間4畳半・本勝手・下座に床の間を持つ形式で 金森宗和の系譜に属するものと思われている。 通常は、外観のみ見学可能。

建物名称	臨江閣（本館・茶室・別館）
建築年	本館・茶室:1884年(明治17年)・別館:1910年(明治43年)
構造・様式	本館:木造２階建数寄屋造・別館:木造２階建入母屋造
所在地	前橋市大手町三丁目15番
電　話	027-231-5792
Ｈ　Ｐ	http://www.city.maebashi.gunma.jp/index.html(前橋市)
開館時間	9：00～17：00(月曜休館・入館は16：30まで 祝日の場合は開館、翌平日休館)
アクセス	JR前橋駅よりバス遊園地坂下徒歩5分
備　考	本館・茶室・別館：国指定重要文化財

富岡市社会教育館

とみおかししゃかいきょういくかん

群馬県富岡市

富岡市を一望できる小高い丘に位置している。一間薬医門を入ると富岡市社会教育館が現れる。昭和初期の近代和風建築で、設計は伝統建築を先導した大江新太郎（日光東照宮の修復・明治神宮の造営に関わった）の主宰する「大江國風建築塾」による。水平線を強調した構成で、屋根形状は切妻と入母屋を組み合わせ単調さを回避し、軒裏は木小舞の化粧軒裏としている。数寄屋造風建物で配置は雁行型、外壁は真壁造・漆喰塗り、腰竪羽目板張りである。東西の長さは116mあり、東から講堂棟・渡り廊下棟・客室（講師室）棟・玄関（2カ所 西二ノ口と東）・研修棟・厨房・その他棟が連続している。床面積は1460㎡（440坪）である。庭園と建物との要素が一体化していることなど近代和風建築の要素を色濃く表現しているが、椅子座・キングポストトラスなども採用されている。当初は精神修養を目的に「東國敬神道場」として建設された。
現在は市民の社会教育・研修や各種の講座の場として使用している。 2005年から富岡市が所有し管理・運営を行い、 2008年に国登録有形文化財として登録された。西隣に重要文化財の社殿群のある「下り宮」として有名な上州一ノ宮貫前神社がある。

見どころ

日本の伝統的建築要素が随所に採用されている。講堂の室内は高い格天井で、床は高床式で濡れ縁を回し高欄を取り付けている。床下の目隠しには竹簾を張っている。戸袋等に網干文様（あぼしもんよう）の装飾モチーフ（大江の代表作にも施工）が施されている。講堂と客室（講師室）棟を結ぶ長い廊下の天井の小舞化粧軒裏や玄関の欄間も見どころである。

客室（講師室）棟は主室15畳、次の間10畳、四方に畳敷きの床と榑縁が巡っている。東側・南側は全面ガラスはめ込み格子戸で、庭園や遠い山並みまで見ることができる。

主室には付け書院（組子障子）や床の間・脇床が設けられている。特に二室を仕切る欄間が美しい。

客室（講師室）棟～廊下：地形を生かした庭園が楽しめる。廊下の下をくぐると、反対側の北の庭園につながる。

講堂(1935年建築)：入母屋造妻入、玄関は切妻である。内部は60畳で、正面・側面に広縁、背面に演壇がある。旧神殿が北に突出し、西には渡り廊下がつながる。大きな入母屋破風と切妻屋根が威厳を示す。内部の床は高床式で、軽快さが感じられる。講堂から客室（講師室）棟をつなぐ廊下には両面に窓が設けられ、四季折々の南北両面の庭園を楽しめる。

建物名称	富岡市社会教育館
建築年	1936年（昭和11年）
構造・様式	木造平屋建　寄棟造・切妻造・入母屋造
所在地	群馬県富岡市一ノ宮1465-1
電　話	0274-62-2033
Ｈ　Ｐ	http://www.city.tomioka.lg.jp/www/contents/1523428079180/index.html
開館時間	見学：随時、月曜休館　利用：9：00～21：30(事前申込)
アクセス	上信電鉄　上州一宮駅から600m
備　考	国登録有形文化財

旧井上房一郎邸

きゅういのうえふさいちろうてい

群馬県高崎市

南側外観。杉材縦板張りの外壁、日差しや雨を調整しつつ建物に奥行を与える深い軒が印象的。雨樋は無い。

高崎市の文化振興に大きく貢献した井上房一郎(1898-1993)の自邸である。
チェコ生まれのアメリカ人建築家アントニン・レーモンド(1888-1976)は、この前年に東京麻布に「笄（こうがい）町の自邸（1951）」をつくっていた。 戦前から親交があった井上は、レーモンドの自邸建築の際に妙義山から自然石を運び庭の石組に参加した。「笄町の自邸」を身体で感じ深く感銘を受けた井上は、レーモンドに頼み込んで図面提供を受けるとともに、職人を連れ実測した上で瓜二つの住宅を建築した。井上邸は、母屋との関係で「笄町の自邸」を東西反転した鏡写しの平面形状である。また、居間に続くノエミ・レーモンドのアトリエ部分はなく、洋風の寝室の隣に和室を設けている。居間の床もプラスチックタイルからカーペット敷きに変更し、土足から下足を脱いだ生活とした。プールと石と林の庭は、灯篭と竹の日本庭園に変更されている。レーモンドが三度の食事をしたといわれる垂木を藤棚とした雨の落ちる中庭は、井上邸では垂木の上にガラス板をのせたパティオとなっている。

見どころ

レーモンドが建築をつくる上で規範とした「五原則（単純性、経済性、直截性、構造の正直さ、自然性）」と、そこから生まれた「レーモンドスタイル」を間近で見ることができる。尺モデュールの整然とした平面に、丸太を平割りした鋏状トラスや垂木といった構造を意匠としてあらわしている。大開口を得るために引戸やガラス戸を柱芯から外して持ち出す「芯外し」の手法を用いて、庭の延長としての居間を実現している。杉の縦板張りの外壁に地震を考慮して採用された鉄板葺きの屋根と深い軒が水平に走って、建物に陰影を与えている。
日本をこよなく愛したレーモンドが大切にした、人間的なスケールと自然との一体性を体感できる建築である。備え付けの家具はノエミ夫人の作品。「笄町の自邸」が取り壊された現在、65年を経ても建築当時の姿を今に伝える井上邸は、レーモンド建築の真髄を伝える貴重な作品といえる。

北側外観。「芯外し」の手法で連なる居間のトップサイドライトが印象的な外観となっている。写真右が、パティオへとつながる玄関である。

三方を「芯外し」の連窓とした居間南側。建具を解放することで庭園と居間が一体となる。網戸は無い。深い軒が落ち着いた室内空間をつくっている。

居間には暖炉があり、ノエミ夫人のデザインによる家具が置かれている。壁はラワン・ロータリーベニヤ貼。北側には障子のトップサイドライトを設置。天井部分中央のダクトはセントラルヒーティング。

寝室南側。左側の窓はパティオに面している。家具は、笄町の自邸と同形。ソファベッドを２台配置（写真右）。

寝室（洋室）の隣に設けられた床の間をしつらえた小上がりの和室。照明器具はイサム・ノグチの作品。

玄関の正面に位置し、居間と寝室をつなぐパティオ。垂木上に線入りガラスが設置されている。

建物名称	旧井上房一郎邸
建築年	1952年（昭和27年）
構造・様式	木造平屋建
所在地	群馬県高崎市八島町110-27（高崎市美術館内）
電　話	027-324-6125
Ｈ　Ｐ	http://www.city.takasaki.gunma.jp/docs/2014011000469/
開館時間	3月～11月：10:00～18:00／12月～2月：10:00～17:00 入館は閉館30分前まで。高崎市美術館の開館日に準ずる。
アクセス	ＪＲ高崎駅より徒歩3分
備　考	2010年 高崎市景観重要建造物第１号

旧山崎家別邸

埼玉県川越市

きゅうやまざきけべってい

旧山崎家別邸は、川越の老舗菓子店「亀屋」の五代目山崎嘉七の隠居所として大正14年(1925年)に建てられた。設計は同じく川越で第八十五銀行（現在の埼玉りそな銀行　国登録有形文化財)を設計した建築家保岡勝也(1877年～1942年)が建物から造園まで手がけた。
保岡氏は東京帝国大学で辰野金吾教授に師事し、卒業後は三菱地所に在籍していたが住宅に関心を持ち独立。我が国の近代における住宅・数寄屋設計者として高い評価を受けた一人であり、和風庭園にも書籍を著すほど造詣が深かった。
主屋は和洋館並列型住宅で、洋館の白い窓と和館の木建具がしっくり溶け合うデザインになっている。「川越の私的迎賓館」として皇族の宿泊所としても使われた。
敷地面積は約2,300㎡、延べ面積は約250㎡である。

【茶室】
茶室は主屋から庭を通して見る姿を重視しており、土庇部分を主屋側に向け、その上に片入母屋を付け妻を正面に見せている。

見どころ

左／天窓がついた廊下　右／網代天井の美しい縁側
モダンと伝統、和風と洋風の意匠をあわせ持つ建築である。

左／便所：デザインされた照明に照らされた天井
右／洗面台：当時の最先端であったレトロな設備機器が随所に見られる。各室の調度品も美しい。

階段踊り場のステンドグラスは大正期に活躍した小川三知（1869年～1928年）の「泰山木とブルージュ」という作品である。階段下のステンドグラスは鮮やかな色硝子と細かい鉛線で区切られ、別府七郎作といわれている。

茶室内部のこだわりは全ての柱に丸太をそのまま使い、障子の框を丸太に合わせてひっかけているところである。床柱のみ栗のナグリ仕上げとなっている。

【主屋客間９畳】
数寄屋造りで、８畳の広さに下がり壁を介して北側に1畳加わった9畳の間である。柱は全て吉野杉磨丸太で長押にも杉磨丸太の割り材が使われている。

建物名称	旧山崎家別邸
建築年	1925年(大正14年)
構造・様式	木造2階建て
所在地	埼玉県川越市松江町2丁目7番地8
電　話	049-224-5940
Ｈ　Ｐ	http://www.city.kawagoe.saitama.jp/welcome/kankospot/kurazukurizone/kyuyamazakike.html
開館時間	4～9月 9:30～18:30　10月～3月 9:30～17:30
アクセス	西武新宿線「本川越駅」より徒歩15分
備　考	市指定有形文化財　主屋・茶室・腰掛待合 国登録記念物(名勝地)　庭園

二木屋（旧小林英三家住宅）

埼玉県さいたま市

にきや（きゅう こばやしえいぞうけじゅうたく）

中庭から南側外観を見る

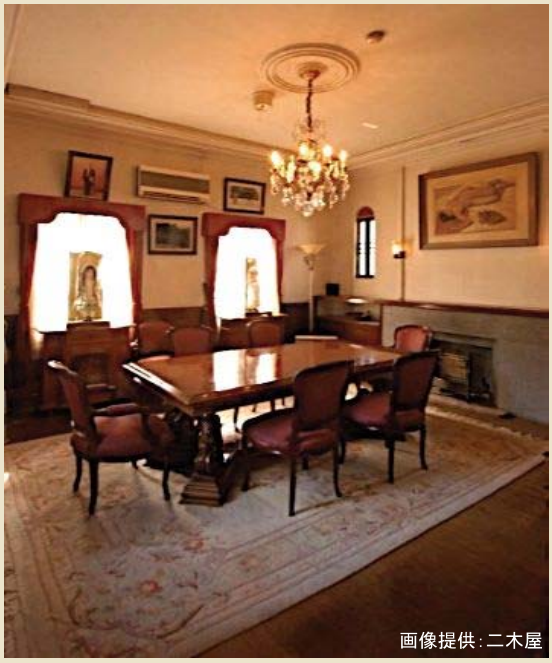
旧小林英三家住宅はもともと陸軍将校の別邸として建てられた住宅建築である。敷地の東側と北側の塀は、大谷石を６段に積む重厚な塀で東面のほぼ中央には木製扉の門、脇に通用口がある。主屋が建てられた昭和１０年代初期は付近が住宅地として開けた時期にあたり東京近郊の住宅地形成期の様子を今日に伝えている。

西側玄関アプローチ

実業家であり政治家であった小林は第３次鳩山内閣に厚生大臣として入閣した人物であった。本住宅は１階を洋間とする北西の２階建部分と東側の雁行部分はそれぞれ昭和23年、25年に増築された。大勢の来客をもてなすため18畳と15畳の広間を持ち、現在は料亭二木屋として建物の公開を兼ねて活用され、四季折々の季節感溢れるお料理や、桃の節句、端午の節句の豪華な飾り付け目当てのお客さんで賑っている。

見どころ

玄関脇の２階建増築部分の１階は、和風の外観から想像もつかない豪華なシャンデリアやマントルピースのある洋間である。窓は木製でアーチ状の可愛らしい小窓が設えてあり、南に向いている腰窓には組子をデザインに取り入れた和洋折衷の上品なディテールが目を引く。天井にはモールディングが施されており、厚地カーテンの装飾バランスの葡萄色と相まって、より落ち着きのあるクラシカルなインテリア空間になっている。



当時の趣を残し料亭に改修された主屋

昭和25年に増築された和室18畳・和室15畳続き間

建物名称	二木屋（旧小林英三家住宅）
建築年	1935年(昭和10年)
構造・様式	木造平屋一部２階建
所在地	さいたま市中央区大戸4-14-2
電　話	048-825-4777
Ｈ　Ｐ	http://www.nikiya.co.jp
開館時間	11:00 ～ 22:00
アクセス	京浜東北線・北浦和駅西口徒歩8分
備　考	国登録有形文化財

遠山記念館

埼玉県比企郡

とおやまきねんかん

遠山記念館は、日興證券（現SMBC日興証券）の創立者である遠山元一が、没落した生家を努力の末に立て直し、苦労をかけた母美以のために建てた邸宅で、工期は昭和8年～昭和11年、延べ床面積約700m²である。敷地内には、住居のほかに、茶室、待合い、長屋門等、全９棟から構成されている。設計は室岡惣七、工事の総監督は元一の実弟芳雄、施工は大工棟梁の中村清次郎が担当し、当時の卓越した建築技術をもちいて、全国各地を回って銘木を収集した、戦前における最高峰の近代和風建築の一つといえる。
邸宅は、建築様式を異する東棟、中棟、西棟の3棟を廊下で結ぶ構成になっている。

【東棟外観】
千鳥破風の茅葺屋根、用材は欅、靴脱ぎ石の鞍馬石は圧巻である。

【中棟外観 】
屋根は桟瓦に銅板葺、用材は檜、壁は卵漆喰と檜の下見張りである。

【西棟外観 】
用材は北山杉の面皮付、壁は錆聚楽（蛍壁）、軒裏の瀟洒な細工も見逃せない。

見どころ

右写真：遠山記念館

【中棟廊下】左上
豪華な　化粧小舞天井を受ける丸桁は長さ７間の吉野杉。畳床が来客の足に優しく、庭の緑も手に取るように近く感じる。
【西棟廊下】右上
掛込み天井と半分畳が敷いてある床は数奇屋造りの導入部にふさわしい。
【中棟浴室】左
天井が放射状の唐傘天井で、驚くことに当初からボイラー給湯設備が施されていた。

【西棟和室7畳の間】
座敷と庭をつなぐ軒内間の土間に磚瓦を敷き詰め、内外を一体化する空間形成となっている。ずっと畳に腰掛けゆったり庭を眺めていたい。

【東棟居間】
18畳の居間は太い欅柱や挿し鴨居等、構造部材の強弱感や、囲炉裏、縁無しの坊主畳によって、豪農の趣きを醸し出している。

【中棟大広間】
18畳の大広間は天井高が10尺、伝統的な書院造りの床の間を背に、３方に展開する庭の景色と共に来客をもてなす場所であった。

二階には応接室と寝室があるが、普段は非公開となっているため、一般開放する時を事前に調べて行くことをおすすめする。

【西棟和室8.5畳の間】
落ち着いた雰囲気の数寄屋造りは母のための空間であり、下がり壁や床脇の壁留め、無目鴨居の付け書院が絶妙なバランスを形成している。

建物名称	遠山記念館
建築年	1936年（昭和11年）
構造・様式	木造2階建
所在地	埼玉県比企郡川島町白井沼675
電　話	049-297-0007
Ｈ　Ｐ	http://www.e-kinenkan.com
開館時間	10：00～16:30(入館は16：00まで)
アクセス	桶川駅、または川越駅よりバスで牛ケ谷戸下車徒歩15分
備　考	国指定重要文化財

上花輪歴史館

かみはなわれきしかん

千葉県野田市

冠木門から門長屋を望む

寛文元年（1661年）に醤油の醸造を始めた旧家で、上花輪の名主を務めてきた高梨兵左衛門家が代々大切にしてきた住居、庭園、土蔵、屋敷林、神楽殿等、歴史的価値の高い建造物が丁寧に保存されている。
邸内には明和3年（1776年）建設の門長屋から、昭和6年（1931年）建設の京風数寄屋建築の主屋にいたるまでの、様々な時代の建物が混在しているが、みごとに調和が保たれている。
高梨家は代々、建築や造園に造詣が深く「西に森、北に山」という江戸時代の屋敷建築の基本を忠実に守り続けてきた。28代兵左衛門が主屋を改築した際にも、最新設備を取り入れたり、京都の鞍馬石を敷石にするなどの巧みな改修で、調和を保ち続けてきた。
建物裏手には構掘（かまえぼり）が巡り、船着き場が設けられている。いにしえの奥様やお嬢様が、ここから船に乗り江戸に簪を買いに出かけて行ったという。そんな姿が思い浮かび、タイムスリップができる歴史館である。

表玄関

見どころ

最大の見どころは、主屋内の見学コース。学芸員の方が一つ一つの部屋を詳しく説明をしてくださる。その後、副館長である高梨節子さんが点ててくださるお茶をいただきながら話を聞く。節子さんが高梨家へ嫁いでこられた時、土蔵にはおびただしい数の先祖伝来の貴重な文物などがあった。こうした文化財にたいへん興味を持ち、家事のかたわら学芸員の資格を取得し勉強をしてきた、という経歴の持ち主。これらの文化財を後世に残したいと博物館の構想を持ち、全収蔵品の目録を作成し、醸造用具や生活用具、屋敷全体を見学できる「上花輪歴史館」を1994年4月にオープンした。
「先祖の強い美意識で建てられ、魂のこもった庭園と建物を慈しんで残していきたい。先祖への尊敬の念をもって、生活に根ざした文化を紹介し、歴史を感じとってもらいたい。また、忘れられていく日本の美意識・伝統美、建築空間の美を体験してもらいたい」と、見学者一人一人にお茶を点てて接してくださる。 1766年に建てられた門長屋をくぐり、1806年の書院を経て、1931年建設の数寄屋造り棟でお茶をいただくと、250年の時の流れと共に高梨家に受け継がれる美意識を体感できるに違いない。
内部の写真は、防犯等の観点から公にされていないが、各部屋には各時代の当時の生活が再現され、小物がそのまま飾られている。直接足を運んでこそ体験できる見学コースである。

書院へ続く鞍馬石の敷石

神楽殿

夏の間、障子から模様替えする夏障子

建物名称	公益財団法人 高梨本家 上花輪歴史館
建築年	1766年（明和3年）、1931年（昭和6年）など
構造・様式	木造平屋建数寄屋造
所在地	千葉県野田市上花輪507番地
電　話	04-7122-2070
Ｈ　Ｐ	http://kamihanawa.jp/
開館時間	3月10･11月･12月第1週：10時～16時 4～7月･9月：10時～17時 休館日：月曜・火曜・8月・12月第2週～2月 ※主屋内の内覧コースは事前予約。一度に10名まで。 木曜・金曜・土曜の10:30～、11:15～、13:00～
アクセス	東武野田線 野田市駅 下車 徒歩17分 駐車場有
備　考	国県指定名勝「高梨氏庭園」 近代化産業遺産「野田市の醸造関連遺産」

戸定邸

とじょうてい

千葉県松戸市

表座敷棟：庭園から望む。芝の形・高さ、樹木の種類、東屋等が当時の写真を元に復元された。　© 松戸市 戸定歴史館

江戸幕府最後の将軍・徳川慶喜の弟・昭武の私邸で、西に江戸川と富士山を望む見晴らしの良い戸定が丘の台地に所在する。明治17年(1884年)竣工。後の増築を経て現在９棟が廊下で結ばれ部屋数は23を数える。江戸時代の大名屋敷の系譜上にありながら、徳川家が権力の座を離れたため、生活様式が大きく変化し規模は著しく縮小している。最上等の杉材をふんだんに使う一方で、装飾を最小限に留めた空間には静かな気品が漂う。昭武は７年間に及ぶ欧州滞在の経験から、芝を敷き詰め円堆樹形の木立を配置した洋風庭園を築き、伝統的な和風様式を用いた主屋との調和に心血を注いだ。明治前期における上流住宅の様態の指標となるものとして歴史的価値が高いといわれる。４千坪を超える庭園と併せて楽しんでほしい。

使者の間棟の欄間：中国故事の縁起をかついで蝙蝠の型で抜いてある

使者の間棟の押入：下段は貴重なケヤキの一枚板。明り取りの工夫もされている

見どころ

松戸は水戸街道の宿場町として栄えた経緯もあり、元水戸藩主であった昭武には馴染み深い場所である。主屋を取り囲むよう庭が配され、昭武が好んだヒヨクヒバやコウヤマキなど大木が植えられている。他には付属建築（茅葺門・物置）が残る。中・奥座敷棟は夫妻や家族の生活の場とし、増築された離座敷棟は生母秋庭が住んだ。建物は大規模だが華美な装飾はなく、一見質素である。しかし様々な工夫（台所棟の廊下幅を広くし使い勝手を考慮、出窓の出を大きく等）が見受けられ、現代の住宅にも十分に応用できよう。

棚は高さがある

表座敷棟の客間

茅葺門・玄関：昭武存命時には腕木を支える鉄材が設置されていた

飴色に光る長い丸桁が建物外周を囲み、大工の技量の高さが伺える

表座敷の客間からの眺め

台所と中座敷を繋ぐ廊下の出窓は奥行きがあり、膳の仮置きができた

湯殿棟の網代天井：湯気の逃げ道にもなっている。邸宅内で一番凝った天井かもしれない

平面図　© 松戸市 戸定歴史館

建物名称	戸定邸・戸定邸庭園
建築年	明治17年（1884年）
構造・様式	木造平屋建　一部２階建　寄棟造 桟瓦葺一部銅板葺
所在地	千葉県松戸市松戸714-1
電　話	047-362-2050
Ｈ　Ｐ	https://www.city.matsudo.chiba.jp/tojo/
開館時間	9:30～17:00（入館は16:30まで） 休館日：月曜日（祝日の場合は火曜日） 年末年始（12/28～1/4）
アクセス	JR常磐線 松戸駅東口 下車　徒歩10分　駐車場有
備　考	国指定重要文化財・国指定名勝

旧堀田邸

きゅうほったてい

千葉県佐倉市

玄関棟：主人もしくは賓客を出迎える

最後の佐倉藩主・堀田正倫の邸宅で、明治23年(1890年)に竣工。現在は佐倉厚生園の敷地内に存する。明治43年(1910年)には湯殿が増築され、主屋や門番所、土蔵などの建物と庭園で構成されている。主屋は木造平屋建て一部２階建て５棟からなる。現存する明治時代の木造邸宅として貴重なものであり、建物群は平成18年(2006年)に国の重要文化財に指定されている。庭園も当時の姿や変遷が史料として残されており、それらが評価され平成27年(2015年)国の名勝に指定された。正倫公は農業と教育の発展に尽力し、県に先駆けて堀田家農事試験場を明治30年に設立。当時の佐倉中(現 佐倉高校)へ多額の寄付もした。建物群と庭園の取り合わせの美しさに往時を偲ぶことができる。

庭園は入念な手入れがされており、何処から見ても美しいが客座敷からの眺めは格別である。

見どころ

主屋は身分や格式を意識した造りとなっていて、出入口も当時は５つあり使い分けされた。更に部屋ごとに建具・柱の材種・壁材料等、厳格な区分けがされた。家族の生活空間である居間棟・書斎棟の造りは細やかな工夫が凝らされ、七宝焼の引き手・明治時代の女流画家、跡見花蹊の絵が引き戸に用いられている。書斎棟は当主正倫公の専用スペースで柱はおろか障子桟まで手の当たるところは全て面取りされている。ぜひ間近で見て欲しい細やかな意匠である。天井には当時も珍しい印度更紗が張られている。豪奢ではないが、旧大名家の邸宅らしい凛とした美しさが感じられる。年数回、特別公開をしている。一般公開では見られない棟があるので訪れる際は確認をして頂きたい。

書斎棟

格式高い書斎棟は紫檀の床柱。
印度更紗張りの天井が印象深い

広い庭も魅力のひとつ

書斎棟・２階は通常は非公開

玄関棟の畳廊下：家令の執務室が並ぶ

客座敷の床の間：床柱の材種は檜

湿気の溜まる北側の床下に通気口。寝室の畳下地は通常より厚い24mm。東日本大震災でも目立つ被害はなかった。

居間棟と書斎棟を繋ぐ廊下：網代天井が美しい

建物名称	旧堀田邸・さくら庭園
建築年	明治23年(1890年)
構造・様式	木造平屋建　一部２階建　寄棟造 桟瓦葺一部銅板葺
所在地	千葉県佐倉市鏑木町274番地
電　話	043-483-2390
Ｈ　Ｐ	http://www.city.sakura.lg.jp/0000000627.html
開館時間	9時30分～16時30分（入館は16：00まで） 休館日：月曜日（祝日の場合は火曜日） 年末年始（12/28～1/4）
アクセス	JR佐倉駅又は京成佐倉駅 下車　徒歩20分　駐車場有
備　考	国指定重要文化財・国指定名勝

翠州亭(旧スイス大使館)

千葉県長生郡

すいすてい(きゅうすいすたいしかん)

正面外観夜景

「旧スイス大使館建物」は、昭和５年日本郵船株式会社の創始者近藤兼平氏の後嗣、 近藤滋弥（当時貴族院議員、男爵）の別邸として、伴仲信次氏の手により東京麻布広尾に建築された。氏24歳の時の力作である。近藤男爵は茶道を嗜む茶人であり、全室京間取りで、数寄屋風総檜造り、随所に繊細な造形がみられる。日本建築の粋と高い評価を受けている。

南面外観つつじ園から

見どころ

建物の前面には約2000株のツツジ、その他、600本の梅林、60本の桜が植えられており、まずは外から四季折々の屋敷の佇まいが楽しめる。食事は予約が必要だが、ゆっくりと房総の海、山の幸を堪能していると、時は瞬く間に過ぎてしまう。お客様の帰った部屋は快く見学させてくださる。建物好き、美味しい物好きを十分満足させてくれる。

内部の設えも随所に見どころがある。各部屋を結ぶ内廊下は、高さの違う欄間が設えてあり、遠近法による奥行を感じさせてくれる。また、濡れ縁には竹節欄間があり、格調の高さが感じられる。全室京間取りなので全体がゆったりと感じられ、鴨居の高さも6尺あり、大柄なスイスの方たちも使い勝手が良かったであろうと思われる。

夕暮れ時の枯山水

松の間外観枯山水から

赤いﾓｹｯﾄ貼の折上げ格天井

見事な屋久杉の船底天井

眺望も美しい鶴の間

開放感のある松の間

昭和20年～53年までスイス連邦共和国大使館として使用され、その間、歴代スイス大使はこの建物の美しさのみならず、その文化財的価値に深い理解をよせ、原型を損なわないよう細心の配慮をほどこしてきたといわれる。 大使館の新館工事にあたり、この建物は解体の運命にあったが、伴仲信次氏の尽力と当時のピエール・クエヌー大使の協力により、国際親善とスイスと日本の親しい交流のシンボルとして、昭和53年11月スイス連邦共和国より長柄「ふるさと村」に寄贈され移築された。

現在は”リソル生命の森”という一大複合リゾート施設の中の、料亭としてして使用されている。

スイス大使館との交流が覗える展示品

1階レストラン

建物名称	翠州亭(旧スイス大使館)
建築年	1930年（昭和5年）
構造・様式	木造２階一部平屋建て・入母屋造・瓦葺
所在地	千葉県長生郡長柄町上野527ー2
電　話	0475-35-3333
Ｈ　Ｐ	https://www.seimei-no-mori.com/restaurants/suisu_tei
開館時間	11:00～15:00、17:00～21:30
アクセス	JR外房線 誉田駅より無料送迎バス約20分　駐車場有
備　考	国登録有形文化財（建造物）、写真：翠州亭

旧白洲邸 武相荘

東京都町田市

きゅうしらすてい　ぶあいそう

母屋外観

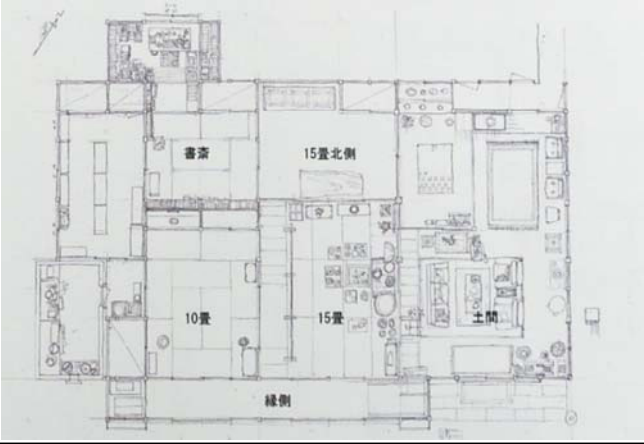
白洲次郎・正子が終戦前、1943年に農地付きの古い茅葺き農家を購入して移り住み、形作り、生涯を通して愛した家。寄せ棟造りの重厚な茅葺き屋根の母屋、柿やシラカシなどを配した広い庭をもつ佇まいで、当時の暮らしの様子をとどめながら、カフェ、レストラン、ミュージアムとして活用されている。

正子書斎

見どころ

白洲正子が「田の字につくってある農家は、自由がきき、いくらでもいじくり廻せる、無駄のある家である」と書いた通り、既存を活かしながら、白洲夫妻の感性でインテリアを造り上げている。茅葺屋根のどっしりとした室内に、味わい深い家具や骨董が絶妙のバランスで配置されている。何ともいえない愛嬌ある使い方が施されていて、住み手のセンスが感じられる。

【土間】牛が住んでいた土間を、白いタイル貼り床の居間兼応接室に改修し、ボイラー焚き温水式床暖房を入れ、和と洋が融合した雰囲気を出している。千本格子戸や障子が空間をゆるく区切っている。既存の骨太な棹縁天井が、どっしりとした空間を造っている。土間から階段で上がる蚕室であった空間は、子供部屋として利用されていた。



建物名称	旧白洲邸 武相荘
建築年	不明
構造・様式	木造平屋建、寄棟造、茅葺
所在地	東京都町田市能ヶ谷７丁目３番２号
電　話	042-735-5732
Ｈ　Ｐ	https://buaiso.com
開館時間	10:00～17:00（月曜休館、入館16:30まで）
アクセス	小田急線 鶴川駅 北口下車　徒歩15分

林芙美子記念館

はやしふみこきねんかん

東京都新宿区

左 /アトリエ棟　右 / 生活棟

この建物は『放浪記』『浮雲』などの代表作で知られる作家林芙美子が、 昭和 16年から昭和 26年にその生涯を閉じるまで住んでいた家である。芙美子は新居を建てるにあたり、建築について勉強をし、設計者や大工を連れて京都の民家を見学に行ったり、材木を見にいくなど、その思い入れは格別であった。山口文象設計によるこの家は、数寄屋造りのこまやかさが感じられる京風の特色と、芙美子らしい民家風のおおらかさをあわせもち、落ちつきのある住まいになっている。

茶の間

見どころ

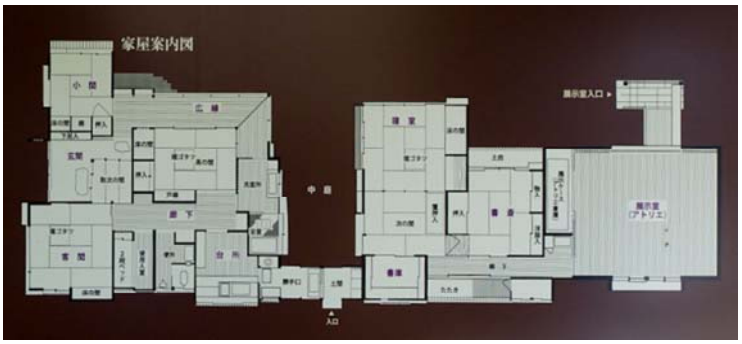
林芙美子のセンスの良さ、住まいについての真剣さが感じられる住宅であった。人に見せるための家ではなく、客間よりも茶の間と風呂と厠と台所にぜいを凝らしており、住み手のくらしと安らぎを第一に考えた家であった。終の棲家となったこの家には、創作活動と同様に生活を大切にした芙美子の熱い想いを随所に見ることができる。各部屋どこにいても庭との一体感を感じられ、風通しが良く、日本家屋の良さを感じられる。

【茶の間】茶の間堀ごたつ、釣り戸棚、二段押入れ、収納式神棚、多くの小引き出しなどを揃えたこの部屋は、暮らしやすさを考えた一家団らんの場であった。ちゃぶ台を囲んで一家が集まる時、芙美子の母は、常に右手床の間の床柱前に、大きな座布団を敷いて座ったそうだ。

【庭】芙美子の生存中、この庭一面に孟宗竹が植えられていた。没後、次第に竹は切られ、その面影は客間前の庭付近に見られるだけとなった。このほか寒椿、ざくろ、アルミア、おおさかづきもみじなど、芙美子が愛した木々がこの庭に植えられていた。現在は、カタクリ・サフランなど、四季折々の草花を楽しむこともできる。

【書斎】納戸として作られたこの部屋は、しばらくすると、書斎として使われるようなった。しかし、深い土庇、部屋の中から、半障子を通して廊下越しに北の小窓が見える様子など、納戸とは思えないような趣向も凝らされている。

書斎



建物名称	新宿区立林芙美子記念館
建築年	1941年（昭和16年）
構造・様式	木造平屋
所在地	東京都新宿区中井2-20-1
電　話	03-5996-9207
Ｈ　Ｐ	https://www.regasu-shinjuku.or.jp/rekihaku/fumiko/
開館時間	10：00～16：30（入館は16：00まで、月曜休館）
アクセス	都営地下鉄大江戸線・西武新宿線「中井駅」徒歩7分
備　考	通常は外から見学。内部特別公開についてHP参照

旧猪股邸

きゅういのまたてい

東京都世田谷区

正門

吉田五十八の設計による武家屋敷の趣をもつ数寄屋で、やや太めの木割りで質実剛健な表現がなされている。延面積約 100坪の平屋で、屋根の納まりや採光、通風が考えられた二つの中庭が配されている。内部では、柱や長押、天井の回り縁といった部材をできる限り取り除いた、すっきりとした吉田流と言われる近代数奇屋の特徴が随所に見られる。施工は水澤工務店、丸富工務店である。邸内には多くの樹木やスギゴケが植えられ、一部に水路が配されて、その廻りに園路を巡らせた回遊式の日本庭園が展開する。

出典：「近代建築の楽しみ」

見どころ

正門、玄関、主屋、茶室の重なり合う屋根の構成が外観を印象づけている。内外とも壁の仕上げはほとんど京聚楽壁で、柱や造作は赤松である。屋根の架け方、開口部の工夫などに、吉田建築の特徴がよくあらわれている。居間の窓から見ると離れのように見える茶室は、45度に曲げられた渡り廊下でつながっている。書斎ともう一つの茶室は1982年の増築である。

【居間】庭に面する開口部は全て木製の造作で、開け放つと庭と一体になるように、壁の中に窓一式が引き込むことができる。室内の建具も壁の中に入る引き込み戸が多用されている。荒い組子の障子、椅子座に配慮した床の間風の飾り棚、フラットな天井と照明など、吉田五十八好みと言われる作風が見られる。庭の反対側は中庭、食堂に続いている。

【和室】空調の吹き出し口は、細かい縦の格子で隠されている。床框（とこがまち）の細い隙間は空調の吸い込み口である。機械設備を和風デザインの中にさりげなく融合するのは吉田五十八の得意技のひとつ。

出典：住宅建築別冊 17「数寄屋造りの詳細 吉田五十八研究」

建物名称	旧猪股邸
建築年	1967年（昭和42年）
構造・様式	木造平屋、数寄屋造り
所在地	東京都世田谷区成城5-12-19
電　話	03-6379-1620
Ｈ　Ｐ	http://www.setagayatm.or.jp/trust/map/pcp/
開館時間	9：30～16：30（月曜休館、詳細HP参照）
アクセス	小田急線「成城学園前」駅下車 徒歩7分

鶴翔閣（旧原家住宅）

神奈川県横浜市

かくしょうかく（きゅうはらけじゅうたく）

楽室棟　前庭

1902年（明治35年）に原三溪が自邸として建て、三溪園造成の足がかりとなった建築物である。 広さ290坪に及ぶこの住宅は、主に楽室棟、茶の間棟、客間棟から構成され、 外観の印象が「鶴」を思わせることから「鶴翔閣」と名づけられた。 震災、戦災などをへて多くの改変がなされたが、1998年（平成10年）から2000年（平成12年）にかけて修復工事を行い、建築当初の姿に復元される。 鶴翔閣には日本を代表する政治家や文学者が集い、横山大観、下村観山といった日本美術院の画家が創作活動のために滞在していたことで有名だ。

車寄せ玄関

石畳のスロープを上ると大きな車寄せがあり、その先の玄関の扉を潜ると土間の先に更に一段高い位置に床面が続く。これは、当時、この建物の前面には今のように背の高い樹木や植え込みなどはなく、部屋に座り大池を眺めたり、また立ってみると手前の睡蓮の池が眺められたりと、三溪の計算上の計画であったと言われている。
建物は芯々６尺の田舎間の計画になっており、棟毎に「楽室棟」「茶の間棟」「書斎」「仏間棟」「蔵」「客間棟」で構成されている。「楽室棟」の鴨居の高さは６尺８寸（２m）を超え、客人をもてなす畳敷き部屋となっている。内部は「書斎棟」以外は簡素な作りとしている。
第２次大戦に突入する昭和15年ころ、「楽室棟」では茅葺屋根から瓦屋根へ改修され、また軍の接収対策として建築面積の縮小が行われたが、現在は創建時の姿に戻され財団法人の管理となっている。

見どころ

由緒ある歴史を背景に現存する鶴翔閣は、現在「利用できる横浜市有形文化財」として活用することができる。大規模な日本間や広大な前庭を有し、茶会、句会などの日本的文化活動の場はもとより、国内外の賓客接遇、結婚披露宴、演奏会や展示会など、建物を五感で堪能することのできる建造物である。

楽室棟：三溪が画家たちを招き、自ら集めた古美術の名品コレクションを鑑賞し、論評しあった場所。 鶴翔閣の中心的な棟となっているゆとりある空間で、現在では大きな会議やパーティなどの開催に対応している。

客間棟：三溪に招かれた画家たちは、滞在中この客間棟で多くの名作を生み出している。特に、横山大観「柳蔭」、前田青邨「御輿振」が描かれたのがこの場所で、歴史的にも貴重な場所である。

鶴翔閣と花菖蒲

建物名称	鶴翔閣（旧原家住宅）
建築年	1902年（明治35年）2000年（平成12年）修復
構造・様式	木造平屋建・入母屋造/寄棟造・茅葺/柿葺/瓦葺
所在地	横浜市中区本牧三之谷58-1
電　話	045-621-0634
Ｈ　Ｐ	http://www.sankeien.or.jp
開館時間	09：00～17：00（入園３０分前）
アクセス	根岸駅からバス10分 本牧下車徒歩10分 駐車場有
備　考	横浜市指定有形文化財　写真：三溪園保勝会

旧柳下邸

きゅうやぎしたてい

神奈川県横浜市

旧柳下邸は明治～大正期の有力商人であった柳下氏により大正中頃に建設された。大正12（1923）年の関東大震災で一部倒壊したものの、大部分は損失を免れ、その後、戦争など激動の昭和史の中、柳下家の人々により大切に守り受け継がれていた。横浜市が平成8年に敷地を取得し建物の寄附を受け、できる限り創建当時の姿にと復元したものである。邸内では大正～昭和初期の暮らしの雰囲気が体験でき、また市民の文化活動の場として利用することもできる。

右：洋室（1F）
関東大震災後に上棟された２階建ての洋館は洋風の壁、天井、窓だが、何故か床だけが和風の畳敷きとなっている。当時としては珍しい洋間である。

旧柳下邸の邸内は、長い渡り廊下に、茶の間の掘りこたつ、柱時計、五右衛門風呂などがあり当時の暮らしぶりが伺える。細部には、欄間の優美な細工、天井の透かし彫り、明かり障子、ふすま引き手、照明の傘など各部屋毎に異なった意匠が見られる。
西館は、浴室・脱衣所・茶の間・居間などがあり、主に居室として使われ、中庭をはさんだ東館は、表玄関・客間・客用便所・仏間（茶室）など、接客用の場所とされていた。洋館は、関東大震災後の大正13年に上棟され、２階の洋室は書斎として使用していたとのこと。洋館の裏手には室内から繋がった蔵があり、中には当時使っていた冷蔵庫や蓄音機、足踏みオルガンなどが展示されている。

見どころ

建物は東館、西館、洋館、蔵から構成され、東館、西館の屋根は「むくり」を持たせた入母屋造りの瓦葺きで周辺の町並みからは突出した高さを持っていることから、近隣のランドマーク的存在となっている。東館は棟の向きが直交しているため、4つの入母屋屋根の複雑な構成になっており、洋館の屋根にはフランス瓦が葺かれていて、ドーマー窓、銅の棟飾りがついている。

右：廊下より中庭を望む
揺らぎのある大正ガラスを使用。
右下：浴室
鉄製の五右衛門風呂の底は熱いので、直接触れないように浮いている木の板を沈めながら湯舟に入る。窓枠や天井のデザインが当時の雰囲気を残す。
下：客間1
縦繁の格子の書院窓、床の間の床板は、やに松（黒松）一枚板が使われ、客間らしい贅沢な造り。

建物名称	旧柳下邸
建築年	大正中頃
構造・様式	木造２階建て、入母屋造、瓦葺
所在地	横浜市磯子区下町10
電　話	045-750-5022
Ｈ　Ｐ	http://ne-yagishitatei.com/
開館時間	09：30～16：30　第2・第4火曜・年末年始休館
アクセス	JR京浜東北線根岸駅から徒歩8分
備　考	横浜市指定有形文化財

旧吉田茂邸

きゅうよしだしげるてい

神奈川県大磯町

旧吉田茂邸は、戦後の内閣総理大臣を務めた吉田茂が暮らした邸宅を再建したもので、豪壮な数奇屋建築風の総檜造り建築物である。邸宅には吉田茂が昭和20年から昭和42年までの晩年を過ごしており、政界引退後も多くの政治家が「大磯参り」を行い、また国内外の要人が招かれるなど近代政治の表舞台としても利用されることとなる。

左：２階書斎　右：１階食堂ローズルーム

吉田茂没後売却され、大磯プリンスホテルの別館として利用されるが、平成16年頃より地元を中心に旧吉田茂邸の保存の機運が高まり神奈川県や大磯町により近代政治史の歴史文化遺産として保全の活動が始まる。しかし、平成21年3月本邸が火災で焼失してしまう。焼失を免れた日本庭園や歴史的資源や大磯丘陵に連なる貴重な緑地を保存活用するため、庭園と共に平成21年7月には都市計画の位置付けの元、再建の運びとなる。

見どころ

現在の建物は、吉田茂が暮らした当時の邸宅を復原したもので、昭和22 年頃建てられた応接間棟、および昭和30 年代に近代数寄屋建築で有名な吉田五十八が設計し、京都の宮大工により建設された。
吉田五十八の設計は、アール・デコの要素を取り入れた直線的な建物の外観や、モルタル塗り廻しの大壁といった近代的な素材を利用した和風建築、また内部も空間を広く見せるために部屋の柱をなるべく見せない造りとなっているなど、近代数寄屋建築と呼ばれる手法が随所にみられる。

昭和時代に増築が繰り返された遍歴を残す本邸。
複雑に屋根が連なる。

兜門：サンフランシスコ講和条約締結を記念して建てられた門で、軒先に曲線状の切り欠きがあり、兜の形に似ていることから「兜門」と呼ばれる。京都の裏千家の兜門と同じ製作者を京都から呼び寄せて造られ、昭和29年完成。屋根は「檜皮葺き」の伝統的技法が用いられており、焼失を免れた貴重な建築物である。

日本庭園：日本庭園は、世界的作庭家中島健により設計され、また本邸周辺部分は、日本庭園研究家の久恒秀治によって造られた。吉田茂がよく散歩をしていたといわれる庭は、心字池や築山のある日本庭園、松林、バラ園、サンルームがある。日本庭園にはあまり用いられないカナリーヤシが植えられるなど、海外赴任生活の長かった吉田茂の嗜好の多様性、様式にとらわれない人間性が色濃く反映された庭園となっている。

左下：２階浴室　下：楓の間

建物名称	旧吉田茂邸（大磯町郷土資料館別館）
建築年	2017年再建（昭和22年応接間棟、30年代新館等）
構造・様式	木造２階建て、瓦葺
所在地	神奈川県中郡大磯町西小磯418
電　話	0463-61-4700（大磯町郷土資料館別館）
Ｈ　Ｐ	http://www.town.oiso.kanagawa.jp/oisomuseum/
開館時間	09：00～16：30（入館16：00まで）、月曜休館
アクセス	JR東海道線大磯駅 バス城山公園前より徒歩5分 駐車場有

鎌倉市吉屋信子記念館

神奈川県鎌倉市

かまくらしよしやのぶこきねんかん

趣のある門塀

庭側外観

作家吉屋信子が昭和10年に東京の自宅を吉田五十八に設計を依頼し建築した後、さらに昭和37年に鎌倉市長谷に「奈良の尼寺のように
と望み建てられた。ここで晩年を過ごし本人の意思で鎌倉市に寄贈された土地建物となっており、今も在りし日のままで保存されてい

見どころ

近代数寄屋建築の第一人者、吉田五十八による設計。施工は水澤工務店。
主屋に加え、前面通り沿いの屋根付きの伝統的な門と土塀も国の登録有形文化財。
茶室へ引き込まれるようなリズムのある露地の敷石、つくばいや四ツ目垣などの前庭空間。なだらかな平屋屋根の曲線、高床ですっきりした柱建て、庭と前庭の隔て。外構からゆっくり楽しみたい。玄関前のゆったりとした空間、敷瓦の腰掛付きの玄関。振り向くと額縁に切り取った前庭が現れるを確認して、奥に進む。少し狭くなった入口を通り抜けると明るい応接間に出る。白い天井にグレーのラインが映える。
縦横が大きい上に開口部側天井が傾斜しているから、窓に目をやると否が応でも天井が目に入る。斜線が走っており斬新なデザインはひきつけられてしまう。
応接間から1段高くなって和室がある。縁側続きの欄間は1間半を引き違い障子にしているがその引き違う箇所に、和室側から見えぬようスチールで釣ってあるのだ。天窓のような照明、額縁窓の書斎、間接照明の寝室など現代でも活用する手法がみられ応用を考える際の糸口をくれるかもしれない。

アプローチの敷石とつくばい

深い軒で迎える玄関

広縁と和室

庭と一体となる和室の構成

玄関

内玄関

応接間の天井

応接間ソファー

書斎

寝室

和室床の間

グループ学習施設としての活用にて運用。見学は下記範囲にて可となっている。（予約・利用期間、申請方法は鎌倉生涯学習センター）

建物名称	鎌倉市吉屋信子記念館
建築年	昭和37年
構造・様式	木造平屋建
所在地	鎌倉市長谷1丁目3番6号
電　話	鎌倉生涯学習センター0467-25-2030
Ｈ　Ｐ	https://www.city.kamakura.kanagawa.jp/gakusyuc/yoshiya-koukai.html
開館時間	4月土曜、5～11月土日曜、GW毎日、9～16時
アクセス	JR「鎌倉」駅から京浜急行バス又は江ノ電バスにて長谷東町下車徒歩2分
備　考	江ノ島電鉄「由比ガ浜」駅徒歩7分

山口家住宅（雨岳文庫）

神奈川県伊勢原市

やまぐちけじゅうたく（うがくぶんこ）

正面外観

外観正面から斜に見える妻面に社寺のような懸魚を施す片入母屋屋根、もとは茅葺きで現在は鉄板葺き。表面をコールタール塗としている。正面の式台の軒は支輪をイメージさせる曲線の垂木として格式の高さを感じさせる。

見どころ

梁間6間・桁行11間、１階は田舎間の部分と奥座敷、2階は数寄屋風座敷の構成。
広いドマを見上げると太くて高い梁組に圧倒される。
チャノマは欅の一枚板の板戸と障子、箱階段と脇の階段障子、書院座敷、一見質素で武家屋敷風とされる奥座敷も宮様のお泊り部屋としての拘りを発見できて楽しい。
2階の数寄屋風書院座敷の組子障子のデザインは美しく床板框に螺鈿をあしらってある。柱の節の埋木模様や天井一枚板・漆塗、障壁画やホトケサンの天女の欄間彫刻や組み物の意匠もじっくりと観たい。

後世の改修の応用として、壁の貫穴を利用した電話配線の紹介など、解説も多く民俗的な展示も興味深い。
このように、１棟でいろいろな姿を見せてくれる民家はそうないのではないだろうか。
また敷地奥に、元政治家（政友会総裁）の鈴木喜三郎の別荘があり、関東大震災跡の大正12年築とされ、質素な外観に見えて内部は貴重な材を使用しているという。併せて訪れてみたい。

旧大山参道沿いにあり伊勢原に春を告げる美しい梅園として市民から愛される梅園でもあり、収穫された梅とともに大山詣の参拝客の立ち寄り先にもなっている。

山口家は江戸時代天和年間頃には上粕屋村の旗本間部領にあって間部家に仕える名主であった。建物は江戸末期天保5年（1834）頃建築と伝えるが1860年頃間部氏より代官の命を受け、元の住宅を曳き家して石倉から現在地へ明治初めに移築完了、その際に武家屋敷風に改装したと伝える。が、移築後まもなく明治時代を迎えたため、代官所としての使用は実質２年ほどであり、山口家の住宅と相州西部の自由民権運動の「湘南講学会」の会場となったことで自由民権運動に関する資料を蔵書として多く所有している。また前面敷地には前当主が寄進した大山阿夫利神社の参道第二鳥居が立ち、大山参りの観光客も訪れるルートとなっている。

妻面の懸魚

式台の軒･二重垂木

土間の梁組

チャノマ

座敷の襖絵

座敷の襖絵

2階座敷の組子障子

2階座敷構え

雨岳文庫とは、旧相模国大住郡上粕屋村にある幕末最後の代官屋敷であった国の登録有形文化財である山口家住宅と同家に伝わる2万点に及ぶ古文書・古美術品・什器を含むすべての文化財を指す総称として呼ばれている。それら資料の一部は敷地内の資料館で公開されている。

8代佐七郎氏は明治14年に相模国最初かつ最大の自由民権結社「湘南社」の社長となり明治23年には第1回の衆議院議員に選出された人物であり、「雨岳」は佐七郎の雅号で,雨降山である大山のことを指すという。

建物名称	山口家住宅(**雨岳文庫**)
建築年	天保5年（1834年）頃
構造・様式	木造２階建
所在地	伊勢原市上粕谷862-1
電　話	www.ugakubunko.com
Ｈ　Ｐ	原則として毎週日曜、午前10～午後3時入場
開館時間	小田急線「伊勢原」駅北口から京浜急行バス「大
アクセス	山ケーブル行」バスにて「〆引」下車徒歩2分又
備　考	は東名道高速バス「東名伊勢原」バス停下車徒歩3分

松永記念館　老欅荘

まつながきねんかん　　ろうきょそう

神奈川県小田原市

戦前・戦後を通じて電力事業を幅広く手掛け「電力王」とも「電力の鬼」とも呼ばれ、実業界で活躍する一方で、茶道にも造詣の深かった松永安左ヱ門(耳庵)が、小田原に居住してから収集した古美術品を　一般に公開して広く愛好家に親しんでもらおうと、昭和34年に財団法人松永記念館を設立自宅敷地内に建てた。

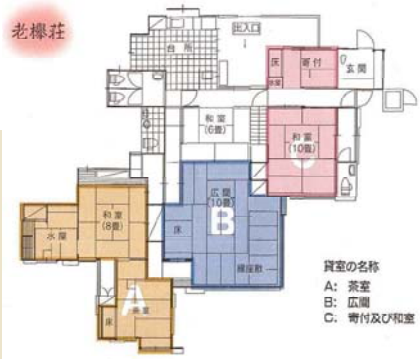
この敷地内にある安左ヱ門の自宅が、老欅荘である。

安左ヱ門は、60歳を境に茶を趣味とするようになり「耳庵」と号した。「耳庵」の名は、『論語』の「五十にして天命を知り、六十にして耳に順う」から付けた。

安左ヱ門は、昭和21年に現在の埼玉県所沢市から　ここに移る。当初、15坪ほどであった新居は、その後増築が重ねられ現在の姿になった。老欅荘の名は、現在もそびえたつ大きなケヤキにちなんで名づけられた。

老欅荘では政財界の重鎮を招いた茶会が開かれると共に、時間が空くと小田原やその周辺の人々が招かれる茶会が開かれた。現在も茶室としての貸し出している。四畳半台目の茶室や三畳大の床の間を設けた広間、母屋に取りつく三畳の客付などの意匠に数寄屋建築としての特徴が見受けられる。小田原市内に残る数少ない数寄屋建築であり、茶室「葉雨庵」と共に平成12年9月26日付国登録有形文化財に登録された。

耳庵は最後の数寄茶人とも呼ばれ、我が国を代表する近代三茶人の一人。老欅荘は、安左ヱ門の固いイメージからは想像できない自由で遊び心のある納まりは、既成観念に捕らわれない安左ヱ門の生き方そのものである。



見どころ

- 欅側の湾曲塀
- 自由な発想の茶室
- 細やかなﾃﾞｨｰﾙ

←現在も健在の欅
（老欅荘の塀の外側）

玄関のデザイン　→
平安時代の帽子を被った女性の頭のイメージ。

↙ 南側塀(欅側)のみ湾曲している

湾曲させる事で庭を広く見せる手法。

しかし、縁座敷より眺めてみると湾曲する事によって欅が庭に入り込んでくる様。

また、そこだけを見ていると　水盤に欅があるように見える

出窓のある茶室↑→

一本溝の引違障子↓

飾り窓と棚、天井に注目↓

建物名称	松永記念館　老欅荘
建築年	昭和21年
構造・様式	木造平屋、瓦葺き
所在地	小田原市板橋941番地1
電　話	0465(23)1377
Ｈ　Ｐ	http://www.city.odawara.kanagawa.jp/field/lifelong/property/tourokubunkazai/kenzoubutsu/tourokumatsunagaroukyo.html
開館時間	09：00 ～ 17：00（入館 16：30 まで）
アクセス	箱根登山鉄道「箱根板橋駅」下車徒歩10分　P有

白雲洞茶苑白雲洞

神奈川県足柄下郡箱根町

はくうんどうちゃえんはくうんどう

外観

見どころ

三井物産総帥であり数寄屋茶人として知られる鈍翁・益田孝が営んだ茶室の一つ。
囲炉裏に自在鉤を掛け自然な曲がり梁で構造を現し縁側を設けた田舎風の茶室である。益田孝が好んで多数作ったとされるがほかに現存せず貴重な遺構である。
6畳に手前座を付した主室、４畳の次の間、水屋などで構成される。主室は囲炉裏に縁なし畳という異例の構えとする。寄棟造、茅葺きで田舎風の外観と古材を多用した内部で野趣あふれる意匠となっている。

内部の迫力ある曲がり梁

貫通した曲がり梁

梁の見える茶室内部

自由度の高い庭

床柱は松永耳庵時代のもので、奈良当麻寺で使われていた古材を利用しているという。内部は庭の雰囲気と相まって全く枠を外した自由な茶室の様子である。白雲洞では実際に点茶を味わうことができ、気軽に日本文化を体験できるまた敷地内には他に仰木魯堂による不染庵、三渓原富太郎の作った対字斎という２席の茶室がある。それぞれが一度に味わえて興味深いものとなっている。

箱根強羅の巨岩怪石の間に、深山のおもむきを保存して、見るからに山家の風情の濃い茶室群である。 大正時代のはじめ、利休以来の茶人と称された鈍翁・益田孝(三井コンツェルンの設立者で男爵)によってはじめられた。大正11年(1922)、この茶苑は三渓・原富太郎(横浜の富豪で美術品収集家として著名)に譲られ、三渓はあらたに対字斎を増築。昭和15年(1940)、茶苑は再び原家より耳庵松永安左衛門(電力界の重鎮松永コレクション創設者)に贈られ、こうして茶室は、明治・大正・昭和と3つの時代を代表する3人の茶人の間に伝えられてきた。今は旧跡として見学できる（国の有形文化財登録）。

囲炉裏と自在鉤

対字斎からの眺め

突き上げ窓

縁側

茅葺きの軒　正面に「白雲洞」の額

建物名称	白雲洞茶園白雲洞
建築年	大正年間1916頃
構造・様式	木造平屋建
所在地	足柄下郡箱根町強羅1300-69　箱根強羅公園
電　話	0460-82-2825　（9～17時）
Ｈ　Ｐ	//www.hakone-tozan.co.jp/gorapark/map/tea/
開館時間	10～12時、13～16時
アクセス	箱根登山鉄道「強羅公園」駅から徒歩3分
備　考	茶席ご観料　点茶付き（お菓子とも）700円

萬翠楼　福住

ばんすいろう　ふくずみ

神奈川県足柄下郡箱根町

外観（木々に囲まれて全貌を望めない）

萬翠楼の外観

明治11年、福住家代10代目当主福住正兄氏により、伝統的な日本の建築に西洋建築の要素を取り入れた「萬翠楼」「金泉楼」の2棟の旅館を完成された。

創建当時の写真からは、2棟の白い瀟洒な擬洋風建築が早川のほとりに並び建ち、箱根に訪れる人々の目を引いたであろうことが伺える。

この旅館には昭憲皇太后、有栖川宮熾仁親王、木戸孝允、伊藤博文、山内容堂、福沢諭吉など幕末から明治にかけて名を馳せた著名人たちが長逗留し、1棟貸しの形で1階は公の場、2階3階はプライベートの間として使われていた。

その後昭和棟の増築を経て、平成14年、日本で始めて現役旅館として「萬翠楼」と「金泉楼」が国の重要文化財建造物に指定された萬翠楼の入り口には防火戸として重厚な蔵戸が設置されており、中に入ると右手に矩形の螺旋階段が特徴的に存在する。

1階15号室は一番華やかな造りとなっており、48枚もの天井画、伊藤博文、三条実朝の書などが飾られ、旅館の一室というより生きた美術館のようである。

萬翠楼1階15号室　天井画が美しい

見どころ

15号室の華やかな天井に目を奪われがちだが、その隣室の屋久杉一枚板の欄間や天井板の木目の美しさに圧倒される。また2階の広縁のむくり天井の竿縁、アーチ状の欄間、畳縁の構成によるリズミカルな空間や、書院や欄間障子の桟の美しさ磨りガラスのモダンな模様など、どの部屋のどの部分にも趣向が凝らしてあり、長逗留客を楽しませる工夫がなされている。

螺旋階段上部の
木製メダリオン

2階の広縁

1階と2階をつなぐ
矩形の螺旋階段

一粒で2度おいしい照明

金泉楼入り口の蔵戸

伊万里焼の照明台座

竹を縦に割った欄間障子の桟

無粋なコンセントを
隠した床の間の棚

唐草模様の落下防止と網戸も当時のまま

創建当初は早川の流れを眺めながら箱根の景色を楽しんだと思われる広縁や客間だが、現在は木々が生長し、その姿をすっぽりと隠してしまい、外界から隔離され時空を超えた不思議な世界を味わうことができる。

時を超えてもなお、新鮮で斬新と思わせるデザインや創意工夫の数々を、後世の人々にも体験してほしい。

建物名称	萬翠楼　福住
建築年	明治１１年
構造・様式	木造３階建
所在地	神奈川県足柄下郡箱根町湯本643
電　話	0460-85-5531
Ｈ　Ｐ	http://www.2923.co.jp
開館時間	チェックイン１５時　チェックアウト１１時
アクセス	箱根湯本駅より徒歩５分
備　考	宿泊利用時、イベント時に見学可。（事前予約）

御師旧外川家住宅

山梨県富士吉田市

おし　きゅうとがわけじゅうたく

中門から主屋を見る。奥へ奥へと続いていく。

昔から神様が宿る山と信じられていた富士山には、登拝するため各地から人々が訪れていた。御師（おし）とは寺社に所属し、参拝者の案内や世話をしたりする人を言うが、富士吉田の御師は富士山を神体として信仰するため、特定の寺社ではなく富士山へ信仰登山する人たちの世話や祈祷を行った。そのため「富士御師（ふじおし）」と呼ばれるようになり、富士御師は、その参拝者に自らの住居を宿坊として提供していた。その宿坊を「御師の家」と呼ぶ。

門柱、タツ道と呼ばれる細長い道、中門（なかもん）、ヤーナ川（間の川）、玄関へと進み、家の奥に御神殿がある。奥に行けば行くほど神聖な場所と考えられて、このような造りになっている。

家は奥行き八十間ほどの短冊形地割の敷地に建てられ、主屋と裏座敷の２棟から構成されてる。

主屋は、18世紀後半の明和5年（1768 年）に建造された。上吉田に現存する御師住宅の多くは、19世紀以降の建築と推測され、この時期まで遡るものは少なく、極めて貴重な建造物といえる。

主屋の奥には、廊下を介して裏座敷が建てられている。屋根形式は切妻造・板葺（現・鉄板葺）で、規模は梁間四間半×桁行六間と主屋より大きい造りとなっている。裏屋敷は、主屋建立から約90 年後の万延元年（1860 年）ごろに増築されて、改築や修理をくり返して現在に至っている。

見どころ

上段の間は裏座敷にある最も格の高い客室で、一段上がった造りとなっている。北面に床の間があり、向かって右には、畳敷きの広縁に張り出した付書院がある。欄間や建具などの造作が見事である。

上段の間

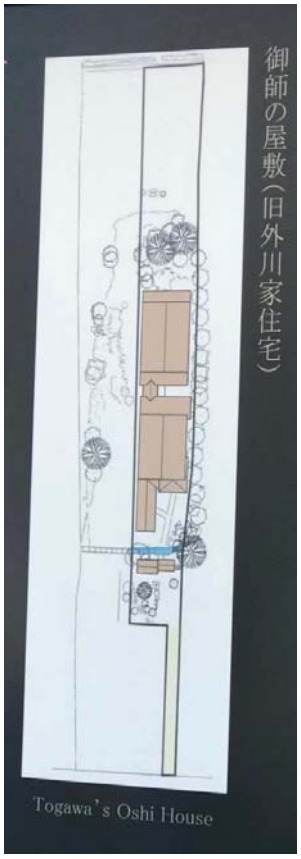
付書院

釘隠し：長押に釘隠しがあしらわれていて、部屋ごとに異なるデザインとなっている。

上：主屋の式台玄関から座敷につながる。

中：裏座敷をめぐる縁側

下：浴室の傘天井



短冊形地割の敷地に建てられた主屋と裏座敷の２棟の構成。御師住宅の特徴ともいえる奥行のある細長い形状の屋敷である。

建物名称	御師旧外川家住宅
建築年	1768年（明和5年）
構造・様式	木造平屋建　切妻造
所在地	山梨県富士吉田市上吉田3-14-8
電　話	0555-22-1101
Ｈ　Ｐ	http://www.fy-museum.jp/
開館時間	9：30～17：00（入館は16：30まで）火曜休館
アクセス	富士急行線富士山駅から徒歩7分
備　考	世界遺産富士山構成資産　国指定重要文化財

安藤家住宅

あんどうけじゅうたく

山梨県南アルプス市

入母屋造りの茅葺き屋根が印象的な主屋。右は中門。

安藤家住宅は甲府盆地南西部、釜無川と滝沢川に挟まれた水田地帯に位置する。敷地は約1300坪。約300年前の建物で、国の重要文化財に指定されている。
安藤家の先祖は武田家の家臣といわれ、武田氏滅亡後は一時徳川家に仕えたとされる。現在の甲府市の地に帰農し、母方の安藤の姓を名乗り、宝永５年(1708年)に現在の地に居を構えていた。江戸時代は西南湖村の名主を務めた旧家で、現在まで一度も火災に合うことなく、往時のまま保存されている。主屋は大規模できわめて質がよく、しつらいも上品である。中門から入ると式台のある玄関があり、主屋につながる。縁側のある奥座敷から広がる庭園には池や築山が配され、夏は涼を感じさせ、紅葉の時期もすばらしい。桃の節句の時期には「ひなまつり」が開催され、江戸時代から近代までのひな人形約 160体が展示される。

見どころ

【長屋門】
1782年（天明 2年）年建造。もともとは武家屋敷を取り巻く家臣の住居である長屋と、門の屋根を一緒にしたもの。中央が出入口、左右が住居で、この家で働く人が住んでいた。
【主屋】
1708年（宝永 5年）年建造。大戸口という引き戸から中に入ると土間があり、整然とした梁組が見られる。土間、式台付玄関のある玄関の間、中座敷、奥座敷、居間、祈祷室、納戸などから構成されている。
【中門】
中門は、式台付玄関に続く門。中門や式台付玄関は、当主と身分の高い客しか使用することができなかった。
【式台付玄関】
総ひのき造りの広い玄関。もともとは武家の正式な玄関で、武士の家には必ずあったが、普通の民家に作ることは許されなかった。村の役人をしている家では、その家の家格を示すため、公の客を迎えいれるために設けられた。
【囲炉裏】
家族が集う大切な場所。毎日の食事の仕度をしたり、冬は暖をとる場所でもあった。火を焚くことによって出るススは、カヤ葺き屋根や柱の防腐剤となり、家の持ちをよくした。火の神様が宿ると信じられていた自在鍵も下げられている。
【奥座敷】
家の主人が客を迎える正式な場所。特別な客は、式台付玄関を上り、中座敷を通って直接この部屋に通された。広い日本庭園が望め、明るく風通しもよく、家の中で一番上等な部屋で、昔は主人以外の家族はめったに入ることができなかった。
【茶室】
1861年(万延 2年)の建造。茶を飲みながら、客をもてなす場所。茶室の床柱は榎木で、竹の子面という飾りが施されている。竹の子面とは榎木の下のほうを斜めに削り、竹の子のような木目を見ることが出来るようにしたもの。出ている年輪の数が多い方が価値があり、大工の腕の見せ所であった。
【市指定文化財　安藤家の避雷針の松】
樹齢 351年を越える黒松。ここには明治期に取り付けられた避雷針があるので「避雷針の松」と呼ばれている。

長屋門

中門

式台付玄関

囲炉裏

奥座敷

茶室

建物名称	安藤家住宅
建築年	1782年（天明2年）
構造・様式	木造平屋建　入母屋造　茅葺
所在地	山梨県南アルプス市西南湖4302
電　話	055-284-4448
Ｈ　Ｐ	https://www.city.minami-alps.yamanashi.jp/sisetsu/shisetsu/bunkazai-ando/
開館時間	9：00～16：30（入館16：00まで）火曜休館
アクセス	中部横断自動車道南アルプスICより車で10分
備　考	国指定重要文化財

根津記念館

ねづきねんかん

山梨県山梨市

旧主屋

根津記念館は、「鉄道王」と称された実業家の初代根津嘉一郎の実家である根津家一族の屋敷を保存活用する施設。この屋敷は、嘉一郎関与のもと、甥の根津啓吉により、昭和7年から10年にかけて整備され、平成15年に根津家の後継者より寄付を受け、山梨市が整備した。
敷地は約6700平方メートルで、そこに国の登録有形文化財である長屋門、旧主屋、土蔵など昭和初期の建物と、保存されていた設計図書により平成18年に復原した数寄屋部分「青山荘」が建っている。それらすべてが近代和風建築である。

長屋門

見どころ

旧主屋と、16間巾（約29m）の壮大な長屋門は、起り屋根・漆喰壁で、梁に手斧（ちょうな）を使った名栗加工の細工がほどこされている。これらは昭和８年に建築されたが、基礎は西洋式のＲＣ布基礎である。旧主屋の台所の屋根には当初よりガラスの天窓があり、地下倉庫や両面使用のかまどなど機能的に考えられている。主人室の天井は高価な柾目板張りが使われている。欄間の障子は桟が斜めに細工されたり、他の障子にも細やかな細工が見られる。設備では、埋込の電気配線、風呂を沸かす際の熱を利用しつくったお湯をトイレの手洗いに引く工夫のあるボイラー設備、屋内消火栓など、各所に当時の先端的な技術が盛り込まれている。

青山壮の座敷

両面使用のかまど

旧主屋の台所

復原した青山荘

旧主屋妻面

土蔵（木造３階建）

蔵前

青山荘の南の日本庭園。作庭が趣味である嘉一郎は、御坂の山々とその上に顔を出す富士山を借景とし、飛石や池などに川石を多用して、故郷の自然を再現しようとした様子が伺える。東京・青山の自邸の大庭園は現在、根津美術館に受け継がれている。

建物名称	根津記念館
建築年	1933年（昭和8年）
構造・様式	木造2階建　入母屋造　桟瓦葺
所在地	山梨市正徳寺296
電　話	0553-21-8250
Ｈ　Ｐ	http://www.city.yamanashi.yamanashi.jp/citizen/gover/public/park-spa/nezu-kinenkan/
開館時間	9：30～18：30（18 :00受付終了）　月曜休館
アクセス	中央本線山梨市駅より徒歩25分・タクシー5分
備　考	国登録有形文化財「長屋門」「旧主屋」「土蔵」

伊那部宿 旧井澤家住宅

長野県伊那市

いなべじゅく　きゅういさわけじゅうたく

かつて宿場町が栄えていた頃、中山道、東海道、甲州街道より伊那谷に物と文化とをもたらした伊那街道。この中間地点にあったのが、伊那部宿である。 この宿場の中で、高遠藩内でも屈指の豪農として知られ、代々造り酒屋を営んでいたのが井澤家だった。名高い井澤の屋敷は、宿場内で唯一の破風屋（大屋根・本棟造）であり、 建坪も最大。伊那部宿は天保年間に二度の大火に見舞われたが、井澤家は最南端に位置していたため、ただ一軒だけ焼失を免れた宿場町最古の建物である。

旧井澤家住宅外観

見どころ

江戸時代に建設された旧井澤家住宅は、平成11年に伊那市の有形文化財として指定され、平成16年に解体復元工事が行われた後、一般公開されている。
勝手（台所）周辺では、豪快な桁行、差鴨居、梁組などを見ることができる。古材の墨色が美しい館内には、かつて使われていた酒造道具や手形の類が展示され、見るのみならず、館内の和室を実際に使用できるようにもなっている。
囲炉裏のある勝手が建物の中心で、土間側の囲炉裏の縁が上框に接していて、下座のないのが特徴である。
また、トオリには井戸があり、日常の生活用水として利用されていた。

トオリ～勝手

勝手～トオリ

【伊那街道・伊那部宿】
伊那市の中心部、官庁街裏手の天竜川右岸第二段丘と呼ばれる地形上に、伊那部宿がある。古来より東海道沿岸部と内陸の信濃を結び「塩の道」として知られる伊那街道は、戦国期に武田信玄によって中山道の脇往還、南信侵攻の為の軍用道路として基礎的な整備が行われ、江戸期に宿場町や伝馬制が設けられたが、飯田藩主の参勤交代以外はほとんど地元伊那地域の生活物流の道であった。
伊那部宿は飯田城下から塩尻宿までのちょうど中間地点にあり、ここから東へは高遠藩の城下町を経て甲州街道へ、西へは権兵衛峠（標高1521m）を越えて中山道木曽路へ通じる権兵衛街道があり、交通の要衝だった。
伊那部宿の始まりは江戸期より前の戦国期に、甲斐の武田信玄が南信への侵攻の為の前線基地をこの地に設けた事に由来している。その後江戸期に伊那街道が整備されると、伊那部宿には伝馬制が敷かれ旅籠や商家が立ち並んだ町の南北にはそれぞれ桝形が設けられて外的の進入に備え、宿の北側には十王堂が立てられ魔除けとされていた。また宿の中央の長桂寺門前には高札場が置かれていた。本陣と問屋は東側に配され、道の中央には角川が流れていた、と伝えられている。
伊那部宿の建物（町家）には門構えのあるものもあり、幕末に高遠藩へ多額の献金をし、門構えを許された名主の町家である。本来、江戸時代の宿場で門構えが許されていたのは本陣や脇本陣に限られていた。なお、伊那部宿の問屋の建物は現存していない。

伊那部宿の建物

建物名称	伊那部宿 旧井澤家住宅
建築年	江戸時代(平成16年解体復元工事)
構造・様式	木造2階建
所在地	長野県伊那市西町5597-4
電　話	0265-74-8102
Ｈ　Ｐ	http://www.inacity.jp/shisetsu/library_museum/kyuisawajutaku/isawajutaku_annai.html
開館時間	9:00～17:00(4月～11月)、9:00～16:00(12月～3月)
アクセス	JR飯田線　伊那市駅徒歩20分　駐車場あり
備考	伊那市指定有形文化財

旧横田家住宅

きゅうよこたけじゅうたく

長野県長野市

この住宅は中級武士の武家屋敷で、他の藩士宅と同様に一種の公舎であった。旧松代藩士横田家は郡奉行などを務めていて、横田家が現在地に移った時期は18世紀末である。主屋は1794年、 表門は1842年に建てられた。 隠居部屋は1820年ころ移築されたものと推定されている。

屋敷地は間口約40メートル、 面積3340.82㎡、道に面して表門、奥に主屋、東隣に隠居部屋、主屋南西に土蔵が建つ。松代の中級武家住宅の典型的な間取り、構成を残しており、1986年に国の重要文化財に指定された。長野市が保存・修景工事を行い、1992年から一般公開されている。

横田家は「富岡日記」で知られる和田英をはじめ、幕末から明治・大正・昭和にかけ、最高裁判所長官、鉄道大臣など多くの人材を輩出した。

左／南の庭から見た主屋＊
中／西から見た主屋　下／座敷

見どころ

長屋門・一部２階建ての主屋・隠居屋・土蔵・遠山を借景とする庭園・菜園・庭に流れる泉水などを見ることができ、邸内の随所から、江戸時代の中級武士の暮らしぶりがうかがえる。当時の位置に屋敷地及び建物がほぼ完全に保存されている大変貴重な武家屋敷である。

上／座敷の床の間＊
中左／主屋玄関＊
中右／箱階段＊
下／台所かまど＊

建物名称	旧横田家住宅
建築年	1794年
構造・様式	木造平屋建一部２階建
所在地	長野県長野市松代町松代1434-1
電　話	026-278-2274
Ｈ　Ｐ	http://www.sanadahoumotsukan.com/facilities/facility.php?n=6
開館時間	9:00～17:00（入館16:30まで）
アクセス	長野駅からバス30分、バス停より徒歩13分
備　考	国指定重要文化財 写真＊：真田宝物館

旧小田切家住宅

きゅうおたぎりけじゅうたく

長野県須坂市

東側 正面外観

製糸業で栄えた須坂の歴史と当時の人々の暮らしを現代に伝える代表的な建物。明治３年の須坂騒動で打ち壊しにあい、その後毀損を免れた建物をもとに再興された。木造二階建て、屋根は北側が切妻造、南側が入母屋造、瓦葺である。塗り壁造の形式で、近世的な造りと近代的な造りが共存している。
主屋、長屋門、店、上店、土蔵が一体として残っている。長屋門には石橋が共に現存している。

北側 土蔵外観

見どころ

漆喰の鏝絵、瓦の役物に桃、ぼたもち石積み、庭には３種類の木が絡まりあった樹木や、はがきの樹とも呼ばれる”たらようの樹”がある。

上店を貸しスペースとして開放。奥の土蔵では長野県ゆかりの職人や芸術家の作品展を開催したり、奇数月に文化講縁会を開催。また組子やちぎり絵、団扇づくり、染物などのワークショップを開催するなど利活用の取り組みもある。

懸魚、鏝絵(米俵と小槌)

南面北座の仏壇

欄間の組子

欄間の組子

ぼたもち石積みの礎石

土蔵下屋部分の陶板

主屋奥座敷

奥座敷の書院

主屋茶の間から車寄せを見る

主屋座敷

中庭

水車(復元)

建物名称	旧小田切家住宅
建築年	1870年（明治3年）以降
構造・様式	木造2階建て　瓦葺　塗り壁造
所在地	長野県須坂市大字須坂432番地1
電　話	026-246-2220
Ｈ　Ｐ	http://culture-suzaka.or.jp/otagiri/
開館時間	9:00～17:00（1～2月 9:30～16:30） 木曜休館（除祝日）
アクセス	長野電鉄須坂駅から徒歩10分　駐車場有
備　考	須坂市指定有形文化財

旧松本区裁判所庁舎

長野県松本市

きゅうまつもとくさいばんしょちょうしゃ

左右対称の外観。正面玄関を中央に構え、左右に法廷を備えている。

旧松本区裁判所庁舎は、明治41年に松本城二の丸御殿跡に建てられた。区裁判所は戦前の裁判所組織の名称で現在の簡易裁判所にあたる。旧松本区裁判所庁舎には、区裁判所の機能とともに長野地方裁判所松本支部の機能も置かれ、建物内に区訟廷と支部訟廷の2つの法廷が設置されていた。
戦後、名称が長野地方裁判所松本支部・松本簡易裁判所に変わり、昭和52年に新庁舎に機能が移転するまで、約70年間、裁判所として使われてきた。その後、市民による保存運動によりこの庁舎は現在の地に移築復元され、日本司法博物館として保存活用された。
現在は松本市立博物館分館の松本市歴史の里として整備され、他の歴史的建造物とともに公開されている。

見どころ

内外共にほぼ完全な形で現存する唯一の和風裁判所。建築史上極めて価値が高い建築である。
全国的に、明治時代に建築された公共建築は擬洋風が多かったが、各地の地方裁判所は和風を基本とすることが多かったようである。本庁舎は、和風建築様式による裁判所建築の典型例で、その中でも完成度が高く、当時の技術を知るという意味でも高い価値を持つ。
木造平屋瓦葺で、平面形は左右対称で横長のH形をしており、その中央正面が突き出た形になっている。中央部分に中廊下をはさんで諸室を設け、左右の翼屋部には法廷が入っている。左右対称の安定した平面形をもつことで、これまで数々の地震や自然災害に耐えてきた。
平面には計5個の突出部があるが、それぞれの屋根に入母屋破風をつけ、また正面の屋根に2個、左右側面の屋根に各3個の千鳥破風をつけている。

和風の外観とレンガ造の塀の対比

当時の雰囲気が残る会議室

法廷：裁判官席として高い段が設けられている。格子天井が特徴的。

建物名称	旧松本区裁判所庁舎
建築年	1908年(明治41年)
構造・様式	木造平屋建、入母屋造り、瓦葺き
所在地	長野県松本市大字島立2196-1
電　話	0263-47-4515
Ｈ　Ｐ	http://matsu-haku.com/rekishinosato/
開館時間	9:00～17:00（入場は16:30まで、月曜休館）
アクセス	松本インターから車で約3分 松本電鉄上高地線「大庭駅」より徒歩15分
備　考	国指定重要文化財 写真：松本市立博物館分館歴史の里

山寺常山邸

やまでらじょうざんてい

長野県長野市

松代藩の寺社奉行、郡奉行を務めた山寺常山の武家屋敷が、かつてこの地にあったが、主屋等は大正時代までに失われ、その規模は不明である。しかし、江戸時代終わりから明治初期にかけて建てられたと推定される表門と、大正時代終わりから昭和初期にかけて建てられたと推定される書院が残され、修復・整備工事を経て平成17年から公開されている。

長屋門形式の表門は間口約22メートルで、松代城下に残る門のなかでは最大である。表門から渡り廊下で書院につながる。

象山を借景とした庭園には神田川の水を引き入れた池（泉水）と、浄化の機能を経て下流の屋敷へと通じる水路が残され、城下町のすぐれた水路整備の一端を見ることができる。現在の園池は大正時代に造られたものを再整備したものである。

左／塀に囲まれた書院と象山

見どころ

書院はその意匠性の高さから近代和風建築の秀作と評されている。１階座敷にかかる扁額から「萬竹庵」と命名されたことがうかがえる。表門よりやや高所に建てられ、背後にそびえる象山（竹山）との調和も意識した配置と見られる。

書院２階の和室＊：丸窓と四角の窓が庭園の景色を切り取る。展望台のような部屋である。

書院１階の座敷＊：塀で囲まれた庭に面した落ち着いた座敷である。２階と異なる景色がのぞめる。

長屋門形式の表門。背後の山が象山

左/庭園と池＊　右／泉水路＊
観賞用の庭園とは異なり、城下町の泉水網を活かした、日常の暮らしと密着した生活の庭である。象山を借景にしている。

建物名称	山寺常山邸
建築年	表門：江戸時代末期、書院：昭和初期
構造・様式	木造平屋建一部２階建
所在地	長野県長野市松代町松代1493-1
電　話	026-278-0260
Ｈ　Ｐ	http://www.sanadahoumotsukan.com/facilities/facility.php?n=8
開館時間	9:00～17:00（入館は16:30まで）
アクセス	JR長野駅よりバス30分、バス停より徒歩15分
備　考	国登録記念物（名勝地）庭園 写真＊：真田宝物館

渡邉邸

わたなべてい

新潟県岩船郡

渡邉邸外観

村上藩の郡奉行をつとめた渡邉儀右衛門善高が、寛文七年（1667年）に下関の現在地に創建し、２度の火災を経て、現在の母屋は文化十四年（1817年）に再建された。母屋と土蔵６棟が国の重要文化財に指定され、庭園は国の名勝に指定されている。平成20年から６年をかけた大修理が終わり、往時の姿と工法を忠実に保存しながら再現され、豪農の風格を感じる見ごたえのある建物となっている。

母屋の通り土間

見どころ

外観で、まず目を引くのが石置木羽葺の屋根である。木羽葺の屋根に玉石を置く工法で、渡邉邸の屋根には約23万枚の木羽板と約15,000個の玉石が使われ、現存する建物の中では日本最大級の石置木羽葺屋根である。屋根の石は、度重なる大地震の際にも一度も落ちたことがない、「合格祈願石」でもある。また大座敷などの屋根はこけら葺で、通常の半分の間隔で杉薄板が重ねられ、優雅な曲線が美しい。

石置木羽葺屋根

こけら葺屋根

また、釘隠しや引手など、随所に凝った細工や工夫が施され、じっくり探してみるのも楽しい。

【母屋】

母屋は、街道に平行と直角に配置された二棟からなり、屋根はＴ字型となる「撞木造り」となっていて、関川村に多い様式である。母屋を南北約30ｍにわたって貫通する通り土間は、上部は吹抜で、土間に面する茶の間や台所とともに壮大な空間をつくっている。玄関から茶の間にかけては室内に漆塗りが施され、随所に欅の良材が使われる一方、大座敷などには、吟味された無節の柱や丸桁、敷板が惜しみなく用いられ、格式と繊細さを合わせ持つ建物である。

大座敷

【庭園】

庭園は心字池を中心に穿ち築山を配し、小規模ではあるが池泉回遊式になっている。江戸中期、京都遠州流庭師を招き構築され、庭匠田中泰阿弥の修復を経て昭和38年に国の名勝に指定された。

庭園から大座敷を見る

建物名称	渡邉邸
建築年	1817年(文化14年）再建
構造・様式	木造2階建て・撞木造り
所在地	新潟県岩船郡関川村下関904番地
電　話	0254-64-1002
Ｈ　Ｐ	http://www.watanabetei.com/
開館時間	9：00～16：00（12/29～1/3除く）
アクセス	車/日本海東北自動車道 荒川胎内I.Cから約20分 電車/JR米坂線越後下関駅から徒歩5～10分
備　考	国指定重要文化財、国指定名勝

北方文化博物館

新潟県新潟市

ほっぽうぶんかはくぶつかん

大広間より主屋を見る

北方文化博物館は戦前最盛期には 1,385 万㎡の田畑を所有した豪農伊藤家の住宅であったが、「博物館をつくり財産のすべてをこれに寄付する」という当主の決断により私立博物館第１号として昭和22年4月に国の許可を得て、現在に至る。
8,800坪（29,100㎡）の敷地に建坪約 1,200坪（ 3,967㎡）部屋数65を数える近代和風大邸宅である。

【主屋】

主屋は腰屋根を持つ寄棟桟瓦葺きで、１階に土間、帳場、三間続きの茶の間、５０人以上の従業員の食事を賄った炊事場、居室等が有り、南東に中庭を望む下屋１間廊下が配され奥の間、新奥、新座敷へ接する。
２階は帳場上に三間の和室、一面板張りの間がある。

【大広間棟】

大広間棟は入母屋せがい造り桟瓦葺きで、間口２間半の独立した入母屋造りの大玄関が配され、奥行き三尺五寸の欅一枚板の式台など造作材には全て欅が使用されており、重厚な作りとなっている。襖を取り払うことで１００畳敷きの広間になる空間は２間幅の床の間を有する３２畳の大広間、下手に４間続き田の字に配され、１５畳の中段の間、１間半の床の間１間半の棚を持つ１６畳の上段の間と二つの脇座敷へと続く。棟の三方は廊下土庇で囲む最も格式ある間として年に数回のみ使用された。

見どころ

主屋廊下軒桁は長さ１６間半（３０m）末口６寸の杉一本物で建物の特徴として語られる。会津から阿賀野川で運ばれ、敷地までの運搬の際には曲がりきれず障害となった家屋を壊して運んだと言われる。

大広間

大広間棟三方に配された廊下はせがい造りの土間庇に、主屋には及ばないが杉一本軒桁により柱の無い釣欄間で庭園との一体感を生み出す。主庭園は銀閣寺ゆかりの田中泰阿弥(新潟県柏崎出身)の作庭。

【三楽亭】

大広間棟の大工の仕事を気に入った五代当主が六代になる息子に設計させ建築した。数寄屋風書院で茶室としても使用された。正三角形の平面で約１１坪、柱・建具の殆どが三角形か菱形等とした独創的で入念な細工が施された建物。

主屋小屋組みは元口一尺二寸長さ六間半の梁を架けた上に直行した梁を六重にも及び架けていて、雪国新潟においても重厚すぎる構造と言って良い。

敷地内には門土蔵や旧宅別邸、蔵、移築された古民家他の建物がある。

このように重厚な構造、上質な造作は伊藤家の豊富な財力に裏付けされて建てられた物であり、近代和風建築として後世に伝え残すべき価値のある建物といえる。

（参考資料：近代和風建築総合調査報告書）

建物名称	北方文化博物館
建築年	主屋：1887年(明治20年)、大広間棟：1889年(明治22年)
構造・様式	主屋：木造2階建瓦葺、大広間棟:木造平屋建瓦葺
所在地	新潟県新潟市江南区沢海2丁目15-25
電　話	025-385-2001
Ｈ　Ｐ	http://hoppou-bunka.com
開館時間	9:00～17:00(12月～3月は16:30まで）年中無休
アクセス	万代シティバスセンターよりバス上沢海博物館前下車徒歩2分
備　考	国登録有形文化財

旧齋藤家別邸

きゅうさいとうけべってい

新潟県新潟市

敷地の中央にとられた池泉と南側に配された主屋＊

明治から昭和初期にかけて、新潟の三大財閥の一つに数えられた衆議院議員・貴族院議員を歴任した豪商四代目齋藤喜十郎が大正７（１９１８）年に建てた別荘。砂丘地形を巧みに利用し、都会でありながら深山幽谷の趣を仕立て、周辺には見られない滝や沢流れ、池泉といった水辺空間をつくり上げた回遊式庭園の中にある。作庭者は、東京の二代松本幾次郎ともその弟亀吉とも言われており、完成までには３年の歳月と巨万の費用をかけている。庭園には、浩養園（東京都墨田区）など、かつての江戸の大名庭園から選び抜かれた数多くの名石や石造物が運びこまれている。
庭園と建物を一体ととらえる「庭屋一如」の趣向で造られた開放的な建築で、随所にさりげなく銘木を使うなど巧みな演出がなされている。敷地の中央に池泉を大きくとり、主屋と蔵を南側に配置している。庭園に面した北側の開口部からは室内には日差しが入らない。主屋は東西に長く南北に風が抜ける。雁行型の平面形で各室から異なる庭園の景色が楽しめる。

２階手摺の堤灯型開口

見どころ

座敷の造作に彫刻を施すなど優れた工匠の技術、各種銘木材を多用した数寄屋風の造作など、当主の好みを反映し贅をつくした近代和風建築である。また庭園は砂丘地形を利用して造った池泉庭園であり「大正期における港町・商都新潟の風土色豊かな庭園の事例として優秀な風致を伝えることから、芸術上の価値及び近代日本庭園史における学術上の価値は高い」として平成27年に国の名勝に指定されている。
本邸に足を踏み入れると外光を遮るように板戸絵があり、その暗さに目が慣れた時に大広間から見える庭園が現れる。建物の配置を南にすることで、庭園への眺望を順光にし、自然光のやわらかい光を取り入れる間取りになっていることが、住居とは違う別邸ならではの造りになっている。

１階大広間＊

１階大広間は書院造で格式の高い造りになっている。縁側部分の内部は畳敷きとし、外側は板敷で１階の手摺は寺社に用いる勾欄をベースにしている。また、２階の手摺は堤灯型の開口が透けるようなデザインを施すことにより、庭との一体感を感じることができる。各部屋の床の間廻りに銘木材を多用し、欄間周りに透かし彫を施すなど数寄屋風の造作が多く見られる。２階座敷の天井にも屋久杉が使用されているなど各種の銘木材が使用されている。質の高い数寄屋建築である。
床は床の間と床脇からなり、設計者のデザイン力が発揮される場所である。真、行、草の構えがあり本邸に備えられた床を見比べていくとその違いが理解できる。

建物名称	新潟市旧齋藤家別邸
建築年	1918年(大正7年)
構造・様式	木造２階建
所在地	新潟市中央区西大畑町576番地
電　話	025-210-8350
Ｈ　Ｐ	http://saitouke.jp
開館時間	9:30～18:00（10月～3月　9:30～17:00）月曜休館
アクセス	新潟駅万代口バスターミナルよりバス15分
備　考	国指定名勝
	写真：旧齋藤家別邸HP　＊新潟県近代和風総合調査報告書

松籟閣

しょうらいかく

新潟県長岡市

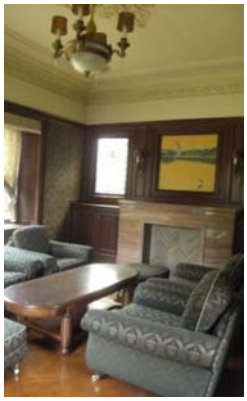
上：表門より臨む。正面に正玄関を構え住宅の中核となる。
正面向かって右側に応接棟が建つ。

松籟閣は朝日酒造株式会社の創設者、平澤與之助が建てた住宅。
「松籟」とは松の梢を吹く風の音のこと。
国の重要文化財の指定を受けたこの建物は、伝統的な日本家屋で、当時の流行デザインがふんだんに採り入れられており見応えがあるので何度でも訪れたくなる。
正玄関の奥の「松籟の間」と呼ばれる茶の間は12畳半の広さと高い天井の大空間に力強い印象を受けるが、縁側に向いた障子戸や書院障子の細かい格子からは繊細さも見受けられる。美しい格子は「小座敷」の腰窓や「朝日の間」の欄間にも施されており、今の時代に同じものを作る技術を持った職人がいるかどうかを考えると、単に建築物としてだけでなく、目に見えない部分にも価値があると思われる。
平成16年に起きた新潟県中越地震で大きな被災を受けたが、復元され現在に至る。

見どころ

障子戸、欄間、書院障子には細い桟が組まれており、部屋ごとに趣きが違っている。どれだけの技術を持った職人が時間をどのくらいかけ造ったものなのか。美しく繊細な桟に見とれてしまう。

縁側のガラス戸には格子の四隅に、手間をかけて彫られた細工が施されている。どんなに時代が変わっても、そのデザインには目を引かれることだろう。美しいだけでなくガラス戸の強度を高める力にも役立っている。



昭和9年9月に建築された応接棟。
応接棟は、外観も洋風で内部にはアールデコの影響を受けた、暖炉や、シャンデリア、ステンドグラスなどの装飾が施され、昭和戦前期の最先端デザインを残している。

建物名称	松籟閣
建築年	主屋・寝室棟 1934年（昭和9年）
構造・様式	木造2階建て、入母屋造り、妻入、桟瓦葺き
所在地	新潟県長岡市朝日80-1
電　話	0258-92-3181
Ｈ　Ｐ	https://www.asahi-shuzo.co.jp/social/shouraikaku/
開館時間	10：00～15：00　4月～11月末（行事日不可）
アクセス	JR来迎寺駅から徒歩15分 関越自動車道 長岡 I.C から15分 長岡南スマート I.C から約3分
備　考	国指定重要文化財

徳川園 蘇山荘

とくがわえん そざんそう

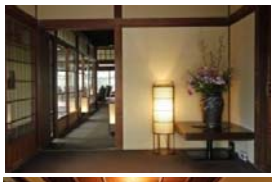
愛知県名古屋市

玄関車寄せ

蘇山荘は1937年(昭和12年)に名古屋市が主催した名古屋汎太平洋平和博覧会の迎賓館和館である。歴史に埋もれた博覧会であるが、満州事変から第二次世界大戦前の軍備増強時代に、人口100万人を突破、東洋一のまちづくりを進めていた大名古屋が「平和」をテーマに開催した日本初の国際博覧会である。陸・海・空の国際的な新しい玄関となった名古屋港から江戸時代の埋立て地である熱田前新田の一角を会場とし、近くには名古屋城築城時に整備された白鳥水中貯木場があり、木曽や飛騨から伐り出された木材が貯蔵されていた。蘇山荘は博覧会中は「檜荘」と呼ばれ、国内外の賓客をもてなす国際交流の場として、木材産業発祥の地として良質な木曽材を展示紹介する場としての役割を果たした。
博覧会閉会後は徳川園に移築され、平和博覧会を今に伝える唯一の建築物となっている。

登録有形文化財建造物(国)としての登録理由は、伝統的な和風建築様式をとりながらも、中廊下や階高の高い座敷を採用する「近代和風建築」の好例として、他の造形の模範となっていることとされている。

木造平屋建て、桟瓦葺きの入母屋造と一部寄棟造、コの字型の平面構成でかつての車寄せが突出しており、玄関から広間へは広い廊下が廻っている。現在は喫茶室として使用されているため、かつてとは異なる使用方法の部屋もあるが、部屋の形状は当初のままを維持されている。



見どころ

これまでの生活文化を引き継ぎながらも、現代の多様な価値観、ライフスタイル、ワークスタイルをおおらかに受け入れ、違和感なく美しい空間づくりを実現するためには、蘇山荘のような「近代和風建築」が参考になるのではないかということを実感できる。運営者による夜の空間演出も魅力的であり大変参考にできる。

玄関構え、玄関破風の懸魚、床飾り、付書院、襖などの従来の和室の手法と、ガラス戸の採用、中廊下の設定、洋家具を意識した階高の高い座敷や応接間などが見事に調和し、また、主要材料を木曽檜とし、柱には割れにくい芯去材や表面に節の無い無地材という高級材を採用しているにもかかわらず、大変奥床しく、現代の流通家具とも違和感なく調和しており、まさに「和」の空間となっている。広い廊下、庭との関係性、季節ごとの設え、手入れの艶、格調高さなど、人生を豊かに生きるために五感・感性を鍛えられる失いたくないものばかりである。

建物名称	蘇山荘 / ガーデンレストラン徳川園
建築年	1937年(昭和12年)　同年移築
構造・様式	木造平屋建て・近代和風建築
所在地	名古屋市東区徳川町1001
電　話	052-932-7887
Ｈ　Ｐ	http://www.sozanso-tokugawa.jp/
開館時間	火～金10:00～17:00(喫茶) 19:00～23:30(バー)
アクセス	地下鉄名城線・JR中央本線大曾根駅　徒歩10分
備　考	国登録有形文化財　駐車場あり(有料)

古川美術館分館 爲三郎記念館

愛知県名古屋市

ふるかわびじゅつかんぶんかん ためさぶろうきねんかん

爲春亭

爲三郎記念館は、一代で名古屋を代表する実業家となり、後に文化芸術、福祉、教育、医療の分野で社会に多大な貢献をした古川爲三郎が、長年に渡り暮らした数寄屋造りの邸宅である。建物全体に数寄の世界が行き渡り、茶人好みの建築といえよう。敷地は閑静な住宅街にあり、樹木の繁る敷地内には主屋の「爲春亭」、四季折々に変化を見せる日本庭園、その中にひっそりとたたずむ茶室「知足庵」があり、北垂れの敷地の地形を巧みに活かし、建物と庭が配置されている。

知足庵

見どころ

爲三郎記念館には小間・広間の変化に富んだ五つの茶の空間があり、其々の席を使い分け様々な茶事が行われていたと思われる。部屋ごとに意匠に趣向が凝らされているが、これみよがし的な感がない。庭と和室を繋ぐ縁側の曖昧で豊かな空間が、居心地の良さにつながっている。また、和の空間の意匠に大きく係わる欄間や建具の意匠と機能性は必見である。
見学の際は、一廻り目はまず全体の雰囲気を感じる。二廻り目は床の間、欄間や建具、天井などの細部を観察。三廻り目は茶事を想定して、庭、縁側、和室の空間構成を観察。最後は座してゆっくりと空間を堪能することをお奨めしたい。

【爲春亭（いしゅんてい）】
爲春亭は各部屋が雁行して並び、柱と貫が交差する高床式の外観は、桂離宮の書院建築を彷彿させる。「ひさごの間」「大桐の間」「葵の間」「太郎庵」があり、それぞれ趣向を凝らした意匠が見られる。「ひさごの間」は、その名が襖に漆で型押しされた瓢箪の模様に由来し、床脇の琵琶床は出書院風で、源氏香紋の透かし彫りの欄間、円窓の下地窓や木瓜形（もっこうがた）の無双窓など桂離宮の意匠が見られる。「大桐の間」は杉と桐の木目を活かし山の重なりを表現した連山薄肉彫欄間と、山にかかる雲をイメージした障子欄間の意匠の掛け合いが印象的である。「葵の間」は四畳半の茶室で知足庵の反転と言え、市松の網代と竿縁天井を組合せた折り上げ天井が特徴的である。

【知足庵（ちそくあん）】
「足ることを知る」という利休の教えからその名をとった知足庵。織田有楽斎が建てた「如庵」の写しの茶室である。二畳半台目向切で下座床の席は床脇に鱗板を入れて壁面を斜行させ、点前座正面の炉の前角に中柱を立てて、火灯形をくり抜いた板を嵌める如庵独特の構成を踏襲しているが、その他は知足庵ならではの部分が多くみられる。

大桐の間

ひさごの間

建物名称	古川美術館分館 爲三郎記念館
建築年	1934年(昭和9年)
構造・様式	木造平屋建て・数寄屋造り
所在地	名古屋市千種区池下2丁目50番地
電　話	052-763-1991
Ｈ　Ｐ	http:/www.furukawa-museum.or.jp/
開館時間	10：00～17：00（月曜休館）
アクセス	市営地下鉄東山線池下駅徒歩3分　駐車場有
備　考	国登録有形文化財・名古屋市認定地域建造物資産

南山寿荘/昭和美術館

なんざんじゅそう しょうわびじゅつかん

愛知県名古屋市

捻駕籠の席

名古屋の閑静な住宅地に建つ南山寿荘は、実業家であった後藤幸三氏の住宅であった建物であり、元々は、堀川沿いに建てられていた尾張藩家老の渡辺規綱の別邸だった茶室と書院からなる建物である。規綱は裏千家の家元玄々斎の実兄であり、自らも又日庵（ゆうじつあん）と号す茶人であったと知られている。江戸末期に建てられ、昭和10年に現在の地へ後藤家の別邸として移築された。

一階の茶室は、主屋に対し角度を振って配置されていることから、捻駕籠（ねじかご）の席と名づけられた。移築前は、堀川から寄付を経て、階段を上って内腰掛に入った。二階書院は入舟の席とも呼ばれていた。現在も池からの傾斜を利用した配置は当時のたたずまいが感じられる。

移築後に変わった部分もあるが、この変わった部分を見ると、後藤氏や関わった大工のセンスの良さが感じられる。玄関は元々台所であった場所であるが、高山の古民家より材を移築し、民芸調の応接間となっている。どっしりとしたその空間は、武家好みの茶室、明るく開放的な広間と対照的で、建物全体の印象をより鮮やかにしている。また、二階の水屋の天袋の板戸も木目を活かした山の意匠が粋である。

見どころ

玄関入ってすぐの民芸調の応接間、その向こうから外の緑が目に入ってくる。廊下へ進むと、その右側の壁には下端が膝の高さの開口があり、中に斜めの壁が見える。とても魅力的な空間で、その開口（中潜り）を通って、内腰掛に入る。その台形の空間は何とも居心地がいい。それらを経て入る捻駕籠の席は、それまでの期待を裏切らないお茶室である。

捻駕籠の席は、四畳中板入りで、座によって天井の高さや材を変えたり、筆柱を配したりと空間に変化と広がりが感じられる。障子には外の緑の色が映りこみ、季節の変化も楽しめる。

昭和美術館の展示室には、数寄者であった後藤氏が集めた茶道具や和歌などのコレクションが企画に合わせて展示されている。また、敷地内にある南山寿荘旧正門は、芝居小屋から移築され、移築後に捻駕籠の席にちなみ、門扉がその屋根に対して斜めに取り付けられたもの、外腰掛待合は桂離宮の写しであり、有合庵の小間は普段非公開だが、極小の空間が素晴らしい。展示室を見て、これらの建物を眺めながら静かな庭をめぐり、南山寿荘を観ると、名古屋のお茶文化を感じることができる。

二階の広間は、洗練された武家の書院といった趣きで、すっきりとした主張しすぎない意匠が素敵である。障子は正方形に桟が組まれ、下の方は横桟の間隔が狭くなっている。玄々斎好みだそうで、かっこいい。ふすまの引手は裏千家の替え紋であるつぼつぼのデザインになっている。つぼつぼの引手は捻駕籠の席の水屋にもみられる。

建物名称	南山寿荘(旧渡辺家書院及び茶室)/昭和美術館
建築年	1832年（天保3年）建築、昭和10年移築
構造・様式	木造二階建て・数寄屋造り
所在地	名古屋市昭和区汐見町4番地の1
電　話	052-832-5851
Ｈ　Ｐ	http://www.spice.or.jp/~shouwa-museum
開館時間	10：00～16：30(月・火定休)展示開催中のみ開館 南山寿荘内部は11月3日公開、捻駕籠の席は予約制
アクセス	市営地下鉄鶴舞線いりなか駅徒歩10分　駐車場有
備　考	愛知県指定文化財

和田家住宅

わだけじゅうたく

岐阜県大野郡白川村

今現在も和田家の住居で有り、一部が一般公開されている

世界文化遺産である白川村荻町集落が一望できるという城山から一番手前に位置しているのが和田家である。
白川村に現存する合掌造り家屋の中では、最大の規模をもち、主屋は国・県重要文化財、板蔵・稲架小屋は県重要文化財に指定されている。
和田家の建築年代は明らかではないが、同家の過去帳の記録などにより、約３００年は経ていると推測されている。
重厚な造り黒光りする太い柱などは、代々名主を勤め、牛首口留番所役人も勤めていたという時代から現在までの和田家が刻み続けている何百年もの生活の歴史を感じずにはいられない。和田家は、古文書や鑑札などの遺物の記録から番所の役人を勤めながら、煙硝（火薬）や生糸の取り扱いを行っていたことがわかっている。

見どころ

自然豊かな山里で、四季折々の風情のある集落であるが、冬は雪深く、積雪量は毎年2メートルを超え、かつては陸の孤島となっていた。
しかし現在では合掌造りライトアップなど、冬ならではの魅力も楽しめるようになっている。

城山展望台からの冬のライトアップ風景

静かな雪夜のたたずまい

2階は代々使用されてきた民具の展示スペース

梁組は建築当時のままであるが、茅葺は更新され続け縄の結び方など技術の継承が見られる

建物名称	和田家住宅
建築年	18世紀初頭
構造・様式	木造3層構造、合掌造、茅葺屋根
所在地	岐阜県大野郡白川村荻町
電　話	05769-6-1058
Ｈ　Ｐ	http://shirakawa-go.org/kankou/guide/174/
開館時間	9：00～17：00（不定休）
アクセス	東海北陸自動車道白川郷ICより駐車場5分、徒歩5分
備　考	国指定重要文化財・岐阜県指定文化財

吉島家住宅

よしじまけじゅうたく

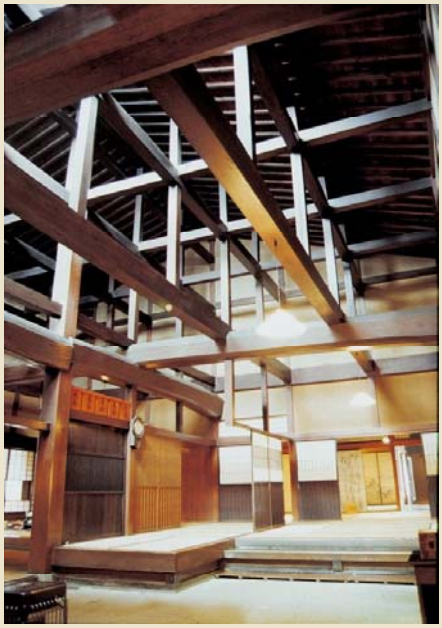
岐阜県高山市

高山祭の屋台組が残るしもまちの古い町並みの通りに面している

明治40年に建築されたもので、国の重要文化財に指定されている。日下部家が男性的な建物に対し、この吉島家は建物のすみずみまで神経のゆきとどいた、繊細さと女性的な美しさのある建物といわれている。
明治８年の大火で焼失し、再建されたが、３０年も経たないうちに、明治３８年また焼失した。
吉島家は天明8年（1784）に、初代重兵衛が高山に居住したのがはじまりで、代々酒造業を営んできた家であり、酒神を祭る三輪神社の杉玉を軒先に下げている。江戸後期頃から生糸繭の売買などで栄えた。

見どころ

大黒柱を中心に、梁（横にかける材）と束（梁に垂直の短い柱）によって構成される吹き抜けは、高窓からの光線をたくみに屋内に取り入れ、柱や鏡戸の木目を美しく見せている。



民家らしい象徴的な梁組

通り路地より玄関を見る

どうじ、おえの広い空間

明治４０年川原町の名工西田伊三郎（ニシダ・イサブロウ）により建てられ、昔の造り酒屋の面影を伝える華麗な商家である。
土間の吹き抜け部分で、大黒柱を中心として構成される梁組と高窓から差し込む光がもたらす陰影に注目したい。
昭和５２年米国の建築界の巨匠チャールズ・ムーアが「自分が見たうちでは最高の日本建築である」と激賞した。

みせ2階のモダンなしつらい

端正な2階座敷

建物名称	吉島家住宅
建築年	18世紀初頭
構造・様式	木造2階建、切妻造
所在地	岐阜県高山市大新町1-58
電　話	0577-32-0038
Ｈ　Ｐ	http://kankou.city.takayama.lg.jp/2000002/2000026/2000208.htm
開館時間	9：00～17：00（年末年始、冬季の火曜日）
アクセス	JR高山駅より徒歩15分
備　考	国指定重要文化財

北岡田家住宅

きたおかだけじゅうたく

岐阜県揖斐郡大野町

外観：式台玄関付近

岡田家（通称北岡田家）は、江戸時代には大垣藩の庄 屋等を努め、広大な農地を有した地元の名士である。
現在の屋敷は、明治期の2度の災害で被災した後、5代 目当主が30年の歳月を費やして完成させた。広大な敷地 に、表門、裏門を構え、主屋、離れ、米蔵、納屋などが 並び、庭園の池には滝がある。
主屋は、大正６年創建。手を尽くして集めた最高の資 材を用い、名匠と知られる職人に造作させた、当地にお ける近代和風建築の意匠・技術の到達点を示すものであ る。
特筆すべきは保存状態の良さである。近世・近代の地 主層の屋敷は、戦後の農地解放により人手に渡って改変 されたり、傷んだまま放置されている建物や、高度経済 成長期に取り壊された建物も多く、当時のまま良好に保 存されていることは貴重である。 平成24年8月に主屋が国の登録有形文化財に登録された。

中の間から座敷を見る

座敷　書院方向

奥の間　棚

見どころ

＜主屋＞
屋根切妻造瓦葺2階建　正面右寄りに入母屋 造り瓦葺きの客用玄関「式台玄関」がある。大小17の部屋を有し、規模が格段に大きい。 「仏壇の間」の折上小屋組格天井のように 最高の造作が行われている。15畳の「座敷」 付け書院にもうけられた庭園を望む大きな窓や、採光に配慮した多くの天窓、棟の東西に 設置された雷針等時代を反映した意匠も随所 にみられる。 このほか、式台玄関の右手「表口」に当時 のまま遺されている両開戸、押上げ式大戸な ども貴重である。

意匠を凝らした釘隠し（こうもり、鶴）

欄間

座敷　床脇地袋の小襖

埋込金庫

建物名称	北岡田家
建築年	1917年（大正6年）
構造・様式	木造2階建て・農村邸宅
所在地	岐阜県揖斐郡大野町相羽字村通282
電　話	0585-34-1111（大野町教育委員会生涯学習課）
Ｈ　Ｐ	http://www.town-ono.jp/0000000494.html
開館時間	一般公開は春と秋の期間限定(要問合)
アクセス	名神高速道路大垣インターから30分
備　考	国登録有形文化財

三松荘

さんしょうそう

三重県津市

母屋正面玄関

昭和１０年に建てられ、戦火や伊勢湾台風をくぐり抜けてきた個人の店舗兼住宅である。父から受け継いだ現在の持ち主の思いのもとにリノベーションが行われ、空き家になることを免れた。以前の持ち主と親交のあった津市の実業家でもあり作陶家の川喜田半泥子が、当時庭にあった３本の松にちなんで、「三松荘」という名前を与えたとの云われが残っている。今回の工事で、失われていた松１本を植え足し３本の松を復活させた。槙、苔、寒椿など常緑の落ち着きある庭に新たに紅葉や備長炭を配して彩りを添え、母屋の座敷から眺める和の庭には３本の松が昔からそこにあったかのような景色となった。また、洋館横のガレージを取り壊した場所に石畳のテラスを設けることで街に開かれた場となっている。テラスに植えられた泰山木が大きな白い花を咲かせる頃、「三松荘」に人が集うことを楽しみに思う。

見どころ

何代かの持ち主の手に渡り姿を変えてきた建築が、三重県の伝統工芸品や伝統工芸士の手によって新たによみがえった。座敷の表具は「伊勢木綿」、照明器具には「伊勢型紙」をあしらい、床の間は「伊賀白土磨き」小面は「黒漆喰磨き」と三重産の土を使った壁となっている。障子の組子も美しく修復され、建築当時の姿を取り戻した。また、玄関襖の唐紙は三松荘のオリジナル柄「松菱」を版木から制作した。その松菱柄で地元の藍染師によって暖簾も制作された。押入から洗面室へと変わった空間に設置された左官職人による人造研ぎ出しの洗面台も見どころの一つである。和の庭に鎮座する棗型の大きな手水鉢もぜひ見ていただきたい。

写真提供 アトリエ・ワン

和の庭

石畳のテラス

【三松荘の構成】母屋、洋館、ギャラリー(旧倉庫)、蔵、離れ

入母屋屋根の玄関を入り、前座敷6畳、中の間4畳、奥座敷10畳からなる母屋がメインのスペースで、奥座敷の床の間には書院、琵琶台が設えられている。中廊下を挟んで居間として使われていた場所は天井を取り払い小屋組を露わにガラス瓦から自然光の差し込むホールへと変わった。

母屋座敷

ホール

母屋玄関の南側に位置する洋館は岩田川に面した木製建具の窓からたっぷりと光が差し込む。漆喰に塗り替えられた壁は音響が良く、演奏会などにも利用されている。北側に位置する質屋を営んでいた頃の倉庫はギャラリーへと様変わりした。

洋館

ギャラリー

建物名称	三松荘（個人宅）
建築年	1935年（昭和10年）築
	2017年（平成29年）ﾘﾉﾍﾞｰｼｮﾝ　設計：ｱﾄﾘｴ･ﾜﾝ
構造・様式	木造平屋建て　木造3階建て　鉄骨造2階建て　蔵
所在地	三重県津市丸之内3丁目22
電　話	非公開
Ｈ　Ｐ	なし
アクセス	近鉄名古屋線津新町駅下車　徒歩10分
備　考	個人宅ですがご連絡の上、見学可能です
	連絡先：4directions.gsl.etc@gmail.com

旧崇広堂

きゅうすうこうどう

三重県伊賀市

玄関棟（大玄関）

旧崇広堂は伊勢津藩第１０代藩主の藤堂高兌（たかさわ）が子弟を教育するため、津の藩校・有造館の支校として建てられたものである。 場所は伊賀上野城の南西に位置し、明治維新後も私立上野義学校、村立上野学校、町立丸之内尋常小学校など、その都度名称を改めてきた。明治３８年からは図書館として昭和５８年まで使用されていた。現在は補修工事などを経て、様々な文化啓発活動の場として、また赤門の愛称で市民に親しまれている。講堂は文政４年（１８２１年）創建当時の姿のまま今に残し、現存している藩校としては近畿・東海地方においてはここしか見る事はできないとされている。昭和５年に国の史跡に指定されている。

見どころ

藩主が出入りする門「御成門」と「小玄関（御成玄関）」一般の出入り口「表門（赤門）」と大勢が一度に利用できる「大玄関」。表門から「大玄関」までは石畳が敷かれている。このふたつの玄関には式台があるのに対して、左手（西側）の下玄関は土間である。さらに西には勝手口があり台所へ直接入る。このように門と玄関の配置と構えによって空間が区別されている。下玄関を入ると敷かれている畳は縁のない「坊主畳」、天井は竹小舞天井となっている。一方「大玄関」「小玄関」から入ると縁のある畳が敷かれ、棹縁天井である。内装についても空間によって区別されている。いわば《空間のヒエラルキー》。ここには封建時代の建築の考え方を読み取れるのかも知れない。

表門（赤門）

御成門

小玄関（御成玄関）

講堂：外観

講堂：内観

【講堂】

文政４年の棟札があり、創建当初の建物である。間口７間、奥行７間、入母屋の大空間となっている。中央は列柱に囲まれた28枚の畳が敷かれた高天井の空間があり、その外を一間幅の畳縁が廻る。更にその外縁を半間の板敷きの廻縁が囲む。大空間の講堂は三段階に構成され、外縁から中央へ向かって求心性を高めている。

建物名称	旧崇広堂
建築年	1821年（文政4年）
構造・様式	木造平屋建て　入母屋　瓦葺
所在地	三重県伊賀市上野丸之内78番地の1
電　話	0595-24-6090
Ｈ　Ｐ	http://www.bunto.com/?p=411
開館時間	9：00～16：30（火曜休館）
アクセス	伊賀鉄道伊賀線上野市駅徒歩5分（駐車場なし）
備　考	国指定史跡旧崇広堂

旧長谷川家住宅

三重県松阪市

きゅうはせがわけじゅうたく

正面玄関

長谷川家は数多い江戸店持ち商人の中でもいち早く江戸へ進出し成功をおさめ、「丹波屋」を屋号とする松阪屈指の豪商、長谷川治郎兵衛家の本宅である。江戸時代の浮世絵師、歌川広重作の「東都大伝馬街繁栄之図」には長谷川家の江戸店が描かれており、当時、江戸の大伝馬町一丁目に５軒の出店を構える木綿商で、その繁栄ぶりがうかがえる。長谷川家の広大な屋敷構えは、その長い歴史の中で隣接地の買収と増築を繰り返し形成されたもので、近世から近代にかけて商家建築の変遷をたどることができる。正面外観は建ちの低い厨子２階建て、切妻造、平入りの町家で両袖にはうだつが上がる。左手に表蔵を見ながら玄関をくぐると奥に向かって通り土間が続き、奥に土蔵が更に4棟、最も古い大蔵、左に米蔵、大蔵の右手に新蔵と西蔵が並ぶ。平成28年7月25日に国の重要文化財（建造物）に指定された。

見どころ

土蔵の裏手には町境でもある背割排水が流れ、その奥には池を中心とした回遊式庭園が広がる。ここは以前、紀州藩勢州奉行所があった地で明治初年に長谷川家が購入し、庭園の他に離れや茶室、四阿なども建てられた。他の建物とは逸して、この離れだけが南西の方角を向いているのは、松坂城を望むためだったと考えられる。今は高層の建物の影となっているが、この庭園越しに松坂城を眺めた豪商家の瀟洒な佇まいを感じていただきたい。

うだつ

主屋（通り土間）

長谷川家の広大な屋敷構えは往時の江戸店持ち商人の隆盛を今に伝える。奇抜な意匠や華美な装飾はみられないが、重厚な構え、良材を用いた上質な造りである。質素・倹約を創業以来の家訓としてきた同家の家風をよくあらわしているといえる。

大正座敷（広間）

大正座敷（外観）

建物名称	旧長谷川家住宅
建築年	江戸時代中期～
構造・様式	木造厨子２階建て　切妻造　平入り　土蔵　他
所在地	三重県松阪市魚町1653番地
電　話	0598-53-4393（松阪市文化課）
Ｈ　Ｐ	https://www.city.matsusaka.mie.jp/site/kanko/kyuhasegawatei.html
開館時間	フリー公開10：00～16：00（土・日、祝日） 団体公開（予約制・ガイド付）3回/日（月・金）
アクセス	伊勢自動車道松阪インター下車10分 近鉄松阪駅より徒歩10分
備　考	国指定重要文化財・三重県指定史跡及び名勝

賓日館

ひんじつかん

三重県伊勢市

正面玄関

賓日館は明治２０年伊勢神宮に参拝する賓客の休憩・宿泊所として建設された。明治天皇の母、英照皇太后の宿泊に間に合うよう明治１９年１２月着工、翌年２月に竣工。これほどの短期間で格調高い建物が完成したのは驚異ともいえる。歴代諸皇族、各界要人が数多く宿泊された建物である。明治４４年に隣接する二見館の別館となり以降、２度の大増改築を重ねている。重厚な唐破風の玄関や壮麗な大広間など現在の賓日館は昭和５年の改築によるもの。二見館の休業後、平成１５年に二見町へ寄贈された。賓日館は建物・庭園も含めて当時一流の建築家による品格のある洗練されたデザイン、選び抜かれた材料やそれに答える職人たちの技など日本の伝統技術の粋を目の当たりにすることが出来る。明治から大正、昭和、平成へと二見町の近代史を語り伝える国指定重要文化財である。

見どころ

賓日館玄関の柱で節があるのは唐破風屋根を支える２本のみである。虹梁は中央部から振分けの返し杢になっており非常に珍しい。上り框は檜、式台は欅の一枚板。天井板は屋久杉の一枚板で釘を使わずに設えてあるので今もひび割れ１つない。玄関周りの材には統一感があるように目線から遠く高い場所にある木は粗い木目に、目線に近く低い位置にある木は細かい木目になっている。玄関すぐ右手の階段親柱には地元の彫刻家・板倉白龍作の「二見かえる」が彫られているが、この蛙は親柱と同じ原木で彫られていて後で取り付けたものではない。この親柱裏側にある「昭和１１年初秋」の刻銘を実際に見ていただきたい。

大広間

【大広間】

１２０畳敷きの大広間は代表的書院造りで、桃山式の折上格天井にはシャンデリアが施され和洋折衷の妙も見ごたえがある。床の間、違い棚廊下には最高級の国産材が使われており、舞台は能舞台として数々の音響上の配慮がされている。背景の「老松」は、郷土の日本画家・中村左洲の作である。昭和５年の大増改築で設計管理を務めたのは前年の式年遷宮で主任技師だった建築家・大江新太郎と塩野庄四郎の二人である。

【御殿の間】

御殿の間の天井は珍しい二重格天井になっており、一層の格式を尊ぶ形式となっている。床の間の床框は見事な螺鈿の輪島塗。欄間は細い格子の筬欄間で、広縁の天井は屋久杉が用いられている。広縁南側の化粧室の天井には見事な寄木造りになっており、創建時の姿を残している。

御殿の間

建物名称	賓日館
建築年	1887年（明治20年）
構造・様式	木造２階建て　瓦葺
所在地	三重県伊勢市二見町茶屋566-2
電　話	0596-43-2003
Ｈ　Ｐ	http://hinjitsukan.com/
開館時間	9：00～17：00（最終入館16：30）火曜休館
アクセス	伊勢二見鳥羽ラインJCTより車で４分、駐車場有 JR二見駅より徒歩12分
備　考	国指定重要文化財

豪農の館　内山邸（富山県民会館分館）

富山県富山市

ごうのうのやかた　うちやまてい（とやまけんみんかいかんぶんかん）

式台と切妻面のアズマダチが見える

越中の豪農であった内山家の邸宅・庭園等を、1977年(昭和52年)８月に13代内山季友(すえとも)氏から富山県へ譲渡され、現在は富山県民会館分館として利用されている。

内山家は、内山昌峰(まさみね)氏が1521～1531年(大永・享禄)の頃に宮尾を新田開発し、そこから季友氏(1888～1981)まで13代続いた家柄である。富山藩の時代には十村(とむら)役として、勧農・治水にあたっていた。明治期以降は地主制度の元で最大の繁栄を迎え多くの文人や政治家も訪れていた。

この建物の大部分は、11代内山年彦(としひこ)氏が1868年(慶応4年)に建てたものである。

屋根は桟瓦葺(当初は板葺石置き屋根)で、正面は化粧梁と束を格子状に組み、切妻面を見せる「アズマダチ」で、正面左側に入母屋造妻入りの式台を有する。

平面は、式台左側に六間の長細い土間を有し、式台の奥には二間続きの広間、その右側には表座敷、台子の間、その右側に外川の間と呼ばれる書院を配している。

明治20年代に、12代内山外川(がいせん)氏により外川の間の奥に書院、茶室、水屋が増築された。この一郭もまた選び抜かれた材料で造られ、千石地主の繁栄がしのばれる。

明治40年代には主屋背後に連なる居住部分が改築された。

表座敷（透彫の欄間）

増築された書院

豪農の館といえど、一般の農家住宅とは趣を異にし、この建物は殿様など階級の高い方をお迎えする、武家屋敷の書院的な性格を持っている。

広間や表座敷の木部は漆塗りで仕上げられ、格式高い雰囲気が漂う。

明治期には、主屋に増築された書院式茶室、竹林に囲まれた三入庵（さんにゅうあん）、蔵横の離れ書院を改装した夜雨廳（やうちょう）の３つの茶室が出来た。

増築された書院床脇の天袋は富山藩の絵師により描かれたものである。

書院式茶室と三入庵は藪内流家元の指図、指導を受け建てられており、特に、書院式茶室は、家元本席・燕庵の間取を意識したものとなっており、書院式茶室の寄付き待合には持仏堂が設けられ入口は火打型で、枠縁は竹を回し、手の込んだ造作となっている。水屋には北陸では珍しい外部から取水する水張口の付いた水屋棚となっている。

三入庵は藪内家11代透月斎竹窓の好みと伝えられ、前面の深い庇が印象的である。

夜雨廳は、窓が多く明るい造りのため、外部に御簾を設けており、それがリズミカルである。内外部の色壁は、浅縹（青色）と浅緋（赤色）を用い個性的である。

寄付き待合（左：持仏堂）

水屋棚

見どころ

正面の薬医門

復元された柳原文庫

月見台からの庭園の眺め

三入庵外観

三入庵内観

夜雨廳外観

夜雨廳内観

内山邸に到着すると、正面には薬医門が現れる。薬医門の両側は塀と土居に建仁寺垣風の垣根がめぐらされているが、その手前の用水には菖蒲や燕子花が植えられている。見上げると、大木が敷地を囲み、いかにも富山らしい屋敷林となっている。

広大な敷地に入ると、主屋以外にも蔵や作業所、茶室等がある。まずは建物外観を拝見しつつ、庭を見て頂きたい。梅園、種々の桜、竹林が広がる敷地には四季折々の花が咲く。

貴重な資料が所蔵されていた柳原文庫は、平成27年度に復原され、その姿を目にすることが出来る。

次に主屋内部へ。まずは一つ一つの部屋の雰囲気を感じ取って頂きたい。その際ぬれ縁から庭園を眺めることも忘れずに。そして再度各部屋を廻り、天井の造りや、広間・式台の竹の節欄間、表座敷の透彫の欄間、各部屋の意匠の異なる釘隠し、緻密で繊細な襖絵や杉戸、様々なデザインの引手や唐紙、書院の棚など個々の造りをご堪能頂きたい。丁寧な造りと上質な材料で出来た空間にもてなされることだろう。

建物名称	豪農の館　内山邸（富山県民会館分館）
建築年	1868年(慶応４年)
構造・様式	木造平屋建一部二階建桟瓦葺住宅　外
所在地	富山市宮尾903番地
電　話	076-432-4567
Ｈ　Ｐ	http://www.bunka-toyama.jp/uchiyama/index.php
開館時間	9：30～17：00
アクセス	富山駅から車で約10分
備　考	国登録有形文化財　*撮影：大釜恵

茶室円山庵　立礼席

富山県富山市

ちゃしつえんざんあん　りゅうれいせき

富山市民俗民芸村内にある茶室円山庵は、富山の茶人・金子宗峰が大正９年に建築した茶室「録寿庵」を、戦後当地に移築したものである。昭和５５年（１９８０年）に富山市民俗民芸村の附属施設として増改築され、翌年「円山庵」として開館した。「立礼席」は一般に開放され、呉羽丘陵の豊かな自然の中で気軽にお茶を楽しめる施設として、富山市民の憩いの場となっている。

アプローチ（緑のトンネルと石畳の露地）

立礼席入口

「立礼席（りゅうれいせき）」とは、椅子に座って（正座をせずに）、お茶をいただける茶席のことである。こじんまりとしたヒューマンスケールの室内は、年月を経て味わいを増した自然素材の仕上げにより、落ち着きが醸しだされている。

←立礼席室内

大きな開口部は、網戸も無しに庭に向かって開け放たれ、自然を直接に感じ取ることが出来る。天井は、三つの意匠に分割され（平天井、掛込天井、落天井）、掛込天井は窓に向かって軒裏に連続している。
床は玄昌石貼り、周辺部が豆砂利洗出仕上げとなっており、外部と同じ高さで豆砂利仕上げが連続し、外部空間との繋がりを意匠的にも強めている。和（日本）建築の特徴ひとつである「自然との一体感」を感じられる、半屋外的な茶室空間となっている。

↓庭と一体化した立礼席

「まるで峠の茶屋のよう…」と、散歩やジョギングの途中にフラリと立ち寄るお客さんも多いとのこと。
「気軽さ」と「お茶の雰囲気」を両立させている空間である。

なお、民俗民芸村内には、この他に５つの移築された古民家や蔵があり、その中の「陶芸館」として使用されている「アズマダチ」の切妻住宅は、国の登録有形文化財である。（写真左）

見どころ

茶室につながる庭を「露地」と呼ぶ。
茶室に向かって歩みを進めるごとに目の前に広がる景色が変化し、日常生活から離れた茶の湯の世界へと心が整えられる。
円山庵は、伝統的な露地の形式を踏襲しており、訪れる人々が四季折々の自然を存分に感じとれるような工夫がなされている。

①周辺の景色（呉羽山）

②道に面した露地門

③樹木の中のアプローチ

④中門（内露地の入口）

⑤池泉庭園

⑥立礼席内

建物名称	茶室円山庵　立礼席
建築年	1980年(昭和55年)
構造・様式	木造平屋建･前入母屋･後切妻造
所在地	富山市安養坊 47―3
電　話	076―432―4782
Ｈ　Ｐ	http://www.city.toyama.toyama.jp/etc/minzokumingei/
開館時間	9:00～17:00(入室は16:30まで)
アクセス	北陸自動車道･富山IC、富山西ICより車で20分
備　考	旧「録寿庵」の内部見学は、不可

菅野家住宅

すがのけじゅうたく

富山県高岡市

菅野家全景

【山町筋の歴史】
富山県高岡市にある「山町筋」と「金屋町」は、重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。山町筋の歴史は４００年余前まで遡り、加賀藩第三代藩主の前田利常が城下町から商工業の町へと転換し、商人のまちとして発展した。

山町筋のまちなみ

見どころ

【和室と中庭をつなぐ縁】
ブツマやホンマに佇み空間を堪能した後、ホンマから中庭を眺めてみると、和室・縁・四季を感じる中庭のつながりに空間の奥行きや深みを感じることができる。また、岡山の土とメノオの粉を混ぜたベンガラの壁は色褪せず、障子の白とのコントラストがとても美しい。

【灯具や金具】
ブツマとホンマには天井から灯具が吊り下げられている。対となっている灯具は、シンプルでレトロな雰囲気を醸し出している。さらに、和室を囲む長押に取り付けられた小さな釘隠しを目することができる。長寿の実を模ったそうで主張はせずとも目を惹く装飾となっている。

灯具

釘隠し

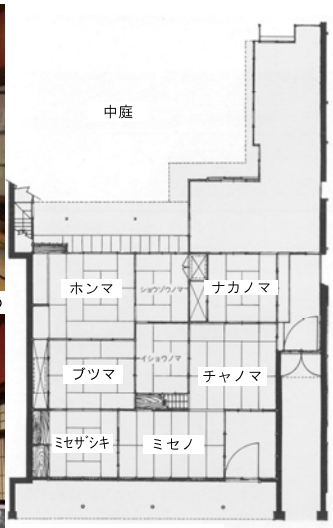
引手

【格子や塀】
外部と内部をつなぐ下屋空間に設置された格子は、外から室内は見えにくく、逆に室内からは外の様子が良く見える、内と外を繋ぐ装置。また、敷地境界にある塀は、壁面にデザインされた記号を模ったスリットが、圧迫感を無くし道行く人に心地良さを演出している。

【山町筋のまちなみと菅野家】
明治３３年（１９００年）の高岡大火により市街地の多くが焼失し、復興に当たり土蔵造りが建てられた。山町のまちなみは、このように「防火のまちづくり」としての歴史も併せ持っている。
その土蔵造りのまちなみに代表される「菅野家住宅」は、明治初頭に北海道との通商で家業を築いた。その後、代々、高岡紡績、高岡銀行を設立、高岡電灯を創立するなど、高岡政財界の中心的な存在として現在に至っている。

ブツマから中庭を見る

床の間（ホンマ）



主屋 1階平面図※
※　富山県高岡市教育委員会発行「重要文化財 菅野家住宅」より

【外観・内観】
菅野家は、大きな箱棟や黒漆喰の外壁、観音開きの防火扉、煉瓦の防火壁や石柱など、重厚な外観である。内部は、重厚な外観の雰囲気とは対照的で、柱や長押の部材が細く、繊細な雰囲気を醸し出している。ホンマの柱は檜、天井は屋久杉といった銘木を使用している。

建物名称	菅野家住宅
建築年	１９０２年（明治３５年）
構造・様式	木造２階建て　土蔵造り
所在地	富山県高岡市木舟町36番1号
電　話	0766-22-3078
Ｈ　Ｐ	http://www.takagas.co.jp/suganoke/
開館時間	3月～12月：9時30分～16時（火曜休館） 1月～２月：休館
アクセス	高岡駅より徒歩15分
備　考	国指定重要文化財

明治の館

石川県七尾市

めいじのやかた

明治の館（旧室木家住宅）は、廻船業や酒造業などで成功し、この地区の大地主に成長した室木彌八郎が明治12年（1879）から建築にとりかかり、明治19年（1886）に完成させた合掌組入母屋造りの家である。
家の規模は敷地面積4,143㎡、主屋のほか、台所・納屋、道具蔵、米蔵、表納屋、と４つの付属室がつき、正面に門と塀を配し、建坪は総合計で852㎡（258坪）ある。

見どころ

【梁と用材】
太く大きな梁の四丁組。
曲がった大木をがっしり組み合わせた技法に豪邸の風格が感じられる。
柱、平物、縁板、建具等全て欅材を使って豪華に仕上げられている。戸は欅の一枚板で直径２ｍの幹周り６ｍ以上の大木を使用している。

【囲炉裏】
アテ材を使用し、入り方式の形式となっている囲炉裏である。薪が焚かれ、その煙と乾いた空気が合掌組の屋根裏へ昇り茅葺屋根を保護している。

【座敷】
上、中、下と三室が並ぶ格式のある座敷である。上座敷は黒柿と黒壇の床の間に付書院、露板の施された正式な造り。下座敷は略式で、床脇に中国風の半円形障子が入っている。

【佛間】
式台から入ると、その奥は格天井の佛間。佛間の襖は、上部がゆるやかな曲線をもたせた凝った造りである。真直な材を曲げるのではなく広い材から曲面を型取って造ったものである。

【米蔵】
この蔵は平成19年の能登半島地震で大きな被害を受けたが、平成22年に修復工事を行い民俗資料展示室として、収集した民俗資料の展示を行っている。

【庭園】
主屋の西側にある庭は座敷から眺めることができる南北に長い池泉回遊式の庭園である。池は羽を広げた鶴を形取り、亀の頭のような石がせり出して背に当たる部分に木が植栽されていて、鶴亀の泉水と呼ばれている。

建物名称	明治の館
建築年	1886年（明治19年）
構造・様式	木造２階建　合掌組入母屋造り　茅葺屋根
所在地	石川県七尾市中島町外ナ部１３番地
電　話	0767-66-0175
Ｈ　Ｐ	http://www.city.nanao.lg.jp/
開館時間	午前9:00～午後5:00（入館は午後4:30迄）
アクセス	のと鉄道西岸駅より徒歩10分
備　考	七尾市指定文化財　写真：七尾市教育委員会提供

武家屋敷跡野村家

石川県金沢市

ぶけやしきあとのむらけ

【野村家の由来】
天正十一年（1583）前田利家が金沢城に入城した際、直臣として従った野村伝兵衛貞家は、禄高千石、千二百石と累進し、十一代にわたって御馬廻組頭、各奉行職を歴任。千有余坪の屋敷を拝して連綿と明治四年の廃藩まで続いた由緒深い家柄である。

【濡れ縁と庭園】
長町武家屋敷跡界隈は中級武士が住んでいた、土塀と水の町。現在も藩政時代の面影をしのばせる。雪から土塀を守るための「こも」（ワラを編んだむしろのこと）は金沢の風物詩である。
金沢城普請の際に木材の運搬に使われた金沢最古の大野用水が流れ、当野村家などの屋敷はこの水の流れを庭園に引き入れ曲水としている。濡れ縁にせまる曲水、落水が奥行のある空間を形成している。庭園は高低差があり、落水する景色が贅沢な造りであったことを想像させる。室内・廊下・濡れ縁から、視点を変えて立って見るもよし、正座で見るもよし、建物・庭園を立体的に鑑賞できる。

上段の間奥より庭園を眺める

見どころ

日本建築は内外の境があいまいで、室内から庭、玄関へ繋がる演出が魅力的である。縁側が庭と室内をつなげる空間となり、寒い季節は建具が入り室内となり、暑い季節は解放し直射日光を避け、深い庇・屋根が日陰を作り出す。
野村家も室内と庭園の繋がりが魅力的な建物である。
武家屋敷跡の名残は庭園にある。庭園は1583年に造られたが、建物は加賀大聖寺藩の北前船の傑商久保彦兵衛が1843年に建立したものを移築。元の建物は加賀大聖寺藩の藩主を迎える迎賓館の役割があったため、上段の間がその名残を残す。総桧づくりの格天井や黒柿透かし彫りの釘隠し、鉄刀木の細工彫りでできた襖の引手、ギヤマン入りの障子戸は弘化・嘉永年間の文化の成熟度を物語る。
昭和初期の移築の際、庭園と建物を繋いだ大工の腕が素晴らしく違和感を感じない仕上がりである。

謁見の間　　上段の間

【茶室　不莫庵（ふばくあん）】
天井は桐板に神代杉の一枚板を置き四国特産の数少ないみどり松でおさえた珍しい造りである。控えの間の床板は樹齢約千年の紅葉の一枚板で、天井は真菰（まこも）の茎張りである。２階から眺める庭園を楽しめる。

茶室天井（神代杉）　　控えの間

曲水を眺める

不莫庵より庭園を眺める

2009年　フランスミシュランから日本の観光地として２つ星を、またアメリカ庭園専門誌「ジャーナル・オブ・ジャパニーズ・ガーデニング」誌で2003年日本の庭園ランキング第３位に選ばれた。（１位は足立美術館、２位は桂離宮）

建物名称	武家屋敷跡　野村家
建築年	1843年（天保14年）建造建物を昭和初期移築
構造・様式	木造
所在地	石川県金沢市長町１丁目３番３２号
電　話	076-221-3553
Ｈ　Ｐ	http://www.nomurake.com
開館時間	8:30～17：30・4～9月　～16：30・10～3月
アクセス	JR金沢駅よりタクシー１０分
備　考	駐車場　６台あり

横町うらら館

よこまちうららかん

石川県白山市

横町うらら館は、旧鶴来町の旧家を一部改装し、街を訪れる人々の休憩所として無料で開放されている。旧鶴来町は、石川・福井・岐阜３県にまたがりそびえる白山の麓、手取川扇状地の扇頂部に位置し、古くは山間部と平野部の交易市場で栄え、金劔宮（きんけんぐう）や白山比咩（しらやまひめ）神社の門前町としても発展した。金沢に交易の中心が移るまでは、この地域の経済・宗教・文化の重要な拠点であった。

横町うらら館の表通りは、白山比咩神社の表参道へと続く通りとなっている。この通りは加賀藩前田家の白山本宮参拝のために整備され、昭和中ごろまでは商家が立ち並ぶにぎやかな通りであった。商家の数は少なくなったが、今でも古くから栄えた鶴来の町の雰囲気を感じることができる。

その歴史と立地の中で、横町うらら館は格式ある商家のたたずまいをそのまま残す、貴重な建物となっている。

見どころ

「おえ」の間　＊

この建物は天保年間、今からおよそ１８０年前に建てられた、間口が狭く奥行が長い商家である。間口に対して租税がかかる、江戸時代の町家の特徴をよくあらわしている。敷地面積は１７０坪程度、建物は間口七間半、奥行き九間の木造２階建て、通り庭でつながった奥に五間×六間の蔵がある。

１階には８室、２階には７室あり、１階の中庭に面した縁側には長さ四間半（約8.2m）の杉柾目板が継ぐことなく使われており、奥の座敷は華やかな朱塗りの壁となっている。現在２階は一般に公開されていないが、窓には天保年間に建てられた際に入れられた赤いステンドグラスが、２枚だけ残っているという。凝った造りの神棚や金箔張りの仏壇、一枚板から掘り出した格子欄間など、現在ではなかなか見られなくなった職人技が、細部に光っている。

奥の間。右手奥は仏間

ここは、江戸時代には年貢米を管理する「蔵宿」として、倉庫業と質屋・金貸しなどの金融業をあわせたような商いをしていた。明治期には集配郵便局、昭和期には町医者をしていたが、平成に入り当主が金沢へ転居する際に、旧鶴来町に寄贈され無料休憩所となった。

「みせ」には観光物産が展示してある

道路から玄関を入ると通り庭に面して「みせ」の間があり、その奥に「おえ」の間がある。広くはないが囲炉裏が切られ、今も昔も客が気軽に腰を掛けて談笑ができるようなスペースになっている。

通り庭を抜けると、「蔵宿」の名残の蔵がある。火災にも強い重厚な石積み壁に囲われており、現在は夏でも涼しいギャラリースペースとして地域で利用されている。

蔵へ続く通り庭。右手は「おえ」

今はさほどではないが、鶴来は雪深い地域であるため、中庭は冬には雪の置場となる。また食用となる季節の野草もあり、中庭は年間通して有効活用されていたようだ。

ここには鶴来の暮らしが色濃く残っている。

建物名称	横町うらら館
建築年	1832年（天保3年）
構造・様式	木造2階建、町家（平入り・瓦葺）
所在地	石川県白山市鶴来新町夕1番地
電　話	076-272-0001、076-273-5699
Ｈ　Ｐ	http://www.urara-hakusanbito.com
開館時間	10:00～16：00　年中無休（年末年始を除く）
アクセス	電車：北陸鉄道石川線　鶴来駅より徒歩12分
	自家用車：白山ＩＣから国道157号線を南へ20分
備　考	＊写真は、白山市観光連盟提供

無限庵

むげんあん

石川県加賀市

見どころ

加賀の山中、湯の町を流れる川の畔にかかるこおろぎ橋から坂を見上げると広大な宅邸の構えが見えてくる。無限庵はこの風景の中に金沢の高岡町から移築された書院である。入母屋造、妻には狐格子に懸魚を付け、四方に桟瓦葺の下屋。随所に豪華な和の美しい意匠が見られるが、四季折々の山の風景と川のせせらぎが背景となった美しい和の空間である。

木瓜型の枠の中に彫刻が施された欄間。２間２枚で左右の構図に埋められ中央に多くの余白を残している。それぞれ枠と一木で一体に彫刻された見事な松板の欄間である。

神代杉の天井板

金唐紙の天袋。天井は神代杉の網代形の寄木張

書院北側の縁

琵琶台の束は黒柿で摺漆塗、正面の羽目板には優美な蒔絵が施されている。

黒柿の手摺

無限庵は、加賀藩元家老横山家の分家、横山章が明治末期に金沢高岡町に建てられた書院をここ山中へ大正元年から大正八年にかけて移築された建築である。武家邸宅書院の伝統を継承する近代の書院造りとして、当時の木造建築技術の粋を傾けた貴重な遺構と言われ、石川県指定文化財として、保存・一般公開されている。

【御殿】
間口4間、奥行4.5間の堂々たる桧（尾州）造りの座敷きである。中央に２間の床を、左右に１間の床脇を設け、黒柿の琵琶床、床脇棚の天袋は金唐皮の美しい模様が印象に残る。全面を開放できるように縁を設けた主室は、神代杉の天井板、縁は欅の寄木張、松の一枚堀の欄間等、格式と豪華さの中に、平明な佇まいが凛とした和の空間となっている。また、金沢の書院に見られる群青の壁や黒柿の手摺が配された北側の縁も意匠として美しい。

【縁側の廊下】
座敷の東側の廊下天井は竿縁天井であるが蒲鉾形に起りがつけられている。御殿の縁は欅の菱形獅子吼張である。

【茶室「雄峯庵」】
裏千家四代　仙叟好みの釘箱棚が備え付けられた二畳台目中板入り向切の茶室。同じく横山家より大正時代に移築された。土縁がついた冬季の使用に備えた雪国の工夫が見られる。

建物名称	公益財団法人　前端文化振興財団　無限庵
建築年	明治末期（大正元年移築）
構造・様式	木造2階建　入母屋造、瓦葺
所在地	石川県加賀市山中温泉下谷町ロの6
電　話	0761-78-0160
Ｈ　Ｐ	http://www.mugenan.com
開館時間	8：30～17：00（年末年始休館）
アクセス	JR加賀温泉駅より山中温泉行きバス下車徒歩20分 JR加賀温泉駅より車で20分
備　考	石川県指定文化財・石川県登録博物館

養浩館

ようこうかん

福井県福井市

西側外観

御座ノ間

鎖ノ御間

養浩館は、福井藩主松平家の別邸で、福井城本丸から北東約４００ｍの位置にあり、城下を流れる芝原上水を引き込んで作られた回遊式林泉庭園「養浩館庭園」の水辺に建つ数寄屋造りの建物である。庭園は江戸時代初期から中期を代表する名園の一つで、昭和２０年の福井空襲により建造物は焼失したが、庭園はよく現在に伝えられていたため、昭和５７年に国の名勝に指定、これを機に復原整備が進められ、平成５年に完成、一般公開された。建物の復原は一部分のみで、地元足羽山産の笏谷石を大棟に置いた柿葺の座敷と、茅葺の御台所・御台子から成っている。

見どころ

庭園や建物の専門家双方から絶賛されているのは、優れた水の造形と、庭と屋敷の見事な一体感。座敷の土縁のすぐ先に豊富な水が湛えられ、建具で切り取られた景色は四季折々の色を一枚の絵として映し出す。

池の上に延びる櫛形ノ御間は、花頭くずしの連窓から跳上げ戸越しに水面の光が掛込天井に反射し、まるで船に乗っているよ うな気分になる。御月見ノ間は、西面いっぱいに出書院が配され､その上部には雲形に繰り抜いたケヤキの一枚板が入り､池に移る残月の眺めの額となっている。

↑櫛形ノ御間　　御月見ノ間↓

建物の北側は御湯殿という殿様のお風呂が再現されている。当時は湯船につかるものではなく、サウナのような部屋があり、その手前には水勾配のついた板の間があり、そこで体を流していた様子がよくわかる。蒸気抜きの屋根など、建築的工夫を見ていると面白い。

南側の座敷は、細部にわたる材料や加工の質の**高さが素晴らしい。欄間は、御座ノ間には桑の一枚板を透彫にした**もの、御次ノ間には山ウコギの皮付きの小枝を組んだもの、というように非常に手が込んでおり、どれをとってもこだわりの逸品である。

なお、養浩館庭園はアメリカの庭園専門誌ＪＯＪＧの「日本庭園ランキング」で２００８年より３年連続で第３位に選ばれている。

御湯殿

建物名称	養浩館（旧御泉水屋敷）
建築年	１９９３年（平成５年）復原完成 （１７世紀末期建築）
構造・様式	木造平屋建て・数寄屋造り
所在地	福井市宝永３丁目１１－３６
電　話	福井市文化振興課　　０７７６－２０－５３６７ 福井市郷土歴史博物館　０７７６－２１－０４８９
Ｈ　Ｐ	http://www.fukuisan.jp/ja/yokokan/index.html
開館時間	９：００～１９：００（3月１日～１１月５日） ９：００～１７：００（１１月６日～２月末日）
休園日	年末年始（１２月２８日～１月４日）
アクセス	ＪＲ福井駅から徒歩約１５分、駐車場有
備　考	国指定名勝 養浩館庭園

旧京藤甚五郎家住宅

福井県南越前町

きゅうきょうどうじんごろうけじゅうたく

正面

旧京藤甚五郎家住宅は、南越前町今庄地区の旧北陸街道沿いに建つ町家建築である。今庄は古来、官道として北陸街道が使われていた時代より京都から北国への玄関口として栄えた交通の要衝で、天保年間(1830～1844)には戸数２９０戸を数えたという当時の繁栄の面影を今なお留めている。
伝統的な町家からなる今庄宿の町並みは、その多くが明治以降のものであると推定されているが、当家に残る文政元年(1818)の「火事見舞扣帳」により、当住宅はこの火災後の天保年間に建てられたものと考えられており江戸時代に遡る町家である。なお当家は、幕末に京都に向かう水戸浪士の一行が立ち寄ったとの伝承があることからもわかるように、今庄有数の旧家でもある。

見どころ

【迫力ある佇まいを備えた外観と防火建築】
木造２階建、切妻造で、屋根には越前特有の赤瓦が葺かれている。間口は２０ｍ余りあり、標準的な町屋と比べると２倍の大きさである。両妻面の壁を屋根面よりも高く持ち上げた本格的なウダツ、防火建築を意識した土壁で塗籠められた虫籠窓や登り梁、垂木、さらに他の今庄町家と異なり板の庇ではなく瓦で葺かれた下屋庇から成る意匠により他の町家とは異彩を放ちひときわ強い存在感がある。
伝統的な町屋の形態をよく留めた、県内に現存する数少ない江戸時代の大型町屋である。

正面(南側外観)

【質実剛健で上質な内部】
柱や鴨居、長押など木部は漆で色付けされ、縁境の障子欄間は繊細で緻密な細工が施されている。決して派手ではないが意匠を凝らした上質な造作を各所にうかがう事ができる。

主屋１階座敷

主屋１階(オウエ)

主屋の内部は、炉のあったハイリクチ、ダイドコ(イロリノマ)とその奥に続くダイドコと並行して、前からミセノマ、オウエ、ナンドと並び、オウエには２階への階段もある。

主屋１階(囲炉裏の間)

ナンドと炊事場の間には３畳の小室、浴室、脱衣室、便所が設けてある。また、２階の道路側には洋室が存在するが、１階の水回りと合わせて、これらは明治～昭和にかけての改修によるものとされる。
洋室の前室にあたる板の間は、京藤家の当主が嗜んだ、写真を現像する為に使用した暗室の役割も担っていたとのエピソードがある。座敷棟はオウエから続く一段と高くなったシキダイ、ナカノマ、ザシキ、さらに奥の縁側から成り、縁側には水戸浪士が付けたとされる刀傷が残り、歴史の情緒を味わう事もできる。

建物名称	旧京藤甚五郎家住宅
建築年	江戸時代後期から幕末
構造・様式	木造、二階建て
所在地	南条郡南越前町今庄
電　話	南越前町教育委員会今庄事務所 0778-45-8003
開館時間	9：00～17：00（家の中を見る場合は要予約）
アクセス	JR今庄駅から徒歩5分/北陸自動車道今庄ICから車で10分
備　考	福井県指定文化財 ボランティアガイド有 （要予約：今庄観光ボランティアガイド協会）

旧料亭蓬嶋楼

きゅうりょうてい　ほうとうろう

福井県小浜市

外観正面（三丁町通り北から）

旧料亭蓬嶋楼は、小浜市香取地区にある三丁町と呼ばれる茶屋町に位置する。三丁町は、かつて西組・中組・東組に分かれていた小浜城の城下町のうち西組に属し、西組の町並みは、近隣の商家町や寺町を含め「小浜西組」の名称で国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、伝統ある町並みの保存と活用が進んでいる。紅殻格子の家々が軒を連ね芸妓の三味線の音が流れる情緒豊かな通りに、瀟洒な塀を巡らした蓬嶋楼は、三丁町でもっとも規模が大きく建物だけの間口は７間ほどある。十字紋を現した軒瓦を載せ腰板を貼った高塀を通りに面して構え、庇付きの引違い戸を建てて表玄関とし、中間に庇付きの出格子を設け、さらに庇付きで片引戸を建てて裏玄関としている。この表構えは秀逸で茶屋町の雰囲気を色濃くかもし出しており、恰好の被写体となっている。

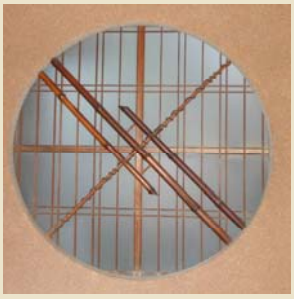
２階主座敷主室

２階主座敷次の間

主座敷は2階の12帖半と10帖の続き間で、踏面が少し外側に湾曲した階段で３帖の前室に導かれる。主室は間口二間半のうち二間を床とし、左の一間を踏込床、右の一間を真塗り框の畳床として一間の付書院を備えている。床柱は下げ束とし、左方の半間に地袋を設け、上部の壁面は斜行させて壁いっぱいに円窓をあけ奥の壁の一部を白く塗っている。こうすることによって客座からは円窓が三日月に見え、赤壁の華やいだ雰囲気の座敷に仕掛けられた粋な趣向となっている。
次の間を振り返ると、主室床の間と相対する壁面は中央で二分され、左に大円窓をあけて腰張りで波を表現し、上部にはシャレ木を横たえている。腰張りは床框に、シャレ木は落掛けに見立てられる。
主座敷には三日月、次の間に満月を配し、遊びの意匠を演出している。

見どころ

料亭であったこの建物には、手の込んだ細工、繊細さと遊び心に富んだ意匠が随所に見られる。それらは目に楽しく、また、建築的視点からも必見の価値あり。



手の込んだ天井の細工

スクラッチタイルを貼って昭和初期のモダンな装いを演出している玄関廻り。

建物名称	旧料亭　蓬嶋楼
建築年	明治期
構造・様式	木造2階建て
所在地	小浜市小浜飛鳥64番地
電　話	0770-64-6034(小浜市教育委員会文化課)
開館時間	10：00～16：00（土日祝日）
アクセス	舞鶴若狭自動車道　小浜ICより8分 JR小浜駅より徒歩17分
備　考	小浜西組重要伝統的建造物群保存地区

蘆花浅水荘

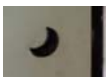
ろかせんすいそう

滋賀県大津市

書院から望む庭園

この別荘庭園は、山元春挙が故郷　膳所に、自分の画の師　森寛斎と両親の恩を記す持仏堂を建立するとともに、自身のアトリエを造るために建築したものであり、離れ、土蔵、持仏堂、本屋など六棟の建造物が存在する。邸宅となる本屋は、数寄屋造りを基調とし茶室を点在させ、春挙の意図によりそれぞれ異なった意匠でまとめられている。１階は住居、２階は応接間とアトリエからなる。屋根は寄棟造、檜皮葺である。

【残月の間】天井と障子の腰板に網代を施している。残月の間の襖の引き手は正に残月を表す。書院の引き手は満月、続く仏間は半月、と、月の満ち欠けを引き手で表現している。

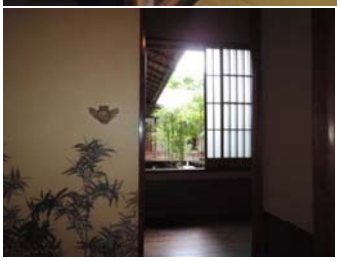


見どころ

蘆花浅水荘（ろかせんすいそう）は、日本画家山元春挙（やまもとしゅんきょ）の別荘で、春挙自らが設計・監修を手掛け、京都の大工　橋本嘉三郎と共に７年の歳月をかけて建築した邸宅である。画家であり、山を愛する登山家であり、書や詩にも精通する粋人春挙がその洗練された感性をもって建築した蘆花浅水荘は、意匠的、技術的に趣向が凝らされているが、華美でなく計算された機能美と気品さえ感じられる。また、庭園は琵琶湖及び近江富士と称される三上山を借景し、数寄屋建築の粋を存分に堪能できる。

【２階応接室】山元家の家紋である「ききょう」が家具、天井換気口、シャンデリアにあしらわれている。

【竹の間】床の間の室礼も全て竹という徹底ぶり。襖には春挙松が描かれ、引き手は竹製で雀が飛び立つ様子を表現。丸窓には竹を嵌めこみ障子越しに満月とススキを表現する粋な趣向。



大正時代の雰囲気漂う、静かで落ち着いた魅力的な和の空間。
近代建築の違例として国の重要文化財に指定された蘆花浅水荘は地域の人々にその価値を理解され、コミュニティの場としても大いに活用されている。

【莎香亭】松の唐紙に千鳥の引き手。楽しく舞う様子を高さを変えて表現する粋な遊び心。春挙が瞑想に耽った小部屋には梅が描かれている。

庭園から見た邸宅

建物名称	蘆花浅水荘
建築年	1914年～1921年（大正3年～10年）
構造・様式	木造2階建て・数寄屋造
所在地	大津市中庄1丁目19番地23号
電　話	077-522-2183
Ｈ　Ｐ	www001.upp.so-net.ne.jp/rokasensuisou/top.htm
開館時間	10：00～16：00　（要予約）
アクセス	京阪電車石山坂本線瓦ヶ浜下車　徒歩5分
備　考	国の重要文化財　大津市指定文化財 名勝

居初氏庭園と天然図画亭

滋賀県大津市

いそめしていえんとてんねんずえてい

居初氏庭園と天然図画亭

見どころ

琵琶湖の湖上特権を掌握し、堅田の三豪族として代々大庄屋を勤めてきた居初家。その屋敷内に広がる居初氏庭園。琵琶湖や対岸の近江富士と称される三上山を借景とする枯山水庭園は、国指定の名勝である。その庭園内に建てられた茶室が、天然図画亭（てんねんずえてい）である。その茶室から望む庭園の光景は、茶室の陰と相まって自然の美しさがさらに際立ち嘆息する。まさに、天然図画である。心静かに四季折々の繊細な美しさを堪能できる魅力的な和の空間である。茶室は県指定重要文化財であり、茶室越しに庭園を眺めるための工夫が随所に見られる。

茶室越しに眺める庭園

廻り縁のある天然図画亭

居初氏庭園と天然図画亭は、天和元年（1681年）頃に、千利休の孫にあたる千宗旦の門人、藤村庸軒（ふじむらようけん）と、庸軒の門人で堅田郷士の一人である北村幽安（きたむらゆうあん）との合作により作庭されたと伝えられている。

【居初氏庭園（いそめしていえん）】

広さは２０８坪。門を入ると霰敷を矩形に打ち、直線を強調した敷石が湖岸壁まで続く。その先には、サツキの大刈込が琵琶湖を背景に迎えてくれる。茶室の縁先へ導くように途中から直角に右に曲がる霰敷石。先には、袈裟型手水鉢が鎮座する。全庭を覆う杉苔、形よく手入れされた松やツツジ、飛石、置き石の配置が絶妙であり、東面に広がる雄大な琵琶湖と湖東の山々を借景する庭園は滋賀ならではの天然図画である。

琵琶湖の青、ツツジの紅、松の緑といったコントラストが庭園美を一層引き立てる。

縁先の手水鉢

【天然図画亭（てんねんずえてい）】

天然図画亭の名は天台の学僧　六如上人（りくにょしょうにん）が名付けたとされている。葭葺入母屋造、柿葺庇、平入り。玄関３畳、中の間４畳半（本勝手の茶室）、これに続く仏間６畳、主室は８畳と１畳の点前畳。玄関と主室には腰高障子を入れており、腰板には、海北友松（かいほうゆうしょう）作と伝わる花鳥が描かれている。点前座は向切、逆勝手で、中央に中柱を立て結界を作り遊具を客人に見せびらかさない謙虚な気持ちを表している。また、縁先には、秀吉の御座船にヒントを得た板蔀の仕掛けや、出庇、腰高障子は、茶室越しに眺める庭園を図画のように見せるための演出である。

建物名称	居初氏庭園と天然図画亭
建築年	1681年（天和元年）
構造・様式	葭葺入母屋造
所在地	大津市堅田2丁目12番5号
電　話	077-572-0708
開館時間	9：00～16：30　日曜10：00～15：00 （要事前予約）
アクセス	JR湖西線堅田駅　徒歩15分
備　考	国指定名勝　滋賀県指定文化財

外村宇兵衛邸（てんびんの里　伝統家屋博物館）

とのむらうへいてい

滋賀県東近江市

主屋表門

外村宇兵衛邸は、五個荘商人を代表する商家として隆盛をきわめた。現存する主屋は、１８６０年（萬延元年）に京都の大工西村冨次朗・川瀬忠次郎によって建築された。２，７２３㎡の敷地に、家業の隆盛と共に数次にわたる新増築が重ねられ、盛時には十数棟が立ち並ぶ壮観なものであったが、現存されているのは、その半数程となった。しかし、五個荘商人の本宅の典型を示すものとして、保存整備計画工事が計画され、往時の姿に復元し、平成６年より伝統家屋博物館として一般公開されている。主屋は中央部が二階建て、北部と北西部が平屋になっていて土蔵に接続している。主屋の背面には「オクニワ」に続いて平屋のミズヤ棟が建ち、主屋の前面には南側の道路に沿って便所、表門、カワトが続いている。

川戸（カワト）

敷地の周囲を流れる水路の水を敷地内に取り入れ、炊事等の日常生活に利用するところ。鯉が育てられていた。

見どころ

五個荘町は、近代日本経済の基礎を築いた近江商人の発祥の地の１つとして知られ、優れた歴史的な町並みが多く残っている地域である。古代の条里制の区画を継承する農地と浄土真宗の寺院と鎮守の杜を核とした湖東平野の典型的景観を形成している。国の伝統的建造物群保存地域にも指定されている。現在も本宅として居住・管理されているものは多く、商人屋敷も公開されている所が５ヶ所ある。単体の建物見学に留まらず集落としての空間構成が味わえる。水路・白漆喰・板張り・宅地内の庭木等が美しい景観を生んでいるが、板張りには琵琶湖で使用済みになった舟板が利用され、趣を醸し出している。あつい信仰心をもって、「生業と菩薩の業」を忠実に行動にうつし、「先義後利」の精神での商いが、今広く知られている　「三方よし」に繋がっている。

主と客と継承者しか上がれない２階階段に設置されている可動床板収納

取替可能な敷居と中継ぎの畳

主屋二階の座敷

近江商人は他国で店を出した後も出身地に居宅を持ち、妻や子供たちが中心となって留守宅を守った。それが「本宅」である。
商人たちの生活は華美ではなく堅実なものであったが、庭園や茶室を持ち、文化的な質の高さがうかがえる住まいとなっている。また本宅は客を迎える場であり、妻による丁稚たちの育成の場であった。近江商人の妻の教養は重要な役割を担っていた。

敷地東部（川戸）側の町並み

旧外村宇兵衛邸保存整備事業報告書
東近江市五個荘金堂伝統的建造物群保存地区保存計画　　参照

建物名称	外村宇兵衛邸
建築年	1860年（萬延元年）
構造・様式	木造2階建て・瓦葺
所在地	東近江市五個荘金堂町645番地
電　話	0748-48-5557
開館時間	９：00～16：30 月曜日・祝日の翌日・年末年始　休館
アクセス	JR琵琶湖線　能登川駅から「近江鉄道バス神崎線」 ぷらざ三方よし前下車　徒歩5分
備　考	市文化財史跡指定

大津町家の宿　粋世

滋賀県大津市

おおつまちやのやど　いなせ

大津町家の宿　粋世

改修中にトタンを剥がしたところ現れた黒壁を基に、黒大津壁を復元した外壁。白漆喰の虫子窓も手を加え復元されている。内部の階段壁は、既存壁に合わせて、黄大津壁、浅黄大津壁で仕上げられ、大津町家の特色が伺える。改修計画により、逆勝手に掛け替えられた階段からは、中庭を望めるようにひと工夫されている。

見どころ

昭和8年（1933年）に建てられた米問屋の店舗兼住宅を、大津市で初の空き町家を活用した外国人観光客向け宿泊施設として再生したのが、大津町家の宿　粋世である。伝統木造構法を活かした構造設計、米問屋ならではの重厚で風格ある大津町家のディテールを継承しつつコンバージョンされた室礼は、外国人に限らず、日本人にとっても懐かしくて心地よい。オーナーが建築士であり、自らが設計・監理された点においても興味深い建物である。まずは宿泊して、この土地の歴史文化に触れながら、和の趣と昭和レトロが融合した魅力的な和の空間を堪能することをお奨めしたい。

奥へと続く通り土間とその上部に広がる火袋、健全な状態の木組みは当時のままでありながら、宿泊施設として改修するにあたり直面した建築的問題、法令的課題に対する解決策は大いに参考になる。

蘇った庭

16畳のコミュニティスペース

建具、照明器具、金物等の殆どを再利用している。新調するにあたっては、既存デザインを踏襲することで調和に配慮し、落ち着いた居心地の良い空間演出に繋がっている。客室は全室５部屋。往時の面影を至るところで感じられる町家の宿である。１６畳のコミュニティースペースでは、地域文化に触れるイベントや集まりが賑やかに催されている。

通り土間と火袋

客室 秋月

客室 夕照

建物名称	大津町家の宿　粋世
建築年	昭和8年（1933年）
構造・様式	木造2階建て
所在地	大津市長等3丁目3-33
電　話	077-510-0005
Ｈ　Ｐ	www.inaseotsu.com
開館時間	9：00～21：00　（電話対応時間）
アクセス	JR琵琶湖線大津駅徒歩20分　タクシー５分
備　考	国登録有形文化財（粋世主屋）

公人屋敷（旧岡本邸）

くにんやしき

滋賀県大津市

主屋と表門

米蔵と馬屋

敷地奥の現存する米蔵は、公人として徴収した年貢米などを蓄えておく延暦寺専用の米蔵で、馬屋は主に滋賀院門跡等にあいさつのため坂本に訪れた上級武家の馬を預かる施設として設けられていた。
（手前は、解体された、離れの跡）

座敷や神前の間には、江戸中期に活躍し、晩年を坂本で過ごした横井金谷（1790～1832）の描く襖絵（現在は大津市歴史博物館所蔵）が据えられている。

見どころ

坂本は、徳川幕府から延暦寺の寺領として寄進されていたため、幕府や大名からの支配は受けなかったが、代わりに「公人」（くにん）と呼ばれる人々が置かれた。「公人」とは、延暦寺の僧侶でありながら、妻帯と名字帯刀を認められ、三塔十六谷からなる延暦寺の堂舎・僧房に所属し、治安維持や年貢・諸役を収納する寺務を務めていた人々を言う。延暦寺の諸行事が滞りなくおこなわれるため、社会の安定に大きな役割を果たしていたのが公人達である。岡本家は代々公人を務め、家屋は全体に公人屋敷としての旧状をよく留めた社寺関係大型民家の特徴を示す住宅である。明治維新の神仏分離の折、延暦寺を離脱し、日吉大社の神職となったことから、社家となり現在に至っている。桁行八間、梁間五、五間切妻平入りで、南北に縁側、東西に下屋を配している。

座敷横、奥の四畳間は「神前の間」と呼ばれ、祖霊社が設けられている。この点が一般の住宅と異なる所。岡本家が延暦寺公人衆を離脱する明治初期までは、仏間であったと思われる。

神前の間

玄関右手側に取り付けられた鳥籠の様な窓。

通りニワより、玄間・表門をみる。年貢米を乗せた馬は、この通りニワを通ったと推測されている。

台所

坂本は、比叡山延暦寺と日吉大社の門前町として発展してきた、神と仏が住まう祈りのまちである。大きな特徴は、里坊と石垣。石垣は穴太衆積と呼ばれ、穴太の地に住む石工たちが、最澄が比叡山に延暦寺を開創するにあたり、最澄とともに比叡山に登り土木工事に携わる中で、高度な職能集団を形成していった。「里坊」制度ができ、山上の僧侶は60歳を向えると山をおり、坂本に住居を設けた。里坊は、道路に面して野面石を積んだ穴太積みの石垣を設け、その上に土塀や生垣、竹垣を配し、主屋を囲んでいる。江戸時代前期から後期にわたり築城で養った石垣技術の粋を集めて構築された石垣と、「里坊」という住居形態でつくられた町並みは、一体となって歴史環境を形成している。個の建物と共に、町全体が興味深い地域である。

穴太衆積

大津市観光振興課、坂本観光協会資料
「穴太衆石積みの歴史と技法」　福原成雄　　参照

建物名称	公人屋敷（旧岡本邸）
建築年	1864年（元治元年）
構造・様式	木造２階建て・瓦葺
所在地	大津市坂本六丁目２７－１０
電　話	077-578-6455
開館時間	９：00～17：00　（入館は16：30まで） 月曜日・祝休日の翌日　休館
アクセス	JR湖西線　「比叡山坂本」駅から　徒歩10分 京阪電車　「坂本比叡山口」駅から　徒歩1分
備　考	大津市指定文化財（建物）・伝統的建造物群保存地区

豪商　稲葉本家

ごうしょう　いなばほんけ

京都府京丹後市久美浜町

外観

当家は平成13年9月、十四代当主にあたる稲葉昭次氏から土地を買収、家財、文書を含む建物を提供いただき、歴史的建造物の保存修理を基本に、町内外の人々が交流できる場として建物を一部改造し「豪商稲葉本家」として開館したものである。

稲葉家初代は「美濃国の武将として生まれたが、武田信玄に抗して敗れこの地に移り住んだ」と言われているが正確にはわからない。推測では約450年美濃国（岐阜県）又は信濃国（長野県）からこの地に住んだものと思われる。

初代喜兵衛代から家業は糀屋で、七代目から潘の用達とともに沿岸交易により財を成した。七代・八代から付近諸藩の金融を一手に引き受ける豪商となり、代々付近を買い取り現在の屋敷となった。

間取り図

約709坪（2,345㎡）の広大な敷地に母屋・奥座敷・蔵・匠処・雛御門・通路（土間）からなり延べ面積は1,101.45㎡となる。

1階母家奥の和室

見どころ

【母家】

この住宅は長年火災などにあわなかったため不便となり、明治18年から5か年をかけ新築されたものである。玄関から土間に入り目に入るのが、この圧倒するような吹抜けの大空間である。部材は欅の柱を多用し、松材の太い柱を井桁状に組み上げて豪壮な木組を示すなど、上質かつ堅牢な構造形式となっている。しかも土間と居間を一体としてその四周には化粧貫を回らせ、空間の壮観さをよりいっそう演出している。この土間と居間を一体に吹き抜ける空間構造は、貫を多用する意匠とともに但馬地方の伝統的な町家建築にも共通に認められ、地理的に近接する但馬地方をも含めた地方形式をよく示す典型事例である。また、通り土間から独立して設けられた厨房空間はほとんど改造されず今日まで残されたことで、この地方の生活史を考える上での希少な資料として貴重である。

【吟松舎（ぎんしょうしゃ）】

奥座敷は「吟松舎」と呼ばれ文政年間（1818～1829）に浜別荘として当家北側に建築、その後移築された。派手さはないものの適度に数寄屋的な要素を散りばめられて書院座敷としてのまとまりもよく、広縁を介して庭との一体的な空間が形成されている。

【雛御門（ひなごもん）】

「雛御門」と呼ばれる長屋門は平入桟瓦葺き切妻造りの2階建てである。桁行9.4m梁行3.9m。屋根の両妻側に卯建（うだつ）を上げている。但馬地方の町々に見られるが、稲葉家もこの伝統に沿って上げたものと言える

建物名称	豪商 稲葉本家
建築年	明治18年（他文政年間建物移築）
構造・様式	木造2階建て、平屋建て
所在地	京丹後市久美浜町3102
電話	0772-82-2356
HP	http://www.inabahonke.com/
開館時間	9:00～16:00（水曜休館）
アクセス	舞鶴若狭自動車道「春日IC」→北近畿豊岡自動車道「神鍋高原IC」から豊岡経由久美浜（25km）
備考	国指定 登録有形文化財（2003年1月31日指定）

聴竹居

ちょうちくきょ

京都府乙訓郡大山崎町

聴竹居

昭和3(1928)年の創建時より変わらぬ姿で京都府乙訓郡大山崎町の天王山の麓に建つ聴竹居は、建築家・藤井厚二の第5弾の自邸として建設された名作住宅である。和洋の生活様式の統合とともに、日本の気候風土との調和を目指した昭和初期の日本の住宅として、先駆性、歴史的・文化的価値が高く評価され、藤井厚二の数ある建築物の中でも現存している貴重な物件である。それまでに建てた4軒の実験住宅の経験を活かし、真に理想的な住宅を建てるにあたって次の5つの条件をもとに聴竹居は作られた。

■8人の人間が快適に住むのに充分な大きさとする。
■来客の応接用に当てる空間は可能な限り減らし、家族の居住空間の快適さを第一とすること。
■腰掛式(椅子式)生活を主とし、畳生活も混用する。
■木造平屋の建物とし、建物のサイズを可能な限り小さくするため、調理と暖房のための電気器具を取り付けること。
■夏季の生活の快適性を第一に考慮すること。

これらの条件は日本の住宅のテーマというべきものである。
「真に日本の気候風土にあった、日本人の身体に適した住宅」を生涯追い求めた藤井厚二の研究と実験の集大成を是非ご覧になり、体感していただきたい。

見どころ

食事室

居室とゆるやかに仕切られる

【食事室】居室の床より15cm上げて設けられた食事室は完全に仕切らず、居室の一部となっている。ベンチシート横の台の上部には花籠が吊られ、日々季節の花が盛られていた。

読書室

【読書室】居室に連続する位置に読書室と名付けられたコンパクトで機能的な設えの勉強部屋がある。わずか4畳あまりの空間に、藤井と姉妹の机と本棚が造り付けられている。子供たちの机は縁側に面して障子で仕切られ、障子を開ければ縁側越しに季節を感じる庭が望める。

【調理室】キッチンも食器棚もすべて造り付けで、作業台の引戸を開けると食事室と繋がっている。今でいう対面式キッチン。当時ではめずらしいオール電化住宅である。

調理室

客室

【客室と床の間】聴竹居の中でも特にデザイン性の高い空間。板間に椅子とテーブル、造り付けベンチが置かれ、窓には紙障子。椅子式の洋風を取り入れながら、細部を和の自然素材で構成している。
床の間は椅子に座った人に対応した目線の高さとしている。床の間と部屋を同時に照らす和紙の照明も藤井のデザインである。

縁側

【縁側】
南に面する細長い縁側。長手は約5,753㎜。三面をガラス戸(ガラスは建設当時のもの)で囲まれ、深い軒裏が視線に入らないように床から1,700㎜上部はすりガラスとし、下部も同様にすることで、四季折々の景色が額縁に切り取られたパノラマで楽しめる。
冬の晴れた日は特に暖をとる必要もなく、効率の良いサンルームとして家事や家族の団らんの場となっていた。

角に柱を設けない手法のコーナー部分を利用した花台

涼しく暮らすための工夫も見どころのひとつである。庭の木々や深い庇が夏の直射日光を遮る。また、気流・通風を考慮した通風口、床下の冷たい空気を内部を通し屋根裏へ排出させる天井排気口や、西側に設置された通気口から地中に埋め込んだ土管を通して外気を室内に送るクールチューブは天然のクーラーである。襖や障子、欄間を開けることで風が通り抜け、家は大きな一室となる(一屋一室)。
断熱は様々な研究検討の上、土塗壁を採用している。仕上げは和紙を貼るなど、天然の調湿を考えた、まさに現在の無添加・パッシブ住宅である。

建物名称	聴竹居
建築年	昭和3(1928)年
構造・様式	木造平屋建て
所在地	京都府乙訓郡大山崎町谷田31
電話	(問い合わせ、見学申込はHPから)
HP	http://www.chochikukyo.com/
開館時間	水・金・日曜日　9:00～16:00【事前申込要】
アクセス	JR山崎駅より徒歩5分　駐車場なし(近隣パーキング有)
備考	国指定 重要文化財 (2017年7月31日指定)

頼山陽書斎（山紫水明処）

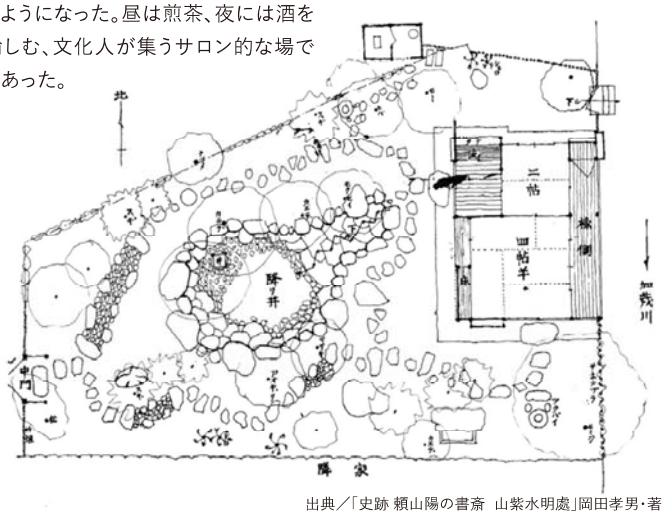
京都府京都市上京区

らいさんようしょさい（さんしすいめいしょ）

山紫水明処

山紫水明処は『日本政記』、『日本外史』の著者であり、江戸時代後期の歴史家、思想家、漢詩人、文人で、明治維新の原動力となった頼山陽が晩年を過ごした建物である。自宅である水西荘の庭内に増築した建物は草堂風の書斎と茶室をかねた離れであり、『日本外史』全22巻はここで完成した。

当時、川幅は広かったため現在のような垣根はなく、鴨川に面した縁側の下には清流が流れていた。東に見える鴨川の対岸の柳と遠くに見える東山三十六峰を一望する眺めを山陽は大変愛したと伝えられている。この書斎に山紫水明処という名をつけてから、一般に「山紫水明」とは風向明媚の代名詞として使われるようになった。昼は煎茶、夜には酒を愉しむ、文化人が集うサロン的な場でもあった。



出典／「史跡 頼山陽の書斎　山紫水明處」岡田孝男・著

見どころ

四帖半

【四帖半】

四帖半の天井は琵琶湖の葭（よし）の穂先を並べて漆で仕上げたものに、北山小丸太の隅木で寄棟の化粧屋根裏（四注天井）。

壁の腰板と建具の腰は網代で仕上げた風流なものである。

【外格子】

内障子の桟に合わせた西側地窓上部の外格子。直線は竹で曲線は南天の枝を使った趣のある華奢な作り。

【西側地窓】

西側の地窓の室内側には網代戸、外部は雨戸。ここから茶や酒を運んだという。

西側地窓と外格子

降り井

【降り井】

かつて鴨川の伏流水が湧き出していた「降り井」。地面から2mほど下に設けられている非常に珍しい意匠である。山陽が造ったかどうかは不明。

鴨川の工事により現在は枯れている。

【建物】

葛屋葺（くずやぶき）入母屋造りの建物は、鴨川べりの湿気に耐えるように堅い栗材を用い、四帖半の主室と二帖の次の間、約一帖分の板の間から構成されている。

素朴な外観ながら高度な手法と贅沢な材料を惜しみもなく使用しており、遊び心が随所にみられる。京都の蒸し暑い夏と厳しい冬の寒さ、鴨川縁の湿気対策や換気に気を配った工夫も見どころ。

●柱は皮付き赤松を由緒ある建物より譲り受け再利用したものである。

●建具にガラスが使用されている。当時、輸入の吹きガラスは非常に珍しく、1枚のガラスで小さな家が一軒建つと言われるほど高価なものであった。

●支那風の手摺の意匠は、儒学・漢詩・煎茶など中国への憧れか。手摺の外には鴨川が流れ、遥か向こうに比叡山、東山、吉田山を望む。

●京都市眺望景観創生条例に基づき特に重要な眺望景観や借景として選定された「眺望景観保全地域」に指定されており、大文字を望む景観の視点場となっている。

路地に続く入り口

●見落としそうな敷地への入り口。当時の敷地は267坪あったが山陽が亡くなったあと人手に渡った。明治の孫の代で買い戻され、母屋を解体して借家を6件建てたため、路地を共用している。

建物名称	頼山陽書斎、山紫水明処
建築年	1828（文政11）年
構造・様式	木造平屋建て・葛屋葺入母屋造り
所在地	京都府京都市上京区東三本木通丸太町上ル南町
電話	一般財団法人 頼山陽旧跡保存会　075-561-0764
HP	なし　（詳細はお問い合わせを）
申込方法	見学は希望日の2週間前までに往復はがきにて【事前申込要】
アクセス	京阪電車　神宮丸太町駅より徒歩6分
備考	国指定 史跡（1922年3月8日指定）

がんこ「平野郷屋敷」（旧辻元家住宅）

大阪府大阪市

がんこ「ひらのごうやしき」（きゅうつじもとけじゅうたく）

外観

旧辻元家住宅は平野郷鞍作（現・大阪市平野区加美鞍作）の豪農辻元家の本宅として江戸時代初期に建設された近世和風建築である。通称は平野郷屋敷。約1100坪の敷地に、主屋をはじめ長屋門、蔵5棟、茶室が建っており、床面積合計は約804坪。
1990年からレストラン「がんこ平野郷屋敷」の施設となりまた1993年からは「平野町ぐるみ博物館」を構成する施設となって、屋敷内に「くらしの博物館」が設けられた。
（ウィキペディアより）

くらしの博物館

見どころ

約1100坪の敷地に、主屋をはじめ長屋門、蔵5棟、茶室が建っており、敷地の多くを占める日本庭園は、大阪万博の日本庭園を手がけた木戸雅光による作庭である。
大阪市南部の平野区は、堺などと同じく自治都市であり、豊臣氏の正妻おねの領地であったため、大阪の陣の後も自治権を維持することができた。大阪が東洋のマンチェスターと呼ばれる所以の綿産業の中心地であり、豪農豪商の家が多く、戦禍にあっていないため、古い寺社、民家が今も残っている。辻元家はその一画にあり、江戸時代より庄屋・村長などの要職に就き、苗字･帯刀をを許された豪農である。
平野郷屋敷は、４００年前の江戸時代初期に建てられ、現在は寿司、和食のチェイン店が購入し「がんこ平野郷屋敷」店として営業している。過去に重要文化財の指定の話があったらしいが、古い母屋に接続の増築が多く、復元が難しいので断ったとのこと。
辻元家が所有していた絵画、茶器など文化財が店内と衣装蔵だった「くらしの博物館」に展示されている。
大阪府建築士会が毎年実施しているヘリテージマネージャー養成講座の見学先としても採用されている。
大阪市立工芸高校が広報動画を製作している。
https://www.youtube.com/watch?v=V0oIJNVI3UI

母屋全景。

玄関ホール

庭を見渡せる客室

長屋門
奥に母屋玄関が見える。玄関は明治に入って増築されたと

庭には７０種類の植物が植えられている。雑木林をイメージして造られたそうだ。

くらしの博物館内部
「伊万里赤絵」や「楽焼」の茶碗の他、室町時代の画僧、吉山明兆の作とされる「飛鯉之図」や、江戸時代中期の絵師である伊藤若冲による「水鳥」の掛け軸など、非常に文化的価値のある作品を観ることができる。

建物名称	がんこ・平野郷屋敷（旧辻元家住宅）
建築年	江戸時代初期
構造・様式	木造・近世和風建築
所在地	大阪府大阪市平野区加美鞍作1-3-19
電　話	06-6796-0728
Ｈ　Ｐ	https://www.gankofood.co.jp/shop/detail/ya-hiranogou
開館時間	平日11：00～15：00　17：00～22：00 土、日、祝　11：00～22：00
アクセス	ＪＲ関西本線 加美駅 徒歩3分
備　考	

旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）

大阪府吹田市

きゅうにしおけじゅうたく（すいたぶんかそうぞうこうりゅうかん）

主屋全景

旧西尾家住宅は、平成21年（2009年）12月8日、重要文化財に指定された仙洞御料庄屋屋敷である。数寄屋風を意識した主屋、茶道藪内家の指導になる茶室、牧野富太郎の関与が伝えられる温室、建築家武田五一が和洋折衷の意匠を試みた離れなどで、文化性に富む優れた建築である。日本を代表する音楽家、貴志康一の生家でもある。近代の生活や文化が見事に体現された和風住宅建築として極めて優れている。

積翠庵

見どころ

仙洞御料庄屋の伝統を感じさせる表門、主屋の式台玄関、大座敷と次の間との境の置上げ技法による菊華をあしらった欄間や水仙の釘隠し、大正頃のガラス戸のある広縁、箱階段や電話室、台所南壁面の刃形開閉器を備えた古風な配電盤。また、台所には武田五一デザインといわれる家具等がある。離れでは和風棟土縁の丸窓や皮付き丸太の垂木を並べた化粧屋根裏の渡り廊下や洋風棟応接室のステンドグラスやサンルームの菱形ガラスの嵌め殺し腰板等がある。又、離れの屋根瓦はアール・ヌーヴォー風とも言われている。

【主屋】

桟瓦葺入母屋造り、本二階建の豪農の建物である。居住棟、玄関棟、計量部屋棟の３棟で構成され、南側には式台付の玄関があり、接客用の六畳の茶室（味々庵）がある。西側奥に十二畳半に床、床脇、付書院を設けた大座敷、その手前に十畳の間があり、南側には幅一間の広々とした縁側が廻っており、全面カットガラスのはまった引違戸が建て込まれ、極めて華やかな雰囲気を醸し出している。

【積翠庵（せきすいあん）】

第十一代当主與右衛門義成は藪内流十代休々斎に師事し、藪内家の茶室「燕庵」と「雲脚席」の写しといわれる積翠庵を建てた。母屋西側の庭には桂離宮の卍亭とも箱根三井別邸の四腰掛の写しともいわれる四阿がある。

【離れ】

武田五一の簡素で洗練された和風意匠の和風棟とビリヤード室、応接室、それに付属するサンルームの洋風棟が渡り廊下で繋がれている。全体としてゆったりしているのは当時には珍しいメートル・モジュールで作られているからである。応接室には武田五一デザインによる花と鳥をあしらたアール・ヌーヴォー風の質の高い意匠のステンドグラスや、セセッション風のオリジナルの照明器具が残っている。また、五一の住宅改善の提案を具体化した水廻りの工夫がみられる。流しと一体となった開放的な出窓や通風への配慮がなされている。水洗便所のための浄化槽なども設けられていた。

建物名称	旧西尾家住宅（吹田文化創造交流館）
建築年	（主屋）1895年（明治28年）
構造・様式	木造一部2階建て・数寄屋
所在地	大阪府吹田市内本町2丁目15番11号
電　話	06-6381-0001
Ｈ　Ｐ	http://www.suita.ed.jp/hak/Kyunishioke/kyunishioke.html
開館時間	9:30～16:30（月曜休館）
アクセス	JR吹田駅又は、阪急吹田駅下車徒歩10分。
備　考	平成21年（2009年）2月8日　重要文化財に指定 （主屋以外の見学は要予約）

堺市茶室　伸庵・黄梅庵

大阪府堺市

さかいしちゃしつ しんあん･おうばいあん

千利休をはじめ多くの茶人を輩出した堺の茶室と千利休の茶の世界に触れる。

世界最大級の墳墓・仁徳天皇陵古墳前の大仙公園内には国登録有形文化財である堺市茶室「伸庵」「黄梅庵」がある

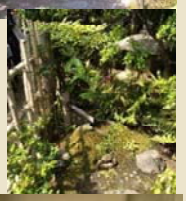
〈写真：堺観光ｶﾞｲﾄﾞHP〉

見どころ

2つの移築された建物をつなぐように露地が整備され、元々この場所に建てられていたかのように馴染んでおり、季節の風景とともに和の意匠を体感することができる。

黄梅庵　躙口

待合



貴人口

蹲

伸庵

（写真：個人撮影）

伸庵 立礼席

伸庵〈写真：堺観光ｶﾞｲﾄﾞHP〉

【伸庵(しんあん)】
昭和4年に数奇屋普請の名匠といわれた仰木魯堂が粋をこらして建てた茶室で元東京芝公園にあったものを昭和55年に福助株式会社から寄贈され移築。一部2階建の桟瓦葺の建物で、中庭を囲み玄関・広間・茶室・座敷等が配置されている。各室の柱間寸法の決め方や畳の寸法は江戸間や京間、中京間を組み合わせた特色ある間取りで、面皮材や丸太材、角材の柱材も適所に用いる工夫が見られる。茶室は伝統的な平三畳台目の形式を踏襲しながらも、貴人口を併用することで客座の開放感など近代らしい空間が作られている。茶室を含めて10室の和室がある。

黄梅庵〈写真：堺観光ｶﾞｲﾄﾞHP〉

【黄梅庵(おうばいあん)】
奈良県橿原市今井の豊田家住宅（国指定重要文化財）にあった江戸時代からの茶室を、日本の電力開発に尽力し茶道の四天王の一人とされた故松永安左エ門翁（耳庵）が譲り受けて改装し小田原で愛用されていたもので、昭和55年に遺族より寄贈され移築したものである。庵名は梅の実が黄熟する頃に完成したことから、耳庵によって命名。外観は銅板葺きの屋根を重ね合わせた変化に富んだ構成で、内部は八畳敷の広間と小間と勝手水屋等からなり、広間の正面には床を構え、天井は化粧屋根裏とした軽快な数寄屋造である。また、小間は平三畳で下座床を設け炉は向切としている。豊田家の頃には今井宗久の茶室であったと伝えられていたが、建築様式的にはその頃まで遡ることが難しく、建築された年代等は不明である。しかし堺の茶人今井宗久・宗薫親子ゆかりと伝えられる茶室を耳庵が移築し愛用したことも、歴史的価値を高めている。

建物名称	堺市茶室「伸庵」「黄梅庵」
建築年	「伸庵」昭和4年　　「黄梅庵」江戸時代
構造・様式	「伸庵」木造2階建　　「黄梅庵」木造平屋建
所在地	堺市堺区百舌鳥夕雲町2丁（大仙公園内）
電　話	072-247-1447
Ｈ　Ｐ	https://www.sakai-tcb.or.jp
開館時間	9:30～16：30（月曜休館）
アクセス	JR阪和線百舌鳥駅徒歩6分　駐車場有
備　考	堺市登録有形文化財

さかい待庵・無一庵（さかい利晶の杜）

大阪府堺市

さかいしちゃしつ　さかいたいあん･むいちあん

堺出身の偉人千利休と与謝野晶子をクローズアップしたミュージアム「さかい利晶の杜」が千利休屋敷跡の前に2015年に開館した。そこには千利休作とされる茶室が復元されている。

さかい待庵〈写真：さかい利晶の杜HP〉

見どころ

建造当時の利休の構想を文献等から読み取り復元されている。利休の茶の世界・茶室に対座した時の距離感や空間を体感して頂きたい。

1尺3寸4分角の隅炉と5尺の床

天井

躙口

さかい待庵（写真：個人撮影）

無一庵〈写真：個人撮影〉

さかい待庵〈写真：さかい利晶の杜HP〉

【さかい待庵（たいあん）】
京都府大山崎町の妙喜庵にある「国宝待庵」は千利休作で唯一現存する茶室であり、利休が豊臣秀吉の山崎城内に営んだ簡素な素材で造られた、二畳隅炉の極侘びの茶室を移築したものである。「さかい待案」は「国宝待庵」の造形性で床の間口幅や炉の大きさなどの不可解な問題点を洗い直し、その祖形を復元している。

無一庵〈写真：堺市より提供〉

【無一庵（むいちあん）】
天正15年10月1日に催された北野大茶の湯において、豊臣秀吉・今井宗久・津田宗及の四畳半と共に構えられた利休の四畳半の復元である。

千利休屋敷跡〈写真：さかい利晶の杜HP〉

建物名称	さかい利晶の杜　「さかい待庵」「無一庵」
建築年	2015年
構造・様式	木造平屋建
所在地	堺市堺区宿院町西２丁１番１号
電　話	072-260-4386
Ｈ　Ｐ	https://www.sakai-tcb.or.jp
開館時間	9:00～18:00（月曜休館）
アクセス	阪堺線 宿院駅徒歩1分
	南海高野線 堺東駅よりバスで約6分
	南海本線 堺駅より徒歩で約10分／バスで3～5分

太閤園「淀川邸」（旧藤田男爵家 東御殿）

大阪府大阪市

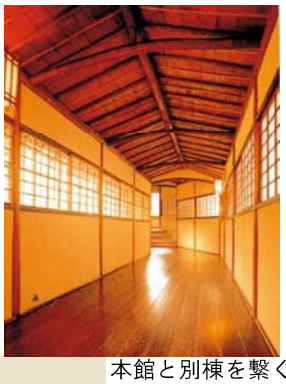
たいこうえん「よどがわてい」（きゅうふじただんしゃくけ　ひがしごてん）

旧藤田男爵家の「網島御殿」としての約8000坪の庭園と重厚な和風建築群の内、戦災を免れた東御殿がこの「淀川邸」である。複数の料亭・レストランからなる「太閤園」の和館料亭部分を占めている。奈良や京都とは異なり、自分達のハレの和の空間、ハレの室礼･調度品を大空襲で失ってしまった大阪市民にとって、戦後公開されたこの淀川邸は、近世から育み円熟させた住文化のハレの部分を担ってくれる場所でもあり、四季の美しさを愛でる心と、品格ある和の空間の魅力をつなぐ、大切な場所となった。お見合い･両家引合せの思い出や、婚礼はもちろん、長寿・結婚記念日など家族の幸せな日は、数多くある大小の和室が場となり、受賞祝賀会・謝恩会・同窓会など社交の場としても、今も「きものを着て行きたい」憧れの場所である。寺社でなくホテル・旅館でもないその数々の和室は「太閤園の〇〇の間の感じ」という施主の声に繋がることもある。

太閤園の門

車もこの門を潜る。入って正面が淀川邸、右に進むとＲＣの新館「迎賓館」に横付けとなる。

淀川邸の玄関



本館と別棟を繋ぐ廊下

離れ茶室「大炉の間」

見どころ

最大の大広間には尺角とも思われる台湾からの桧の柱や美しい柾目の長い長押、一枚板の精巧な欄間など、素晴らしい材による構成と細部の意匠が見られる。また能舞台に転じる仕掛け、置かれた調度品、生け花と器、季節による建具の開け具合など、おもてなしの心が散りばめられている。明治期からいわゆる邸宅が西洋式に動く中、関西財界では欧米に流出する貴重な品の蒐集に力を入れると共に、豊かな和の衣食住の文化を守ろうとする向きがあった。五代友厚氏に次いで第２代大阪商工会議所会頭を務めた藤田傳三郎氏もその一人であり、道を挟んで広大な敷地に茶室などと共に存在する藤田美術館は、有名な国宝曜変天目茶碗をはじめ数々の国宝・文化財が春・秋の季節限定で蔵の中で展示されてきた。

（藤田美術館は2020年に向けて建替、閉館中）

庭を散策すると、四季折々の風景の中に数棟が見え隠れし、複数の料亭・レストランとなっている。何度訪れても飽きることはなく、しかし変わらぬ空気が漂う。

邸内の十数室の大小の和室

それぞれ趣が異なる。畳に懐石膳または座卓であったが、今は椅子が中心である。

本館１階「桜の間」

本館１階「羽衣の間」とその欄間

建物名称	太閤園　料亭 淀川邸
建築年	明治43(1910)年頃
構造・様式	木造2階建
所在地	大阪市都島区網島町9-10
電　話	06-6356-1110(太閤園代表)
Ｈ　Ｐ	https://www.taiko-en.com/restaurant/yodogawatei/
開館時間	12:00～22:30（営業時間）
アクセス	JR東西線大阪城北詰駅(3 号出入口)徒歩 1 分 京阪京橋駅(片町口)徒歩 7 分 地下鉄長堀鶴見緑地線京橋駅(2 番出口) 徒歩 5 分
備　考	写真提供:太閤園

適塾　旧緒方洪庵住宅

大阪府大阪市

てきじゅく　きゅうおがたこうあんじゅうたく

【外観】

【客座敷】都会の喧騒を忘れそうな静かな時間が流れています-⑥

【客座敷と大阪欄

【欄間模様】

【格子】

大阪市中央区北浜のオフィス街に現存する適塾は、我が国唯一の蘭学塾の遺構です。現在は国史跡・重要文化財として内部を観覧することができます。適塾は、蘭医学研究の第一人者とされる蘭方医緒方洪庵（1810-1863）が1838（天保9）年に開いた塾で、ここでは西洋医学の研究をはじめとして、種痘事業やコレラ治療など、大きな医学史上の業績が生まれました。また、適塾は幕末から明治維新にかけて、近代日本の国家形成に関与する幾多の人物を輩出しました。門下生の数は、1844（弘化元）年以降の入門者の署名帳「姓名録」に記載されただけでも636人、このほかに通いの塾生や1843年以前の門人等を含めると、史料から判明する範囲でも1000名を超えるものと推定されています。塾生以外に教えを乞うた者も多数あると考えられます。

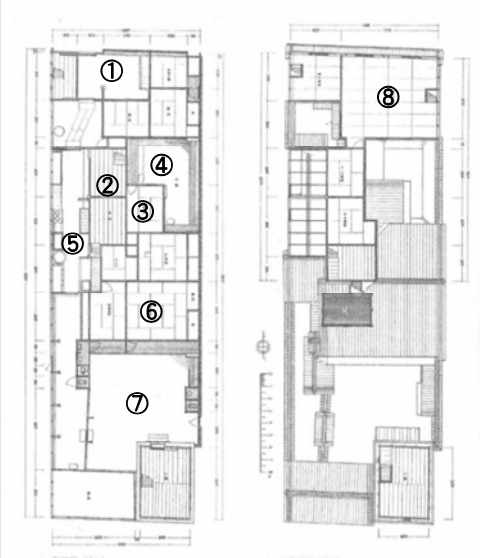
現存する適塾は、1845（弘化2）年に洪庵が当時の過書町に町屋を購入し、瓦町の旧適塾から移転して拡張した建物です。「適塾」の名称は、洪庵の号「適々斎」にもとづいて名付けられ、「適々斎塾」、略して「適々塾」「適塾」とよばれました。

適塾の元塾生らを中心として創立された大阪医学校は、幾多の変遷を経て、大阪帝国大学医学部、そして大阪大学医学部へと発展し今日にいたっています。

［大阪大学適塾記念センター　HP　より］

見どころ

大阪北浜の高層ビルが建ち並ぶ街に戦禍を免れた最古級の近世大坂の町屋であること、オモテの店構えとオクの住居部分をつなぐ町屋形式で関西では「表屋造」「出店造」と呼ばれ、かつては船場に多く存在した町屋を見ることができます。



敷地464㎡
間口11.9m
奥行38.9m

【1階】　【2階】

【台所】-②

【書斎】-③

【玄関】-①

【主屋の庭】-⑦

【土間吹抜け】-⑤

【中庭】-④

【塾生大部屋】全国から集まった塾生が生活と勉学に励んだ部屋-⑧

建物名称	適塾　旧緒方洪庵住宅
建築年	寛政４年(1792年）大火、現在の建物はそれ以降の建築
構造・様式	木造一部2階建
所在地	大阪市中央区北浜3丁目3番8号
電　話	06-6231-1970
Ｈ　Ｐ	http://www.tekijuku.osaka-u.ac.jp/
開館時間	午前10時～午後4時　　休館日　月曜日　他
アクセス	大阪メトロ淀屋橋駅から徒歩約5分
備　考	国指定 史跡・重要文化財 写真提供　大阪大学適塾記念センター

倚松庵

いしょうあん

兵庫県神戸市

外観

「椅松庵」は、文豪・谷崎潤一郎が1936年から1943年まで居住し、松子夫人やその妹たちをモデルとした小説「細雪」の舞台となりました。庵内には著書や参考文献等を集めた「谷崎文庫」を併設しており、「文学の庵（いおり）」として、多くの市民や観光客に谷崎文学の世を親しんでいただくことを目的として開館されています。

2階8畳

見どころ

小説「細雪」の舞台というだけあって、小説の情景を思い起こすことも楽しみの一つです。2階8畳は（右上写真）、演奏会に出かけるために3姉妹が装いをこらすという優雅な「細雪」の冒頭のシーン。また、この部屋は、幸子・貞之助夫婦の寝室で、東に1間、南に1間半の窓があり、欄干があります。さんさんと陽光が差し込み、家中で一番明るく広い空間となっています。

右の写真は2階西の部屋。六甲山脈を望めるのはこの部屋のみで、山の見える風景の「外へ向かって開かれた」雰囲気が作家に「旅立ち」場面を書かせる衝動を駆り立てたと言われています。

右の写真は1階洋間に面しているテラス。庭の土の面から30センチほど高くなっており、当時をそのまま復元されました。このテラスでの谷崎潤一郎と松子夫人とのツーショット写真は有名。

「大」大阪（1920年代に流行した呼称）のベッドタウンとして急速に進歩し始めた阪神間の中流階級の、和洋折衷の新建築の典型的な建物。付近の一般的な当時の農家の建築様式とも異なり、「昭和初期の典型的な」住宅様式となっています。

1階は、外観の和風建築の様相とは違い、洋間、食堂、廊下、テラス等が洋風になっています。「特にまっすぐな廊下はその象徴。各部屋に行くのに別の部屋を通らなくてもいいように、しかも、和風建築のよさも取り入れて隣室との通路も設けてある。（中略）洋的合理精神と和的協調精神の見事な調和である。」（参考資料引用）

対して2階は「細雪」の登場人物の部屋となる3つの和室からなり、庭の景色と相まつて、当時をしのばせる和風空間になっています。

※神戸市ホームページより一部引用

1階食堂

1階応接間

建物名称	倚松庵（谷崎潤一郎旧邸）
建築年	1929年（昭和4年）／移築復元1990年（平成2年）
構造・様式	木造２階建て
所在地	兵庫県東灘区住吉東町1-6-50
電　話	078-842-0730
Ｈ　Ｐ	http://www. city. kobe. lg. jp/information/project/urban/tender/isyoan. html
開館時間	土日のみ10:00~16:00(年末年始は休館)
アクセス	JR住吉駅から南東へ900m徒歩約12分/六甲ライナー魚崎駅から北へ150m徒歩約2分/阪神魚崎駅から北へ450m徒歩約6分/市バス東灘区役所前停留所から南へ500m徒歩6分
備　考	入館料無料

篠山市立　青山歴史村

兵庫県篠山市

ささやましりつ　あおやまれきしむら

長屋門

篠山市立青山歴史村は、篠山藩主青山家の明治時代の別邸（桂園舎）を中心として３棟の土蔵と長屋門から成り立っている。長屋門は篠山藩旧藩士澤井家にあった木造入母屋造、茅葺きのもので、昭和３２年（１９５７）にこの地に移築された。文化年間（１８０４～１８０８）頃の建築と考えられている。
これらの建物は、昭和６２年（１９８７）から青山歴史村として一般公開されていたが、平成１０年（１９９８）に歴史村を管理していた財団法人青山会から旧篠山町に全資産をご寄付いただいたのを機会に、町立（平成１１年より市立）の史料館として蔵書の保管をはかるとともに大学などの調査研究にも活用されている。
また、藩政文書とともに、青山家ゆかりの品々や篠山藩校「振徳堂」の蔵書などを所蔵している。その中から、全国的にも珍しい漢学書関係の版木（篠山藩では藩士の教育のために、版木で数多くの漢学書を印刷し刊行しており、当館には版木を１２００枚余り所蔵。材質は、桜の木を使用）、篠山城石垣修理伺の図面、藩政始末略、印判、鼠草紙絵巻（作者不詳。鼠を擬人化した室町時代の怪婚譚が主題で民衆の風俗等を描いている）、江戸時代の歴史文化を物語る史料の数々を展示している。

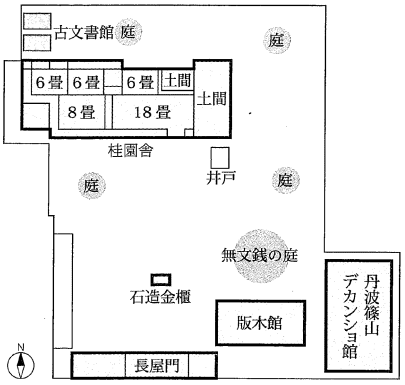
見どころ

青山歴史村は、篠山藩主青山家の別邸「桂園舎」(旧庄屋住宅を移築)を中心にして、３棟の土蔵と長屋門(移築)から成る。全国的にも珍しい漢学書関係の版木１２００余枚、篠山城石垣修理伺い図面、藩政始末略、印判、ねずみ草子等、江戸時代の歴史文化を物語る史料の数々を展示している。また、市民向け伝統文化関連ワークショップなども企画されている。伝統的建造物としては、主屋「桂園舎」は平入、土間＋変形六間取り＋縁側＋庭の構成で建設当初の姿がよく残されている。また、長屋門は市内では珍しい入母屋造、茅葺の建物で、武家屋敷の多くが消滅している今日、当時の形態をうかがい知る貴重な建物となっている。

桂園舎

金櫃

篠山市指定文化財。
花崗岩の板石で組み合わせた金櫃（金庫）で、江戸時代「貨幣司」が大手馬出付近にあり、土中に埋め地下金庫として使用していたもの。
縦216ｃｍ・横120ｃｍ
深さ70ｃｍ
石厚12ｃｍ



敷地面積　3,230.74㎡

建物名称	篠山市立青山歴史村
建築年	1804～1818年頃（1957年に移築）
構造・様式	木造平屋建・木造二階建
所在地	兵庫県篠山市北新町48
電　話	079-552-0056
Ｈ　Ｐ	http://www.withsasayama.jp/REKIBUN/aoyama_top.htm
開館時間	9：00～17：00（受付終了16：30）
アクセス	JR福知山線「篠山口駅」→ﾊﾞｽ「二階町」徒歩5分
備　考	景観重要建造物。長屋門は篠山市指定文化財。

兵庫県立舞子公園 旧木下家住宅

兵庫県神戸市

ひょうごけんりつまいここうえん　きゅうきのしたけじゅうたく

全景

旧木下家住宅は、神戸で海運業を営んでいた又野良助氏が、私邸として昭和16年に建てられた数寄屋造近代和風住宅である。昭和27年に明石で鉄鋼業を営んでいた木下吉左衛門氏の所有となり、平成12年に木下家より、兵庫県に寄贈された。民家風の虫籠窓を付けた主屋を中心に、東面に玄関、北東に台所、北西に茶室、南東に応接室、南西に書院を配し、北側に中庭を取り込んだH字型平面となっている。
木下家の所有となったのち、昭和28年頃に土蔵を移築、昭和30年代に納屋の増築などを経て、今日の姿となる。
主屋（主棟）はツシ二階建てで、南面は応接室と書院が張り出し、座敷、中室の縁側からテラス状の靴脱ぎ、芝生の前庭との連続性は、和風住宅ながら洋風を想起させる構えとなっている。応接室は大壁の漆喰塗仕上げで、大理石貼りのマントルピース、アールデコ調の照明器具など、昭和初期の洋風住宅の意匠の特徴が良く現れている。
茶室は、掛け込み天井や下地窓、土壁、シャレ木の床柱等が使われ、草庵風である。待合、水屋などの設えとともに昭和戦前期の雰囲気を良く留めている。便所、洗面所周りは廃材の木材が使われるなど、数寄屋ならではの遊びも見られる。

見どころ

阪神・淡路大震災以後、姿を消しつつある阪神間の和風住宅のなかで、創建時の屋敷構えをほぼ完全に残す貴重な建物である。芝生敷の前庭と茶庭風の中庭には、創建時の庭造りの様子が残る。戦前期の西洋文化の生活様式（マントルピースのある応接室や大きなガラス窓）を取り入れた和風住宅であるとともに、草庵風の茶室も備える。材料には竹と桐が多く使用され、建物の細部には、数寄屋大工や職人の技による繊細なつくりが見られる。
座敷の床の間の天井は亀甲網代編で、琵琶床を備える。
夏は襖を葦戸に入れ替えたり、木下家より寄贈の雛人形や兜飾りや羽子板を飾ったり、月に一度はお茶会を催すなど、四季折々の日本文化を体験することができる。

芝生を中心とした明るい前庭に対して、中庭は露地（茶庭）風の和風庭園で、主庭といえる。この主庭は、四畳半茶室に付随する蹲踞と降り蹲踞という二つの蹲踞が中心となって構成されている。
大振りの降り蹲踞は、中庭の主景となっており、手水鉢には見事な鞍馬石の自然石が用いられ、中鉢形式（手水鉢の周囲が海になった形式）の蹲踞として見応えがある。

中庭の様子（中央は降り蹲踞）

建物名称	兵庫県立舞子公園 旧木下家住宅
建築年	1941 年（ 昭和16年 ）
構造・様式	木造ツシ二階建て・数寄屋
所在地	兵庫県神戸市垂水区東舞子町11-58
電　話	078-787-2050
Ｈ　Ｐ	http://hyogo-maikopark.jp/
開館時間	10:00～17:00（月曜休館）
アクセス	JR舞子駅・山陽電鉄舞子公園駅から徒歩5分
備　考	国登録有形文化財（主屋、土蔵、納屋）

ヨドコウ迎賓館（旧山邑家住宅）

兵庫県芦屋市

ヨドコウゲイヒンカン（キュウヤマムラケジュウタク）

アプローチより

ほぼ建築当初の姿で現存する我が国で唯一のフランク・ロイド・ライトの設計による住宅建築である。帝国ホテル設計の為にアメリカから来日したライトが、山邑酒造（現櫻正宗〈株〉）の八代目当主の別邸として1918（大正7）年に設計した。

見どころ

3階に存在する三間続きの和室は、ライトの当初の設計案には無く、施主の強い要望で遠藤新と南信により設計された。畳、襖、床の間、欄間という和室のエレメントを備えるが、仕上や造作材は洋室部分と殆ど同じ仕様である。長押の位置で室内から外に連続する庇や装飾的な地窓が、室の重心を低く保ち、和室としての落ち着きを感じさせる。傾けられた正方形の窓からバルコニーの大谷石の水盤が見え、ここにも建築家の水への拘りを感じる。建物全体はヤード・ポンド法、和室は尺貫法が用いられ、用尺の違いは壁厚で処理されている。現在、この和室では、毎年山邑家ゆかりの「雛人形展」が開催され、多くの来場者を集める。

3階の家族寝室と隣接する和室の婦人室。摺りガラスの格子戸を開けると、和室に座る人と隣室に立つ家族の目線が同じレベルとなる。家族寝室には竣工当時の家具が復元展示されている。

六代目山邑太左衛門は灘の酒に不可欠な宮水を発見した酒造家として知られる。ライトの帰国後、残されたスケッチをもとに弟子の遠藤新と南信が実施設計・監理を行い、1924（大正13）年に竣工した。芦屋川沿いの急峻な尾根の起伏に合わせた4層のフロアで構成され、建築のさまざまな場所から、周囲の自然、海へと注ぐ芦屋川の水の流れを感じることができる。建物のモチーフである幾何学的な意匠が施された扉や窓などの開口部は、光、風、緑を透過させることでそのデザインが完成され、それは和室にも連続し、随所に感じる水への視線とともに、和様の空間を見事に融合させている。この建物が内包する和の空間の在り方は、ライトが創造した自然と融和する空間構成や単純化され洗練された美しい造形が、まさしく日本的な思想やイメージを想起させるものであることを実感する。

３階西側廊下　　４階食堂

近代建築の名作が次々と姿を消す一方でこの建築は幾度もの危機を乗り越え、建築当初の姿を維持し、公開されている。1947（昭和22）年に現在の株式会社淀川製鋼所の所有となり、1971（昭和46）年には一度は取壊しが決定するも保存に転じ、1974（昭和49）年、RC造の建物として、また、大正時代の建物として初めて国の重要文化財の指定を受けた。老朽化や雨漏り、地盤沈下などによる破損が激しく、大規模な保存修復工事が行われ、1989（平成元）年より「ヨドコウ迎賓館」として一般公開された。その後も阪神・淡路大震災で被災し、裏山の開発問題にも直面しながら、現在の佇まいを守り続けた。近年では、約2年間にわたる大規模な保存修理工事を経て、2019（平成31）年2月より公開中。

エントランス

建物名称	ヨドコウ迎賓館（旧山邑家住宅）
建築年	1924（大正13）年竣工
構造・様式	鉄筋コンクリート造4階建
所在地	兵庫県芦屋市山手町3-10
電　話	0797-38-1730
Ｈ　Ｐ	https://www.yodoko-geihinkan.jp/
開館時間	水・土・日曜日と祝日　10：00～16：00
アクセス	阪急神戸本線「芦屋川駅」より北へ徒歩10分
備　考	参考文献：兵庫県建築士会『tsudoi 2011.12』 淀川製鋼所『F.Lライトの世界』

堀家住宅（一橋徳川家領庄屋）

兵庫県たつの市

ほりけじゅうたく（ひとつばしとくがわけりょうしょうや）

【① 揖保川から見た堀家西面の遠景】

大きなクスノキの奥に、一際目を引く堀家住宅の白壁群が見えます。6484㎡の広大な敷地の中心には巨大な主屋があり、周囲を長屋門や座敷、多数の蔵が取り囲むように 一体化し、一連の白壁群となった外観は、堀家住宅の特徴といえます。 年代が明確なものとしては播磨地方最古の主屋をもち、民家建造物としては 県下最大規模を誇ります。旧日飼村は1747年に一橋徳川家領となり、堀家はその庄屋を務めた豪農で、苗字、帯刀御免など、庄屋以上の処遇を 得たようです。かつて、庭では時代劇のロケも行われたそうです。

■堀家住宅の建物配置図と撮影箇所

【② 主屋と式台玄関】

【③ 主屋の梁組】

◈母屋は平屋で、9間取りの平面形が元々の建物であるが、後に7回の増築を繰り返して拡張が重ねられている。

見どころ

主屋は 1744（延享元）年から 1767（明和４）年まで 20年以上かけて 建築されており、周囲の建物の殆どが江戸時代の建築で実に築 250 年以上となります。これらの建物は、現在まで ほぼ改変なく当時の姿をとどめ敷地内で 一括して保存されてきた住宅としては、全国的にもまれな存在です。こうしたことから 堀家住宅は敷地や 附を含め、主屋１棟、座敷２棟、蔵12棟、門３棟、付属建物５棟など 計23棟が、国の重要文化財に指定されています。

◈堀家の家紋「向い蝶」を刻む主屋瓦には、瓦銘（明和４年龍野城下住　三木与兵衛）と刻まれている。

【ナマコ壁】

【⑨ 東蔵・柴小屋・漬物部屋】

【⑩ 大乾蔵・八番蔵・九番蔵】

【⑪ 二番蔵】

◈主要建物は全て漆喰の白壁とナマコ壁が特徴である。

【④ 長屋門】

【⑤ 主屋 次の間と上の間】

【⑥ 主屋縁側と鞘の間】

【⑦ 消防設備用の雲龍水】

【⑧ 獅子をあしらった潜門の留蓋】

建物名称	堀家住宅（個人所有住居）
建築年	1767年（明和4年）
構造・様式	主屋：木造平屋建・一部二階建（入母屋本瓦葺き）
所在地	兵庫県たつの市龍野町日飼291番
電　話	0791-75-5450 たつの市教育委員会歴史文化財課
開館	特別公開限定
アクセス	JR姫新線本竜野駅～徒歩10分、山陽自動車道龍野IC～10分
備　考	平成25年8月　国重要文化財指定 参考文献：日飼自治会「日飼の歴史と文化」

今西家書院

いまにしけしょいん

奈良県奈良市

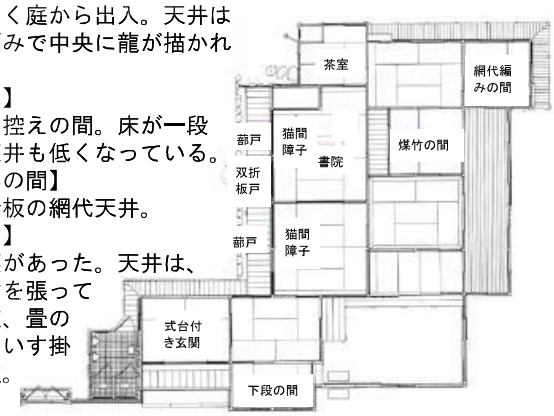
今西家書院は、永く興福寺大乗院家の坊官を努められた福智院氏の居宅を大正13(1924)年、今西家が譲り受けた。一説には大乗院の御殿を賜り移築したものとも伝えられている。昭和12(1937)年8月25日、国宝保存法により民間所有の建造物として初めて国宝の指定を受けたもののひとつである。その後文化財保護法の施行に伴い、昭和25(1950)年、重要文化財となった。江戸初期、寛永7(1854)年、元治元年（1864）年、明治中期、昭和と度重なる修理を経て大切に守られ、現在に至っている。

書院

見どころ

書院造の初期（室町時代）の遺構。角柱・畳敷・障子・襖・棹縁天井等は現代住宅の和室の基本に通じるもので、和室の原点を感じることができる。庭に面する二つの間（書院）は建築当時は板敷きだったところを、江戸時代に床の間が造られ、畳敷きの二間になった。鴨居ははめ込み式で、鴨居と敷居を外すと元の板敷きの一間に戻すことができる。また、一本の敷居溝に二枚の障子が入る猫間障子は、縦の桟が同じ幅となっており、閉めると大きな障子に見え、端正な美しさを醸し出している。双折板扉は大陸から伝わった古い形式の外開きの建具。中塗り壁に何重にも和紙を貼り重ねられた壁など、寝殿造の名残りもあるが、入母屋造軒唐破風や檜皮葺屋根などに堂々たる書院造の魅力を十分に味わうことができる。

【茶室】
躙り口はなく庭から出入。天井は杉の網代編みで中央に龍が描かれている。
【下段の間】
お供の者の控えの間。床が一段下がり、天井も低くなっている。
【網代編みの間】
太い杉の柾板の網代天井。
【煤竹の間】
昔、囲炉裏があった。天井は、幅広の煤竹を張っている。現在、畳のテーブルといす掛けの喫茶室。



平面図（出典：株式会社今西清兵衛商店 HP）

猫間(子持ち)障子

上下2枚のしとみ戸(半蔀)

双折板扉(諸折戸)
お輿に乗った身分の高い方専用の出入り口

茶室

煤竹の間

建物名称	今西家書院
建築年	室町時代中期
構造・様式	木造1階建て・書院造
所在地	奈良市福智院町24-3
電　話	0742-23-2256
Ｈ　Ｐ	http;//www.harushika.com/study/
開館時間	午前10時～午後4時（休館；月、イベント開催時）
アクセス	JR･近鉄奈良駅徒歩15分または天理行バス福智院下車
備　考	国指定重要文化財　　入館料：要

中家住宅

なかけじゅうたく

奈良県生駒郡安堵町

主屋外観

中家住宅は、大和川北岸に残る大和地方の典型的な環濠屋敷である。屋敷は外濠と内濠の二重の濠に囲まれ中世土豪の平城式居館の姿を現代に伝える。中氏の祖先は足利尊氏に従い大和に入り、この地に居館を定めた。武士として活躍した後、国替えを期に帰農し大地主となり、現在に至っている。そのため、建物は武家造りと農家造りを併せ持つ造りとなっている。主屋は万治二年(1659年)頃の創建と推定され、新座敷には安永二年(1773年)の棟札がある。
その他、表門、米蔵、新蔵、乾蔵、米蔵及び牛小屋、持仏堂、庫裏の９つの建造物と、宅地、濠、竹藪が重要文化財に指定される。現在も邸内に住んで維持管理をされている。

【表門と内濠】
表門正面の内濠に掛かるはねあげ橋は、夜間には中央の板を外し、外敵の侵入を防いだとされている。表門には、橋を監視する為の物見窓がある。

【主屋】
主屋の屋根は大和棟形式で、その姿は極めて美しい。日本郵政発行の切手「日本の民家」シリーズのモデルにもなった。
土間には、11の焚口が勾玉型に並ぶ国内最大級の竈がある。

【新座敷（勅使の間）】
新座敷は、数年に一度訪れる役人をもてなす為に建てられた、大変上質な普請である。
(天井板：春日杉、床柱：北山杉
柱：栂、縁側：欅板張り)
高床になっており、主屋からは数段上がる。縁側から広がる見下ろしの眺望が絶妙である。
特別な来客時以外は使われなかったため、保存状態が良好で創建当時の姿を今に伝える。

【持仏堂本堂・庫裏】
中氏一族が祖先を弔うために、享保十九年（1734年）に菩提寺である持仏堂を建立。本堂内には多くの仏像が安置されている。
僧侶の住まいである庫裏は、茅葺屋根に本瓦葺きの下屋を持つ美しい佇まいで、板の間の台所には「座り流し」や「持ち出しくど」（移動式かまど）がある。食い違い四間取りのコンパクトな空間は現代住居として住んでみたいと思わせる魅力がある。

見どころ

＜ダイナミックな架構＞
主屋は、曲がりの強い大きな地松丸太が多用されている。その姿は圧巻で、民家の力強さを十分に堪能できる。
＜おもてなしの空間＞
新座敷をはじめ、主屋の奥にある「蒸し風呂」や、内濠で観月会（船遊び）をする為の「入り船の庭」など、大変風流なおもてなしの場がある。
新座敷には”月にむら雲、波に兎”の意匠が彫られた欄間や狩野派の絵師により描かれた襖がある。釘隠し等の金物も上質なものばかりで見どころが多い。
三畳の茶室も併設されている。空間全体から、高い品格と知性が感じられる佇まいである。

建物名称	中家住宅
建築年	江戸時代
構造・様式	木造1階建て・環濠屋敷
所在地	生駒郡安堵町窪田133番地
電　話	0743-57-2284
Ｈ　Ｐ	http://www.town.ando.nara.jp/content
開館時間	午前10時～午後5時、見学は電話で事前に予約
アクセス	近鉄平端駅またはJR大和路線法隆寺駅からタクシー または安堵町コミュニティバス奈良交通かしの木台線 （法隆寺より約5km）
備　考	重要文化財

臨済宗大徳寺派　慈光院　書院

奈良県大和郡山市

りんざいしゅうだいとくじは　じこういん　しょいん

慈光院は、片桐且元の甥で当地の大名であり茶道石州流の祖である片桐石見守貞昌(石州)が、1663年(寛文3年)に、父の菩提寺として建立。片桐石州の茶の教えは、徳川家綱、水戸光圀や大名の多くが学んだ。
一之門から鬱蒼とした霰零しの石畳を歩いて行くと茅葺きの茨木城楼門がある。片桐且元の摂津茨木城の楼門（櫓門）を移設したこの門をくぐると明るく開けた庭があり、その先の右手に、大きな茅葺きの書院がある。左手には寺務所棟、書院の北側に渡り廊下で繋がる別棟の本堂がある。書院の北東と北西に趣の異なる2つの茶室二畳台目の高林庵と三畳の閑の席（逆勝手）が配されている。

見どころ

石州流茶道の祖片桐石州が父の菩提寺として建立したが、寺としてよりも境内全体が一つの茶席として造られている。表の門から建物までの道、座敷や庭園、露地から小間の席までの全てが、石州の演出そのまま三百年を越えて眼にすることができる貴重な場所となっている。書院から東南方向に庭園（史跡及び名勝指定）と大和平野の借景を見渡すことができ、まさに庭屋一如のごとく空間は他に類を見ず圧巻である。全体的に天井や鴨居の高さが低く押さえられ、座敷に座ったときに最も安らぎや落ち着きが出るように考えられている。建築には地域の材が使われており、全体に装飾は排除され、華美を排した佇まいに高い精神性が表れており、簡素にして品格のある和の空間である。石州がこだわって造った重要文化財の手水鉢やつくばいも趣を添えている。

茨木

書院玄関の前

書院入

床の間

女の字(めのじ)

独座(どくざ)

【書院】
寺院でありながら、この書院が中心的建物。茅葺きの農家風外観である書院は、格式の高い荘厳な書院とは明らかに異なる思想が表れている。

【茶室　閑】
書院入り口の左手にある、三畳の茶室。席中は少し暗い。躙り口はなく、書院の北側廊下からの貴人口より入る。

【茶室　高林庵】
書院北東隅のある二畳台目の茶室。石州の代表的な席で、手前座の奥に床の間がある亭主床や二畳台目の隣に二畳の控えの間を設けている。

建物名称	臨済宗大徳寺派　慈光院
建築年	1663年(寛文３年)
構造・様式	木造１階建て・書院作り・
所在地	大和郡山市小泉町865番地
電　話	0743-53-3004
Ｈ　Ｐ	http;//www.1.kcn.ne.jp/~jikoin
開館時間	午前9時～午後5時　(年中無休)
アクセス	JR小泉駅または近鉄郡山駅バス片桐西小学校下車
備　考	書院・高林庵・閑茶室；国指定重要文化財 庭園；史跡及び名勝指定

奈良学園セミナーハウス　志賀直哉旧居

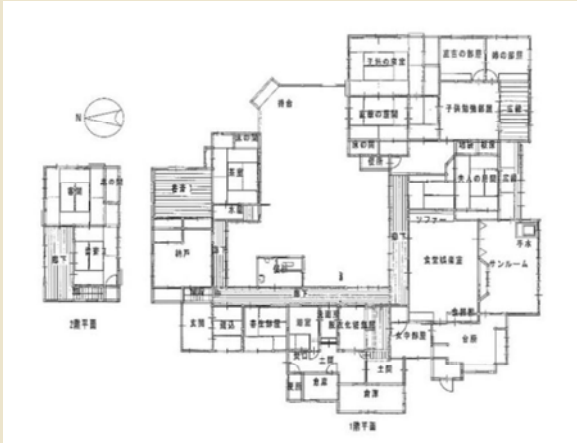
奈良県奈良市

ならがくえんせみなーはうす　しがなおやきゅうきょ

志賀直哉旧居は、直哉自ら構想し、京都の数寄屋大工の下島松之助が昭和４(1929)年に竣工させた住宅である。直哉が昭和13(1938)年に転居した後は個人に売却され、昭和22（1947)年から26（1951）年まで米軍に接収された。返還後は、厚生年金保養施設として利用されていたが、昭和50（1975）年に老朽化のため建替えが計画された。その時、近隣住民を中心として保護運動が展開され、昭和53（1978）年に奈良学園がセミナーハウスとして買収した。平成21（2009）年には、建築当時の姿に復元修理され、 平成28（2016）年、奈良県指定有形文化財となった。

見どころ

建物は、昭和初期の文人宅に相応しく、上質で落ち着きのあるものである。全体構成は、数寄屋造りを基調とし各所に近代的な洋風意匠を加えるが、各要素は破綻なく見事に調和している。志賀直哉は、日記や手紙の中で、住宅に対する考え方を明確にしており、自身を表現する方法のひとつとしてこの建物があった。北棟は、書斎、茶室といった内証的な場、「高畑サロン」と呼ばれ直哉を慕う多くの文人画人が集ったサンルーム、食堂は公の場とした。一方、子供部屋を中心に構成された南東棟は、配置、窓の取り方など随所に家族の絆を大切にした直哉の思想が伺える。



サンルームの採光窓

クヌギ丸太の門屋棟木

食堂の皮張りソファー

サンルームの手水

【茶室】
6畳広間の茶室。 床柱は、桧の風倒木。 床框も桧である。 床の間前は杉目透か しの平天井、点前畳 上部は蒲の落天井と し、道庫がある。 東側のくぐり戸を通り、 待合のある茶庭から 入る。貴人口のみで 躙り口はない。

【サンルーム】
食堂から1段下がった床は、 瓦製の四半敷きとし、井戸を 模した手水や躙り口に見立て た板戸を設けている。天井は 張らずに架構の丸太を見せ、 葦を煤竹と小丸太で交互に 押さえた数寄屋の意匠である。 棟際には採光窓も開けられている。

【食堂】
床は松板張り、東側にソファー を西側には台所と両面から使 えるハッチのある食器棚を造り 付け、漆喰塗り折上げ天井の 洋間であるが、建具は障子を 使い、赤松の半丸太を廻している。

【2階客間】
座敷飾りを備えた8畳の客間。床柱は直哉の好んだ赤松。床框は、桧の磨き丸太で、天端の太鼓落とし部分を漆塗りで仕上げている。鉤の手に繋がる窓は、腰を低く抑え、2箇所の窓を開け放つと、若草山を借景に北側の池庭を望むことができる。

建物名称	志賀直哉旧居
建築年	昭和4年（1929年）
構造・様式	木造2階建て・数寄屋和洋折衷様式
所在地	奈良市高畑町1237-2
電　話	0742-26-6490
Ｈ　Ｐ	http://www.naragakuen.jp/sgnoy/
開館時間	午前9:30～午後5:30(冬季 午後4:30)休館：年末年始
アクセス	JR･近鉄奈良駅から市内循環ﾊﾞｽ「破石町」下車徒歩5分
備　考	奈良県指定有形文化財　　入館料：要

名勝　依水園

奈良県奈良市

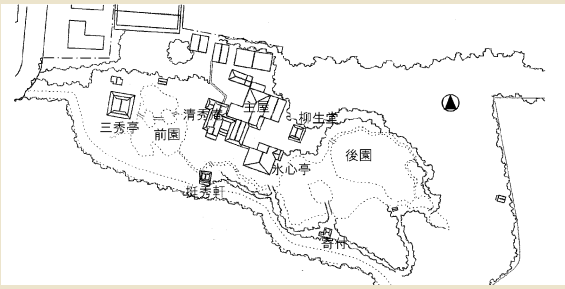
めいしょう いすいえん

【三秀亭】茅葺の屋根構造に江戸時代初期の形式、内部には江戸時代前期と明治時代の好みが多様に詰め込まれている。

依水園は、西側の江戸時代 延宝年間（1670年代)に作られた「前園」と、東側の明治後期に作られた「後園」との二つの庭園、及び「寧楽美術館」からなる。「前園」は、奈良晒の幕府御用達商人であった清須美道清の別邸として建てられ、茶室「三秀亭」と「挺秀軒」が現存している。明治中期に同業者、関藤右衛門の手に渡り、その長男の藤次郎が、明治32年からほぼ10年をかけ建屋や庭園の修復整備を行うと共に、「清秀庵」「氷心亭」などの茶室を配した主屋等の建物と、池泉回遊式借景庭園である「後園」を増築した。昭和14年に神戸の海運業者中村準策が取得し、昭和20年から28年の米軍の接収を経た後一般公開された。昭和44年に寧楽美術館が建築され、戦災を免れた約2000点の美術品を収蔵している。依水園は、昭和50年国の名勝庭園に指定された。

見どころ

依水園の建物群は、近代数寄者の茶の湯とは一線を画した、裏千家12世又妙斎の指導による、侘茶に忠実な茶道を追求した結果としてある。その配置は、借景として庭園を最大に受け取れる位置に設けられている。明治時代の古社寺修理の開始に伴って得られた古材の転用が見られるのも面白い。



清秀庵の意匠

天井：新薬師寺の古材

引手：つぼつぼ

氷心亭の意匠

欄間：三山(御蓋、高圓、若草）

欄間：櫛型(寒雲亭の写し）

濡縁：新薬師寺の柱を転用

広間畳廊下からの眺望

【挺秀軒】
延宝年間 接待所として建てられたものを明治に「清秀庵」の待合にも使えるよう、縁、雪隠、腰掛が設けられた。「清秀庵」に続く路地に「編笠門」が建てられている。

【清秀庵】
四畳半本勝手の茶室と鞘の間、六畳台目 からなる。檜皮葺き、袖壁で変化をつけ、外観を軽やかに見せている。内部は裏千家「又隠」を意識した造りであるが、網代天井を少し高めにしたり、躙口と貴人口を併設するなど、又妙斎の配慮が感じられる。

【氷心亭】
依水園の主座敷にあたる茶室で、屋根はｷﾝｸﾞﾎﾟｽﾄﾄﾗｽを用いた兜造り風の茅葺き。十三畳の広間と五畳半の小間が後園の池に面しており、背面側に、九畳の次の間、四畳分の水屋が置かれている。

【氷心亭 十三畳の広間】
天井は「寒雲亭」を意識した竿縁の平天井（新薬師寺の古材）、掛けこみ天井、船底天井を組み合わせている。床の間は巾7尺8寸の栃の踏込み床、赤松皮付の床柱を持つ。付書院欄間は屋久杉に桐紋の意匠が施されている。

建物名称	名勝　依水園
建築年	前園 延宝年間(1670年代）後園 明治32年(1899年)
構造・様式	木造1階建て
所在地	奈良市水門町74
電　話	0742-25-0781
Ｈ　Ｐ	http://www.isuien.or.jp
開園時間	午前9:30～午後4:30(入園は 午後4時迄） 休園：毎火曜日（令和1年10.11月は無休）、年末年始
アクセス	近鉄奈良駅から徒歩15分（東大寺西隣）
備　考	国指定 名勝庭園　入館料：要

奈良町宿　紀寺の家

奈良県奈良市

ならまちやど　きでらのいえ

前庭のある町家

古くから栄える奈良町で、約100年前に借家として建てられた5つの町家。時代の移り変わりとともに界隈の町家が次々と壊されていく中、５つの町家を快適で魅力的な住まいとして再生し、「今の町家暮らし」が体感できる宿として活用されている。

町家の表構え

見どころ

＜土間の活用＞「通り庭の町家」は、玄関のくぐり戸から中に入ると天井が高く開放的な通り庭がある。昔ながらの土間形態のまま、くつろぎの空間として利用されている。
「前庭の町家」や「角屋の町家」では、ベッドが設えてある寝室が1段低い土間空間になっている。和の要素の中に洋の要素が取り込まれており、空間の変化が楽しめる。

通り庭の土間空間

小屋組を表した空間

季節を感じる中庭

＜庭との関係＞それぞれの町家には小さな庭がある。静かな光が入り風が通り抜け、鳥の声が聞こえる。
町家暮らしの豊かさが感じられる。

＜木部の経年変化＞
新たに改修された木部には、濃色の着色は施されていない。建物に手を入れながら更新されている様子が伺えるとともに、木部の経年変化が自然な街並みをつくっている。

高い設計技術により改修されたそれぞれの町家は、現代の暮らしにも通じる和の魅力を十分に味わうことができる。素材の使い方等の改修の手法も含め、細部にわたり見どころが多い。

５つの町家（「縁側の町家」「前庭の町家」「通り庭の町家」「角屋の町家」「三間取りの町家」）は、それぞれに特徴的な間取りを持ち、町家暮らしの文化や歴史を感じることが出来る。
１棟の戸建てと2棟の長屋建てで構成されており、路地も含めた建築群として活用されているところも魅力である。

町家の佇まいはそのままに現代の暮らしに沿うように手を入れて住み継ぐことを改修の主旨とされており、暮らしに寄り添う町家の魅力そのものが感じられる。
改修は、職人の手による伝統的技法により、昔ながらの素材「木」「土」「石」「紙」が使われている。古材や古瓦も多く取り入れられている。
新たにつくられた空間や現代的な設えも見事に調和しており、新しさの中にも建物本来の持つ伝統と品位が保たれている。
また、寒さの解消のための断熱改修及び、伝統構法の耐震改修も施されている。

宿のフロントでは「町家・古民家暮らし準備室」を開設されており古い建物を改修して住まわれたい方への相談窓口としても活用されている。

建物名称	奈良町宿　紀寺の家（宿泊施設）
建築年	大正13年 （2011年改修　改修設計：藤岡建築研究室）
構造・様式	木造平屋建て　戸建て1棟・長屋建て2棟
所在地	奈良市紀寺町779
電　話	0742-25-5500
Ｈ　Ｐ	http://www.machiyado.com/
開館時間	（宿泊予約はホームページ参照）
アクセス	JR奈良駅・近鉄奈良駅より「天理駅」「下山」「窪之庄」行きのバスに乗車。「紀寺町（市立奈良病院前）」下車。徒歩3分。
備　考	登録有形文化財（戸建て1棟のみ）

琴ノ浦温山荘園　浜座敷

和歌山県海南市

ことのうらおんざんそうえん　はまざしき

【琴ノ浦温山荘園概要】

琴ノ浦温山荘園は、新田帯革製造所の創業者で、造園を趣味にしていた新田長次郎翁が、５５歳の頃「健康回復には己の欲すること、好む所を趣味として行うのが第一の養生法なり」と助言され、別荘の造営を始めようと決心し、大正初期から昭和にかけて造園されました。黒江湾から海水を引き、その潮の干満によって水位が変動し、池泉景観が変化する「潮入式池泉回遊庭園」の中には、浜座敷、主屋（本館）、茶室（鏡花庵）などが庭園と一体的に建てられています。

庭園は国指定の名勝に、建造物は重要文化財に指定されています。また、平成２９年には日本遺産にも認定されました。

主屋（本館）

茶室（鏡花庵）

浜座敷

見どころ

浜座敷に入ると、寄り付き６畳間の北側に、大きな花頭窓が壁一面に広がっているのが印象的です。外部から見ると、雨戸の戸袋は設けず、雨戸の巾だけ敷居と鴨居を横に伸ばし、そこに雨戸が納まるスッキリとした意匠になっています。寄り付き６畳間と１０畳間の境には、一連の金と銀の雲の文様の襖があり、竹の輪とコウモリの引手が付いています。また、縁のガラス障子は、雨戸のようにすべて引き込む事ができるので、外部と一体化した開放的な空間を楽しむ事ができます。

天下の景色を独り占めすることを欲せず、広く一般に公開した長次郎翁の心意気と、庭園と一体的に建築された建物の調和と、細部まで気を配った意匠を楽しんで見て欲しいです。

寄り付き６畳間
内観(左)と花頭窓(上)

寄り付き６畳間
襖(左)と引手(上)

１０畳間
襖(左)と引手(上)

【浜座敷】

海を眺望する敷地の南端に最初に建設したのが「浜座敷」でした。崖上に建つ懸造風の離れ座敷で、入母屋と寄棟屋根をＴ字形に合わせた「撞木造り（しゅもくづくり）」と呼ばれる形式の屋根は、東大寺の三月堂をモチーフにしたと言われており、古代風の意匠の鬼瓦が据えられています。

本瓦葺きの重厚な屋根をもつ一方で、屋根勾配は緩く、垂木は吹寄せに配置され、軽妙な構成になっています。

内部は、玄関奥に寄り付き６畳間があり、１０畳間へと続き、外側に矩手に廻した開放的な縁が広がります。縁先の高欄は、３本の横連子に三組の束を立てた特徴的な意匠で、内外観を整えるアクセントとなっています。近代和風建築らしく小屋組にはトラスを用いたり、天井板には当時最新の建築資材であった合板を使用するなど、新しい技術を取り入れているところが魅力ある和の空間の構成要素になっています。

古代風の意匠の鬼瓦

東縁　天井見上げ

１０畳間　南西を見る

東縁　北東を見る

建物名称	琴ノ浦温山荘園　浜座敷
建築年	1913年（大正2年）
構造・様式	木造平屋建て・屋根入母屋造及び寄棟造　本瓦葺
所在地	和歌山県海南市船尾370
電　話	073-482-0201
Ｈ　Ｐ	http://www.onzanso.or.jp
開館時間	9：00～17：00（月曜、12月1日～2月末日休園）
アクセス	JR海南駅より和歌山方面バス10分「琴の浦」下車
備　考	庭園：国指定名勝、建造物：重要文化財、日本遺産

山﨑邸

やまさきてい

和歌山県紀の川市

【山﨑邸概要】

◇主 屋　木造二階建 屋根入母屋造 桟瓦葺(床面積･･･675㎡)
棟上　大正6年5月30日
◇北側土蔵 土蔵造二階建 屋根寄棟造 桟瓦葺(床面積･･･71㎡)
棟上　大正7年
◇南側土蔵 土蔵造二階建 屋根切妻造 桟瓦葺(床面積･･･23㎡)
◇表門 間口4.28m

見どころ

この建物は、かつて綿ネル事業で財を成した山﨑家の豊かさを反映し、中庭に面した廊下の先にある質の高い和洋折衷の階段室や豪華絢爛な奥の大広間を筆頭に趣向を凝らした意匠が数多く散りばめられた邸宅となっている。
敷地の東側に位置し折上吹寄格天井と金箔で雲が表現された壁面で構成された大広間は、外観の厳粛さから想像しがたいほどきらびやかで、足を踏み入れるのも気が引けるほどである。
また、１階と２階に傘天井を持つ間があり、１階は和洋折衷の客間、２階は伝統的な和室となっており、各室の意匠や趣の違いは必見である。

敷地は、南北に長い長方形である。主屋は、ロの字型に中庭を挟み、東側に大広間を伸ばした平面形となっている。
1階玄関より北進すると、両側に広縁を備えた次の間と床間・違棚を備えた書院造の座敷がある。東に折れると県内でも数少ない極めて豪華な大広間がある。2階は、幅広い堅木が使用された特徴ある天井を有した座敷等、趣向を凝らした和室空間が広がっている。

内部は、伝統的な格式を現す意匠を備える一方、形式にとらわれない質の高い意匠が随所に見られ、加えて洋風の意匠も導入するなど近代建築としての特色を備える。また良材もふんだんに使用されているのも見逃せない点である。
主屋内部は改造が少なく竣工時の姿をよく遺し、敷地全体においても主屋の他、土蔵、門、土塀など屋敷構えがよく残存している。

南西に位置する、かつての勝手口は、現在営業されているcafé のエントランスとして利用されており、当時の山﨑邸の生活の場であったであろう空間を肌に感じながら、気軽に食事を楽しむことができるのも、この建物の魅力の１つである。

価値ある近代和風建築としての特色を持つ山﨑邸は、様々なイベントやcafé として利用する事により、一層身近に和の空間を感じられる場所となっている。

建物名称	山﨑邸
建築年	1918年(大正7年)
構造・様式	木造二階建・屋根入母屋造　桟瓦葺
所在地	和歌山県紀の川市粉河853
電　話	0736-60-8233
Ｈ　Ｐ	https://hajime-cafe.jimdo.com
開館時間	café 毎週 木～土曜 11:00～15:00
アクセス	JR和歌山線粉河駅　徒歩1分
備　考	上記時間外は、お問い合わせ下さい。

蓮華定院

れんげじょういん

和歌山県高野町高野山

庫裡

蓮華定院は空海が修禅の道場として開いた日本仏教における聖地のひとつである高野山にあり建久年間（１１９０年頃）に鎌倉幕府のあつい帰依を受けていた行勝（ぎょうしょう）上人により念仏院として開創されたのが始まりである。
高野山では天保の頃に８００を超え在存していた寺院も度重なる大火や明治の廃仏毀釈により現在は１１７カ寺となるがその約半数は宿坊寺院を兼ねている。
江戸時代、幕府が諸国大名に高野山に墓を建てるよう推奨し多くの寺院はその菩提寺・所縁坊としての役を担い諸国大名との壇縁が結ばれた。　また参詣者を受け容れる施設として高野山では宿坊が発展してきたが、近年まで出身県によって利用する宿坊も決められていたという。
蓮華定院は鎌倉時代よりこの場所にあり、江戸期以降は幾度の火災にも免れ、現在にその姿を遺した宿坊寺院である。
信州真田家との所縁が深く、蓮華定院内の至るところに家紋の六文銭があしらわれ『真田坊』とも呼ばれている。

見どころ

宿坊という性質上、寺内見学は宿泊者に限るが、
真田昌幸・幸村親子が寝起きした「上段の間」と「上段次の間」に設えられた欄間は中国風で重厚さが際立つ。
鴨居は漆塗りの付鴨居で付樋端（つけひばた）と呼ばれふた間を一体として使用するという意味を持つ。　また「土室」の差し鴨居が一尺六寸を超える造りは高野山の寺院に共通する特徴の一つであるが、その大きさの必要性は謎である。昭和初期に建てられた宿坊には現在では入手不可能な高品位の材が数多く使われており、それらを探してみるのも面白い。
宿泊者は本堂にて行われる夕方の瞑想【阿息観／あそくかん】や早朝のお勤め【朝勤行】に参加する事が出来る。
特別な和空間での非日常的な体験を是非お薦めしたい。

山門を潜ると正面をずらして玄関が配された檜皮葺の庫裡が見える。庫裡には「持仏間」を中心にしてそれを囲む形で「上段の間」「上段次の間」「角の間」「稚児の間」「大広間」「土室」「茶の間」「会所」といった座敷が配されており、それぞれの襖を取り払うと大空間が生まれる高野山寺院の特徴を表す造りとなっている。庫裡の左手には江戸期に建てられた本堂と護摩堂があり、それらの建物は火災から御本尊をお守りする為に四方の壁に加え屋根の下と床下も土造りの『六方蔵』となっている。宿坊は庫裡から護摩堂の横を抜け、幾つかの中庭を囲んだ形で変形Ｔ字型に配されており、傾斜地を利用して建てられたそれらの棟は互いの目線をずらす工夫がされている。正面からはその形を窺う事は出来ないが、どの部屋に滞在しても部屋から美しい庭を愛でる事が出来る。
江戸時代の襖絵がそのまま使用されている客室も数多く有り、蓮華定院の懐の深さを知る事が出来る。

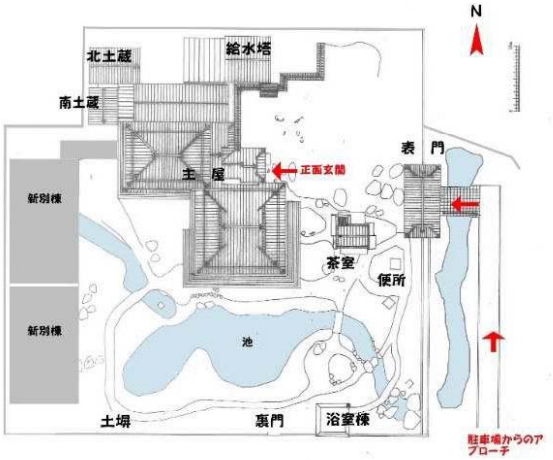
庫裡 大広間から持仏間を望む

建物名称	蓮華定院
建築年	本堂・庫裡 / 万延年間（1860年頃）
構造・様式	木造
所在地	和歌山県伊都郡高野町高野山700
電　話	0736-56-2233
Ｈ　Ｐ	なし
開館時間	IN 15:00～17:00　OUT 9:00
アクセス	南海高野山ケーブル　高野山駅 下車 路線バスにて２駅目 [一心口]下車 正面
備　考	見学は檀家及び宿泊者のみ

旧松井家別邸（がんこ六三園）

和歌山県和歌山市

きゅうまついけべってい（がんころくさんえん）



○表門	木造平屋建　長屋門	○給水塔	煉瓦造2階建
○主屋	木造平屋建（一部2階）	○浴室棟	煉瓦造平屋建
○北土蔵	土蔵造2階建	○便所	木造平屋建
○南土蔵	土蔵造2階建	○裏門	鉄筋ｺﾝｸﾘｰﾄ造
○茶室	木造平屋建	○土塀	土塀

見どころ

稀代の頭脳と鮮やかな駆け引きによって奔放な相場を繰り広げ、「世直し大明神」「北浜の太閤はん」の異名で呼ばれた松井氏が、亡くなるまでの約５年を過ごした別邸である。

道路からのアプローチ、表門、石畳みの広い玄関ｱﾌﾟﾛｰﾁを通り、正面玄関に入る。玄関には、大きな青石の踏み石、屋久杉を使った舟底天井、座敷には優雅な意匠の欄間や、長押の釘隠、また応接室には大正ロマンの格子窓や内装など、随所にこだわりが感じられる。
開口部をダイナミックにとることで、庭園を存分に鑑賞できるよう考えられている。

長屋門形式の表門

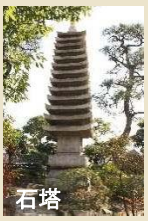
座敷棟　間越欄間

釘隠

応接室の格子窓

外構では、大阪の難波橋と同じライオン像が玄関先に置かれ、回遊式庭園には、各地より取り寄せた石材の石塔や石灯籠が、豪快に配置されている。

ライオン像


石塔

座敷棟から見た庭園

給水塔、浴室、便所、土蔵、茶室、土塀、裏門と、それぞれの用途に合った構造で周到に建てられており、興味深い。現オーナーにより、各座敷や廊下に適した調度品や季節のものが飾られており、食事客を華やかに出迎えてくれる。

【旧松井家別邸（がんこ六三園の概要】
和歌山県橋本市出身で、大正時代に大阪・堂島の米穀取引所で活躍した伝説の相場師、松井伊助（1865-1931年）が63歳の祝いに和歌山市に建てた別荘。

戦後は一時米軍に接収されたが、1952年、当時の和歌山銀行のオーナー尾藤家に買収され、長く料亭として利用された。2005年、がんこ六三園として運営を引き継がれ、現在に至る。

約2,000坪の広大な敷地の南側に回遊式の庭園が築かれ、庭園に面して中央に（2階棟・玄関棟・座敷棟）からなる主屋が建てられ、その北西に土蔵が2棟、建てられている。これら主屋、土蔵２棟の他、給水塔、表門、茶室、便所、浴室、裏門、土塀の計10件が、国の登録有形文化財として2012年に登録されている。

【主屋：大正９年（1920年）】

２階棟　外観

２階棟

２階からの眺望。
細い格子で開放的となっている。

座敷棟

三面手漉きガラスが連なり、広縁と座敷の間の建具が外され庭園を180度眺めることができる。

応接室

和洋折衷の応接室。腰壁と天井、壁と椅子が同じ模様の布で張られ、家具、大理石の暖炉、銅製の鏡、照明、内装が調和している。

建物名称	旧松井家別邸（がんこ六三園）
建築年	1920年（大正9年）（主屋）
構造・様式	木造平屋一部二階建、瓦葺一部銅板葺（主屋）
所在地	和歌山県和歌山市堀止西1-3-22
電　話	073-422-7163
Ｈ　Ｐ	https://www.gankofood.co.jp/shop/detail/ya-rokusanen/
開店時間	店舗　月～金　11:00～15:30　／　17:00～22:00 土・日・祝　11:00～22:00
アクセス	JR阪和線 和歌山駅 西口車20分 ／南海本線 和歌山市駅 車20分
備　考	送迎バス有り（要予約）

ホテル東光園本館

鳥取県米子市

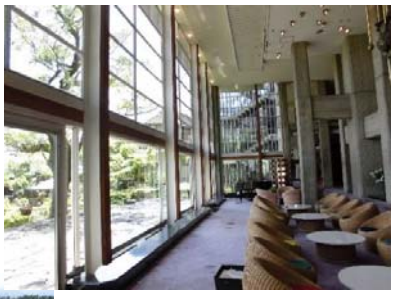
ホテルとうこうえんほんかん

ホテル東光園正面外観

東光園本館は、山陰地方における建築家菊竹清訓氏の代表作の一つとして、１９６４年に竣工した。この建築の特徴は、６本の組柱によって、高く持ち上げられた大梁から２枚の客室階の床を吊るという主構造にあり、世界的にこれが初にして最後といわれる建築様式（二段ピロティー形式）を用いている。主柱、貫、添柱という厳島神社の鳥居にみられる木造建築の架構をコンクリートで大胆に表現している。ガラスの階段室や最上階のスカイルームの十字架構とＨＰシェル屋根など見所満載である。皆生温泉は、山陰の三名湯の一つでもあるため、源泉かけ流し湯や四季折々の山海の美味を楽しむことも出来る。文化財に宿泊できる宿として数少ない宿泊施設である。

【ロビー】

前面ガラス張りのロビーの窓から見えるのは世界的彫刻家　流政之氏が作庭した３０００坪の広さを誇る日本庭園である。



【東光園七庭】

芸術家の研ぎ澄まされた感性が、惜しみなくそそぎ込まれた日本庭園。その美しい光景は、粋を知る日本の心そのものである。

見どころ

昔、出雲大社にお参りする時、皆生の中でも東光園にしかない「よみがえりの水」で体を清めまた、三杯飲水することにり、今までの邪念を浄化し、魂をよみがえらせた、という言い伝えが受け継がれている。その言い伝えにより、東光園は「出雲大社」をモチーフにして設計されている。地面から６階の上にかけられた巨大な梁をフロント正面ロビーの真ん中に位置する柱で支え、その巨大な梁から５階、６階の床が吊るされている。正面より東光園に入ると視線はガラスの向こうに広がる庭園へ釘付けとなる。実は1階もピロティになっている。

客室は畳敷きの落ち着きのある和室。窓外には霊峰大山と見事な庭園が広がる。

日本の様式美と西洋の機能美が心地よくとけあう寛ぎの空間となっている。

天皇・皇后両陛下をはじめ皇室の方々が幾度となくご宿泊になった貴賓室があり、また、広大な日本庭園の一角に数奇屋造りの離れの間が、昔ながらの姿で佇んでいる。本館に限りお気軽に見学にお越し下さいとのこと。宿泊は伝統の日本建築が語りかける和の心に包まれ、非日常を堪能されてはいかがでしょうか？

【空中庭園】

４階にあたる部分を正面から眺めると建物にぽっかり穴が開いたように見えるこの異質な空間が「空中庭園である。

【スカイルーム】

7階、全面ガラス張りのスカイルームからは大山、日本海、米子の町が一望できる。

【ギャラリー】

１階ギャラリーには東光園の構造など良く分かる模型や資料が展示されているが、東光園はその建物自体が美術館となっているともいえる。

建物名称	ホテル東光園本館「天台」
建築年	1964年（昭和39年）
構造・様式	SRC造吊り下げ構造　地上7階地下1階
所在地	〒683-0001　鳥取県米子市皆生温泉3-17-7
電　話	0859-34-1111
Ｈ　Ｐ	http://www.toukouen.com/
アクセス	米子鬼太郎空港よりタクシー、車で約30分 JR米子駅よりタクシー、バスで約20分
備　考	国登録有形文化財

塩谷定好写真記念館

しおたにていこうしゃしんきねんかん

鳥取県東伯郡琴浦町

記念館外観

塩谷家は幕末から明治にかけて菊港を母港とする廻船問屋を営んだ家で、5代目当主は赤碕町長などの公職を務めた。当館は、昭和初期に「芸術写真」の分野で活躍した塩谷定好の生家でもあり、平成26年から、写真記念館として公開されている。主屋は明治39年に街道に面して建築された、木造2階建、切妻造妻入の大型の町屋。多数の座敷をもち、各部屋ごとに銘木や螺鈿細工などを使い分け、趣の異なった、質の高い意匠をみせる。ギャラリー棟は主屋の東に隣接して建つ、土蔵造2階建、切妻造妻入の建物で、明治7年に建てられた。元は土蔵であったものを、定好氏が戦後に店舗兼写真スタジオとして改修した。外観は土蔵造の面影を残しており、主屋とともに、街道沿いの町並みの景観に寄与している。米蔵は明治5年建築で、一部に設けた2階の床、鉄板を張った内壁等、米蔵らしさを残す。質蔵は明治12年、新蔵は明治35年建築で、一部に設けた2階の床、鉄板を張った米蔵とともに、敷地後方の景観を形成する。また、建物を守っている孫の晋（すすむ）氏の丁寧な接客は、訪れた方を惹きつける。「写真を目的に来たが、こんな素晴らしい日本家屋も見られた。」と満足される声も多く聞かれるそう。

見どころ

生涯に渡って山陰の自然や人を撮り続けた写真家・塩谷定好の写真記念館。アメリカやヨーロッパで個展を開催するなど、国内外で世界的に高く評価された写真家。明治初期の商家である生家を改装した写真記念館には、ギャラリーはもちろん、生前の愛用品や生活ぶりを感じられる品々を見ることができる。

【螺鈿仕上げの違い棚】
2階の10畳和室の床の間は、違い棚が螺鈿(らでん)仕上げとなっている。趣向を凝らした材など見ごたえ

【ギャラリースペース】
白を基調とした和モダンな空間。
ギャラリーは年に2度、季節に合わせた作品の掛け替えがあり、県内外問わずファンが幾度も訪れる。

【正面玄関】
一歩足を踏み入れると、懐かしい雰囲気に包まれる。地域の文化拠点でもあり、地元の方の生け花や作品展、和紙明りの展示なども催される。

【愛機の展示】
定好氏の愛機もギャラリーのいたるところに展示されている。

【米蔵を改装したカフェ】
素敵なお庭を眺めながら、併設しているカフェでゆったりとお茶を楽しみませんか♪

建物名称	塩谷定好写真記念館
建築年	明治39年
構造・様式	木造2階建・商家建築
所在地	〒689-2501　鳥取県東伯郡琴浦町赤碕1568
電　話	0858-55-0120
Ｈ　Ｐ	http://teiko.jp/
開館時間	9：00～16：00
アクセス	JR赤碕駅下車 徒歩約20分、琴浦町駐車場
備　考	国登録有形文化財

鳥取いなば有隣荘

とっとりいなばゆうりんそう

鳥取県鳥取市

池泉回遊式庭園

有隣荘は元は鳥取平野南部邑美郡国安の西尾家の旧宅であった。明治以降は鳥取県東部地域屈指の資産家で名門とされた家柄である。国安は平安期まで遡る集落と推定されるが千代川の氾濫原で度々位置を変えている。大正7年の大洪水を機に新しい堤防が村内西寄りを南北に縦断することになる。西尾家を含む集落過半の120戸が集落の東側に接して集団移転することとなり、大正8年に着工し大正14年完成した。昭和36年米原家の所有となり玄関とホール部分を改装した。鳥取市名誉市民で貴族院議員を勤めた米原章三は晩年ここを好み有隣荘と名付け居住した時期がある。昭和60年鳥取県で開催された国体の時に高松の宮の行啓に際し、建具の一部取り替えと主屋北側に「高松の間」を増築し、その後は一般にも開放。現在は会席料理等食事の場として、また茶会、婚礼会場等として広く利用されている。

玄関前の佇まい

見どころ

現在客室として利用されている各和室はそれぞれに特徴がみられる。座敷十畳（佳友の間）は一間の床の間と違い棚に平書院を持ち、天井棹縁は床差である。柱は杉面皮、床柱は黒檀、床框は黒檀等の銘木を多用し主屋の座敷として相応しい。長押は松材で米原家家紋の木瓜紋の釘隠しが打たれる。離れ十畳（簡堂の間）は床が一段高く、用材は栂が多用されており、一間半の床の間・違棚・付書院を持ち、天井棹縁は床差である。長押を内法と天井下に入れ、菊紋の釘隠しを打ち、付書院に透かし彫りの欄間を有す。茶室は二畳中板胴庫付で台目幅の床を持つ。床柱は皮付き赤松の丸物、茶道口踏込の隅柱は竹、塗り残しの丸窓をあける。水屋は三畳間と茶室茶道口に繋がる廊下脇に設けられている。照明器具は建築当初のもので大正期のモダンな和風意匠で、電線を接続しない引っ掛け式となっており、正式な茶会の時等には簡単に取り外すことができる。
鳥取県の富裕層の近代和風の大邸宅としての特徴を示し造形の規範となっている建造物である。

【庭園】
八坂山を借景とした心字池を廻る池泉回遊式庭園で上方の庭師の作庭とされ、大ぶりの石と踏分石を多用した近代和風庭園である。農家的平面の主屋に旧藩主池田家拝領と伝わる離れ等数棟を庭に雁行して配置し、庭園と建築が内外共に一体となって美しい調和を成している。

【栂の間】
「栂の間」は木造平屋建て桟瓦葺（黒褐色旋釉）入母屋造りで主屋の最も奥にあり、庭園側南より六畳間・三畳間・茶室が並ぶ。東西に棟を並べ雁行する建築群の中で、棟を南北に向け庭園側にやや低めの入母屋の妻側を見せ、独立した離れとして外観に変化を与えている。
六畳間は、柱・長押・鴨居・床柱・落掛・付書院棚等ほぼ全ての用材は栂の柾目の良材が多用されている。茶室に繋がる廊下の四間に及ぶ栂柾目の長尺板は見せ場である。一間の床の間と床脇には地袋と黒漆枠の火灯窓を設け、襖は金が縫い込まれた瑞雲の模様で、有隣荘では最も古いながらも他の座敷や離れと趣を異にして華やかな室内空間を演出している。

栂の間

【食事】
昼食は、有隣御膳　3,000円～
夕食は、会席料理11,880円～
その他、お茶会・催事等
※全て予約が必要
※建物の案内・見学付き

建物名称	鳥取いなば有隣荘
建築年	大正14年
構造・様式	木造平屋建て
所在地	鳥取県鳥取市国安８９５
電　話	0857-53-2686
Ｈ　Ｐ	http:/www.yurinsou.com
開館時間	昼食：11時半～14時　夕食：17時半～21時 予約制、不定休
アクセス	鳥取駅から車で10分　駐車場あり
備　考	国登録有形文化財

小泉八雲旧居

こいずみやくもきゅうきょ

島根県松江市

門をくぐるとそこは静謐な空間。白い障子が美しい

『怪談』『知られざる日本の面影』の筆者である小泉八雲(本名ラフカディオ・ハーン)がこの家に暮らしたのは明治24年（1891）6月から11月である。
ニューヨークの出版社の記者として来日したハーンはすぐに島根県松江市の尋常中学校と師範学校の英語教師として着任した。そこで「へるん先生」と呼ばれ親しまれた八雲が日本人の妻であるセツと結婚後、松江での第三の住処としたのが旧士族根岸千夫の留守邸であった。

建物は享保年間の築とも言われており、松江城を囲む城山稲荷の森と濠に面している。背景には赤山を従え、現代の今も尚、季節の移ろいを色濃く感じるエリアの中にある。
長く高い塀に囲まれたこの家の門を潜り石段を上がると、そこには白い障子に囲まれた玄関が端正な顔を見せている。

この家は庭に囲まれた家である。
八雲は旧居をぐるりと取り囲む庭と、そこに暮らす「有情のものたち」小さき生物をこよなく愛した。

書斎から眺める蓮池を八雲はとりわけ気に入っていた。家の描写と庭の描写は著書にも繰り返し登場する。
塀と植物によって外の世界と遮蔽されたこの世界は今もそこにあり、八雲が愛した日本の姿を訪う人に今も伝えている。

見どころ

書斎から庭を望む

庭と家の作り出す様々な陰影。
赤山から聞こえる山鳩の鳴き声と、蓮池に蛙が飛び込む小さな水音。
町中にありながら小さな自然とその自然が出す音と気配で溢れている。

書斎北西面

書斎は元茶室に準じて作られたと言われている。
様々な物語がこの家で妻セツの口から語られ、八雲の手で物語となって紡がれた。

南庭

南庭は建物正面から西側に建物を取り囲み、北庭へと連続する。
庭に配された灯篭や手水鉢、様々な形の岩なども八雲は好んで描写している。

昆虫や蛙、小さな生物が日々見せる姿を八雲は愛した。
池に棲む蛙を守るため食べ残りの肉を皿のまま石段に置き、家中でイタチや蛇から蛙を庇ったと伝えられている。

建物名称	小泉八雲旧居
建築年	1905年(明治38年)建築/1912年-1925年（大正期）増築
構造・様式	木造瓦葺平屋建
所在地	島根県松江市北堀町315番地
電　話	0852-23-0714
Ｈ　Ｐ	https://www.matsue-castle.jp/kyukyo/
開館時間	8：30～18：30（10/1～3/31日17：00）
アクセス	松江駅からバスで約20分
備　考	史跡名勝天然記念物

旅館美保館本館

りょかんみほかんほんかん

島根県松江市

美保関は古くから海上交通の要として栄えてきた。
朝鮮半島や環日本海交易の拠点として繁栄。
江戸から明治にかけては北前船の寄港地として栄え廻船問屋が軒を連ねた。
美保館を営む定秀家は源平合戦の東の将、松田十郎藤原定秀が石橋山の戦いに敗れ、美保関に定住したのが始まりとされ、四十一代定秀寛一・ナツ夫婦が美保関で初めての旅館である美保館の営業を開始している。

美保関神社から続く青石畳通りは、海石を切り出して作られた石畳の路で、雨の日は石畳みがうっすらと青く輝き、一際美しい。
通りを挟んで海側に美保館本館、山側に二代目美保館が佇み、青石畳通りの風情を作り出している。

石畳通りに面した入口をくぐると、格子天井の重厚感ある玄関空間の向こうに、思いがけず明るい空間が広がっている。昭和4年に当初中庭だった空間をガラス天井のアトリウムに改築。
アトリウムを囲んで張り巡らされた廊下と階段、趣向を凝らした数寄屋造りの部屋や空間は訪れる人を日常から離れた異空間へと誘う。
アトリウムを含むこの空間ではコンサートや講演会など様々な催しが開催されている。

見どころ

美保館本館の見どころは何といってもアトリウムを囲む吹抜空間。
そしてそれを囲む回廊に設えられた様々な座敷や小部屋。
その連続性が生み出す変化に富んだ景色の面白さにある。

欄間・障子・丸窓。
部屋毎に様々な意匠が凝らされており、当時の大工や指物師の高度な技術と遊び心を垣間見ることが出来る。

トップライトからの日差しが凛とした影を落とす昼間も、アトリウムを挟む部屋の障子が淡く染まる夜の姿も。
それぞれに美しく、是非どちらも堪能することをお奨めしたい。

建物名称	旅館美保館本館
建築年	1905年(明治38年)建築/1912年-1925年（大正期）増築
構造・様式	木造瓦葺二階建
所在地	島根県松江市美保関町美保関573
電　話	0856-73-0111
Ｈ　Ｐ	http://http://www.mihokan.co.jp/
開館時間	旅館として営業中（見学可能/会合・会食・宿泊は要予約）
アクセス	松江駅からバスで約80分（乗り換え有） 境港駅からタクシー15分　（又はバス４０分～１時間）
備　考	国登録有形文化財

旧堀氏庭園　楽山荘客殿

きゅうほりしていえん　　らくざんそうきゃくでん

島根県鹿足郡

※

津和野町中心部から約10km上流の畑迫地区。
堀家は代々、銅山年寄役を世襲し、天領差配家として三百年の歴史をつないできた名家。経営の繁栄に従って本宅を中心に庭園や学校、病院などを建設し、歴史的・文化的・景観的に価値の高い建造物や遺構を数多く残している。

※

※「津和野町教育委員会」所蔵

見どころ

楽山荘客殿は、書院造を基調にしながらも、各室で意匠を凝らした数寄屋風の座敷からなる。多様な材の取り合わせの巧みさや、ハツリ目のつけ方など数寄屋や茶室などの作事を得意とした大工によることがうかがえる。

■１階主座敷　床柱は赤松の皮付

使われている材料や、欄間、障子、目に入るもの全てが魅力的なものとなっている。

■２階主座敷
床柱は北山杉天然絞り丸太

琵琶台の天井が長板を縦横に並べた幾何学模様であるのに対して、床の間の天井は格天井にして変化を付けている。境には赤松の面皮を吊り束としている。

客殿には茶室（小間）をあわせて７つの床の間があり「真・行・草」の座敷デザインをみることができる。

漆喰仕上の土塀は東西に100mを超える。屋敷地内の主屋と客殿とは小さな庭門で区画されており、客殿と庭園とによる、まさに庭屋一如である。一年を通じて美しい景観を作り出しているが、その中でも秋の庭園は絶景。この屋敷対面にある「和楽園」周辺地を含んだ約6.5haの範囲がが国の名勝に指定されている。

１階主座敷から中間域を通した新緑の庭園
薄暗い空間座して身を休める

２階障子越しに見える紅葉の景色
美しさが客をもてなす

※

建物名称	（堀氏旧宅）　楽山荘客殿
建築年	1897年(明治30年)上棟　1900年竣工(明治33年)
構造・様式	木造瓦葺二階建
所在地	島根県鹿足郡津和野町邑輝795
電　話	0856-72-0010
Ｈ　Ｐ	http://tsuwano-bunka.net/horiteien/
開館時間	9：00～16：30
アクセス	津和野駅から町営バス長野行き約20分、堀庭園下車 P 有
備　考	月曜休館日※11月は無休　月曜が祝日の場合翌日が休み

いかしの舎

いかしのや

岡山県都窪郡早島町

長屋門　　いかしの舎喫茶

い草の町として、また、金毘羅往来の地として、昔から経済・文化とともに隆盛を極めた早島。その長い歴史は、早島に独特の文化的土壌を培い、誇り高い町民性をはぐくんできた。「いかしの舎」は畳表・経糸（たていと）の問屋で当時の繁栄を物語る代表的町屋・寺山家を改修した建物で、早島に受け継がれた遺産を保存しながら、新しい文化を創造する拠点として今に蘇らせたものである。
「五十橿舎（いかしのや）」とは、明治期の歌人で岡山市に在住した岡直盧（おかなおなり）がここを訪れた際、寺山家に対して命名したもので、「盛りに足りておごそか」という意味である。

見どころ

往時をしのばせる貴重な建物でありながら、多目的文化交流の施設として、美術展示会、ミニコンサート、茶会、食事会、法要、ウェディング等、幅広く活用されている。建物はすべて自由に見学でき（貸し切り時を除く）、四季折々の姿を見せる庭を眺めながら、茶房にてゆっくり食事やお茶を楽しむこともおすすめしたい。

母屋１階座敷

母屋１階座敷

長屋門

いかしの舎喫茶

母屋１階座敷

【長屋門（ながやもん）】
現在は県道となった、金毘羅往来に臨む。
１・２階にそれぞれ１２畳・２０畳の和室を備え、ヨガ教室やフラワーアレンジメント教室等に利用されている。

母屋玄関より表庭を見る

【いかしの舎喫茶（いかしのやきっさ）】
伝統的ななまこ壁の蔵を利用した茶房。１・２階ともギャラリースペースがあり、開放的な吹抜けを活かした一体的利用もできる。
大きな一枚ガラスからは、来客を迎える表庭の様子が窺える。

２階大広間

【母屋（おもや）】
元は厨であったと思われる大きな土間から板間の玄関へ上がると、田の字に並ぶ和室から南側の中庭に面する広縁へと続く。
２階は七島藺（しちとうい）を使った琉球畳を敷き詰めた２４.５畳の大広間。創建時の丸太の梁は６尺ほどの高さにあり、眼前に迫る。
朝鮮張りの回廊の先には中国風の応接室があり、栄華が偲ばれる。

中庭（露地）

【竹坪庵（ちくへいあん）】
母屋から、渡り廊下でつながる離れの茶室。
平成４年の改修時、京都より移築。古田織部の作と伝えられる四畳台目茶室「八窓庵(はっそうあん/明治24年、興福寺の大乗院庭内より奈良国立博物館中庭へ移築)」の写しである。
母屋からいったん中庭へ降りると、腰掛待合へとつながる露地が設えられており、世俗を離れ清浄無垢の精神に至るという茶の湯の心を感じることもできる。

中庭から見る竹坪庵

建物名称	いかしの舎
建築年	明治末期（1992年に改修）
構造・様式	木造２階建て
所在地	岡山県都窪郡早島町早島1466
電　話	086-483-1243
Ｈ　Ｐ	http://www.town.hayashima.lg.jp/ikashinoya/1456464734836.html
開館時間	AM9:00～PM5:00　（月曜日休館）
アクセス	JR瀬戸大橋線早島駅から徒歩12分 瀬戸中央自動車道早島ICから車で2分　駐車場あり
備　考	見学は無料。部屋使用は有料。

脇本陣　木代邸

岡山県真庭郡

わきほんじん　きしろてい

木代邸外観

脇本陣木代家は、出雲松江藩松平氏の参勤交代の往来の宿場として栄えた新庄宿で脇本陣をつとめた家である。屋号を「向馬場屋」と称し、江戸時代の終わり頃に建てられた幕末を代表する建物で三列六間取りの大規模家屋である。入口の柱には馬つなぎの環が備えられ、またトイレには今でも刀掛が残っており、江戸の風情を今に伝える大名旅籠である。木代邸はがいせん桜通りに面しており、家並みの前には残したい日本の音100選に選ばれた涼しげな音色を奏でる美しい小川があり、地域の人々の生活用水として大切にされている。

木代邸　玄関先の小川の水車

木代邸　内部

見どころ

脇本陣の木代は分家である。本家木代は出雲の尼子氏に仕え、尼子氏の出城である新庄沢城主吉田修理の家臣であった。尼子氏が滅ぶとともに、武士を捨てここに農民として宿場の町並みに居を構えたのである。
敷地内にある施設は自由に見学できる。明治時代に醤油製造を行っていた蔵を改造したさくら茶屋では郷土料理を堪能できる。桜の時期に訪れることをお勧めする。
木代邸中庭には新庄村の歴史を感じることのできる展示スペース「史紀庵」があり、出雲街道新庄宿、がいせん桜、脇本陣木代邸についての資料が陳列されている。

親子格子

廊下の丸窓

蔀戸

刀掛け

蔀戸（しとみど）は、通常外に面した開口部に設けるが室内にある蔀戸は県下でも珍しい。

がいせん桜は、1906年に日露戦争での戦勝を記念して旧出雲街道宿場町の両側に植えられた桜の通称。毎年桜の開花期にがいせん桜まつりが開催される。「岡山県で最後の桜の名所」として有名である。

【木代邸】
木代邸は切妻平入り中二階の建物で、屋根は石州瓦の桟瓦葺で赤茶色の独特の色合いである。外壁は白漆喰仕上げの塗壁造り、腰壁は下見板張りで鎧伏せの黒っぽい板張りで、壁の白さとの対比が美しい。部屋は表側に店の間、玄関の間、奥の間があり、裏側に居間、中納戸、奥納戸の三列六間取りである。さらに囲炉裏の間、湯殿、厠とある。囲炉裏の間は板張りの部屋で、囲炉裏が二か所もある珍しい造りとなっている。雪が降り積もる厳しい冬に峠を行き来する者にひとりでも多く、一刻も早く暖を取ってもらいたいという配慮を感じることができる。

史記庵

囲炉裏の間

建物名称	新庄宿　脇本陣　木代邸
建築年	安政４年
構造・様式	木造二階建て
所在地	岡山県真庭郡新庄村中町1107
電　話	0867-56-2626（新庄村役場代表）
Ｈ　Ｐ	http://www.vill.shinjo.okayama.jp/index.ph
開館時間	新庄村教育委員会へ問い合わせ 桜茶屋は春以外は予約すれば飲食可能
アクセス	JR姫新線 中国勝山駅／中鉄バス40分 米子自動車道 久世IC／40分、又は蒜山IC／25分
備考	新庄村有形文化財

後楽園

こう　らく　えん

岡山県岡山市

延養亭

【延養亭（えんようてい）】

藩主の居間で、園内で最も重要な建物だったが、戦災で焼失し、昭和三十五年に当時第一級の木材と技術で築庭当時の間取り「御茶屋御絵図」を元に復元された。築庭当初から現在の位置に建てられ、藩主の座る主室からの眺めが最も美しくなるように、庭園が作られている。現在もこの景観の保全につとめている。沢の池、唯心山、借景の操山と、園内外の景観が一望できる、後楽園の中心的建物である。現在、期間限定で一般公開がある。また、お正月や月見などの年中行事の時には、琴の演奏が催される。

延養亭には隣接する茶室「臨い軒」がある。天井に龍の絵が描かれていることから「龍の間」とも呼ばれている。戦争で焼失し、延養亭とともに復元された。現在の龍の絵は、倉敷市出身の日本画家池田遙邨画伯によって、描かれたものである。

（※「臨い軒」は非公開）

【島茶屋（しまちゃや）】

園内最大の池である「沢の池」の中の島にある茶屋である。園路より西に向かって太鼓橋を渡りる。通常は一般公開されていないが、茶室として人気の貸し出し建築物である。

板の筋違い橋で繋がっている御野島には釣殿があり備前焼の鶏が寄棟の棟上に置かれている。（御野島への一般見学は不可）

島茶屋

見どころ

非常に洗練されたシンプルな室内。障子を開けると素晴らしい開放感と美しい景色は時を忘れるほどである。治政は茶道を好み、書画、俳句などにも秀でていたが、特に大文字の名人として知られていた。写真の掛け軸は「致遠（ちえん・遠きを致す）」（延養亭）

延養亭　床の間と池田治政の書

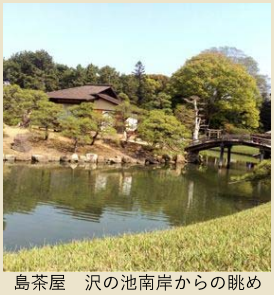
延養亭　藩主の座る主室からの眺め

4畳半に床ノ間、床脇付。東に、2畳と直角3角形の板間付。4畳半は、腰付障子で南と西が開放され、障子の外には、濡れ縁が廻る。濡れ縁には、南側に切石の、西側に自然石の沓脱石が配置されている 。東側 2畳半大の室の東壁面は 、5尺2枚割の腰付障子で、勝手口だったと思われる。3角形の板間の斜辺に辺る壁面には、丸窓が添えられている。4畳半からは、南の唯心山から西の延養亭、2畳半の丸窓からは、東南の流店、干入の森、桜林、梅林、が眺められる。基礎は沓石、根回り竹横木下は差石。（島茶屋）

島茶屋　室内から沢の池の眺め

島茶屋　室内続く竿縁

島茶屋　丸窓



島茶屋　沢の池南岸からの眺め

【庭園】

岡山後楽園は、江戸時代を代表する大名庭園の一つである。延養亭や能舞台を中心とした亭舎、園内各所に置かれた茶室や祠には、歴代藩主の思いが込められている。

広い芝生地や、池、築山、亭舎が園路や水路で結ばれ、歩きながら移り変わる景色を眺めることができるよう、工夫された庭園である。通年四季折々の景観に合わせた、趣向を懲らせたイベントで賑わう。春と夏と秋には人気のイベント、夜間特別開園「幻想庭園」が開催される。

[ウメ(梅)]時期:2月上旬～3月上旬
[サクラ(桜)]時期:3月下旬～4月上旬
[ツツジ]時期:4月中旬～5月下旬
[ハナショウブ(花菖蒲)]時期:6月上旬～6月下旬
[ハス]時期:6月下旬～7月下旬
[紅葉]時期:11月中旬～12月上旬

[芝を大量に使った庭]日本に広く自生している野芝を使った明るく広々とした庭園である。築庭当時、芝は沢の池西側の延養亭から見える範囲にだけ使われ園内の大半は田畑であった。その後、田畑の削減に伴って芝生地が広がり、 園全体に使われたのは明治以降。

[曲水]昔は旭川の約4km上流から対岸まで引いた後楽園用水を利用していたが、今は伏流水をくみ上げている。その水を池や滝に上手に利用し、優れた水の景色を作り上げている。

延養亭　室内からの眺め

入り口付近から沢の池と島茶屋の眺め

建物名称	後楽園　延養亭・島茶屋
建築年	延養亭（昭和35年復元）・島茶屋（不明）
構造・様式	木造平屋建
所在地	岡山県岡山市北区後楽園１－５
電　話	086-272-1148
Ｈ　Ｐ	http://okayama-korakuen.jp/
開館時間	3月20日～9月30日午前7時30分～午後6時 10月1日～3月19日午前8時～午後5時（年中無休）
アクセス	ＪＲ岡山駅から徒歩２５分　駐車場有
備　考	特別名勝

由加山 蓮台寺 客殿 通天橋

岡山県倉敷市

ゆがさん　れんだいじ　きゃくでん　つうてんきょう

境内よりを通天橋を望む

日本三大権現のひとつ、瑜伽大権現をお祀りし、厄難、災いを払う、厄除け祈祷を行っている。「厄除けの寺」として知られている由加山蓮台寺は、桜のシーズンになると境内は数千本の桜が咲き誇りピンク色に染まり美しい。
特に境内にある双樹満願桜は有名で、多くの参拝者が訪れる。

通天橋室内

見どころ

由加山は、江戸時代には四国の金毘羅大権現と両参りが盛んであった瑜伽大権現をお祀りする蓮台寺の御山である。3万坪の境内には観音堂、権現堂、大師堂、多宝塔など数多くの建築物があるが、中でも備前藩主池田候の参拝時に使用された蓮台寺客殿は県指定重要文化財で、円山応挙の竹鶏の図をはじめ108点の貴重な障屏画が並び、江戸時代にお殿様が宿泊参拝した様子をうかがい知ることができる。
皇室の方が座られた御成の間は、中段、上段の間に加え上々段を設けた造りで、現存するものでは松島の瑞巌寺と由加山蓮台寺の2箇所のみである。
また、上段の間正面に掲げられた掛軸は備前藩主の直筆の作品で、「蓮台寺」の三文字が書かれている。
客殿の奥には四季折々の風景を楽しめる庭園が広がっており、庭園を眺めながら頂ける精進料理コースを申し込みゆったりと拝観されることをお薦めする。

庭園

御成の間

孔雀の間

傾斜の階段

階段内部

通天橋から窓を眺める（桜の絵屏風）

【通天橋】
本殿と客殿を結ぶ通天橋は、桜の時期には無料で入ることができます。通天橋の窓からは満開の桜が絵屏風のように見え、参拝者の心を麗してくれる。壁に飾られた絵画やピアノ演奏を楽しむことができ、芸術文化の交流フロアにもなっている。
通天橋の奥には備前焼の水瓶が展示されており、季節の草花が拝観者を優しく迎えてくれる。
精進料理を申し込むと客殿を拝観することができ、総本殿にて蓮台寺説明とお清めをうけ、県重要文化財である客殿拝観の後に四季折々の逸品膳を堪能できる。
また大茶盛は奈良西大寺の僧叡尊が正月行事の終わりに1年の健康を念じたお茶を民衆に振舞ったことに由来しており、蓮台寺はその西大寺より唯一認可を受けたお寺である。大きなお茶碗で一服。心静に悠久の時を味わうことができる。

備前焼の水瓶

大茶盛

庭園

建物名称	由加山　蓮台寺　客殿
建築年	寛政年間（1700年頃）完成
構造・様式	客殿：木造二階建て
所在地	岡山県倉敷市児島由加2855
電　話	086-477-6222
Ｈ　Ｐ	http://yugasan.jp/
開館時間	9:00～16:00
アクセス	JR瀬戸大橋線「児島駅」よりタクシーにて約15分 瀬戸中央自動車道「水島IC」より約10分　駐車場有
備　考	客殿　岡山県指定重要文化財 県指定重要文化財の「客殿」にて精進料理をお楽しみいただけます。

特別史跡 旧閑谷学校

とくべつしせき きゅうしずたにがっこう

岡山県備前市

泮池より鶴鳴門・講堂を望む

閑谷学校は、江戸時代に岡山藩主池田光政によって創設された庶民のための公立学校である。その姿はほぼ建築当時のままであり、慌ただしい日常生活とは一線を隔す麟とした佇まいを保っている。創学の精神は形を変えつつ現代に受け継がれ、岡山県内外の生徒が研修に訪れる現役の教育の場である。

講堂（国宝）

見どころ

うねるように連なる765mの石塀に囲まれた敷地内には、閑谷学校の中心的建物である講堂をはじめ、鶴鳴門と呼ばれる正門、孔子像を納める聖廟、池田光政を祀る閑谷神社など備前焼の瓦を用いた精工な造りの建築物が並び立ち、2本の楷の木が四季おりおりの色をまとう様は壮観である。

なお、現在は資料館として使用されている旧閑谷中学校本館は明治時代の校舎であり、納められている資料とともにゆっくりと時を過ごしてほしい空間である。

講堂内部

石塀

椿山

紅葉した楷の木

備前焼の瓦

【講堂・小斎】

桁行7間、梁間6間、一重入母屋造、備前焼の瓦を用いた錣葺の屋根をもつ。内部には10本の丸柱に囲まれた内室とそれを取り囲む入側があり、柱と床は拭漆仕上げである。鏡のような床は周辺の自然の色をとりこんで季節により表情を変える。講堂の南側には小斎と呼ばれる一重入母屋造、こけら葺の簡素な造りの建物があり、内部には四畳半二間と浴室が備えられている。藩主が閑谷学校を訪れた際に使用された建物で、子ども達が勉学に励む様子を眺めた様を想像すると当時の藩主の教育への想いが伝わってくる。小斎には質素ながらも床や炉があり、窓から見える借景の山々は見事である。

【習芸斎・飲室】

講堂の西側に連なる建物で、習芸斎は教室、飲室は休憩室である。飲室には石を用いた炉があり、冬場に炭で暖をとったり、湯を沸かしてお茶を飲みながら師匠と生徒が交流をもった空間である。

【椿山】

閑谷神社の東には椿がうっそうと生い茂る小道があり、その先の小山には池田光政の髪などが納められている。椿に囲まれた空間は不思議と心落ち着く空気を醸し出している。

【黄葉亭】

閑谷学校から500mほど山あいの小道を歩くとみえてくる、四畳半一間の閑静な茶室であり、来客をもてなすために使用されていた建物である。小川の合流する土地に文化10年（1813）につくられ、ひっそりと佇む様は時の流れが止まっているかの様である。黄葉亭にたどり着くまでの小道には、池田光政の命をうけ学校建設に携わった津田永忠の宅跡があり、当時と変わらぬ静かな山間の景色を楽しむことができる。

黄葉亭

建物名称	特別史跡 旧閑谷学校
建築年	寛文10年（1670）～元禄14年（1701）造営
構造・様式	講堂：木造一重入母屋造本瓦錣葺（備前焼瓦）
所在地	岡山県備前市閑谷784
電　話	0869-67-1436
Ｈ　Ｐ	http://shizutani.jp
開館時間	9:00～17:00　休館日：12月29日～31日
アクセス	JR山陽本線吉永駅下車タクシーで約8分 駐車場有 JR赤穂線備前片上駅下車タクシーで約10分
備　考	特別史跡（旧閑谷学校） 国宝（講堂） 重要文化財　登録有形文化財（閑谷学校資料館）

重森三玲意匠書院復元

岡山県岡山市

しげもりみれいいしょうしょいんふくげん

書院全景

岡山県立美術館の二階展示室の一角に、作庭家重森三玲意匠の書院がある。この展示室には古い時代の掛軸から新進気鋭の作家の現代的な作品まで、さまざまな種類の作品が並べられる。そのすべてを受け入れるだけの寛容さがこの書院にはあり、それこそが和の空間が持つ魅力だと思うのでここに紹介したい。

重森三玲は、岡山県吉備中央町出身の作庭家・庭園史家である。18歳にして自宅に茶室を設計し、上京後もいけばな、日本画、庭園などについて造詣を深め、京都市東山区にある東福寺の「国指定名勝 東福寺本坊庭園」を皮切りに多くの庭園を完成させる。

岡山県吉備中央町に重森三玲の姉妹が住んでいた民家があり、その民家に三玲によって設えられたこの書院が岡山県立美術館に復元されたのは2009年のことである。建物、内部とも痛みが激しかったため、部屋全体は実測のもと作成された図面をもとに新たに作成されたが、重森三玲らしいデザインの襖、障子、違い棚などは持ち主より美術館へ寄贈され、修復された。

6畳に床の間、違い棚がついている空間は、住宅の中にあるとそれはごく普通の風景だが、美術館の展示室の一部にあると縁側も含めると思いのほか広く感じられる。中まで立ち入ることはできず、展示スペースの一部として和の空間を味わうという趣である。日本画の展示の際には床の間に掛けられる軸はよりリアリティをもって鑑賞することができ、焼き物の展示の際にはその焼き物が日常に溶け込む様子が想像でき、今回の取材時のように現代アート作品の展示の際には、その作品が書院を含めて成り立つ様子に感嘆させられる。

見どころ

特筆すべき見どころはなんといってもこの襖であろう。変形の激しかった骨組みは新たに作られており、損傷していた襖紙は復元されている。襖紙は、縁を外した部分に残る当時の色合いを手掛かりに京表具師の手によって再現された。復元に使用された紙は、昭和50年代の桂離宮改修で使用されたものである。三玲の憧憬の的であったであろう桂離宮と同じ材料が使われたという点も興味深い。

独特な色合いの市松模様と、その前面を流れる雲のような不思議な模様は、眺めているとさまざまな形に見えてきて飽きることがない。その模様の中につく引き手は七宝焼きで、美しい模様が描いてあるという。

復元によって当時の色合いを取り戻した襖が、藍と銀箔の大柄な模様というある種現代的な佇まいだからこそ、どんな作品とも折り合う空間を造りだしていると感じられる。

この書院のある岡山県立美術館は、昭和63年に開館した岡田新一設計の建物である。建物はもちろんのこと、毎回充実した内容の企画展、常設展を和の空間とともにぜひ鑑賞していただきたい。

参考文献：岡山県立美術館　重森三玲展　パンフレット

取材当日は太田三郎氏の作品が展示中であった。作品名：Milk
書院も表現の一部として取り込んでいる。

建物名称	重森三玲意匠書院復元
建築年	2009年
構造・様式	―
所在地	岡山県岡山市北区天神町8-48　岡山県立美術館内
電　話	086-225-4800
Ｈ　Ｐ	https://okayama-kenbi.info/
開館時間	9時～17時（入館は閉館30分前まで）
アクセス	JR岡山駅後楽園口（東口）から徒歩15分 地下駐車場：38台（近隣有料駐車場有）
備　考	月曜日、年末年始、展示替期間中は休館

旧広兼家住宅（通称：広兼邸）

岡山県高梁市

きゅうひろかねけじゅうたく（つうしょう：ひろかねてい）

楼門づくりで城郭にも劣らない堂々とした石垣は、高さが15m、長さが100mあり、今もそのままに当時の富豪ぶりをたたえている。駐車場からの眺めは圧巻で、映画のロケ地としても知られている。

旧広兼家住宅（通称：広兼邸）は享和・文化の頃、小泉銅山とローハ（硫化鉄＝ベンガラの原料）の製造を営み、巨大な富を築いた大野呂の庄屋・広兼氏の邸宅で、お城のような石垣と主屋・土蔵3棟・楼門・長屋は江戸末期に建設された。庭園には水琴窟が設置されていて、規模、構造とも雄大な城郭を思わせる構えで当時の富豪の姿を偲ばせている。

楼門

石垣に沿ってスロープを上がった先に楼門があり、門の上には不寝番部屋が設けられている。主屋の正面屋根では逆立ちした狛犬も侵入者に睨みをきかせている。

屋根上の狛犬

見どころ

広兼邸は山を背負うようにそびえ立つ大邸宅である。春は桜、秋は紅葉した山に包まれ、また庭に植えられた様々な木や花によって、季節ごとにその表情を変える。

毎年５月にイベント「広兼邸　花めぐり」が、離れ座敷と衆楽園で開催されている。庭からでも鑑賞できるが、イベントの期間中は普段上がることができない座敷に上がって生け花を鑑賞できるチケット（お茶とお菓子付）も販売される。

本宅だけで323㎡（約98坪）あり、離れ座敷・土蔵・楼門・長屋まで入れると全部で723㎡（約220坪）56部屋ある。また、邸宅の向かいには明治初期、広兼氏個人の神社として天広神社が建てられた。境内は庭園風となっており、衆楽園と呼ばれている。

離れのお茶室

土蔵の展示品

本宅の庭に面した座敷は、手前から客間、玄関、店の間、控間、さらに台所と続く。

水琴窟

本宅の隣に佇む離れ座敷は大正時代に建設され、当主の婚礼に一度だけ使用された。床の間や襖も素晴しく、お茶室化粧部屋・客間・風呂等を備えている。離れの奥にある土蔵には、当時の紋付や調度品屏風などが展示されている。

広兼邸から４kmほど山道を行くと突如、赤銅色の石州瓦とベンガラ色の外観で統一された、見事な町並みが現れる。ここが国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている「吹屋の町並み」である。

吹屋の特異な点は、豪商個々の屋敷が豪華さを競うのではなく、旦那衆が相談の上で石州（今の島根県）から宮大工の棟梁たちを招いて、町全体が統一されたコンセプトの下に建てられたという先進的な思想にある。旧片山家住宅（国指定重要文化財）、旧吹屋小学校（県指定重要文化財）などの見どころも多く、広兼邸と合わせて、山あいの町並みにもぜひ足を延ばしていただきたい。

建物名称	旧広兼家住宅（通称：広兼邸）
建築年	文化７年（1810）（離れは大正時代）
構造・様式	木造入母屋造・瓦葺
所在地	岡山県高梁市成羽町中野2710
電　話	0866-29-2222（成羽町観光協会吹屋支部）
Ｈ　Ｐ	高梁市観光協会（成羽町吹屋地区） http://takahasikanko.or.jp/modules/spot/index.php?cat_id=5 成羽町観光協会吹屋支部 https://sites.google.com/site/fukiyakankou/home
開館時間	9:00～17:00（12月～3月は10:00～16:00） 休館日：12月29日～31日
アクセス	JR伯備線 岡山→備中高梁 約50分 →備中高梁駅から定期路線バスで吹屋へ 約１時間 吹屋観光案内所より約４km　駐車場35台あり
備　考	高梁市指定重要文化財

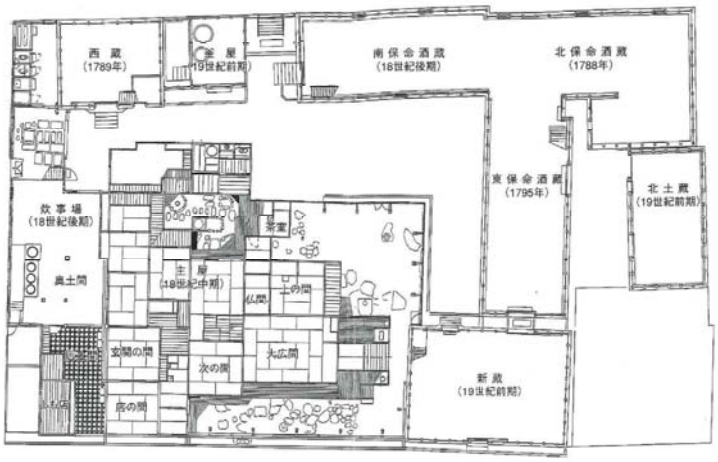
太田家住宅

おおたけじゅうたく

広島県福山市

太田家住宅は、主屋や保命酒醸造蔵など９棟から構成される。建物の建築年代は、文書や日記、棟札などから、主屋が18世紀中期、炊事場・南保命酒蔵が18世紀後期、北保命酒蔵が天明8年（1788）、西蔵が寛政元年（1789）、東保命酒蔵が寛政7年（1795）、釜屋・新蔵・北土蔵が19世紀前半頃と考えられている。本建物は太田家住宅と呼ばれているが、もとは中村家によって江戸時代中期から後期にかけて家屋敷を購入しながら拡張・増築され、現在の規模となる。明治期になって太田家が受け継ぎ今日に至る。

保命酒とは、創業者である中村吉兵衛が餅米を主原料に、粳米、焼酎、16種類の漢方薬を使って醸造した薬酒である。宝永7年（1710）には藩から一手醸造販売権を与えられていたが、明治になり専売権がなくなると保命酒醸造業者が増加、競争の激化と共に太田家は製造を終えた。現在、原料や醸造方法は江戸時代とほとんど変わらない。ただしオリジナル中村家の薬味の調合は一子相伝であったため、各醸造元の工夫によって多少味に違いがある。



見どころ

蔵と隣接する主屋は、実に美しい日本建築である。小規模な庭園が設けられ、住んでいた人やお客の目を楽しませる造りとなっている。表の通りからも見える市松模様の土間床は、瓦と漆喰で構成されたモダンなデザインある。天井には網代天井が施され、ハイサイドで設けられた窓は土間レベルから開閉できる装置がついている。蔵の壁にあるナマコ壁は、１や４、５といった数を表現し、まるでサイコロのようである。

太田家住宅は、平成3年（1991）5月31日に重要文化財の指定を受けており、平成8年（1996）から平成13年（2001）まで、約6年の歳月をかけて保存修理事業が行われ、屋敷構えとしては最も充実した江戸時代末期から明治時代初期の姿に復旧整備された。四方が道路で囲まれた本敷地であるが、東（見取図の下）の道路の対面に、同じく重要文化財指定を受けた別邸「太田家住宅朝宗亭」が建っている。雁木を独占するように海に面しているため、専用の船着き場をもっていたと考えられる。太田家の一連の建物郡は、街区をまるごと占めるような大規模なものであり、鞆の浦の景観形成において重要な役割を果たしている。

参考文献：太田家住宅を守る会　パンフレットより

建物名称	太田家住宅
建築年	18世紀
構造・様式	木造
所在地	広島県福山市鞆町鞆842
電　話	084-982-3553
開館時間	10:00～17:00（入館は16:30まで　火曜休館）
アクセス	JR福山駅南口から鞆鉄バス鞆線で「鞆港」下車、徒歩５分
備　考	国指定重要文化財

恋しき

こいしき

広島県府中市

「恋しき」は近世の宿場町によく見られる切妻平入りの町家で、伝統的な木造三階建ての旅館建築である。明治5年(1872)に開業し、石州街道を往来する人々が宿泊したが、開業時に建築されたのか、すでにあった建物を用いて開業したのかは定かではない。当時の財界人の一人が旅館名「土生屋」から「こいしき」へと改名したと言われており、「恋」の字がいつごろから使われ始めたのかは不明である。時代の変化に応じて、当時の好みや流行を取り入れながら増改築を重ねており、明治、大正、昭和の各時代が重層していることが特徴である。犬養毅、井伏鱒二など多くの著名人が宿泊しており、田山花袋の小説「蒲団」には恋しき宿泊の記載がある。平成に入り、旅館としての役目を終えることとなったが、平成16年(2004)に登録有形文化財に登録され、現在は「町屋 Cafe & Dining 恋しき」をメインテナントとした観光・商業複合施設として運営されている。

見どころ

泉水、築山を配した本格的な和風庭園が大正初期に築造されている。造園に際して、禅宗の僧侶が主屋の三階から縄張りをしたと言われており、庭園を囲むように5棟の離れが点在し、それぞれに控室や茶室を付した趣のある景色を作り出している。
（離れ「明月庵」（ふじの間）のみ登録有形文化財に指定されていない）

「恋しき」を後世に残していくために、文化財でありながら現状にとらわれず、柔軟にリノベーションを繰り返してきた様子が、随所に見られる。このような保存活用方法は、時代の状況に合わせて再生していくことの大切さをしめしている。

平成19年（2007）と平成24年（2012）と2回に渡り、改修・再生事業が行われていおり、「府中の文化、社交の場を後世に残したい」という思いが形となりまちのシンボルであり続けている。

配置図と平面図

参考文献：中国地域のよみがえる建築遺産―新たな生命を吹き込まれたレトロ建築の魅力（中国総研・地域再発見BOOKS）

建物名称	恋しき
建築年	明治初期
構造・様式	木造二階建て、一部三階建て
所在地	広島県府中市府中町178番地
電　話	0847-41-5140
Ｈ　Ｐ	https://www.koishiki.com （株式会社　恋しき）
営業時間	8:00～18:00（不定休）
アクセス	山陽自動車道「福山西I.C」から車で約30分
備　考	登録有形文化財

耕三寺潮聲閣

こうさんじちょうせいかく

広島県尾道市

書院造りを基調とした御佛間

潮聲閣は、耕三寺建立が初願される10年前の昭和2年（1927）、耕三師が36歳のとき、ご母堂の為に建築した壮大な住宅で、完成までに約5年の歳月を要した。
潮聲閣の名称は、子爵三室戸敬光の撰で表玄関の扁額も子爵の筆になっている。
母屋は木造・平屋・入母屋造・桟瓦葺（一部銅板葺）で、洋館は2階建て切妻造・洋瓦葺で車寄せ（ポーチ）が付属している。現在は耕三寺の重要な行事のときに使用されている。
本建物は和洋複合形住宅であり、広島県内でも数例が現存しているが、そのなかでも最も規模が大きく、かつ豪華な例がこの潮聲閣である。特に、日本住宅部分は、独創的で格式の高い書院造りの意匠が用いられ、折上格天井を多様することや名木をふんだんに使うなど、豪華さにおいても秀でており、昭和初期の住宅建築の最高傑作といえる。

見どころ

洋館と日本住宅を複合させた住宅建築は、一般的に洋館が表に位置し、その背後に日本住宅が配置されるが本建築では日本住宅のほうが正面にある。また正式な来客を迎える主室としての大広間よりも、ご母堂の居間である「老人室」のほうが豪華に造られているのは例のないことであり、耕三師の孝心によって造られた特別な住宅であることをよく表している。

潮聲閣の最高格式の座間である老人室

折上格天井で百二十四面の花鳥画が
帝展作家山下薫画伯によって描かれている

道路に面した洋館部の姿と見学で入れる和館の裏側勝手口

表玄関式台の天井

玄関の間

洋館部分の応接室

表玄関では式台を高欄付の廻り縁とし、玄関の間には一間半もの地袋付の付書院（室内側を華頭窓にし、外側に高欄付の小さな廻縁を設ける）その天井には畳大の一枚板を使い畳割と同じように配置されている。

参考文献：書院潮聲閣パンフレット

建物名称	耕三寺潮聲閣
建築年	1929
構造・様式	木造
所在地	広島県尾道市瀬戸田町瀬戸田553-2
電　話	0845-27-0800
Ｈ　Ｐ	http://www.kousanji.or.jp/
開館時間	10:00～16:00（年中無休）
アクセス	しまなみ海道「生口島南I.C」から車で13分
備　考	国登録有形文化財

旧毛利家本邸

きゅうもうりけほんてい

山口県防府市

旧毛利家本邸として、大正5年（1916年）に庭園とともに完成。ほとんど当時のまま残されおり、国の重要文化財に指定されている。
江戸時代の大名家の御殿建築の流れを汲みつつ、近代的な建築手法を巧みに取り入れているのが特徴。柱梁などの構造材は木曾ヒノキ、板戸は屋久杉、また、階段は段板ではなく、ヒノキの一本物がもちいられるなど、厳選された素材とそれらを活かす技術が格式高い邸宅を作り上げている。
一階の天井高、階高が高く、二階の窓からは、瀬戸内海を借景に広大な池泉回遊式庭園と防府の街を望む。大正期のガラスを随所に使い、風通しがよく、心地の良い空間。
設計・監督は毛利家専属の建築技師原竹三郎、作庭は佐久間金太郎。建物は合わせて12棟、敷地面積は8万4000㎡に及ぶ。

二階からの景色

見どころ

一階客室のシャンデリアは特注のドイツ製。高い天井で違和感なく、和風建築にとりいれられている。毛利家の家紋である「長門沢瀉」がデザインされている。

二階客室のシャンデリア。一階応接間や廊下、食事の間などすべてデザインを変える演出がみてとれる。
全て当時のもの。

一階の大広間は、最も格式の高い部屋で、折り上げ格天井にシャンデリアのライトも５つと豪華な仕様になっている。当時はすべて邸内の自家発電でまかなっていた。

玄関から応接間へつづく廊下及び応接間は、木目の美しい台湾ケヤキの一枚板が敷き詰められている。（写真左：一枚板の廊下）
また、接客、居住の表の空間、家政を支える裏方の空間がきちんと分けられており、表の空間の廊下はすべて畳廊下、裏方の空間は、すべて板廊下である。（写真右：庭園に面した畳廊下）
壮大にして落ち着いた雰囲気の近代建築遺産としても貴重な空間である。

家紋「長門沢瀉」をさまざまな意匠に工夫した釘隠。

建物名称	旧毛利家本邸
建築年	大正5年（1916年）
構造・様式	木造二階建て　書院造り
所在地	山口県防府市多々良1-15-1
電　話	0835-22-0001
Ｈ　Ｐ	http://www.c-able.ne.jp/~mouri-m/
開館時間	9：00～17：00（12月22日～31日休館）
アクセス	ＪＲ防府駅から約2.5キロ（車で約8分）
備　考	重要文化財

山口市菜香亭

やまぐちしさいこうてい

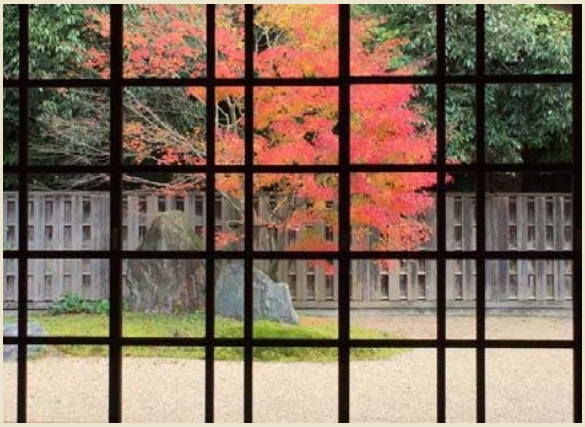
山口県山口市

写真提供：山口市

山口市菜香亭は、八坂神社境内に料亭菜香亭として明治10年に創業し、平成8年まで営業を行っていたものを、平成15年に移築復元した文化施設。
現在残っている建物は、明治20年から昭和11年の間に増改築された部分。
床面積は、約1,000㎡。
菜香亭は山口の迎賓館として使用され、歴史的人物や歴代の総理大臣も訪れており、直筆の書が飾られている。
大豆の御汁で磨かれたという黒光りする廊下や、ゆがみのあるガラスなど和風建築の良さを今に残している。
庭は大正時代の池泉観賞式庭園を移築している。

見どころ

大広間の床の間へ向かって右側には板の間の縁側、左側には畳敷きの縁側があり、それぞれ、庭に面している。
ゆがみのあるガラス越しに、季節の風景を望むことができ、まるで絵画のようである。
窓ガラスは、大正15年にベルギーから輸入されたと思われるフルコール法によるガラス。



大広間より中庭と客間棟を見る

写真提供:山口市

約150畳の大広間。歴史的人物の法要や祝宴が催された。戦後はここで結婚式が行われた。
床の間は、大正15年、昭和11年、二時代の意匠を再現しており、床脇に違い棚がなく、床柱の柱身中央部を切り取る形。
大広間のスパンは7,760mmもあり、木トラスが組まれている。建材は一部に明治時代の物をそのまま使用している。大広間は、明治26年ごろ、明治36年ごろ、大正15年ごろに増築を重ねており、その時代によってトラスが技術的に進歩している。その様子を検証できるよう、一部天井がガラス張りになっている。
当時の円卓や食器などが残っており、歴史が感じられる空間である。

建物名称	山口市菜香亭
建築年	明治20年から昭和11年（平成15年移築復元）
構造・様式	木造二階建て（補強の為一部鉄骨有）
所在地	山口県山口市天花１丁目２番７号
電　話	083-934-3312
Ｈ　Ｐ	https://www.c-able.ne.jp/~saikou/
開館時間	９：00～17：00（火曜日、12月29～1月3日休館）
アクセス	ＪＲ山口駅からバス「野田学園前」徒歩２分
備　考	

金子みすゞ記念館

山口県長門市

かねこみすずきねんかん

金子みすゞは、山口県出身の童謡詩人。
記念館は、「本館」と「金子文英堂」からなる。
「金子文英堂」は、金子みすゞの実家である書店を当時の場所に再現したもので、みすゞが童謡を書き始める前の子供時代を過ごしたところ。
表の書店から裏の庭まで、通り土間がある商家のつくり。庭を囲む形で風呂、便所があり、土間の台所と風呂の間に井戸のポンプがありどちらにも使えるように吐出口が回るようになっていた。
通りの雰囲気も昔ながらの風情が残っており、再現された大正時代の書店がなじんでいる。

見どころ

当時、文英堂の隣に造り酒屋があり、裏手に蔵があったことから、記念館は蔵をイメージしたつくりになっている。
梁や入口に古材が使われていて、梁の迫力は圧巻である。

写真提供：金子みすゞ記念館

文英堂二階のみすゞの部屋。格子窓から通りをながめ、行き交う人々、仙崎の潮風、移ろう季節を感じながらすごしたであろう、みすゞの温かいまなざしをうかがい知ることが出来る。この日々の感覚、感情が後の作品に影響していることが感じられる居心地の良い和室。
当時の木製家具が再現されており、木のあたたかみと畳の良い香りが、どこか懐かしい、心の落ち着く空間である。

書店から奥をながめる。ふすまをあけ放つと庭が見え奥までひとつづきの部屋となる。

建物名称	金子みすゞ記念館
建築年	平成15年（大正時代の建物を再現）
構造・様式	木造二階建て　　鉄筋コンクリート平屋建て
所在地	山口県長門市仙崎1308番地
電　話	0837-26-5155
Ｈ　Ｐ	http://www.city.nagato.yamaguchi.jp/site/misuzu/
開館時間	9：00～17：00（12月29日～1月1日休館）
アクセス	ＪＲ仙崎駅から徒歩５分
備　考	

長府毛利邸

ちょうふもうりてい

山口県下関市

長府毛利邸は、長府毛利家第14代当主・毛利元敏公により明治36年に完成した邸宅。城下町長府にあり、近くには功山寺、乃木神社などがあり、まちなかには長屋門や土塀が残っており、当時の風情を今に残している。
武家屋敷造りの母屋は、書院、明治天皇ご宿泊の間、居住空間であった室が残されている。玄関土間部分の天井は格天井、正面には鶴が描かれた板戸があり反対側には雉の絵が描かれている。中庭を囲むように部屋が配置されており、その反対側は庭園に面しているため、風通しがよく、季節の移り変わりを感じられる気持ちのよい空間となっている。庭に面したガラス障子は、歪みのあるガラスで和の趣が感じられる。

正面玄関

庭から見た居住空間

見どころ

長府毛利家の家紋は「一文字三星」と「抱沢瀉」を定紋とし、他に替紋として「菫」「五七桐」「十六菊」を用いた。その家紋をデザインした釘隠。

書院庭園は白壁に囲まれ、濡れ縁からの飛び石の配置、手水鉢など、庭自体に風格がある。畳敷きの書院前室に座り、庭を眺めていると、時の流れがゆっくりと感じられる。

書院造りの床の間。違い棚と窓枠の意匠も落ち着いた雰囲気。
天井高は3m。廊下や前室に面した欄間は障子欄間になっており、庭から庭へ風が通るようになっている。部屋と部屋の欄間は各部屋装飾が違い美しい。子供部屋の欄間は松竹梅。

居住空間であった家族の室は池泉回遊式庭園に面しており、回遊式庭園の奥には枯山水が配してある。
回遊を意識し作られているため、石橋や石段などが配置されている。いろいろな眺望を楽しみながら散策できる。池の奥から眺める毛利邸も美しい。

建物名称	長府毛利邸
建築年	明治36年（1903年）
構造・様式	木造平屋建て　武家屋敷造り
所在地	下関市長府惣社町４番１０号
電　話	083-245-8090
Ｈ　Ｐ	http://s-kanrikousha.com/mouriteitop.html
開館時間	９：00～17：00（12月28日～1月4日休館）
アクセス	ＪＲ下関駅からバス23分「城下町長府」徒歩10分
備　考	

長岡家住宅

ながおかけじゅうたく

徳島県三好市

長岡家全景

長岡家住宅は、三好市東祖谷落合集落の重要伝統的建造物群保存地区内にある伝統的建造物（特定物件）の一つで、中腹からやや下腹に位置しており、標高約９００ｍの南斜面に建つ。建築年代は、棟札が残っており明治３４年である。当初は同地区内にある喜多家の分家として建築された。脇土居あるいは西土居と呼ばれ、落合集落でも上層農家であったといわれている。当家は、木造平屋建、茅葺の寄棟造で、外壁は、土壁を保護するため、竹を火で炙ってから割ってつぶした（ひゃいだ）ものを張るという、祖谷地方に古くから残る工法の「ひしゃぎ竹」で仕上げられている。上層農家であったためか、間取りは食違六間取で、祖谷の民家特有のオモテに相当する部屋がなく、かわりに書院と床の間を備えた座敷がある。土間が極めて小さく、通常は平側に設けられる前便所が妻側にあるなど、この地方の他の民家とは多くの点で異なっている。農業だけでなく来客も意識した格式の高さが分かる貴重な建物である。

見どころ

長岡家住宅の茅葺の大きな寄棟と、この地方に古くから残る「ひしゃぎ竹」で仕上げた外壁は、祖谷地方特有のものだ。平側に長く伸びる縁側に座り、対岸を眺めてのんびりするもよし、中で板間やタタミに座りゆっくりするもよし。見どころというより、居どころと言った方がしっくりくるそんな建物である。そして建物だけでなく、対岸から眺めてみたり里道を歩いたりして、集落をじっくりと楽しんでもらいたい。

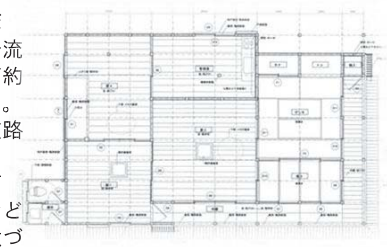
ザシキ

囲炉裏部屋

イモ穴

新緑の落合集落

落合集落は、県西部東祖谷のほぼ中央にあり、祖谷川と落合川の合流地点より山の斜面に沿って、東西約７５０ｍ南北約８５０ｍに広がる。斜面を蛇行しながら上に向かう道路沿いに民家が点在している。集落内を東西南北に走る里道や石垣、田畑、森、そこで住む人々などすべてのことが、この集落を特徴づけている。



長岡家住宅　平面図

対岸の中上地区にある展望所からほぼ全景を一望することができる。集落内には、一棟まるごと貸し切りできる茅葺きの民家が８棟あり、宿泊体験ができるほか、地場産食材やジビエを使った料理を楽しめる古民家レストランもある。

対岸の展望所から見た落合集落

建物名称	長岡家住宅
建築年	明治34年
構造・様式	木造平屋、寄棟造、茅葺
所在地	徳島県三好市東祖谷落合
電　話	0883-72-3910（三好市文化財課）
Ｈ　Ｐ	www.miyoshi.i-tokushima.jp（三好市）
開館時間	9：00～16：00（定休：毎週水曜日）
アクセス	車：井川池田IC下車　1時間30分
	バス：四国交通「鎖谷」下車　徒歩15分
備　考	重要伝統的建造物群保存地区内(特定物件)

出羽島の民家

てばじまのみんか

徳島県海部郡牟岐町

港から集落を望む

出羽島は、牟岐港沖約３.７㎞に位置する海岸周囲距離約３㎞の小さな離島である。島の北部には砂嘴（サシ)に囲まれた入り江があり、入り江に沿って集落が形成されている。島内には自動車の乗り入れは出来ず、アワエと呼ばれる路地が縦横に巡らされ、今でも手押し車が主な運搬手段として利用されている。集落の歴史は1800年に藩令による移住が開始されたことに始まり、江戸時代後期から昭和前期にかけて漁業の隆盛とともに集落も拡大・発展した。島の歴史は常に漁業と共にあり、現在も約70人の島民が漁業を生業として静かな島の暮らしを営んでいる。島への交通手段は、牟岐港から出港する定期船のみであり、高度経済成長期の開発の波にさらされることなく、近世から昭和にかけて形成された伝統的漁村集落のたたずまいをを現在に伝えている。島にはゆったりとした時間の流れがあり、清浄な空気と温かな潮風に包まれてほかにはない特別な旅情を味わうことができる。

見どころ

出羽島は、平成29年2月に徳島県3カ所目の重要伝統的建造物群保存地区に指定された。漁村集落としては国内２例目である。現存する建物群には建造された時代ごとの特徴が見られ、多様な建築様式を縦覧できる貴重な場所となっている。時代が進むにつれて平屋からつし二階・中二階・本二階と軒高が高くなる傾向があり、また最も特徴的な建築要素として平入り主屋の正面に設けられたミセ造り(上部蔀・下部床几)や出格子をみることができる。ミセ造りは四国東南部のみに見られる稀少な建築部品で、荒天時には雨戸として使用された。島全体が伝統的漁村集落の佇まいを現在に伝える貴重な文化遺産となっている。島の交流施設として復原された民家『波止（はと）の家』は事前申込みをすれば内部も見学可能である。

出羽島全景

交流施設『波止(はと)の家』
手前に手押し車が見える

もっとも特徴的な建築様式である「ミセづくり」と「出格子」をもつ民家。持送りには、家ごとにさまざまな意匠がこらされている。ミセは漁網の繕いや魚を捌く作業台として利用され、時には近所の人との談笑を楽しむ縁台となった。

『波止の家』内部
通り土間を潮風が吹き抜ける

建物名称	出羽島（てばじま）
建築年	江戸時代後期から昭和初期にかけて
構造・様式	木造平屋・つし二階・中二階・二階建て等
所在地	徳島県海部郡牟岐町牟岐浦
電　話	0884-72-0107（牟岐町教育委員会）
Ｈ　Ｐ	tebajima.jp
アクセス	牟岐港から定期連絡船で15分 牟岐港へはJR牟岐駅から徒歩8分
備　考	重要伝統的建造物群

吉田家住宅

よしだけじゅうたく

徳島県美馬市

吉田家住宅は、吉田直兵衛が寛政四年（1792）に創業した藍商家である。藍商とは、幕末から明治にかけて繁盛した藍染めの原料を販売する商人をいう。建物は、重要伝統的建造物群保存地区「うだつの町並み」に面していて、間口十一間・奥行き三十間の広大な敷地を有し、母屋・質蔵・藍蔵など五棟が中庭を囲むように建っている。家屋は、本瓦葺きに大壁造りの重厚なたたずまいで、隣家と接する二階の妻壁に卯建を設けている。建物裏手には雁木石段があり、かつて吉野川が近くを流れていたときの名残で、降りてすぐの所が舟着場になっていた。また、家屋の中には、商談に使ったみせのまや帳場があり、使用人部屋や藍蔵、藍寝床なども残されている。移築として建てられた後、江戸後期から慶応元年までの約九十年間に、三度に亘る大規模な改修を行ったと記録されている。現在は一般公開されており、建築様式の素晴らしさや藍商の暮らしぶりを見ることが出来る。

見どころ

商家の密集する市街地で、人々がもっとも恐れたのが火災である。江戸時代に入ってから、たびたび大火に見舞われた美馬市脇町では、家屋の防火構造が重視され、卯建（うだつ）や虫籠窓（むしこまど）などが造られるようになった。卯建は、隣家と接する二階の妻壁から突き出した、本瓦葺･漆喰塗の小さな袖壁で、延焼をくい止める役割がある。虫籠窓は、表面に練り土・漆喰を塗り込めて堅牢に固めた二階部分の窓で、窓から室内へ火が燃え移るのを防ぐ役割がある。卯建は、作る費用が相当に掛かったことから「うだつがあがる・うだつがあがらない」という、ことわざの語源にもなっている。

重要伝統的建造物群保存地区「うだつの町並み」は、幕末から明治期まで藍商をはじめ多くの商家が建ち並び、たくさんの人々で賑わっていた。現在は、明治期のものを中心に、江戸中期から昭和初期の八十五棟の伝統的建造物が建ち並んでおり、近世・近代の景観がそのまま残されている。この町並みの大きな特徴は、町家の両端に卯建がみられることであり、このことから「うだつの町並み」の通称で親しまれている。近年では、古民家を活用したセレクトショップやカフェ、ゲストハウスなどがオープンし、毎年「うだつまつり」が開催されている。

建物名称	吉田家住宅
建築年	1792年（寛政4年）
構造・様式	木造2階建・本瓦葺
所在地	徳島県美馬市脇町大字脇町55番地
電　話	0883-53-0960
Ｈ　Ｐ	http://www.city.mima.lg.jp/kankou/kankouannai/miru
開館時間	9：00～17：00（最終入館16：30）
アクセス	徳島市内より車で約40分、脇町ICより車で約10分
備　考	重要伝統的建造物群・美馬市指定有形文化財

旧金毘羅大芝居

香川県琴平町

きゅうこんぴらおおしばい

舞台・客席

旧金毘羅大芝居は、天保６年（1835年）に建てられた、現存する日本最古の芝居小屋である。江戸時代中頃から金毘羅信仰が全国的に高まり、多くの参詣客で町は賑わいをみせていたといわれる。
年３回（３月・６月・10月）の「市立ち」の度に仮設小屋で芝居、相撲、軽業、操り人形などの興行が行われていた。
しかし、だんだんに門前町の形態が整ってくるにつれて常小屋の必要性と、また一方その設置を望む多数の庶民の声を反映し、天保６年、高松藩寺社方より許可を契機に、当時、大阪三座の一つ大西芝居（後の浪花座）の規模、様式、構造を模し、富籤（現代の宝くじのようなもの）の開札場を兼ねた常小屋として建てられた。
しかし、時代は移り変わり人々の娯楽の変化とともに近代以降、小屋は映画館と変わり小屋の内部なども様式を変えていった。所有者が変わるたびに芝居小屋の名称は「金毘羅大芝居」より「稲荷座」「千歳座」となり、明治33年に「金丸座」と改名した後は現在でもこの愛称で親しまれている。

見どころ

【かけすじ】　役者などが宙乗りするための装置。
【明り窓】　開閉することで場内の明るさを調整する。
【顔見世提灯】
　興行の際、役者の番付の代わりをしている。
【ブドウ棚】
　竹で編んだ格子状の天井。花吹雪も散らすことができる。約500本の竹を使用。

【花道】
　舞台下手より直角に客席を貫き、鳥屋に通じている。
【すっぽん】　花道の七三の位置にある切穴のこと。
【廻り舞台】
　舞台中央にある直径４間（7.3m）の円形に刳り抜き、回転させることができる舞台。
【セリ】
　廻り舞台にあり、「スライド」式に奈落と舞台を上下できるようになっている。
【空井戸】
　舞台と花道の付け根に構えた半間四方の空枠。舞台下の奈落に通じており、ここから出入りしたり、早替わりなどに用いられる。
【仮花道】　舞台上手より、直角に客席を貫いている。

正面外観

興行が衰退し廃館となるが、江戸時代より現代に至るまで風雨に耐え火災にも遭うことなく、奇跡的に残った最古の劇場を後世に残すため保存運動が始まり、国内外の建築、演劇に携わる専門家も加わり、芝居小屋を訪れ専門的な調査が行われた。
昭和45年、歴史的、文化的価値が認められ「旧金毘羅大芝居」として国の重要文化財に指定され、昭和47年から4年間の歳月をかけ、昭和51年に現在の愛宕山中腹に移築復元された。
平成15年、復元及び耐震構造補強工事（平成の大改修）が行われた。調査の結果、天井裏全面に鉄骨で構造補強が施され、補強を施すことにより、大梁を支えていた四本の支柱を除去することが可能となり、本来の姿（江戸時代の内装）に戻された。併せて調査中に発見された痕跡を検証し、判明した「ブドウ棚」と「かけすじ」が復元され、より江戸時代の情緒あふれる姿に再現された。
昭和50年度の移築大改修以後、昭和60年から毎年「四国こんぴら歌舞伎大芝居」が開催され、四国路に春を告げる風物詩となっている。

建物名称	旧金毘羅大芝居　　通称「金丸座」
建築年	1835年(天保6年)、1976年(昭和51年)移築
構造・様式	木造 一部鉄骨/木戸、客席、舞台、楽屋等複合建造物
所在地	香川県仲多度郡琴平町1241
電　話	0877-73-3846
Ｈ　Ｐ	http://www.konpirakabuki.jp/index.html
開館時間	9：00～17:00　(年中無休)
アクセス	JR琴平駅・琴電琴平駅より車で5分、駐車場無し
備　考	国指定重要文化財　昭和45年6月17日

渡邊邸

わたなべてい

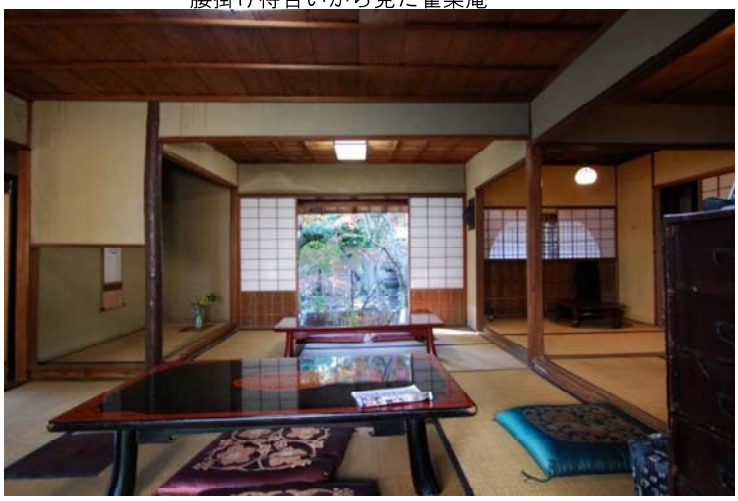
香川県木田郡

京阪にまで聞こえた数寄屋大地主、「揚家十茶室」より譲り受けた五室の茶室と伝承の「鯰魚庵」を合わせて名席六室をもつ大邸宅。

腰掛け待合いから見た雀巣庵

見どころ

渡邊邸は明治中期から昭和初期にかけて揚家より移築された五つの茶室を併せ持つ。そのこだわりたるや「揚家を語らずして讃岐の茶室を語るな」という言葉が残されるほど。屋敷の一番北側にあるのは三畳台目の「孤月」と二畳半の「白雲軒」。隣接する鯰魚庵の入り口を腰掛待合に見立てている。孤月には江戸初期の大名茶人である遠州の書いた「孤月」のぬれ額が鬼瓦下の破風にかかっていることでこの名があるのだそう。軒下には吉原灯篭。軒回りの垂木は北山杉。野地は黒部。柱は法隆寺の残木だそうで驚きである。内露地には織部焼のエメラルドグリーンの敷石があしらわれ、ふと目をあげると母屋との廊下には波模様のかげろう窓が美しい。天井は屋久島杉、竿は栗のなぐり、お点前天井はトクサ。縦がシナ紋竹、横が高野竹といった具合に細部にわたり、こだわりの逸品で構成されている。文献によると孤月は金比羅に抜け参りにきて揚家に滞在した表千家十一代碌々斎（ろくろくさい）が揚硯堂氏の求めに応じて自ら指揮して建てた名作だという。大変由緒深く、美しい建物であると共に、そこから醸し出される本物がもつ侘び寂びの素晴らしさが体感できる希少な建築物である。



写真右奥は櫛窓の席。にじり口の上に寒竹の櫛窓があるのでこの名が生まれている。長四畳逆勝手、かべ床、丸炉があるので「丸炉の席」ともいう。大茶人揚氏の「櫛窓の席」は通路を仕切って有効に利用するという間取りの妙を垣間見せてくれる。

狐月内部

狐月外観

内露地

建物名称	渡邊邸
建築年	明治中期（築約120年）～昭和初期(築90年)
構造・様式	木造数寄屋造
所在地	香川県木田郡三木町下高岡2569-1
電　話	090-1572-7877（渡邉邸オーナー小橋様）
Ｈ　Ｐ	http://www.watanabetei.net
開館時間	不定休（要事前予約）
アクセス	ことでん長尾線「白山駅」徒歩約7分
備　考	mail : ayami@watanabetei.net

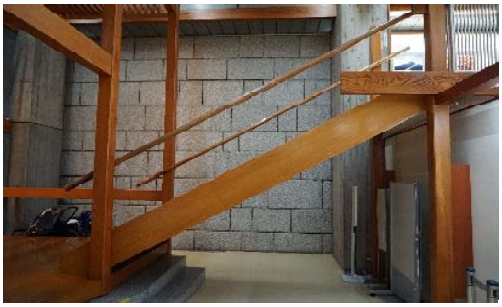
香川県文化会館

かがわけんぶんかかいかん

香川県高松市

外観

香川県の教育、学術、文化の発展に寄与するため、総合的な文化施設として開設された。設計は、戦後日本を代表する建築家大江宏氏。
玄関前の彫刻は、流政之氏の作で『おいでまあせ』



エントランスホール

見どころ

香川県文化会館は、鉄筋コンクリート造の近代建築の様式美に、館内の随所に檜、杉、松を取り入れ、日本建築の伝統美を融合させた建築である。50年を経た木の美しさが飴色となってすっかり馴染んでいる。特に４階部分（和室、茶室、談話室）は比較的伝統的な手法を基本とし、建築的な扱いは厳密に木造作構成の手法で統一している。
公共のオープンスペースでありながら、木の扱いをここまで部分・細部にまで厳しく追及したインテリアの構成は必見である。
大江宏氏は新建築の中で、明治以降公的な生活の場は「洋風」で進歩的、私的な生活の場は「和風」で退嬰的あるといった固定概念が社会通念となっていったが、どれをもっても先進、どれをもって保守とするような格差優劣は本来存しえないという前提にたちもどり、異質の要素が混在する日本の現実をそのままに反映しようとするところに建築創造の意義を見出そうとしたと語っている。（混在併存）
見学の際は、細部の納まりや素材のこだわりに注目して堪能していただきたい。

3階芸能ホール

古さを感じさせずどこか時代を超越した存在感を漂わせている舞台は、能舞台をアレンジしたもので、上部の透かしは銀杏の模様になっている。南側の木の壁面は吸音と装飾を兼ねて鎬（しのぎ）という作り方。天井は、桐の格子天井に、正倉院裂の獅子狩り文様を模して龍村美術織物（株）が織ったものを組み合わせている。

4階談話室（奥には和室が見える）

軒下は栂（つが）の木を使用。軒は、当初桧皮葺（ひわだぶき）だったが、後に銅板に改修している。
中央の炉は、周囲が大谷石で中に那智石が敷き詰められている。

4階和室

建物名称	香川県文化会館
建築年	1965年　（昭和40年）
構造・様式	鉄筋コンクリート造・地下１階地上７階
所在地	香川県高松市番町一丁目10番39号
電　話	087-831-1806
Ｈ　Ｐ	http://www.pref.kagawa.lg.jp/kmuseum/bunkakaikan/
開館時間	午前9時から午後5時まで
アクセス	JR高松駅から南へ1.5ｋｍ ことでん瓦町駅から西へ1.2ｋｍ
備　考	近隣に駐車場（有料）有り

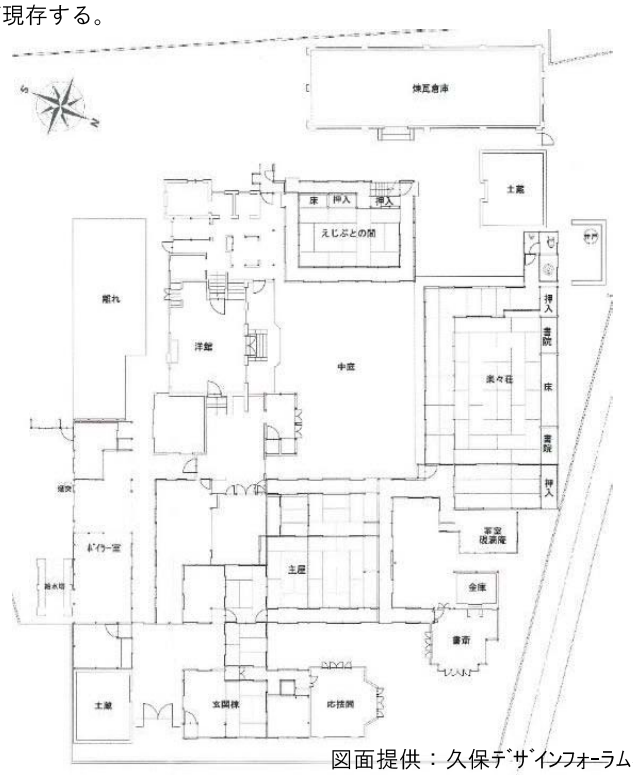
合田邸

ごうだてい

香川県仲多度郡

中心市街地「本通」に面した正門と出桁造の玄関棟

金毘羅参道の玄関口であり、廻船業の根拠地として栄えた多度津町に位置し、「多度津七福神」と呼ばれた実業家の一人であり、貴族院議員でもあった合田氏の邸宅である。
広い敷地内に大正から昭和初期にかけて建てられた計13棟の建物が現存する。



図面提供：久保ﾃﾞｻﾞｲﾝﾌｫｰﾗﾑ様

東の本通りに面して土蔵・正門・中2階で黒漆喰塗り出桁造の玄関棟と洋風の応接室が並列する。
中央に位置する中庭を取り囲むように、主屋、書院、洋館のゲストルーム、2階建ての離れが配し、家人とゲストが外部から隔離された私的空間を楽しめるよう趣向が凝らされている。
敷地南側には、ボイラー室や物置を備えた作業空間、西側にはレンガ倉庫、土蔵の収納空間といった、多棟建築ながら明確なゾーニングの敷地構成が成されている。

漆塗りの折上げ格子天井を伴う大広間

北原白秋が「楽々荘」と命名した３０畳の大広間。中庭を隔てて洋館と東西に対する。シャンデリアは合田家の家紋である片喰を金具に施した別注品。中央に３畳の畳床。床脇にはケヤキの一枚板を使用するなど、良質な木材が多用されている。

資料提供：合田邸ﾌｧﾝｸﾗﾌﾞ様

見どころ

伝統的な意匠を持つ玄関棟・主屋と近代和風的な意匠を備えた数寄屋風の書斎・書院・離れの和館に加え、大正～昭和初期の意匠を持つ建築当時の先進的な工法であるRC造を半地階部分に採用したｽｷｯﾌﾟ・ﾌﾛｱ形式の洋館、また個人の住宅としては珍しい大型の煉瓦倉庫等、多様な意匠の建築・構造物を楽しむことが出来る。

主屋と大広間を繋ぐ廊下や、中庭に接する広縁の天井は、隣接する室との調和が図られた様々な意匠が楽しめる。

離れの和館は、戸袋も含め、全面ガラス張り。２階の「えじぷとの間」は、明り先障子、欄間にえじぷと文様が施され、妻折れ格天井の畳の間に異国の雰囲気が取入れられている。
中庭に面する広縁の意匠は、欄間、欄干、床共に幾何学模様で構成されている。糸ガラスで織りなされた欄間の匠さには目を見張るものがある。

ゲストルームは、木造中2階建の洋風建築。外壁はモルタルスタッコ塗りの壁にステンドグラスをはめ込んだ窓、装飾金物のついた暖炉用煙突及び軒先・けらばには装飾を施したブロンズのカバーモールを使用している。内部は、漆喰レリーフ格天井や大理石製のマントルピース、幾何学的な分割が見られるアールデコ調のステンドグラスなど、色彩豊かにコーディネイトされた特注の内装材が数多く使用され、贅を尽くした内容となっている。

建物名称	合田邸
建築年	大正～昭和初期（多棟建築による）
構造・様式	木造・入母屋造り、RC造、レンガ造等
所在地	香川県仲多度郡多度津町本通1-5-2
電　話	090-7785-7573（合田邸ファンクラブ代表泉川様）
Ｈ　Ｐ	https://www.facebook.com/goudatei/
開館時間	事前問合せによる
アクセス	JR多度津駅から徒歩10分
備　考	

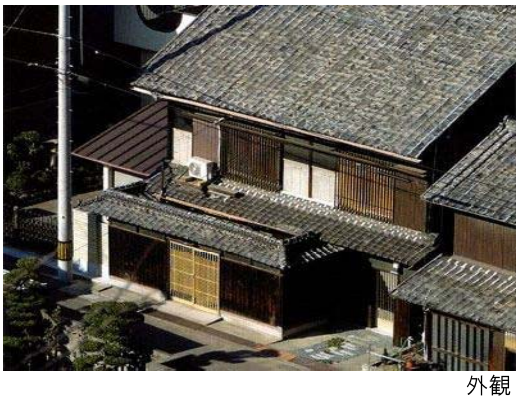
古民家ステイ 香露軒

香川県仲多度郡

こみんかすてい こうろうけん

玄関から眺める

かつての多度津町西浜は宿や銭湯、遊郭、桶屋、射的場などがあり、金毘羅街道の玄関口でもあることから多くの人が訪れた。香露軒は昭和初期頃まで料亭として使用していた。『香露軒』という名前は料亭時代からのもので、その板看板は今でも使用されている。



外観

見どころ

二階は10帖と4帖の続き間がある広間と6帖の和室が2つある。続き間の欄間には竹割りで装飾されている。基本的に各室共、天井・鴨居・柱に至るまで杉の糸目柾の仕様で見応えがある。広間にある床の間の床柱は丸柱で、付書院は細やかな格子と組子でできている。障子にも同じく細やかな仕事がなされており、障子の桟は1分厚で、意匠性がとても高い。窓面からは外の光を優しく室内へ入れてくれる。窓には中庭を見渡す事が出来る肘掛け欄干があり、とても風情がある。

階段のすぐ横に6帖の和室があり、他の和室には見られなかった節入りの柱が一本ある。このことから、客人は使用せず、芸子などの控え室として使用し、階段奥の渡り廊下を渡り、広間へと入ったと思われる。

一階・二階共に格式が高いわけではないが、遊び心のある意匠でつくられている。だが、細部にまで細かな仕様を取り入れており、当時この地域には無いであろう手法などが使われている為、お金をかけて作られていることが分かる。

広間の天井

階段

中庭

二階 主広間

多度津町は北前船の寄港地でもあり、江戸期から商人が行きかう港町として発展した。鉄道・銀行・電力の発祥地ということもあり、商人が裕福であり数多くの大邸宅や町家が存在した。現在は多くの建物がなくなったが、当時のままの姿を残している建物が比較的残っている。香露軒はその中の一つである。門を構えている町屋で大阪ではよくある建て方で、そのたたずまいから高級な町屋・屋敷の趣きのある町屋で、中西讃では珍しい建て方だと思われる。また、厨子二階（つしにかい：明治期に建てられた二階が低い建築）では無く、本二階の造りであることから、大正期から昭和初期に築造されたものではないかと思われる。

外観は二階の腰壁部分に塗りがあり、扇の意匠が施されている。近隣の建物もよく似た塗りがある建物がある。玄関から内部を眺めると、中庭が垣間見える。玄関奥の8帖和室は松梁を使用しており、天井は張られていない。細やかな造りではない為、家人が使用していたと思われるが、料亭であったことから待合としても使用していたと思われる。また玄関すぐ横には襖で隠してある第二の階段があり、客人への配慮として使われていたと思われる。料亭を閉めた後は住宅として使用され、現在は最小限の改修はしたものの、その趣きはそのままにゲストハウスとして再生・利活用している。静かな町で古き良き時代の空間をそのまま感じる事ができる施設となっている。

建物名称	古民家ステイ香露軒
建築年	大正期（築約100年）
構造・様式	木造二階建
所在地	香川県仲多度郡多度津町西浜1-15
電　話	090-7144-6803（おいでまい町家ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ生田様）
Ｈ　Ｐ	http://www.korouken.com
開館時間	不定休（要事前予約）
アクセス	ＪＲ多度津駅　徒歩15分
備　考	宿泊及びイベント貸出可

常信寺庫裏

じょうしんじくり

愛媛県松山市

道後温泉本館にも程近い常信寺（天台宗）は、松山藩主初代松平定行が松山城の鬼門守護のため
東京上野寛永寺になぞらえて、天海僧正弟子憲海を開山として1650年（慶安3）に建てたものである。

北側座敷

北側座敷

見どころ

本堂、庫裏、元三太子堂、観音堂、鐘楼などの建物が建ち並び、寺院としての佇まいを見せている。
桜の時期は特に素晴らしく、俳句の吟行で訪れる人も多い隠れた古刹である。

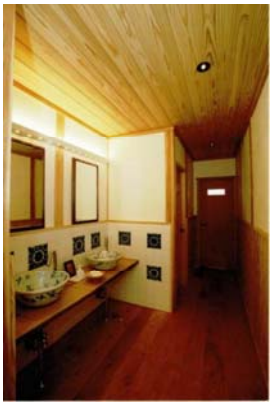
境内の東に位置する庫裏の屋根は南北軸の寄棟で、どっしりとした風格を感じられる建物である。
内部は北側に続きの座敷があり、西側には玄関を中心とした和室が続く。
東側はプライベートな空間となっている。
和室は連続した大空間にもなるが、区切っても使える工夫がしてある。
長押の上や床の間に間接照明を設け、柔らかな和の空間を演出している。

境内には松平定行公の霊廟（県指定史跡）がある。本瓦葺きの入母屋造り妻入りの建物で、唐破風をもつ江戸時代初期の代表的な霊廟建築である。
その東隣にひっそりと建つ、弟定政公の霊廟（県指定史跡）と共に藩政時代の松山藩を物語る貴重な遺構といえる。

庫裏全景

西側和室

広縁から庭を望む



女子便所

男子便所

建物名称	常信寺庫裏
建築年	明治後期
構造・様式	木造　桟瓦葺き　（285㎡）
所在地	松山市祝谷東町636
電　話	089-943-5623
Ｈ　Ｐ	
開館時間	問い合わせ必要
アクセス	伊予鉄道市内電車道後温泉駅徒歩10分　駐車場有
備　考	

古今荘

ここんそう

愛媛県四国中央市

上之間

この建物は、創建年代や来歴は不明だが、旧小松藩の萩生村（現在の新居浜市中萩）庄屋飯尾家の屋敷から明治30年頃現在地に移築されたものと伝承されている。

現在は地元の製紙会社の別邸となっている。
先代社長が戦後間もなく購入された後は、ご親族の結婚式や銀婚式などの慶賀の会に使用されただけだった。

経年劣化による雨漏りなども進行し、痛みが激しかったが、平成11年に屋根の全面葺き替え等、原形を留める形で補修された。
近代的な建物に建て替える計画もあったそうだが、地方の貴重な文化遺産でもある和風建築を残そうとの意志で保存された。

見どころ

建物は平屋建て、入母屋造妻入りで、玄関式台部分にむくり破風の屋根がかけられている。

間取りは、北側の玄関式台から「三之間」（10帖）に入ると「次之間」（10帖）、「上之間」（15帖）と二間半の間口で一列に三室が並んでいる。

三室はそれぞれ床の間を持っている。
三之間は床の間のみで、床板には見事な栂の一枚板が使われている。
上之間は本格的な床の間で、床脇は北端に地袋のみで、床板には松の鏡板が張られている。床の間は框が漆塗りの畳床で、栂無節の四方柾の床柱は建物全体のレベルを象徴するかのような逸品である。
次之間の床脇は天袋と地袋のみで、地板を張らず畳敷きとなっている。

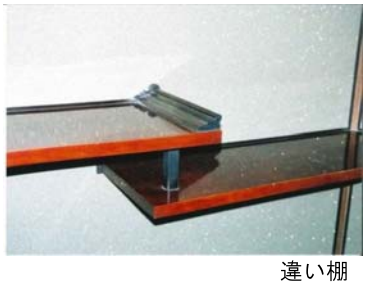
建具や欄間、その他細部の意匠や納まりにも携わった大工の丁寧かつ精緻な仕事がうかがえ、建築技術の高さを物語っている。

また、移築時に見られがちな傷や痕跡の埋め木などがほとんど見られず、見えがかり部分の仕口等にも隙間がほとんど見当たらない事からも、精緻な仕事ぶりがうかがえる。

三室を望む

次之間

障子



違い棚

欄

欄

建物名称	古今荘（旧飯尾家客殿）
建築年	明治初期
構造・様式	木造　入母屋造妻入り　（218㎡）
所在地	四国中央市川之江町141番地4
電　話	0896-57-2200　（管理者）丸住製紙㈱社長室
Ｈ　Ｐ	
開館時間	問い合わせによる
アクセス	JR川之江駅徒歩20分　三島川之江ICから約3km
備　考	

木屋旅館

きやりょかん

愛媛県宇和島市

夜外観

木屋徳右衛門の二代目木屋徳三郎が明治44(1911)年堀端通りの現在地に商人宿として旅館「木屋」を開業

当時の宇和島は、明治以後急速な産業、文化の発展に伴い、追手町通りや袋町を中心に繁華街が形成され、「融通座」という芝居小屋が追手町通りにあり、商業客はもとより役者や歌手などの芸人も多く宿泊した。

所在地の堀端通りは、宇和島城の堀が埋め立てられた土地で、すぐ近くに追手門(国宝、戦災で焼失)があったが、現在は大きな石碑のみ残っている。

夜外観

見どころ

この旅館は木造二階建、切妻造り、平入り、桟掛け瓦葺き延べ面積559㎡（169坪）の、つし造りである。
正面から見る外観は、１階は連子格子窓と犬矢来と、２階は硝子窓が連なり、風情のある佇まいを醸し出している。創建当時の写真には、建物の前に小川が流れ、その前には柳の木がある独特な風景が写っている。

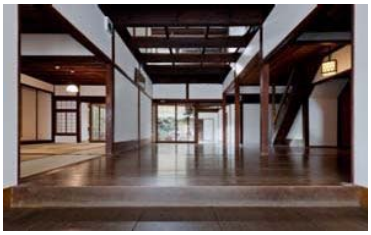
客用玄関前の軒先には、創建当時の門灯が残っている。玄関を入ると取り次ぎの板間になる。板間横には、客間して和室８帖２部屋と４帖１部屋がある。３部屋共床の間の構えがあり、会議室や宴の部屋に使われている。この客間と板の間からも中庭と宇和島城が見える空間になっている。

主として１階は旅館に必要な機能を備えた部屋を配置している。調理室、風呂場、ボイラー室等がある。
また、１階部分に車庫があるが、創建当時は人力車置き場であった。従業員が使用していた玄関には、宴が盛り上がり旅館に泊まったお客が、早朝人力車に乗るため用の小さな板戸があり、現在も残っている。

２階の間取りは、表通りに面して縁を設け、客室には８名まで宿泊出来るようになっている。客室の前に廊下、その外にも廊下が二重に設けられて掃き出しの硝子窓となっている。創建当時は建具は無く、雨戸のみとなっていた。外側の天井は主屋根の勾配で、その部分のみ天井が低く、屋根は銅版一文字葺きである。

２階北面端にある部屋は、常連客の司馬遼太郎が宿泊する時に使用された部屋が今の残っている。
この部屋からも城山や１階の中庭も望められる造りで、北面壁には、茶事に使われる小さな花瓶掛け用の沈め釘や床板に類する構えも残されている。

表の外観は創建当時の景観が残されており、宿泊客や市民に慕われる建物になっている。



玄関ホール

夜外観

２階廊下

客間

客間

客間

建物名称	木屋旅館
建築年	1911年（明治44年）
構造・様式	木造２階建　土葺き　（559㎡）
所在地	宇和島市本町追手二丁目8-2
電　話	0895-22-0101
Ｈ　Ｐ	http://www.kiyaryokan.com/top/
開館時間	問い合わせによる
アクセス	JR宇和島駅徒歩15分
備　考	国登録有形文化財（建造物）平成26年指定

岡御殿

おかごてん

高知県安芸郡田野町

岡御殿　外観

岡御殿のある田野は藩政期中頃、「田野千軒ヶ浦」と呼ばれ、田野五人衆をはじめとする豪商が軒を並べ、薪炭、酒、塩などや魚梁瀬美林の木材の集散地として繁栄していた。所有者の岡家は、豪商の筆頭格で土佐藩の財政のため御用金を献上したため、五人扶持、名字帯刀御免、独礼御目見得などの特権が与えられていた。岡家は米屋と号し、祖先岡氏は泉州から山内候に従って田野に来たと伝えられている。
藩主の本陣(宿泊所)として建てられたこの書院造りの建物は、上段の間に近侍の間が並び、その外に一間の次の間が廻って、その外側に三尺の廻廊と切縁がある。そして湯殿(ゆどの)や砂雪隠(せっちん)、家具に至るまで完全に保存されており、当時の建築様式が残されている貴重な遺構といえる。
また上段の間に面した広い庭には何とも趣のある趣向が凝らされた青龍姥目樫（せいりゅううばめがし）という、枝をぐねぐねさせた五本の姥目樫を一匹の龍にみたてたしつらえを楽しむことができる。

見どころ

岡御殿は天保15年(1844)に建築され、平成9年(1997)に修復工事が行われた。八畳の上段の間を中心に鞘(さや)の間、湯殿(ゆどの)、砂雪隠(せっちん)などがあり、当時の本陣の様子がよく理解できる。
特に上段の間は身分の違いを表現するために他の間より床が一段高くしつらえられ、藩主が座る位置から庭を望むと、座敷や縁の柱がピタリと一本に重なり、最も美しい庭の眺めを望むことができる。

上段の間から庭を望む

優美なこけら葺き屋根に加え、軒下を覗くと化粧の扇垂木が軒下空間に格式高い印象を与えている。
また三尺の廻廊によって奥行きのある贅沢な空間のしつらえを感じることができる。

扇垂木

廻廊

【　上段の間　】
上段の間には付け書院と違い棚があり、壁は貼り付け壁(土壁の上に紋様を刷り上げた和紙を袋貼りにした襖の様なパネルを入れた二重壁)で、さらにその周囲に黒漆塗りの四分一(しぶいち)とよぶ木製の細枠が回されている。格子欄間も繊細な造りで、また長押の釘隠しも銅板を一つ一つ彫金した優美な装飾となっている。

違い棚と貼り付壁

格子欄間

釘隠し

建物名称	岡御殿
建築年	1844年（天保15年）（1997年（平成9年）修復）
構造・様式	木造平屋　書院造り　入母屋造り　こけら葺き
所在地	高知県安芸郡田野町2147-1
電　話	0887-38-3385
Ｈ　Ｐ	http://www.chugei.or.jp/tano/tourism/tourism-551
開館時間	9:00～16:30（火曜休館（祝祭日はその翌日）
アクセス	土佐くろしお鉄道田野駅～徒歩約7分･南国ICから約1時間
備　考	高知県保護有形文化財(建造物) S60年4月2日指定

竹林寺書院（客殿）・庭園

高知県高知市

ちくりんじしょいん（きゃくでん）・ていえん

書院　西庭より庇を見上げる

高知市の南方五台山上に在する竹林寺は、四国八十八カ所霊場第三十一番目に数えられる信仰の地である。本堂は当地方の中世折衷様建築の代表事例として国の重要文化財に指定されている。
書院は竹林寺の山門北側に位置しており、高知県下を代表する大規模客殿として、2016年(平成28年)に国の重要文化財に指定されている。

書院　平面図

見どころ

文化13年建築当初の姿を保つ竹林寺書院は、正統的な書院建築の形式を遵守しており、当地方においては江戸時代後期の建築物としては稀有な存在といえる。これは藩主山内家の祈願寺として火災後の復興にあたったためとみられる。高知城本丸御殿を模したと見られる意匠があること、また玄関や書院大棟に山内家の家紋があることもそれを裏づけるものである。

玄関上部、襖引手等に柏三つの家紋が確認できる

欄間には家紋の柏をモチーフにしたものが見られる

書院内部から見る庭園は、建物の規模をさらに大きく感じさせる。傾斜面を利用した庭園は一枚の絵画のようでもある。視点や場所を変え、「見え方」を変えると、また違った趣きを感じることが出来る。座位や起立、構造部材越しと、楽しみ方は多くある。

書院内部から北庭を望む

【　書院　】
書院は、寺蔵文書である「災害後金色院記」によれば、1808年（文化5年）に焼失し、1816年（文化13年）に再興されたとある。
建物は南面して建ち、東側の玄関部と西側の客殿部で構成される。
玄関部は、桁行12.8m、梁間7.9m、切妻造、銅板葺、正面に車寄せ付きの式台玄関をもち、車寄せは向唐破風造、銅板葺とする。
客殿部は、桁行20.2m、梁間14.3m、一重、入母屋造、銅板葺である。
濡縁および雨戸仕舞に若干の改造がみられるものの、間取りはほぼ当時の姿を保っている。

【　庭園　】
庭園は書院の周辺に展開し、大きく三つの部分より構成される。
第一は書院に南面し、前庭を成す区域である。
第二は書院の西南面から西面にかけての区域、第三は書院の西面及び北面にかけての区域で、ともに竹林寺庭園の主たる部分を成す。背後に迫る傾斜面とその前面のわずかな平坦地を利用して造られ、平坦地には傾斜面とその裾部から湧き出る希少な水を集めて池が掘られている。特に西庭では、護岸を石段状の直線的意匠とすることにより水面を軒先近くにまで引き寄せ、狭隘な水面に広がりを持たせている。
庭園は史跡名勝天然記念物に指定されており、また建物と一体になることで高い価値をもつものといえる。

南庭から書院を眺める

建物名称	竹林寺書院（客殿）
建築年	1816年（文化13年）再興
構造・様式	木造平屋建て・入母屋造など
所在地	高知市五台山3577
電　話	088-882-3085
Ｈ　Ｐ	http://www.chikurinji.com/
開館時間	8：00～17：00
アクセス	高知駅からMY遊バスで26分
備　考	書院：国重要文化財 庭園：国史跡名勝天然記念物

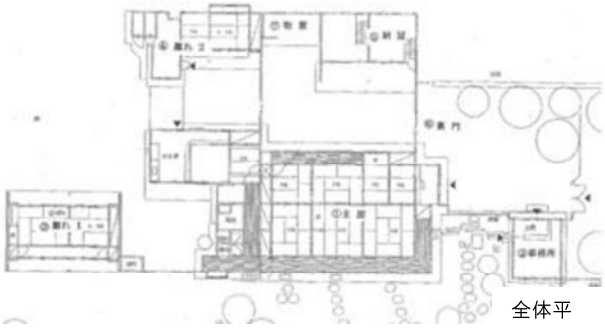
五藤家安芸屋敷

ごとうけあきやしき

高知県安芸市

住宅を南側庭園から望む

五藤家は、尾張黒田（愛知県一宮市）の出身で、山内一豊の先代の時代から家臣として仕えた。関ヶ原の戦いの後、一豊と共に土佐へ入国、安芸城を預けられ、高知県安芸市土居に居を構えた。
江戸時代には土居（土塁）内に家老屋敷が幾棟も建っていたが、1869年（明治2年）にすべて取り壊された。
現在の安芸屋敷は1887年（明治20年）代以降に、別邸として土居跡に建てられたものである。南の座敷3間を取り巻くように、東から南へ廻り縁があり、庭を見渡すことができる。



全体平面図

見どころ

多種にわたる境界塀

▶G.L

6畳＋8畳の座敷には、質素に見える欄間があるが、良く見ると1間1枚の板を切り抜いたもので、細かい細工が施されている。また、天井は高いが質素に徹した武家屋敷らしく「雲長押」が設けられていない。
この座敷は、申し込みをすれば無料で借りることができ、地域の発表会などに活用されている。

職人の技が光る欄

●注目！！遊び心あるディテール●

玄関横にある金庫ダイヤルは「いろは」

離れへ通じる廊下のドアノブ座金が桜の形

2012年(平成24年)、五藤家を中心に安芸市・土居廓中が国の重要伝統的建造物群保存地区に指定された。この武家屋敷群の特徴は生垣や石垣、瓦積みなどによる塀の造りに依るところが大きい。特にウバメ樫や土用竹の生垣は、土佐では武家のみに許されていたといわれている。五藤家を訪れる際は、まちなみの散策も欠かせない。

【　廻り縁　】
1本の丸太桁で組まれている。建具はすべて木製で透明の磨きガラスを携えている。（数枚は損傷しており、入れ替え済み）

廻り縁天井を見上げる

廻り縁からの庭

【　玄関　】
明治になってから建替えられたが、その様は「武家屋敷」らしく質素である。
その中で、玄関間にある杉戸には立派な馬の絵が描かれており、質実剛健の中で際立つ装いである。

立派な馬の絵が楽しめる

【　台所　】
1898年（明治31年）に増築された台所は、土間やダイドコロが当時のまま残されており、その頃の生活様式がうかがえられる。

歴史感じる土間

年代物のダイドコロ

建物名称	五藤家安芸屋敷
建築年	明治29年
構造・様式	木造（寄棟）平屋建・武家屋敷
所在地	高知県安芸市土居土居跡
電　話	0887-34-3706（安芸市歴史民俗資料館）
Ｈ　Ｐ	https://www.city.aki.kochi.jp/rekimin/index.html（上記資料館）
開館時間	9:00～17:00（土曜日、日曜日のみ）
アクセス	土佐くろしお鉄道安芸駅～ﾀｸｼｰで5分、南国IC～約50分
備　考	国登録有形文化財（2008年（平成20年）指定）

土佐山田の舎

とさやまだのや

高知県香美市

通り土間

【貫通するブロック塀】
元々商店であった１階の中央に、柱と柱を縫うよう貫入するコンクリートブロック塀は、パースペクティブの効いた通り土間をつくり、建物奥へと視線を誘う。

＊撮影：西森秀一

見どころ

最初の改修が行われた1990年は、バブル景気の末期であり、民家再生の仕事はまだ少ない時期であった。古い建物を改修する場合、新しく追加する材も古色に塗っていたが、ここではあえて、新しい材はそのままの色とし、古い材に対峙させている。歴史と現代の融合を試みる中で、建物を貫通する「コンクリートブロック土佐漆喰かまぼこ目地仕上げ」が誕生した。後に増築した渡り廊下は、タテハゼ葺きの屋根にいぶしの丸瓦を被せており、和の景観になじみつつ軽やかなデザインとなっている。

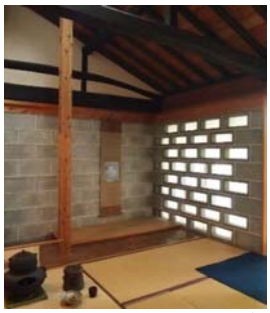
コンクリートブロック土佐漆喰かまぼこ目地仕上げ

聖瓦棒葺き＊

土佐山田の舎は、再生した古民家と増築したギャラリー、それを結ぶ渡り廊下で構成されている。建物は、大きく二度の改修を経ており、設計者はそれぞれ再生、再々生と呼んでいる。一度目の再生は、明治29年建築の町屋を、1990年に設計事務所兼ギャラリーへと改修したもの。2000年には国の登録有形文化財に指定された。2002年の再々生では、古民家の裏手にギャラリー棟を増築し、現在の骨格となった。その後も外観を変えない程度に、小さな改修を重ねながら、建物を活用している。

北側外観

【　外観　】
原型は、つし２階の一般的な町屋(商家)のつくりであったが、再生にあたり、車寄せのために道路側の下屋を撤去している。また、構造体がこれ以上劣化しないように、木製ガラス建具で保護している。



茶室

【　茶室　】
コンクリートブロックの部屋内側は、床の間付き４畳半の現代的な茶室となっている。押入の柿渋紙張り襖は年月を経て、皮革のような趣を出している。

【ギャラリー樹下の舎（こしたのや）】
一度目の再生により生まれたギャラリーの拡大が望まれたため、再々生として、樹齢100年超の金木犀の樹の下に、ギャラリー空間を増築し、渡り廊下でつないだ。

ギャラリー樹下の舎＊

渡り廊下＊

建物名称	土佐山田の舎
建築年	1896年(1990年,2002年改修)
構造・様式	木造二階建て・つし二階＋木造平屋
所在地	高知県香美市土佐山田町東本町5丁目2-11
電　話	0887-52-5104（聖建築研究所）
Ｈ　Ｐ	http://www5d.biglobe.ne.jp/~hijiri-a/
開館時間	10：00-17：00（土日：事前予約制）
アクセス	JR土佐山田駅徒歩7分　駐車場有
備　考	登録有形文化財（H12年9月指定）

旧戸島家住宅

きゅうとしまけじゅうたく

福岡県柳川市

旧戸島家住宅は、柳川藩で中老職の要職に就いていた吉田兼儔の隠居後の住処として庭園と共に建築した葦葺二階建ての建物で、後に藩主の立花家に献上された御茶屋として使われたといわれている。
維新の頃に藩兵の調練所として徴発された宅地の代償として立花家から由布氏に下賜され、明治１５（1882）頃に由布氏の転居に伴い戸島家の所有となった。
その後は主に住宅として使用されたが、柳川地方の武家住宅の典型例として福岡県の文化財に指定された。
数寄屋風の意匠を持つ葦葺屋根の建物と掘割の水を引き入れた池を持つ庭園がつくる静かで落ち着いた趣ある空間が見事である。

見どころ

桜と鳩とししじゅうからが描かれた杉戸絵。
仏間の棚の扉には張謂の漢詩が彫られ、扉の両側に竹で箕状に編んだ枠。
茶室や座敷には竹柱、竹の落し掛、竹の違い棚など竹を主題意匠とし使われている。

入側（東）

仏間東面

座敷西面

屋根は、東面南半と南面が葦、目板葺、杉皮葺の三段。茶室庇屋根と桁間の壁は竹網壁で竹の意匠を強調。

式　台

三日月の竹下地窓、竹の欄間など江戸後期の流行を反映して、随所に文人趣味の意匠がみられる。

建物名称	旧戸島家住宅
建築年	1828年（文政11年）
構造形式	木造、入母屋、葦葺
所在地	福岡県柳川市鬼童町49番地3
電話	0944-73-9587
HP	http://www.city.yanagawa.fukuoka.jp
開館時間	9：00～17：00 入館16：30まで 火曜休館（詳細ＨＰ参照）
アクセス	西鉄バス「御花前」バス停下車徒歩2分　駐車場無
備考	福岡県指定文化財・庭園は国指定名勝

旧木下家住宅（堺屋）

福岡県八女市

きゅうきのしたけじゅうたく（さかいや）

木下家は、江戸期初期から始まり「堺屋」（さかいや）の屋号で、代々酒造業を営み、大きく栄えた商家である。

現在、離れ座敷、土蔵、倉庫が保存されている。

「離れ座敷」の妻壁には「一富士、二鷹、三茄子」のめでたい鏝飾りが施され、内部では黒柿の床柱、屋久杉の一枚板で造られた欄間など贅沢な造りとなっている。

屋根裏の棟札には明治３９年旧暦１月３１日に建設に着手、明治４１年旧暦３月１８日完成。建設に係る大工棟梁は長峰村吉田（現八女市吉田）の坂田茂太郎、左官は井上幾平と記されてる。

往時は貴賓客のための応接や宿泊などに使われていた。この離れ座敷の建設前に乃木希典大将が宿泊した記録が残っている。

見どころ

新奇な意匠で飾られた座敷では折り上げ天井、一富士二鷹三茄子の意匠。手洗所と小便所床面の植物文様の磁器タイルなど様々な発見を楽しむ事ができる。

座敷南面の庭園には水琴窟があり、庭を囲む土塀の開口部には扇形を採り入れ、意匠の細部に気概が感じられる。

建物名称	旧木下家住宅（堺屋）
建築年	1908年（明治41年）
構造形式	木造、入母屋、桟瓦葺
所在地	福岡県八女市本町184番地
電話	0943-23-7611
ＨＰ	http://www.city.yame.fukuoka.jp
開館時間	10：00～17：00　月曜休館（詳細ＨＰ参照）
アクセス	西鉄、堀川バス「福島」バス停下車徒歩12分 駐車場有
備考	八女市指定文化財

旧伊藤伝右衛門邸

きゅういとうでんえもんてい

福岡県飯塚市

筑豊の著名な炭鉱経営者であった伊藤伝右衛門の本邸として明治30年代後半に建造。大正初期、昭和初期に数度の増改築がおこなわれた。
高い塀は旧長崎街道に面しており、昭和2年に福岡市天神町にあった別邸（通称銅御殿）から移築された長屋門や、伊藤商店の事務所が目を引く。
邸宅は南棟（正面）北棟（庭側）、両者を結ぶ角之間・中之間棟、玄関・食堂棟、繋棟の家屋5棟と土蔵3棟からなり、池を配した広大な回遊式庭園を持つ近代和風住宅である。
和洋折衷の調和のとれた美しさ、当時先進的だった建築技術や繊細で優美な装飾を随所に見ることができる。
また、柳原華子（白蓮）が伝右衛門の妻として約10年過ごしたゆかりの地で、伝右衛門や白蓮に思いをはせる場でもある。

見どころ

アールヌーヴォー調のマントルピース、イギリス製のひし形のステンドグラスのある応接間、一畳たたみを敷き詰めた長い廊下等、様々な芸術的技法を取り入れた、繊細で優美な装飾を随所に見ることができる。

入側（東）

庭園は導入部の馬車廻しを中心とする広場をはじめ、建築群に挟まれた中庭の部分、敷地北半分を占める大規模な主庭の3つの部分から構成される。そのうち、特に主庭は、流れ及び2つの池泉の背後に緩やかに盛り上がる築山などから成り、主屋からの展望を意図した庭園であるとともに、様々な景を楽しむことができる回遊式庭園でもある。
池泉に架かる石造の太鼓橋、2基の石造噴水、敷地の西北隅に立つ石塔、随所に据えられた様々な形式の石燈篭、築山の頂部に建つ茅葺八角形屋根の四阿など、近代の回遊式庭園として十分な質と量を誇る庭園景物を見ることができる。

建物名称	旧伊藤伝右衛門邸
建築年	明治30年代後半
構造様式	木造、入母屋、瓦葺
所在地	福岡県飯塚市幸袋300番地
電話	0948-22-9700
HP	http://www.city.iizuka.lg.jp
開館時間	9：30～17：00　水曜休館（詳細ＨＰ参照）
アクセス	ＪＲバス「幸袋本町」バス停下車徒歩2分　駐車場有
備考	飯塚市指定文化財・飯塚市指定名勝

旧丸林本家北棟　「うなぎの寝床」

福岡県八女市

きゅうまるばやしほんけきたとう　うなぎのねどこ

旧丸林本家は、八女福島伝統的建造物群保存地区内にある町家である。主屋3棟（北棟、中棟、南棟）からなり、明治初期～後期にかけて建築された。大正期に伝統産業である八女提灯製造業と、その住居として使われるようになった。空き家となり約30年、取り壊しの危機にあったが、2006年有志の市民が、本家に特化した団体「八女福島丸林本家保存機構」を立ち上げ、市の補助金に加え、会員からの借入金によって修理工事費を調達した。

現在、北棟は商店「うなぎの寝床」、中棟は泊まれる町家、南棟は個人宅として賃貸され、家賃収入から借入金を返済しながら運営している。「うなぎの寝床」は九州・筑後地方の手仕事のものづくりを伝えるアンテナショップであり、店のコンセプトと町家が見事に調和している。

見どころ

北棟は「居蔵（いぐら）」と呼ばれる妻入り入母屋造の大壁塗込造りで前下屋と左右に袖下屋を持つ。中棟は平入り切妻、前下屋付き、南棟は妻入り入母屋造で前下屋付きと3棟が少しずつ違いのある造りとなっており、これが八女福島の変化のある町並みを創り出している。

旧丸林本家3棟外観（右から北棟、中棟、南棟）

袖下屋

鬼瓦

うなぎの寝床 店内＊

昭和初期、昭和30年の道路拡幅により、前下屋は軒切りがなされ改変されていたが、柱筋に残る痕跡を元に蔀戸や大戸が復原された。開店時、蔀戸、大戸が開かれ、のれんがかかると町に店舗の賑わいが広がり、魅力的な景色を生み出している。

蔀戸

建物名称	旧丸林本家北棟　「うなぎの寝床」
建築年	明治後期
構造形式	木造2階建　桟瓦葺正面入母屋造　背面切妻造
所在地	福岡県八女市本町267
電話	0943-22-3699
HP	http://unagino-nedoko.net/
開館時間	11:30～18:00（火、水定休日）
アクセス	西鉄バス「西唐人町」下車　徒歩12分、駐車場有
備考	八女福島伝統的建造物群保存地区内 ＊写真：うなぎの寝床

旧柳川藩主立花邸

福岡県柳川市

きゅうやながわはんしゅたちばなてい

旧柳川藩主立花家別邸は、5代藩主、立花貞淑（さだよし）により、元文3年(1738年)、二の丸御殿から奥の機能を柳川城の南西隅に移したのが始まりとされている。
14代当主、寛治（ともはる）によって、明治43年（1910年）に建設された西洋館、大広間、御居間、家政局、松濤園、門番詰所が現在に残り、これらを含む敷地全体が国の名勝に指定されている。
現在でも立花家が所有し、昭和25年からは、結婚披露宴会場、レストラン、ホテルとして活用されている。

柳川市は「水郷のまち」とも言われ、御花も堀に囲まれている。川下りで着いた船が着岸できる船着場門もあり、新郎新婦を乗せた「花嫁船」も名物の一つとなっている。

見どころ

立花家の迎賓館として建てられた西洋館は、鹿鳴館の流れをくむ建物で、ギリシャ神殿風の柱や、天井の装飾など、華やかな意匠が目を引く。すべての部屋で異なった装飾がされている点も注目される。シャンデリア（当時のまま）は、自家発電によって点灯していた。

西洋館外観

階段室

大広間

約100畳の大広間は、前後に床を持ち、分割しても床を持つ造りとなっている。また、畳を外すと能舞台として利用することもできる。
縁側には立花家に代々伝わる金の兜が並ぶ。
他にも400年以上に渡り、継承された立花家の歴史を伝える史料は、併設の立花家史料館で見ることができる。

建物名称	旧柳川藩主立花邸
建築年	1910年（明治43年）
構造形式	木造、入母屋、桟瓦葺
所在地	福岡県柳川市新外町1
電話	0944-73-2189
HP	http://www.ohana.co.jp/
開館時間	9:00～18:00（詳細ＨＰ参照）
アクセス	西鉄柳川駅よりバスで15～20分「御花前」下車（川下りで70分）
備考	国名勝

旧松崎旅籠　油屋

福岡県小郡市

きゅうまつざきはたご　あぶらや

油屋　外観＊

江戸時代、宿場町として栄えた松崎宿は旧薩摩街道沿いにあり、九州の主な大名が参勤交代の道として利用するなど多くの人が行き交ったという。慶応元年の資料によると、松崎宿には、26軒の旅籠があったと記されている。油屋は、その中で現存する唯一の江戸時代の旅籠である。
昭和初期まで旅籠として用いられたが、その後、寮、芝居小屋、食堂、電気店など様々な用途として使用された歴史を持つ。平成24年度から着手した修理工事により、幕末の姿に復原された。
階高の高い2階建ての外観が特徴で、1階では荷馬を引き入れ土間で荷物の積み下ろしができるようになっていた。
「油屋」と呼ばれる主屋と、「中油屋」と呼ばれる座敷の２つの建物からなり、油屋は一般の宿泊客を、中油屋は武士などの身分の高い賓客を泊めるのに用いられた。油屋、中油屋の造りの格の違いを見るのも興味深い。

中油屋　油屋と対照的に門、塀で囲われている

中油屋　座敷

見どころ

建物中央に位置する大階段は、緩やかな勾配で、大空間の中にあって存在感を見せる。大きな竈などと共に当時の油屋の活気を偲ばせるものである。
また、中油屋の床下から発見された「胞衣（えな）壺」が見学できる。これは、江戸時代の風習で胎盤を納めた容器を人の出入りの多い場所に埋め、良く踏まれることで子どもの健康を願ったものである。

主屋　大階段

復原された竈

床下に埋められた胞衣壺

油屋　2階

油屋を訪れた著名人には、乃木希典の名が上がる。他にも、記録には残っていないものの西郷隆盛が宿泊したとの言い伝えが残っている。

建物名称	旧松崎旅籠　油屋
建築年	江戸末期
構造形式	木造、寄棟造、茅葺（現在は茅葺風鋼板葺に整備）
所在地	福岡県小郡市松崎786番地1
電話	0942-80-1920（NPO法人小郡市の歴史を守る会）
HP	http://ogorishinorekishi.ogori.net/
開館時間	10:00～15:00（毎月第2、4日曜日休館日）
アクセス	甘木鉄道「松崎」下車　徒歩5分、駐車場有
備考	小郡市指定有形文化財、入館料無料 ＊写真：小郡市

旧中尾家住宅（鯨組主中尾家屋敷）

佐賀県唐津市

きゅうなかおけじゅうたく（くじらくみぬしなかおけやしき）

主屋外観

鯨組主中尾家屋敷は、江戸時代に鯨組主として巨万の富を築いた中尾家の屋敷として建てられた建物である。
特に主屋は当時の姿をよく残しており、佐賀県の重要文化財に指定されているほか、唐津市の景観重要建造物にも指定されている。

主屋外観（中庭より）

見どころ

江戸時代に唐津藩呼子に本拠を置き、170年に渡り鯨組主として栄えた中尾家の屋敷として建てられた建物。
2008年より保存整備工事が始まり、2011年より一般公開されている。
平入りの豪壮な造りの主屋は、吹抜けの広い通り土間により建物の歴史が感じられる。
また、勘定場跡の建物は、見事な小屋組にて建てられており、「中尾家と捕鯨」に関した貴重な資料と共に是非一見して頂きたい。

勘定場跡内観

【主屋】

主屋は、平入りの切妻造二階建てで、棟高9.135m、延べ床面積374.26㎡と非常に大きな町屋建築である。復原工事に先立つ調査によって、主屋の変遷がわかった。主屋の中央部は、柱や壁、建具が二重になっている。これは、主屋が１棟ではなく、北棟と南棟の建築時期が違う２棟の建物が一体化していることを物語っている。北棟が先に建築され、のちに南棟が増築されたことがわかった。建築された年代ははっきりしないが、主屋の建築年代は18世紀の前～中期にさかのぼると思われる。

【勘定場跡（本倉）】

現在の建物（本倉）の修理工事中に地下からかつての勘定場の基礎と思われる石列が発見され、建物の位置が特定できた。現在の建物（本倉）は、明治期に現在地に建てられたことがわかったが、新屋敷から移築してきた江戸期の建物との説もある。

旧中尾家住宅ﾊﾟﾝﾌﾚｯﾄより引用

勘定場跡内観

建物名称	旧中尾家住宅(鯨組主中尾家屋敷)
建築年	18世紀前～中期頃(2011年保存整備)
構造・様式	木造二階建て
所在地	佐賀県唐津市呼子町呼子3750番地3
電　話	0955-82-0309
Ｈ　Ｐ	http://www.city.karatsu.lg.jp/唐津市HP
開館時間	午前8時45分～午後5時
アクセス	唐津駅よりバスで呼子まで20分
備　考	佐賀県指定文化財 休館日：水曜日(祝日の場合翌日)・年末年始

Fountain Mountain（旧一増本店）

佐賀県西松浦郡有田町

ファウンテン マウンテン（きゅういちますしょうてん）

旧一増本店棟は、有田内山の伝統的建造物群保存地区本通りより、上幸平橋手前交差点を上有田駅に抜ける、県道上有田停車場線沿いに入り、200m程の中樽橋前に位置する。
建物の規模は全体では、間口11.9間、奥行き12.5間ありその中のA棟は、間口（桁行）7.5間、奥行き（梁間）が6間で、西側奥に奥行7間、幅3間のA棟で構成される。
B棟は、A棟南西に繋がり、間口（梁間）2.7間、奥行（桁行）7.4間となる。
C棟は、間口（梁間）２間、奥行（桁行）3.4間の建物である。西側隣地崖側に隣接するD棟は、幅（桁行）10間、奥行（梁間）4間でA棟の東側よりC棟に隣接している。

（A）木造２階建て、入母屋（１階切妻）造り、桟瓦葺き、黒漆喰塗り（玄関廻り白漆喰塗+腰タイル張り）（１階中庭廻り白漆喰、その他下見板張り）
（B）木造２階建て（一部鉄骨造補強）切妻造り、桟瓦葺き、１階部分サイディング張り
（C）木造平屋建て、切妻造り、桟瓦葺き、下見板張り
（D）木造３階建て、切妻造り、下見板張り（妻側：トタン張り）

見どころ

「有田焼」というブランド名は、輸送手段が船から電車等へ移った明治以降に全国へ発信され、広まっていった。
この建物は上有田駅からうちやま地区の商店街へ向かう入り口となる場所に位置し、有田焼が陸路で日本全国に発信された時代の表玄関でもあり、商人たちが住まう空間と仕事場が同居する大規模で重要な建物として、歴史的資料としても重要なものだと考えられる。
明治から大正・昭和と時代の変遷の中で、焼き物隆盛期から過渡期へと、地場産業の発展や流れを知る上でも貴重な建築物だと読み取る事ができる。
現在は、セレクトショップ併設のカフェとなっており、座敷などで不定期ながらいろいろなイベントが仕掛けられている。建物の重厚さを損なわないシンプルな使い方で、落ち着いた癒しの空間となっている。

建物名称	Fountain Mountain （旧一増本店）
建築年	昭和10年頃
構造・様式	木造2階建て、入母屋、桟瓦葺き
所在地	佐賀県西松浦郡有田町中樽1-10-8
電　話	0955-25-9249
Ｈ　Ｐ	www.fountainmountain.jp
開館時間	11：00～17：00 休館日：月曜・火曜（祝祭日）
アクセス	波佐見有田ICより車で8分（駐車場有） JR佐世保線・上有田駅下車徒歩3分、JR有田駅から車で8分

ギャラリー喫茶　欒

佐賀県佐賀市

ぎゃらりーきっさ　まどい

１階喫茶店カウンター

見どころ

古民家風ではなく、実際の古民家をサス組、土壁など伝統技術によって再生されている。
なるべく元の建具を使用し、新規の建具も古建具を探して取り付けられている。
更にオーナーのセンスが光る室礼が、古民家の魅力を引き出している。
新建材を多用しないが故に生まれる重厚感があり、これからも受け継がれる価値のある建物となっている。

また、右も左も似たような住宅が建ち並ぶ住宅街に古民家が移築されたことで、古民家の存在が際立ち、「ギャラリー喫茶　欒」は訪れる人々に古き日本の伝統家屋の良さを再認識させる場所になっている。

１階カルチャー・イベントスペース

１階喫茶店・ギャラリー

佐賀の山間にあった茅葺きのミカン農家の住まいを、ギャラリー喫茶として街なかに移築再生している。
移築先が建築基準法により、茅葺き屋根にできない地域だったため、茅葺き屋根を鉄板で覆ったような屋根形状になっている。
外壁は土壁下地の漆喰仕上げに腰板張り。
内部は吹抜けで、小屋裏も茅葺き屋根に見えるようにサス組、竹組がされている。
１階の半分は喫茶店兼ギャラリー、半分はカルチャー教室やイベントスペース、２階はギャラリーとして使われている。

2階ギャラリー

建物名称	ギャラリー喫茶　欒
建築年	2007年
構造・様式	木造二階建て
所在地	佐賀県佐賀市東佐賀町14-30
電　話	0952-28-0752
Ｈ　Ｐ	http://madoimadoimadoi.blogspot.jp/
開館時間	11：00～19：00（月曜定休）
アクセス	JR佐賀駅から車で10分（駐車場有）
備　考	

竹　屋
たけ　　や

佐賀県唐津市

唐津神社行列図

見どころ

唐津市の繁華街にある老舗の料理店竹屋。
大正12年（1923）に唐津市鏡の大工脇山氏によって当時としては珍しい木造3階建てに建て替えられた。増改築は数回行われたものの、内観、外観とも当時の様相を残しており、歴史的な佇まいを今に引き継いでいる。
当時、唐津くんちの曳山は背が高く3階客室から見ていたようだが、現在は時の流れと共に電線等ができ2階客室から見るのが丁度良いと言う。
玄関や2階の入り口には松の大板、2階・3階の廊下の一部にはみちのく桜を使用している。通りを眺める縁側の床には継目のない5間長さの縁甲板が張られ、外壁は下部を手摺り、上部をガラス戸引違いとし、その外側には上下別々の雨戸を一筋に立てる形式で吹く風がとても心地よく建物内に入る。又、各階には滑車を使ったエレベーター様のリフトがあり料理の運搬も考慮した造りとなっている。
2階は、6畳ほどの客室が3部屋あり、床の間には当時の掛軸が掛けられ、季節の野花が生けられている。又、唐津の人から「とのさま」として慕われた小笠原長生の書は新築祝いに贈られたものだと言う。
3階は、10畳ほどの客室が2部屋あり、間仕切となる襖は敷居を含め取外しができ大広間としても利用できる。床の間には紫壇・黒壇が使われ、飾り棚も2階より凝ったつくりとなっており、金物も当時のままである。又、塗り壁も当時のままで、大正ガラスに飾り組子、欄間は桐で作られ、各階材料の選択にも意を注いでいる。
通りに面した焼場からは、鰻を焼く香ばしく甘い香りが漂い、建物内は当時にタイムスリップしたかのようである。
是非、唐津の人・食・歴史と共に一見して頂きたい。

うなぎ丼肝吸い付

2階客室：小笠原長生の書

【建物・大木家にまつわる物語】

竹屋は、江戸時代から続く屋号で、刀研ぎ・漆師屋=ヌシヤ（鞘の細工など）を営んでおり、国の重要無形民俗文化財でもある唐津くんちの曳山、刀町1番曳山「赤獅子：文政2年(1819)」、中町2番曳山「青獅子：文政7年(1824)」、京町12番曳山「珠取獅子：明治8年(1875)」の制作にも携わったとされる。
しかし、明治維新の際に発令された廃刀令によって職変えを余儀なくされ、店の前を流れる松浦川で獲れた川魚料理の食堂を始めた。その中でもうなぎを使った料理が好評だったため、明治10年頃よりうなぎ料理を専門とするようになった。
竹屋の家主である大木家は、唐津焼の名匠である中里家や炭鉱王として知られる高取家、佐賀銀行の前身であり旧唐津銀行を創設した大島家などとも親交があり、店内には関連する焼き物や書類などが多数残っている。
建物は、平成10年に唐津市で最初の国登録有形文化財となり、又、平成28年22世紀に残す佐賀県遺産にも認定され県民の思いがつまった佐賀県の宝となっている。

運搬用リフト

2階：客室

3階客室：敷居(取外し)

2・3階：縁側

3階客室：床の間・唐津焼

3階客室：床の間・唐津焼

【保存や活用の取組】

創業時は天然うなぎを使用していたため、冬場は漁量の減少により鶏のすき焼きや水炊きなどの鍋料理を出していた。今でも冬季はなべ物も提供するなど、現在も創業時の手法・スタイルのまま、うなぎ料理を提供しており、今でも継ぎ足してきた秘伝のたれを守る為、身内だけで経営している。最近では3階の広間で、ライヴや大正・昭和のアニメーションの上映、活弁イベント、2017年公開の大林宣彦監督作品「花筐／HANAGATAMI」の撮影にも使われた。

建物名称	竹　屋
建築年	大正12年（1923年）
構造・様式	木造三階建て
所在地	佐賀県唐津市中町1884-2
電　話	0955-73-3244
Ｈ　Ｐ	https://www.karatsu-kankou.jp/gourmet/detail/124/Gourmet
開館時間	平日11：30～19：00（日・祝18：30）
アクセス	JR唐津駅より徒歩6分／大手口バスセンターより徒歩3分
備　考	休み：毎週水曜日／第3木曜日／1/1～1/3

心田庵

しんでんあん

長崎県長崎市

茅葺屋根の母屋

東屋（あずまや）

茅葺門（内側）

和室から庭を望む

見どころ

心田庵は長崎の茶道において重視された経緯があり、天和２年（１６８２）の「心田菴記」や文化14年（１８１７）の「心田菴図」などの資料も残されている。江戸時代からの由緒ある日本庭園（池泉回遊式庭園）は春は新緑に、秋は紅葉に包まれ、風情がある景色と市内では非常に珍しい茅葺門、茅葺建物があり、皮の付いたままの木や丸太が柱として使用されていることなど、数寄屋造りの特徴を持っている。閑静な住宅地の路地裏に茅葺門だけが見てとれ、その奥にこのような広い敷地（約478坪）と茅葺建物が残されているとは想像しがたい。長崎市内に残る貴重な歴史的、文化的な遺産で、平成25年2月に長崎市の史跡に指定されている。

心田庵は、何兆晋（がちょうしん）が長崎片淵郷（現在の片淵2丁目）に建てた別荘である。何兆晋は何高材（がこうざい1598～1671年）の長男。父、何高材は帰化唐人であり日中貿易で財をなし、崇福寺大雄宝殿（国宝）をはじめ長崎の清水寺本堂（国指定重要文化財）を父子で寄進したことで知られている。また、石橋の寄進などにも尽力している。

何兆晋は万治（まんじ）元年（1658年）に唐小通事（とうこつうじ）となり、寛文8年（1668年）まで十年間つとめている。心田菴記の作者である長崎出身の儒学者、高玄岱（こうげんたい1649～1722年）は「およそこの心田庵は他と大いに異なり、奥深く穏やかな外観であり、拡がって隠れなく見える。この庵には、あらゆる所に細工を尽くしているが、肘掛けや敷物など贅沢なものはない。」「わずかな土地だが、心の田を子孫に残し耕させる余地があり、欠けるところはない。」「これはいわゆる心田と言うべきか。それゆえ、君の心田は千頃万頃（せんけいばんけい）の広さであり、まさに子が種をまき、孫が耕すのみなのであろう。」と記している。質素な中に心を豊かにする美しさが感じられると、心田庵の名の由来が語られている。江戸後期になると心田庵は唐通事をつとめた茶人、神代松蔭（くましろしょういん　1754～1833年）の別荘となり、しばしば茶事が催されていた。

茶室

茶室

表玄関

和室床の間（右奥は茶室）

日本庭園（池泉回遊式庭園）

建物名称	心田庵
建築年	寛文8年（1668年）推定
構造・様式	茅葺建物　木造平屋・数寄屋
所在地	長崎市片淵2丁目18番18号
電　話	095-829-1193（長崎市文化観光部文化財課）
Ｈ　Ｐ	http://www.city.nagasaki.lg.jp/
開館時間	一般公開　春・秋（各20日間ほど）9時～17時　有料
アクセス	心田庵入口バス停徒歩3分　新大工町電停徒歩10分
備　考	長崎市指定史跡 茅葺建物（和室・茶室）と庭園の貸出（申込必要）

湧水庭園　四明荘

ゆうすいていえん　しめいそう

長崎県島原市

庭から見た透明度の高い池と四明荘（写真：島原市提供）

池へ張り出した座敷から庭園を眺める

明治後期に伊東元三氏（当時開業医師）の別邸（宅地187.8坪、木造瓦葺約40坪）として建築され、四方の眺望に優れていることから「四明荘」と名付けられた。庭園は昭和初期に禅僧を招いて造られたと言われ、京都の庭園などの枯山水式庭園と対極にあるような湧水を生かした近代庭園である。透明度の高い美しい水に色とりどりの鯉が優雅に泳ぐ庭園の池へは一日に約3000トンもの清水が流れていて市民に親しまれてきた。座敷は正面と左側面の二方が池へ張り出して縁を廻しており、一段高い屋敷から庭園を見下ろすと座敷と庭園が一体となり、ここでしか見られない独特の美しい景観が広がる。

見どころ

正面の庭だけではなく、居室棟裏手には観賞式の池泉式庭園がある。その四角形の池には四つの中島があり表の庭園とはまた違った趣がある。澄んだ水の周りは低い石積で護岸され、池底はいずれも砂敷き、池の中には沢飛石が配置されている。くぐり門から一歩中に入るとピンと張りつめた静寂が当時にタイムスリップしたような感覚になる。入口付近には底まで見える程の透明度を誇る湧水口があり、こんこんと湧く様子を見ることができる。国の登録記念物、登録有形文化財となり、「鯉の泳ぐまち」の一角にある人気の観光スポットとなっている。

くぐり門（表）

くぐり門

入口付近にある底まで見える透明度を誇る湧水口

池で優雅に泳ぐ

座敷の床の

居室棟裏手にある観賞式の池泉式庭園

沸々と湧き出る美しい水に泳ぐ

島原半島は随所で水が湧き出ていて、上下水道や農業用水などほとんどを地下水でまかなっているほど湧水に恵まれた町である。特に半島の中央にある雲仙地溝内に特に湧水が多く、島原市街地では60ヶ所以上の地点から合計日量22万トンの湧水がある。島原市は水緑都市モデル地区に指定され、島原湧水群は「日本名水百選」「水の郷百選」にも選定されている。湧水群の多くは1972年の眉山崩壊後に出現したと伝えられる。この「四明荘」は島原市の中心街(鯉の泳ぐまち)にありながら静寂な佇まいをかもし出し、邸内にある池からは沸々と湧き出る大小の池が３つある。1日約3,000トンの湧水量を誇る池には鯉が泳ぎ、庭内には赤松や楓など色々な植栽が施されており、見るものすべてを魅了する。

建物名称	湧水庭園　四明荘
建築年	明治後期
構造・様式	木造平屋　数寄屋造り
所在地	長崎県島原市新町2丁目125番地
電　話	0957-63-1121
Ｈ　Ｐ	http://www.shimabaraonsen.com/
開館時間	9：00～18：00（休館日無） 入場料　大人300円　小人150円
アクセス	「商工会議所前」バス停　徒歩5分
備　考	国登録有形文化財

茶室「閑雲亭」

ちゃしつかんうんてい

長崎県平戸市

茶室閑雲亭全体の外観　（公）松浦史料博物館より提供

松浦史料博物館は昭和30年（1955）10月西海国立公園の指定と前後し、松浦家39代陞（すすむ）氏により資料等を寄贈され設立されました。建物は鶴ヶ峰邸と称して明治26年（1893）に建てられた当主の私邸であったものである。（県指定有形文化財）

茶室の内部　（公）松浦史料博物館より提供

見どころ

「閑雲亭」は主として千利休の創意に基づく純然たる草庵茶室である。従って建築の資材並びに方法は，農村庶民の質素な住居様式を取り入れ、殆ど自然の材料を似て構築されている。屋根は棟、梁、桁を除き全部竹材を用い、葭葺とし、軒柱は自然の丸太柱を組み合わせ、藁縄で固定し、ほとんど釘は使用していない。このように草庵様式ではあるが、亭の要素も完備した草庵茶室は稀である。その為に全国各地から大勢の観覧者やまた茶室研究の専門家が来訪し、調査研究するなどかなり世に知られたており、これからも慎重な維持管理が必要である。

茶室「閑雲亭」は元来明治26年（1893）、松浦家37代松浦詮（号・心月）は、御館跡に居を構えることを計画し、明治26年（1893）に竣工、鶴ヶ峰邸と名付けた。鶴ヶ峰邸の庭園一隅に自らの設計による茶室「閑雲亭」を建立した。しかし残念ながら昭和62年（8月の12号）の台風により倒壊した。現在の「閑雲亭」は昭和63年9月に佐賀市の宮大工宮路肇氏によって再建完。従来の萱葺を葭葺に替え、目に見えない箇所に台風に対する補強をしているが、他は忠実に復元している。床面積は19.83㎡あり、お茶とお菓子（平戸の名菓）を楽しむことができる。

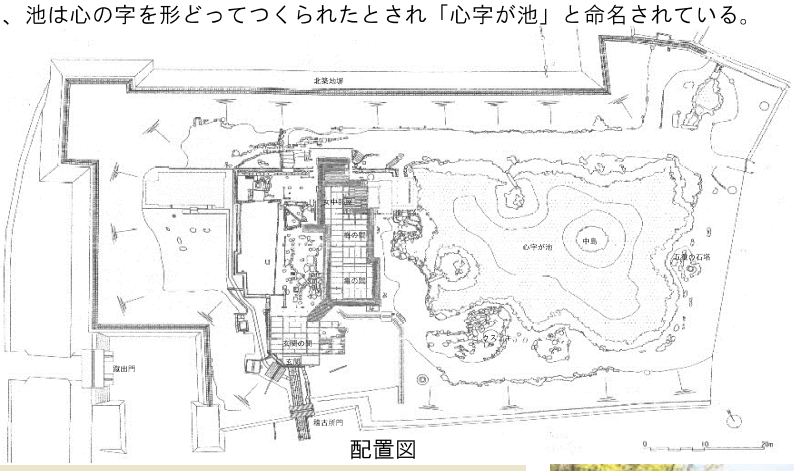
建物名称	茶室「閑雲亭」
建築年	1893年（明治26年）　昭和63年再
構造・様式	木造　庶民の質素な居住様式
所在地	長崎県平戸市鏡川町12番地
電　話	0950-22-2236
Ｈ　Ｐ	http://www.matsura.or.jp/
開館時間	9：30～17：00（12月29日～1月1日休館）
アクセス	平戸桟橋バス停より徒歩5分
備　考	国登録有形文化財

石田城五島氏庭園隠殿屋敷

長崎県五島市

いしだじょうごとうしていえんいんでんやしき

五島家第30代盛成は、福江城（石田城）の 工事が八分どおり竣工すると安政5年(1858) 1月21日、子息の盛徳に家督を譲って藩政を 辞し、城郭内にある隠殿として邸宅を建て、この東側に京都の僧、全正に庭園を作らせた。全正は金閣寺の丸池を模倣し、用い石は鬼岳の溶岩を多用した。盛成はことのほか亀を好んでいたので、池護岸、中島などの随所に亀似た石を据えているのが特徴で、池は心の字を形どってつくられたとされ「心字が池」と命名されている。



配置図

玄関

亀の間より庭園を眺める

見どころ

隠殿屋敷は、第35代当主典昭により、平成28年(2016)2月29日に修復工事が完了した。亀の間、梅の間、神様の間の表具・建具(現物は大変貴重なものであり、今後の経年・活用によってこれ以上破損することを防ぐ意味で、別途保管されている)は既存に倣い、本紙複製、張り直しが行われているが、版木を制作して刷り込んで製作されたものである。

亀の間の唐紙と釘隠し

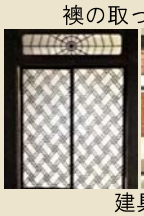
梅の間の唐紙と釘隠し

南化粧部屋の建具

女中部屋からの見通し

襖の取っ手

屋敷内の井戸



建具

石灯篭

樹齢800年を経たクスノキ（パワースポット）と隠殿屋敷外観

亀の間

15畳敷で北側にトコとトコ脇を並べ、トコ柱はカリンの曲柱、地板はケヤキの1枚板を使用する。トコの東側は地板を上げ、その上部には吊束に竹状落掛を差して北東面に障子を建込み独特の書院とし、トコ脇では天袋吊る。公的な接客に使用されたと思われる。

梅の間

8畳敷で、北側にトコとトコ脇を並べ、「亀の間」と同様にするが、落掛けはアーチ状に拵え「仏間」とは続き間とし、当主の居間として使われたものと思われる。腰壁障子の桟組を丁字崩し、書院欄間の桟組は万字組子とする。間仕切り欄間は黒漆縁に万字入梅紋。

建物名称	石田城五島氏庭園隠殿屋敷
建築年	1861年（文久元年）
構造・様式	木造２階建て・書院造り
所在地	五島市池田町1-7（無料駐車場８台可）
電　話	0959-72-3519
Ｈ　Ｐ	なし
開館時間	9：00～17：00（毎週火曜日・水曜日休園）
アクセス	福江港より徒歩10分。福江空港より車で10分。
備　考	国指定名勝

旧早川家住宅

きゅうはやかわけじゅうたく

長崎県諫早市

写真：諫早市公式HPより

見どころ

外観

２階天井

写真：諫早市公式HPより

外壁

１階天井

縁側

写真：諫早市公式HPより

式台

畳敷き

座敷

違い棚

縁側

写真：諫早市公式HPより

旧早川家住宅は、明治7（1874）年に元諫早家家臣の木下助内氏が自邸として建設し、その後、長男の元衆議院議員木下吉之丞氏をはじめ、代々子孫が住んでいた。また、同氏の娘婿早川員氏が入居され第９代諫早市長を務めたため「市長邸」の愛称で親しまれている。

外観（座敷側より）

建物は木造２階建で、２階の大屋根は寄せ棟の茅葺を、その周囲にとりつく１階の下屋部分は瓦葺になっている。大屋根の小屋組は扠首組で伝統的な構法を示している。外壁は真壁造で、上部露出部を漆喰塗り仕上げとし、腰壁は目板打ちつけの縦板張りになっている。

床面積は１階が191.26㎡，２階が78.48㎡の計269.74㎡（約82坪）と規模が大きく、また近世の武家住宅に特有な玄関である式台を構え、違い棚、付書院、仏間を配した座敷の間と、これに付随した客用の便所を持っている。全体に土間部分が少なく、建設当初から室内のほとんどを畳敷きにしている。農家系統の民家でありながら、格式を重んじる武家住宅に近い様相を見ることができる。明治以降の建設だが、その建築様式のあり方は旧藩時代の上級農家や庄屋クラスの形態をよく伝えている。

建物名称	旧早川家住宅
建築年	1874年（明治7年）
構造・様式	木造２階建
所在地	長崎県諫早市小野島町2233-7（干拓の里）
電　話	0957-24-6776
Ｈ　Ｐ	http://www.kantakunosato.co.jp/
開館時間	9：30～17：00（入館16：00まで） 休館日：月曜日（祝日の場合翌日）12/30～1/1
アクセス	県営バス「干拓の里」前　駐車場あり
備　考	諫早市指定有形文化財

旧楠本正隆屋敷

長崎県大村市

きゅうくすもとまさたかやしき

主屋正面

庭園、離れ側面

見どころ

1.5間の式台玄関の奥に15帖の座敷があり、西側に1.5間の床の間と1間の付書院が並び、床の間と直角に違い棚を設け、独特な座敷飾りを構成している。庭に面しては矩折に畳敷きの縁側を設け、土庇には濡縁を同様に付設している。

式台玄関から座敷を眺める

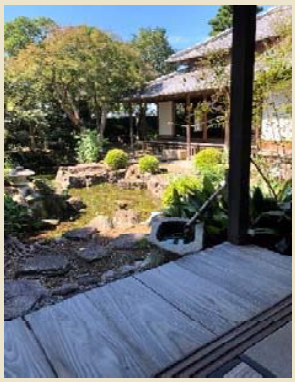
座敷廻りの土庇

座敷飾り

欄間…北と南は組子を斜めにいれた珍しい意匠

釘隠し

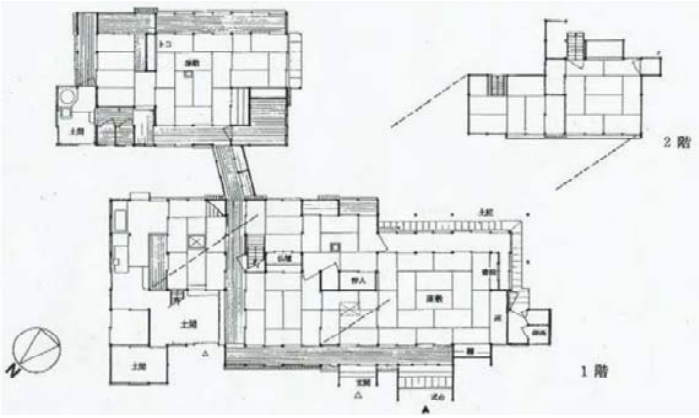
取手



斜めの渡り廊下で結ばれた離れは10帖の座敷を中心にして専用の便所と風呂をもつ独立した生活空間を形成している。

離れから座敷･庭園を眺める

楠本正隆は尊王攘夷を掲げた大村藩三十七士の一人で、明治維新後は明治５年に新潟県令、同１０年に東京府知事、同２６年に衆議院議長を務めた。
この屋敷は楠本正隆によりに建てられもので、通りに沿って築かれた石垣よりもやや高い位置に寄棟造り、桟瓦葺き、平屋建て一部２階の主屋と渡り廊下で結ばれた別棟の離れが並び建っている。主屋は棟札から明治３年建設と解り、伝承では市内の深澤家の屋敷の材料を用いて建てられたといわれている。建設されたのは明治初期であるが、大村の近世武家住宅の典型的な形式を伝えている。
平成4年3月に大村市の史跡に指定されると同時に、以後全面的な修理・整備工事が施された。庭は従時の池泉回遊式に復元されている。



平面図（『城下町・大村と武家屋敷通り』より）

主屋、土間上部梁組

食堂の隅に設けられた棚

建物名称	旧楠本正隆屋敷
建築年	(主屋)明治3年　(離れ)明治前期
構造・様式	(主屋)木造平屋一部2階、寄棟造、桟瓦葺 (離れ)木造平屋、寄棟造、桟瓦葺
所在地	長崎県大村市玖島2丁目291番地4
電　話	0957-52-9885
Ｈ　Ｐ	なし
開館時間	9：00～17：00（月曜日・年末年始休館）
アクセス	大村ICより車で15分（駐車場有）
備　考	長崎県指定有形文化財、大村市指定史跡 入場料　高校生以上200円、小中学生100円

合資会社　猪原金物店

長崎県島原市

ごうしがいしゃ　いのはらかなものてん

表が金物店、手前が茶房とギャラリー「速魚川」

店舗側面と鏝絵

見どころ

環境庁より「名水百選」に選ばれた島原の湧水であるが、国内の四大名水（北海道の羊蹄山の湧水、神戸の六甲山の湧水、屋久島の縄文水、島原の湧水）にも入っている。平成10年に敷地内の湧水を利用して作った人工の川「速魚川」がある。このような街なかの湧水を利用したビオトープは少しづつではあるが、その活動の輪を広げつつある。中庭はどの部屋からも見える何かほっとする空間であり、喫茶やギャラリーでは静かな時間が流れる。喫茶では湧水を使った寒ざらしやコーヒー等がある。またかつての住居部分の２階座敷では展示会なども多く利用されている。

湧水の流れるビオトープ速魚川

展示会などがある２階座敷

店先に多くの商品が並ぶ

「速魚川」から中庭を望む

１階和室のガラス戸と格子窓

江戸時代後期の商家で、北に島原城を望む由緒ある島原街道に面するこの地に明治10年（1877年）金物店として創業し、現在に至っている。金物店としては九州で2番目に歴史の長い老舗であり、とても趣のある町屋造りの建物で、店舗正面と側面の漆喰壁には龍の鏝絵（こてえ）、店舗脇の水汲み場には龍の石彫がある。平成15年（2003年）には国の登録有形文化財になった。

平成の普賢岳噴火後は、昔ながらの金物店を大改装し幕末の町屋を復元してお店の奥に茶房とギャラリー「速魚川」（はやめがわ）を併設し、さらにお店の横に井戸の湧水を利用した人口の小さな川「速魚川」を生み出した。ここには突き井戸（地下110メートル）から自噴する毎分150リットルの湧き水が流れている。自由に飲んだり持ち帰ったり出来るのでこの湧水を求めて、遠くは福岡や佐賀、長崎、諫早、大村、そして島原半島のあらゆる所から毎日多くの来客がある。

速魚川にかかる小さな石橋を渡って建物の中へ入ると、坪庭を囲むように昔ながらの囲炉裏の間やテラスがあり、渡り廊下、土間など懐かしくて安らげる空間が広がっている。茶房では、湧水と自然食材を使った美味しい料理を楽しむことができ、２階のギャラリーでは、全国様々な分野の作家の展示会、演奏家や歌手によるコンサートなどが開かれ、ギャラリーのもつ歴史的な空間との絶妙な調和が好評を得ている。また、金物店では国内外のロングセラーからチタン製の最新商品まで品質本位で選んだ金物類や明治から昭和の珍しい商品ストックも多数あり展示販売している。最近では幅広い世代の要望にも応えられるようなものも揃えてあり、明治から令和へと引き継がれている。

基本理念は「こだわって本物、使って一生モノ」。

猪原金物店屋号。明治初期、吉備の国（岡山）から島原に移住し創業した初代猪原信平考案。吉備の「吉」を使用。

数千あると思われる金物類が並ぶ店内

建物名称	合資会社　猪原金物店
建築年	1861年（万延2年）
構造・様式	木造2階建　町屋造り
所在地	長崎県島原市上の町912番地
電　話	0957-62-3117
Ｈ　Ｐ	http://www.inohara.jp
開館時間	金物店　9：30～18：00（毎週水曜日休業日） 入場料　無料（喫茶・食事は有料）
アクセス	島原鉄道島原駅より徒歩3分
備　考	登録有形文化財（国）、景観資産登録（県）

旧細川刑部邸

熊本県熊本市

きゅうほそかわぎょうぶてい

熊本県指定重要文化財であり、平成5年に子飼から熊本城三の丸に移築復元された。細川刑部家（別名長岡刑部家）は細川家3代（肥後藩初代）忠利の弟、刑部少輔興孝が正保3年（1646年）に2万5千石を与えられ興したものである。明治6年（1873年）城内の本邸を鎮台に接収された刑部家はここを本邸としている。建坪約300坪の旧邸の中心は玄関、表客間、書院、春松閣で、それに茶室観川亭、長屋門、蔵、台所などが付属し、大名屋敷の形式を整えており、全国でも有数の上級武家屋敷としての格式を持っている。

見どころ

現在、熊本地震の影響で休館中であるが、紅葉の季節、梅の季節には期間限定で外庭が無料公開されている。無料公開では、多くの観光客が来場しており、復旧を望む声が多い。建物の復旧はまだまだ先となるようだが、公開の際には、是非、足を運んでいただきたい場所である。

↑熊本地震の影響で倒れた状態の塀

熊本地震で被災したため、現在、建物の内部は公開されていない。下記写真は被災前に撮影されたものであるが、上級武家屋敷としての格式があり、建坪300坪の広さを持つ建物には多くの見どころがある。下記の化粧ノ間、表御書院は、ほんの一部に過ぎない。
熊本城の復旧作業が進む中、このような魅力ある和の空間を持つ建物についても早く復旧されることを望む。

化粧ノ間

表御書院

建物名称	旧細川刑部邸
建築年	正保3年（1646年）　1993年（平成5年）に移築
構造・様式	木造
所在地	熊本県熊本市中央区古京町3-1
電　話	096-352-5900
Ｈ　Ｐ	http://kumamoto-guide.jp/kumamoto-castle/
開館時間	熊本地震の影響による休館中
アクセス	ＪＲ「熊本駅」から車約15分もしくは熊本城周遊バス（通称：しろめぐりん）「博物館・旧細川刑部邸前」下車
備　考	写真：外観　熊本城総合事務所（熊本市） 内観　熊本通信HP

松浜軒

しょうひんけん

熊本県八代市

八代城主三代松井直之公が延宝年中(1670年)黄檗宗慈福寺を建立したが、その後、寺を廃し梶畑になっていた所に、元禄元年(1688年)の春、生母崇芳院のために御茶屋を建て、松浜軒と称した。通称は「浜のお茶屋」である。
明治３年に八代城が国有となったため、十代章之が増築して松浜軒に住居を移し現在に至っている。
古くからあった赤女ヶ池、赤女ヶ森がそのまま庭園にとりいれてあり、森の中に伏見の稲荷大明神を勧請した稲荷社をはじめ、歴代が子供たちの健やかな成長を祈念した児宮、菅原道真公を奉祀の天神社、愛馬の守護神馬頭観音が鎮座する。
赤女ヶ池、赤女ヶ森の謂れは古く、群れ泳ぐ「鯉」の古名に因んでの由来といわれ、大変縁起の良い所としても知られている。

見どころ

創建当時は松林越しに八代海や雲仙を望む雄大な庭園であった。
園内の池には伸びやかな石の配置が行われ、築山（つきやま）の石組みや桂離宮天橋立（かつらりきゅうあまのはしだて）の景色に似た造形など、大名庭園として変化に富んだ風情をつくり出している。
国の名勝にも指定されており、雄大な海と遥かな景色を取り込んだ意匠を持つ、江戸時代初期の大名庭園として貴重なものである。
６月上旬には約5,000本の肥後花菖蒲が見頃を迎え、人々の目を楽しませる。一般的には菖蒲が有名であるが、秋の紅葉時期もとても風情があり、一見の価値がある。

また、松井家に伝わる家宝を展示する松井文庫の資料館があり、宮本武蔵ゆかりの「戦気」の軸や手彫りの木刀も展示されている。

松井神社境内にある臥龍梅

（肥後花菖蒲）
肥後花菖蒲は肥後六花の一つ。花弁が大きくて幅広く、大型の花を咲かせるのが特徴。江戸花菖蒲の華麗さ、伊勢花菖蒲の優美さに対し、力強く男性的であると言われている。古来、肥後花菖蒲は鉢植えで座敷鑑賞用だったが、松浜軒のものは特別に地植えが許された。

茶室の縁側にたてられている戸のガラスは大正時代のものであり、ゆるやかな表面が悠久の時を感じさせてくれる。現在でも台風時に雨戸が立てられることがないが、周囲の樹木が守っているのか、ガラスが風雨で割れたことはないそうだ。
毎年６月の第１日曜日には肥後古流のお茶会が行われている。

※建物内は一般公開されていない。

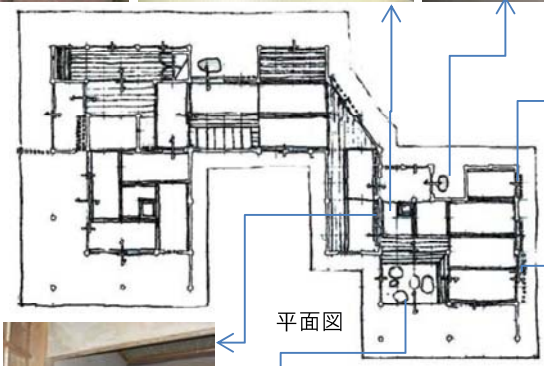
建物名称	松浜軒
建築年	元禄元年（1688年）
構造・様式	木造
所在地	熊本県八代市北の丸町３－１５
電　話	0965-33-0171
Ｈ　Ｐ	http://www.city.yatsushiro.lg.jp/
開館時間	午前9時～午後5時（入園は午後4時30分まで）
閉園日	月曜日（祝日の場合は翌日）、年末年始、旧盆
アクセス	九州自動車道八代ICから八代港線経由15分。駐車場あり
備　考	観覧料　大人500円　小中学生250円　団体割引あり
	写真：八代市文化振興課、建築士会熊本 下野明希子

仰松軒

こうしょうけん

熊本県熊本市

仰松軒は、茶道に造詣の深かった細川忠興（細川家2代）の原図に基づき大正12年に復元されたものであり、風流を極めた造りとなっている。茶室の前庭に苔むした石灯籠と手水鉢があるが、それは京都で忠興が愛用したものである。ことに、手水鉢は豊臣秀吉や忠興の茶の師である千利休も利用したと伝えられている。歴代の細川藩主は、この手水鉢を参勤交代の道中にも持参し、宿ごとに茶をたててはその風情を楽しんでいたとのことである。来場の際は建物と共に、この石灯籠と手水鉢を見ていただきたい。



平面図

↑下地窓

↓連子窓

見どころ

杉木立に囲まれた藁葺き屋根の茶室。樋は、横・縦ともに竹でできており、自然の中に溶け込んだ建物となっていた。建物の周りには飛び石が配してあり、土・石・苔のバランスが、風情を感じさせる。排水のための配管も、目に触れる部分は竹で覆われ、景観を損なわない工夫がなされている。
建物と自然との調和を是非体感していただきたい。

茶席には土間よりあがる茶室となっており、間取りが通常の茶室としては特異である。また、床の前の茶席と大目畳との間は離れすぎており、一般的な茶室で通用する作法が、ここでは成り立たない。
また、正面左にも扉がついており、そちらでも茶をいただくことができたのではと想像される。茶室として、二通りの使い方をしていたと見ていい。路地から茶室への誘導、土間が入り口であるということにより、滑らかに運ばれたようだ。

建物名称	仰松軒
建築年	大正12年(1923)に細川忠興の原図に基づ復元
構造・様式	木造
所在地	熊本県熊本市中央区黒髪4-610
電　話	096-344-6753
Ｈ　Ｐ	https://kumamoto-guide.jp/spots/detail/82
開館時間	8時30分～17時00分（入園は16時30分まで）
アクセス	ＪＲ「熊本駅」から車で約25分もしくはバスで約20分 立田自然公園入口下車　徒歩約10分
備考	利用料　高校生以上200円、小・中学生100円、30人以上の団体2割引、障害者手帳をお持ちの方は無料

CAFÉみなもと

かふぇみなもと

熊本県五木村

五木村は熊本県南部である球磨郡北部に位置しており、五木の子守唄で知られる人口1,000人ほどの村である。1963年から1965年に川辺川及び球磨川流域において大水害が発生したことを契機に、1966年旧建設省より川辺川ダム建設計画が発表された。そして今、ダムの建設は止まったままである。

「CAFEみなもと」は、時代に翻弄された建物が地元の人々と多くの村外協力者の手で蘇った空間である。ここで働くのは、U・Iターン者、インターンの学生たち。店内では、地元特産品の販売と同時に、地元住民からリサーチした日用品も並んでいる、地元にとってもなくてはならない場となっている。手作りの、人々に寄り添った新しいカタチの「和の空間」を感じてみてはいかが。

＜Before＞　＜After＞

見どころ

当建物は、川辺川ダム水没予定地にあった建物を移設・増築したものである。

本体は戦後まもなく建築された平屋建ての古民家であるが、ダムの計画により建替えができない状況が続き、家族の変化と共に増築で対応。2000年、ダム建設賛同の調印を機に解体。部材を譲り受けた現オーナーにより2003年に現所在地に移設し店舗部分を増築。2017年まで食堂及び民宿として利用されていた。移設の際に、川辺川ダム水没予定地で解体された別の建物の部材も活用し建築したという。まさに、ダムで翻弄された建物の集合体となっている。

現在の姿となったのは、2018年9月以降のリノベーションによるもの。学生を始め地元村民によるワークショップや、熊本県による「元気だけん！くまモン県プロジェクト」など、つながる人々のチカラで作り上げられた。

目に見えないものとつながっている感覚を覚えるこの空間を、地元食材と共に味わって頂きたい。

（白滝公園）

公園の名称である白滝とは、高さ70m、幅200mの切り立った石灰岩の断崖がまるで滝が流れ落ちるように見えることから。見る者を圧倒する白い岩と、その下を流れる深いエメラルドグリーンの川との美しいコントラストが見事。園内には吊り橋や小さな鍾乳洞があり、夏場は川遊びにやってくる家族連れや若者らも多く、隠れた穴場として知られる涼スポット。

建物名称	CAFÉみなもと
建築年	平成15年　移設、増築
構造・様式	木造
所在地	熊本県球磨郡五木村乙１５３２－１
電　話	0966-37-7810
Ｈ　Ｐ	https://hizoe.co.jp/cafe/
営業時間	午前11時～午後６時
店休日	月曜日・年末年始
アクセス	国道3号線沿い氷川町商工会より東陽町方面へ。約25ｋｍ
備　考	カーナビでは「白滝公園」で検索、すぐ向かい側

川尻公会堂

かわしりこうかいどう

熊本県熊本市

瑞鷹酒造の2代目社長吉村彦太郎翁が、晩年「川尻の発展には公会堂が必要」と決意し、寄贈を遺言して逝去した。
昭和6年（1931年）に完成した川尻公会堂は、80畳の大広間と10畳の和室が2部屋あり、その周囲三方をぐるりと回廊が囲んでいる。

その後、熊本市の管理のもと運営されてきたが、耐震診断の結果、安全性を理由に平成26年（2014年）10月より使用禁止となり、建て替えの提案もあったが、住民の強い希望により耐震改修が行われることとなった。

しかし、耐震工事着工直前の平成28年（2016年）4月、熊本地震により被災。再設計後、耐震改修工事を経て、平成31年（2019年）4月より利用が再開された。

戦前から戦後を通し、各種団体の活動の場として集会や会議だけでなく、カラオケ、忘年会、成人式、結婚式、葬式と幅広く利用されており、その利用は年間250日を越えている。

見どころ

90年前の石場建て構法の建物である。

耐震改修を行うにあたり、川尻の町並みに合った外観のまま、大広間と二間の和室には壁をつくらないでほしいという地域住民の要望が叶えられた。

木構造体は基礎に緊結しておらず、土壁、足固め、貫、木ずり漆喰、差し込み栓、ほお杖、格子壁を耐震要素に取り入れてある。

再生工事には、土、藁、竹、い草、木材など地元の自然素材をふんだんに使い、建築された当時の趣を残した建物となっている。

大広間

和室

回廊

スロープ

建物名称	川尻公会堂
建築年	昭和6年（1931年）
構造・様式	木造
所在地	熊本県熊本市南区川尻4丁目8番25号
電　話	096-357-9043
Ｈ　Ｐ	https://www.facebook.com/kawashirikoukaido/
開館時間	午前9時～午後10時
閉園日	毎週火曜日、祝日、年末年始（12月29日～翌年1月3日）
アクセス	九州産行バス［海路口］公会堂前
備　考	見学希望は事前に問合せのうえ、施設利用者に配慮をお願いします。

冨士屋 Gallery 一也百 ーはなやももー

大分県別府市

ふじやぎゃらりー　はなやもも

玄関を見る

門を見る

見どころ

別府市は西に山、東に海がある。この建物は南へ長いかぎ型の配置をとり、東側の庭越しに別府湾を望む。
入母屋作りの屋根等外部はほぼ当時の姿のままを残す。
内部は一部改装し小屋組を見せるコンサートホール等として活用されている。ほとんどは当時のままで欄間や建具、庭など、いたる所で意匠が凝らされ、特に和室の本格的な書院造りは、床の間など随所で銘木が使われており、いずれも当時の仕事ぶりを堪能することができる。（１階ホールで棟札を見られる）
新築当時は旅館で、県内の旅館人気投票で大分県一となった程。訪れた人達には筑豊の炭鉱王の伊藤伝右衛門、麻生太吉、人形作家歌人の鹿児島寿蔵や高浜虚子、日本画家の小早川修正などと錚々たる名を連ねたことからも格の高さをうかがうことができる。歴史の偉人達が過ごした場所で、築100年を超える建築と庭や景色、樹齢約200年のウスギモクセイを、現代に響く音楽や芸術と共に楽しめる。

2階　明治の和室　貸室として利用

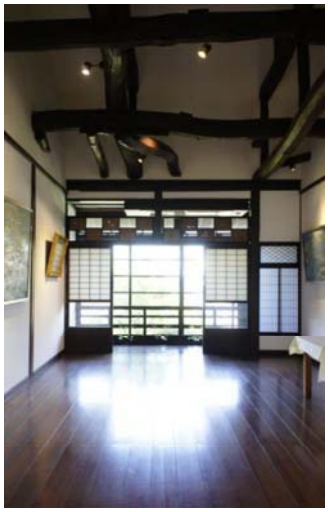
冨士屋旅館　※HPより

2階へ上がる吹抜けの階段

明治32年に建てられ平成８年まで営業していた当時「冨士屋旅館」は鉄輪温泉の風情を残す明治時代の建物。
一時は老朽化のため取り壊す予定だったものの、この建物を現代に伝えるため、保存、再生し、活用することを目的として平成16年に再スタートしている。コンサートを開くホール、ギャラリー、ショップ「愉しい食卓はなやもも」や、カフェがあり、音楽、芸術、文化、食のイベントを通して、「百年の時を繕い今を愉しむ」ことのできる場所となっている。

2階の一也百ホール

1階のロビー　カフェスペース



2階のギャラリースペース

建物名称	冨士屋Gallery一也百
建築年	明治３２年
構造・様式	木造２階建て・数奇屋
所在地	大分県別府市鉄輪上１
電　話	0977-66-3251
Ｈ　Ｐ	https://www.fujiya-momo.jp
開館時間	10:00～17:00 月火定休（祝祭日･イベント時は営業）
アクセス	別府駅から車で15分、鉄輪バス停から徒歩２分
備　考	国登録有形文化財

旧丸毛家住宅

大分県臼杵市

きゅうまるもけじゅうたく

門から見る

丸毛家住宅は、江戸時代後期の建築様式をとどめる、臼杵市でも数少ない武家住宅の一つである。この丸毛家住宅の敷地は、江戸時代に藩より屋敷地として、代々丸毛家に与えられたものである丸毛家住宅の西側には竹林をのぞみ、南に面したいわゆる「奥」の部屋に隣接する縁側では、ゆったりとした時間を過ごすことができる。

「上之間」「次の間」「下之間」前の縁側

見どころ

玄関は二つあり、建物入口の正面にお客用の「表玄関」、入口入って左側に家族用の「内玄関」がある。「内玄関」には大きなかまどが据えられている。屋敷の内部は大きく「表」と「奥」の二つに分けられており「表」は接客の場、「奥」は家族の生活の場となっている。
「表」は眺めが良く落ち着いた場所に造られており、「奥」は日当たりの良い南側に造られている。接客や体面を重んじた武家の格式を知ることができる建物である。

表玄関

南側に面する縁側

内玄関の土間にあるかまど

内玄関から奥を見る

「上之間」「次の間」「下之間」前の庭から見る

丸毛氏はもともと美濃国（今の岐阜県）の武士で、明智光秀の家臣であった斎藤氏の一族であった。そのため、光秀が羽柴（豊臣）秀吉によって滅ぼされた天正十年（1582）の山崎の合戦では、明智方に味方し敗れたため、長く流浪していたと丸毛家家系図に記されている。

「上之間」

寛永五年（1628）丸毛弥市右衛門忠勝の代に、忠勝の外祖母が稲葉一鉄公（臼杵藩初代稲葉貞通の父）の娘であったため、その縁で三代藩主一通公に元高二百石で召し抱えられ、町奉行役を務める臼杵藩では上級の武家であった。

「仏間」など生活の場を庭から見る

丸毛家住宅は武家の生活様相や文化を理解してもらう公開施設として、また町並み観光の一拠点として活用するため、平成元年に建物の解体修理を行った。その後、平成2年3月16日に臼杵市の有形文化財として指定され、平成15年「昔のくらし」を体験できる施設となった。

建物名称	旧丸毛家住宅
建築年	江戸時代後期
構造・様式	木造平屋・武家屋敷
所在地	大分県臼杵市大字海添字本丁13番地
電　話	0972-86-2725
Ｈ　Ｐ	http://www.city.usuki.oita.jp
開館時間	9:00～17:00（火曜日休館）
アクセス	JR日豊本線臼杵駅から徒歩10分
備　考	臼杵市指定文化財

旧真光寺休憩所

大分県臼杵市

きゅうしんこうじきゅうけいしょ

二王座歴史の道にある旧真光寺

門から見る

この窓からの眺めも素晴らしい

臼杵は、武家屋敷や古い神社仏閣が点在する歴史ある街である。旧真光寺のあるこの地区は臼杵を代表する景観のひとつで、平成5年には国の都市景観100選に選ばれた。旧真光寺は浄土宗本願寺派の支院として、臼杵藩士だった稲川小右衛門の長男･宗適が1716年に開基した寺で、1855年に建立された建物である。1992年に廃寺を改修し、現在は市の無料休憩所として使われており、観光案内も受け付けている。また、随時、展示会なども行わている。改修時には筋違にて構造補強がわれた。道のカーブに沿って建物も曲がり、２本の軸線が通る平面はユニークで、２階の「歴史の道」を見下ろせる座敷には、変形した畳が敷かれている。

見どころ

窓から二王座の道を見る

二王座歴史の道は大友宗麟時代から街道筋として役割を果たした道である。臼杵城のお膝元に位置する二王座は、阿蘇山の火山灰が固まってできた凝灰岩の丘で、あちこちの岩を削り割ってつくられた「切通し」の道がある。狭い路地のいたるところにどっしりとした量感溢れる門構えの武家屋敷跡、白壁の土蔵や宗派の異なる歴史ある寺院が軒を連ね、城下町特有の面影を残した地域を窓越しに堪能することが出来る。

2階の和室

「うすき竹宵」　※「臼杵のえんどうさんちHPより」

毎年11月初めに「臼杵石仏」を造ったと言伝えられている真名長者伝説を再現したうすき竹宵という儀式が行われます。うすきの伝統的な町並みを〝竹ぼんぼり〟の優しい光が包む。この時に旧真光寺休憩所でも写真のような竹ぼんぼりとのコラボが行われ、多くの人々を魅了する空間がつくられている。

広い土間　観光案内のコーナーも設けられている

元本堂だった和室　イベントも行われる

建物名称	旧真光寺休憩所
建築年	1855年建立（再生竣工：1992年）
構造・様式	木造２階建
所在地	大分県臼杵市大字二王座
電　話	0972-64-7130（臼杵市観光情報協会）
Ｈ　Ｐ	
開館時間	８：３０　～　１７：００
アクセス	臼杵駅より徒歩約15分
備　考	稲葉家下屋敷前の市営駐車場（有料）

宮崎県総合博物館　民家園

宮崎県宮崎市

みやざきけんそうごうはくぶつかん　みんかえん

南国といわれる宮崎にも険しい山間部や、雪が積もるほどの地域があり、それぞれ地方独特の建築様式をもった民家が多数あった。今から約150年から200年前に建てられたものが【宮崎県総合博物館　民家園】に、移築復元されている。

旧藤田家住宅

旧藤田家住宅は宮崎県北西部の五ヶ瀬町三ヶ所から、昭和52年10月から１年かけて移築復元したものである。
建築年代は、柱に刻まれた文字から天明７(1787)年に建てられたことが分かっており、県内で確認された民家の中で最も古いものである。
復元された平面は、土間なしのヘンヤ(茶の間)とオモテ(客間)の２室で、三方に吹き放ち部をもつ特殊なものである。また、県内の民家のほとんどが外壁を板材で仕上げているのに対して、唯一土塗壁であり、民家としては貴重な文化財といえる。

見どころ

これら４棟の住宅は、中に入って見学することができ、囲炉裏や部屋の設え、燻された高い小屋組などを見ながらゆったりとした時間を過ごすこともできる。また宮崎神宮から民家園、博物館周辺は地域の方々の散歩コース、子どもの遊び場にもなっている。
季節毎にイベントが開催され、四季折々の花々が咲き来訪者を迎える。

旧藤田家住宅内観

旧黒木家住宅内観

米良の民家

米良の民家は、西米良村にあった黒木家住宅を移築復元したものである。この民家は山間の三段石積みの上に建てられていたもので、外観・間取りなどに古い西米良の農家の形が残されている。
また、がっちりした骨組みの馬屋も残っている。
言い伝えにより、文政４(1821)年頃に建てられたとされている。

椎葉の民家

椎葉の民家は、椎葉村にあった清田家住宅を移築復元したものである。この民家は宮崎県北西部に分布する並列型農家の典型で、間取りは部屋を一列に横に並べる形式で、三つの部屋と土間からなっている。また、手前には板縁が通っている。
解体中に発見された墨書きによって、元治元(1864)年に建てられたことが分かっている。
旧黒木家住宅は、霧島山麓の高原町蒲牟田地区から、昭和49年9月から１年かけて移築復元したものである。
建築年代は、解体中に発見された墨書から天保５(1834)年からの２年間であったことが確認されている。
この建物は県南西部に分布していた分棟型農家の典型で、妻入りの土間付きナカエ（茶の間）と平入りのオモテ（広間）の２棟からなっており、テノマ（樋の間）と呼ばれる板間を通して連結されている。

建物名称	宮崎県総合博物館　民家園
建築年	1787年他
構造・様式	木造
所在地	宮崎県宮崎市神宮２丁目４－４
電　話	0985-24-2071
Ｈ　Ｐ	http://www.miyazaki-archive.jp/museum/
開館時間	9:00～17:00
アクセス	・宮崎交通バス：綾・国富方面行き又は平和が丘・古賀総合病院方面行き「博物館前」下車徒歩12分 ・宮崎交通バス：宮崎神宮行き終点下車徒歩12分 ・ＪＲ九州「宮崎神宮」駅より徒歩11分

日向市歴史民俗資料館/旧廻船問屋 河内屋

宮崎県日向市

ひゅうがしれきみんぞくしりょうかん/きゅうかいせんどんや　かわちや

「旧廻船問屋　河内屋」は、美々津重要伝統的建造物群保存地区のほぼ中央に位置し、江戸時代に河内伝作によって作られた。
昭和５５年、当時の所有者から市へ寄贈され、復元された現在は、日向市歴史民俗資料館として開館し、全国的に珍しい河口に面した港のある江戸時代の町家をしのぶことができる。

美々津の町は、古くから海の交易拠点としての歴史があり、美々津を経済面から支えたのは廻船業者たちであった。廻船業者たちは、美々津の河口に注ぐ耳川上流で生産された木材や木炭などを大阪方面に向け出荷し、その帰路には、関西方面の特産品や美術工芸品を持ち帰り、文化交流の担い手としての一面もあった。

この建物は、広い間口をもち、通し庇が設けられ、正面には漆喰の塗壁に「京格子」「虫籠窓」などが設けられ、京都や大阪の町家造りが取り入れられている。間口の広さで課税された時代に、これだけの間口をもつことから、美々津でも屈指の廻船問屋であったことがわかる。

見どころ

廻船問屋だけに、船大工たちの手によって建てられた河内屋には、耳川上流で生産された良質な木材が使用され、随所に船大工の技をみることができる。
部屋によって天井の高さを変えるなど贅沢なつくりから繁栄ぶりが伺える。

「ざしき」は賓客用の部屋、趣味室として意匠を凝らされ、広い窓からは、中庭の枯山水が見える。
枯山水には、石や島の配置によって、三尊仏や鶴亀を表現したり、不老不死の仙人が住むという蓬莱島に見立てたりする石組がある。こちらの石組は、長寿祈願や験担ぎが込められた「亀島」である。
（左側が亀の頭）

＜１階の間取り＞
通り庭をもち「ざしき」「なかのま」「みせ」「土間」が通り庭に沿って２列に配置されている。
土間の三和土（たたき）は、貝殺、粘土、石灰で作られ、今では再現不能な貴重なものである。

＜２階＞
１階の天井高が部屋ごとに変えられているため、二階の床高が部屋によって違っている。それにより面白い空間が構成されている。また、窓からは日向灘が見え、気持ちよい風が入り、いつまでも居たい空間でもある。

＜バンコ＞
美々津の建物の多くは、通りに面して「バンコ」と呼ばれる跳ね上げ式縁台が設けられている。開いてイスや台として、たたんで雨よけとして活躍する。

町人が二階を作ることは「武士を見下ろす」として禁止されていた。

←外観を平家に見せるため二階の天井は低く抑えられ、船底をひっくり返した造りとなっている。

←二階の窓には「虫籠窓（むしこまど）」を設け、外部から内部を見えにくくし外観上は平家を装っている。

建物名称	日向市歴史民俗資料館
建築年	1855年（江戸時代　安政２年）
構造・様式	木造２階建・町家
所在地	日向市美々津町3244番地
電　話	0982-58-0443
Ｈ　Ｐ	https://www.hyugacity.jp/display.php?cont=140317143907
開館時間	9時～16時30分（休館日：毎週月曜日　年末年始）
アクセス	日豊本線美々津駅から徒歩約25分 宮崎交通バス「立縫の里」停留所から徒歩2分 東九州自動車道日向ＩＣから車で約20分
入館料	大人：210円　こども(小･中･高)100円 団体20名以上2割引
備　考	市指定文化財（伝統的建造物）

霧島創業記念館「吉助」

宮崎県都城市

きりしまそうぎょうきねんかん　「きちすけ」

本館正面（東面）

「霧島創業記念館　吉助」は、都城市川東の本社内にあった建物を解体移築したものである。
大正13年の築と言われ、昭和４０年に現在の社屋が建てられるまでは、霧島酒造の前身である川東江夏商店、そして霧島酒造の社屋として使われて来た。表の広い土間は店の売り場で、開業当時は焼酎のほか米穀や肥料など扱っていたようである。奥間は主人一家の住居になっていた。移築の際、一部補修、補強等を行なったが、ほとんど当時の材木をそのまま使用していて、大正時代の商家の面影が残っている。

住居部分であった和室の床の間と欄間の風景

見どころ

外観が一部洋風になっており全体の和風外観とミスマッチなところがエキゾチックである。休憩スペースは落ち着きのある心安らぐ空間になっている。小屋組みを現わしたギャラリーの吹き抜け天井も見応えがある。

本館南面

和室は田の字式間取りで、連続の部屋になっている。欄間には技術と趣向が凝らしてあり美しい。庭園を眺められる、廊下（縁側）も見事である。縁側の奥にはこの建物唯一の洋間があり、碁天井造りである。

廊下（縁側）の様子

土間にある休憩スペース

奥の住居部分は一般開放はされておらず、和室は土間から眺める。日本を代表する女性棋士による将棋の棋戦、「霧島酒造杯女流王将戦もこの記念館特設会場で開催されている。

縁側奥にある洋間の碁天井

小屋組を見せた土間の吹き抜け天井

本建物は霧島ファクトリーガーデン内にあり、他にも霧の蔵ブルワリーやベーカリー、ミュージアムの他、霧島焼酎神社、等がある。

建物名称	霧島創業記念館「吉助」
建築年	大正13年
構造・様式	木造平屋・入母屋造り
所在地	宮崎県都城市志比田町5480番地 霧島ファクトリーガーデン敷地内
電　話	0986-21-8111
Ｈ　Ｐ	https://www.kirishima-fg.jp/kichisuke
開館時間	9:00～17:00
アクセス	都城インターチェンジより車で15分　駐車場有

赤尾木城文化伝承館　月窓亭（種子島邸）

鹿児島県西之表市

あかおぎじょうぶんかでんしょうかん　げっそうてい（たねがしまてい）

建物外観

出典:月窓亭パンフレット

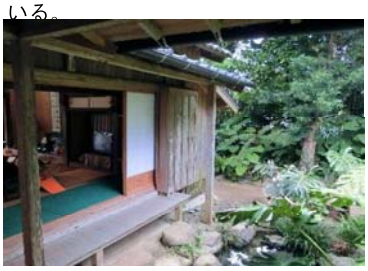
月窓亭は1793年、種子島家家老職を務めた花道師範家･羽生道潔（はぶみちきよ）が27歳の時に建造した建物。　孫である慎翁(しんのう)は、梅陰亭月窓(ばいいんていげっそう)と号し、1882年池之坊大日本総会頭職を務め、池之坊を全国に広めた。この住宅は慎翁が花道修行を行った屋敷である。　慎翁の生活が東京中心となった為、種子島家旧家臣団の要請をうけた27代種子島守時公がこの屋敷に移住した。以来この屋敷は「お屋敷」と呼ばれ、種子島の誇りとして人々の心の拠り所となった。

石垣

門

月窓亭は台所部分が欠損しているものの、赤尾木城にほど近く、風格、書院の造りなど優れている武家屋敷である。種子島は武家社会南限の地であり、さらに珊瑚塊を積み上げる石垣文化の北限。門構えや屋敷、庭園などに種子島の独自性があるが、概して薩摩武家文化の様相を呈している。

２階座敷より



縁と表の座

東側外観（玄関）

見どころ

種子島の武家屋敷は基本的に玄関がない。月窓亭の玄関も狭く質素な造りである。またこの部屋で刀を振り上げることができないよう天井を低くしている。このことは天井が高い奥の間を広く見せる効果もある。種子島の気候に適した建材として、硬質で湿気やシロアリに強い性質を持つ種子島産「ひとつ葉の木」(イヌマキ)が使用されている。

南側外観

玄関の間

２階座敷

建物名称	赤尾木城文化伝承館　月窓亭（種子島邸）
建築年	1793年（寛政5年）
構造・様式	木造平屋一部二階建、瓦葺き
所在地	鹿児島県西之表市西之表7528
電　話	0997-22-2101
Ｈ　Ｐ	http://gessoutei.blogspot.jp/
開館時間	9:00～17:00（毎月25日休館･7,8月無休）
アクセス	西之表港から車で5分　駐車場あり
備　考	西之表市指定文化財

旧増田家住宅

きゅうますだけじゅうたく

鹿児島県薩摩川内市

建物外観

敷地は延命院跡と伝えられ、1867(慶応3)年に寺子屋が開かれたが廃仏毀釈により、寺子屋は現在の入来小学校の地に移されている。
屋敷入口にある石敢当の刻銘から、母屋は1873(明治6)年頃に建築されたと考えられており、構造材の一部には、延命院の部材を転用したと思われる痕跡を残している。
別棟型民家として「おもて」と「なかえ」を「樋の間」で繋ぐ形式など随所に武家住宅としての特徴がみられる。建築主は代々、眼科医を営んでおり、この建物でも治療を行っていた時期があった。
平成21年度、市が土地と建物の寄贈を受け、平成22年度から3ヵ年をかけて保存修理工事を実施した。平成26年12月、重要文化財（国有形文化財）の指定を受ける。

石蔵

浴室便所

見どころ

修理前は瓦葺であったが、復原調査の際、母屋の桁から茅葺であったことを示す「サス穴」の痕跡が確認され、母屋は茅葺屋根に復原されている。
茅葺を支えるダイナミックな小屋組や、復原工事の際用いられた「金輪継ぎ」等の伝統的技法は、当時の建築技術の高さを今に伝えている。

小屋組

金輪継ぎ

釘かくし

漆器類

【おもて】
主として接客空間として使用され、主人が普段生活する場である。
建築主は眼科医を営んでいたため、当時は診療の場でもあった。
【樋の間】
竹を組み合わせた樋で、棟と棟を繋ぐ空間である。
床は板張りで、それぞれの棟の雨水を竹樋で受けて流している。
【なかえ】
居間兼食堂として使用され、炊事等を行う土間があり、かまどなどが置かれていた。
隣接する洗い場には、清色城跡の土居の湧水を、竹で水場へ引いた痕跡を残している。

おもて

樋の間

なかえ

洗い場

建物名称	旧増田家住宅
建築年	1873年（明治6年）頃
構造・様式	寄棟造、茅葺
所在地	鹿児島県薩摩川内市入来町浦之名77番
電　話	0996-44-4111
Ｈ　Ｐ	http://satsumasendai.gr.jp/spotlist/21641/
開館時間	9:00～17:00（月曜休館）※入館16:30まで
アクセス	JR川内駅からバスで45分「入来麓」下車 徒歩5分
備　考	国登録有形文化財

鹿児島県民教育文化研究所

かごしまけんみんきょういくぶんかけんきゅうしょ

鹿児島県鹿児島市

建物外観

敷地は江戸末期、重富島津家(篤姫の母方)の上屋敷跡である。
建築主である藤武呉服店・藤武喜助氏が、宮大工・渕之上喜助氏と3年ほどをかけて建築。1939(昭和14)年、自邸として竣工する。
戦後は料亭や宿泊施設として使用されていた時期がある。
1981(昭和56)年には、初代所長・椋鳩十氏を迎え「鹿児島県民教育文化研究所」が設立された。
外観と庭園は純和風、内部は床の間を備えた書院造りの和室から、暖炉を据えたアールデコ様式の洋室まで多様な造りとなっている。
平成25年12月、家屋と土蔵が文化庁登録文化財の指定を受ける。

庭　園

中　庭

【玄　関】
看板文字は初代所長・椋鳩十氏の書。
玄関の間をぬけると、クスノキの繊細な寄木細工床が迎える。

【応接室】
暖炉を据えたアールデコ様式の応接室と、モザイクタイルを敷き詰めたサンルームからなる。戦後、ダンスパーティ等にも使用。

【表座敷】
長押を配し、床の間や書院棚を備えた書院造りの14畳と10畳の続き間の和室。続き間部分は、2間半の柱間をもつ大空間である。

玄　関

寄木細工床

暖　炉

サンルーム

モザイクタイル

表座敷

見どころ

素材の面白さを活かし、形式にとらわれない「数寄のこころ」を随所の納まりに見て取ることができる。
建築主である藤（富士）と武（竹）にかけたモチーフが、欄間やガラス細工など随所にちりばめられている。
見るたびに新しい発見がある。

曲木細工

格子窓

竹細工

欄間(藤)

ガラス細工(富士)

欄間(竹)

建物名称	鹿児島県民教育文化研究所
建築年	1939年（昭和14年）
構造・様式	木造平屋一部2階建、瓦葺
所在地	鹿児島県鹿児島市春日町4-60
電　話	099-247-4514
Ｈ　Ｐ	
開館時間	9:00～16:00（土日・祝日休館）※入館15:30まで
アクセス	鹿児島市営バス「大龍小学校前」下車　徒歩3分
備　考	国登録有形文化財　※見学時要連絡

中村家住宅

なかむらけじゅうたく

沖縄県北中城村

中村家住宅は戦前の沖縄の住居建築の特色をすべて備えている建物である。
現存する建物は18世紀中頃に建てられたと伝えられ、建築構造は、鎌倉・室町時代の流れが見えるが、各部に特殊な手法が加えられている。
屋敷は南向きの緩い傾斜地を切り開いて建築している。

魔除けシーサー

見どころ

沖縄本島内でこのように屋敷構えが当時のまま残っている例はきわめて珍しく、上層農家の生活を知る上にも貴重な遺構であるいうことで、昭和31年に琉球政府から、昭和47年には日本政府によって国の重要文化財に指定された。沖縄の気候に適した、先人たちに知恵が詰まった住宅である。
中庭と縁側（雨端：アマハジ）、そして和室へと流れる沖縄の南風を感じてもらいたい。

【ウフヤ（母屋）】
一番座（客間）、二番座（仏間）、三番座（居間）となっている。
裏には各一間づつ裏座があり、寝室や産室として使用された。
畳間は、すべて六畳かそれ以下で、当時の農民にはその大きさしか許されていなかった。

三番座（居間）

二番座（仏間）

一番座（客間）

【アシャギ（離れ屋敷）】
当時、近くの中城間切（現在の中城村と北中城村）の番所へ、首里王府の役人が地方巡視に来た際に、宿泊所として使用したようである。　軒裏で建物の仕上げが異なり、アシャギ（離れ屋敷）は、木板で仕上げられている。ウフヤ（母屋）は葺き土の下地に竹をそのままで施している。軒裏の仕上がりで位を表している。

建物名称	中村家住宅
建築年	18世紀中頃
構造・様式	木造平屋
所在地	沖縄県北中城村字大城106
電　話	(０９８)935-3500
Ｈ　Ｐ	http://www.nakamura-ke.net/
開館時間	午前9時～午後5時30分（火曜休館）
アクセス	沖縄自動車道　那覇I.Cより15分
備　考	国指定重要文化財

公益社団法人 日本建築士会連合会女性委員会 2016年ー2018年

小野 全子　委員長・愛知建築士会
本間 恵美　副委員長・北海道建築士会
山中 路代　副委員長・富山県建築士会
新海 直美　委員・北海道建築士会（北海道ブロック）
小林 淑子　委員・宮城県建築士会（東北ブロック）
多羅尾直子 委員・東京建築士会　（関東甲信越ブロック）
筒井 裕子　委員・愛知建築士会　（東海北陸ブロック）
石貫 方子　委員・大阪府建築士会（近畿ブロック）
土居 純子　委員・高知県建築士会（中国四国ブロック）
満原 早苗　委員・佐賀県建築士会（九州沖縄ブロック）

公益社団法人 日本建築士会連合会女性委員会 2018年ー2020年

小野 全子　委員長・愛知建築士会
本間 恵美　副委員長・北海道建築士会
山中 路代　副委員長・富山県建築士会
石貫 方子　副委員長・大阪府建築士会
新海 直美　委員・北海道建築士会（北海道ブロック）
星 ひとみ　委員・宮城県建築士会（東北ブロック）
松野 範子　委員・山梨県建築士会（関東甲信越ブロック）
吉田輝代美 委員・福井県建築士会（東海北陸ブロック）
八木 景子　委員・兵庫県建築士会（近畿ブロック）
村上 良枝　委員・香川県建築士会（中国四国ブロック）
藤田ゆか里 委員・福岡県建築士会（九州沖縄ブロック）

魅力ある和の空間ガイドブック

2018年9月　WEB版公開
2020年4月　WEB版公開　改訂版
編　著　日本建築士会連合会女性委員会　都道府県建築士会女性委員会(部会)
発行所　公益社団法人 日本建築士会連合会
〒108-0014 東京都港区芝5-26-20　建築会館5階
TEL　03-3456-2061
URL　http://www.kenchikushikai.or.jp

無断転載、複製を禁じます。
開館時間等は変更になる場合があるので、見学に際しては各 HP 等でご確認ください。
© 2020 Japan Federation of Architects & Building Engineers Associations